

珍談と獵奇の型破り雑誌

奇譚クラブ

われ女群に包圍さる



復讐言のドラマ
裸身の魔女

奇譚クラブ

五月號

奇譚クラブ

五月號

定價 九拾圓

大阪競輪

新線第1日 2345
5月 大穴

橋田寿賀子 作 競輪場の女スリ

奇譚クラブ六月号

を確実に予告出
来る女がいだ!!
それがいかにすも
女スリだったとは
とても
面白い

う狂う性典
球熱
悪の

如何にして
彼女たちにはその青春
の悩みを解決したか?
由利は無理矢理に裸に
された 見よ其の羞恥は
男より



其の他型破り
の読物満載
乞御期待

早乙女見作 奇譚クラブ六月号

精巧な



汚された

マネキン形

全6巻 第5巻 148頁 1480円
第4巻 148頁 1480円
第3巻 148頁 1480円
第2巻 148頁 1480円
第1巻 148頁 1480円

愛山久 作

詳しくは 本誌六月号を参照せよ

おらが
村に
来た
素晴らしい
ストリッス

岡山の山奥に現れた 前代未聞の珍ストリッス!!
おらが村は ぜんやんやの大それた!!
さてどうなるのか?

能登三 作 本誌六月号

色刷 冗談横丁回覧板 風流太郎・構成 15
口繪 明石三平

裸体寫眞蒐集狂 吉丘根 22

われ女群に包圍さる 能登一三 26
奇譚 うそ新聞 中村米蔵(三平画) 32

時代小説 桃色査察使御入來 根來芳太郎 34
今幾久藏画

新しい愛慾の新軌道 加茂三千彦 38
峯玄太画

裾を乱すまで 椿 昭彦 40
信上寒郎画

奇譚百話 都會の溜息 明石三平画 43
穴吹武画

シベリヤ性風景 有葉亞郎 45
松岡敬一画

映画題名小説 東京夜曲 高村暢兒 46
會根三太郎画

青春小説 わが口髭に悔ありき 中村米蔵(三平画) 50

新作漫才 結婚報告書 北海千珠子 52
片矢薫画

女闘 血に護れた乳房 葦田郁也 61
秋田冷光画

小説 復讐のドラマ 66

私版好色 三人の色事師 61

祇園舞妓水揚げ帖	加茂三千彦	67
花見小路のたそがれ	沖田三平	70
女闘 美開眼	栗津実	73
夜の都會 なやまし奇譚	草薙久人	77
第一話 毛を見てせざるは勇なきなり	天野健画	80
第二話 ステッキを差し込む二號さん	愛山久	82
小説 花薫る裏街	美濃村見画	85
犯罪 萬引令嬢殺人事件	瀬戸川宏志	88
實話 昭彦桃色劇場探訪記	森あきら画	90
都會 こんな牝豹がいる	椿 昭彦	93
甘い夢 桃色の夢	久富浩司	96
怪奇 難波船の佝僂男	笠置良夫	99
小説 情熱裸身の魔女	竹中英二郎画	102
醉夢七不思議	金子しのぶ	105
花の精に弄れる戀人	玉置光男	108
松井頼子	松井頼子画	110

六月號豫告!!

驚異的賣行・躍進の次號

讀者通信

- おらが村に來た ストリップ 能登一三
奇術師華芳の戀 吉丘垣根
男娼哀歌 草薙久人
十年後の彼は女だつた 椿 昭彦
競輪場の女拘摸 緑 猛比古
戀八卦色曆 加茂三千彦
娘相撲部屋參觀記 茨木浩平
女の鑛脈 富士 満
男湯に飛び込んだ女 早乙女 晃
女子プロ野球物語 早乙女 晃
熱球に狂う戀の性典

- 愛慾奇譚 汚されたマネキン人形 愛山久
間違えた赤い腰巻 兵庫一平
怪奇 鱗夫人 青海洋史
女の秘密 佐々木 直
女の秘密姉妹の秘密 木下白蘭
日鮮混血兒 加茂川清子
彈娘銀行狀記 井口正憲
女學生桃色遊戲 山本 春
呼子港の女船頭 寺本 明
愛は惜しみなく奪え 寺本 明
高すぎた代償 寺本 明

讀者通信
讀者様へ
六月號の豫告は、讀者様から多くの御意見を頂戴致しました。特に「情熱裸身の魔女」の挿絵が好評で、今後もこのような挿絵を多用したいと思います。また、「都會の牝豹」の第二話は、讀者様から「もっと早く出てほしい」との御意見を頂戴致しました。誠に申し訳ありませんが、編集上の都合で、もう少しお待ちください。六月號は、六月十五日発行予定です。よろしくお願い申し上げます。

原稿募集

1. 短篇小説 (枚數十枚—二十枚)
取材は自由、ありふれたものでなく、上品なエロとユーモアを盛つた特異な作品
2. 暴露小説 (枚數十五枚—三十枚)
あらゆる方面の世に知られざる事実を盛り込んで興味深い奇想天外な作品
3. 實話小説 (枚數二十枚—四十枚)
現代人情、犯罪、スポーツ、映画、演劇、時代表、探訪、紹介、探検、実見談、外聞、探奇、探訪、紹介、探検、実見談
4. 中間讀物 (枚數五枚—四十枚)
女の噂、人情物語、これは面白い珍談、奇聞、笑話、傳説、小話、ユートピア放談、等
5. コント (枚數二枚—五枚)

6. 漫画、挿繪、寫眞、口繪、其他
7. 中篇小説 (枚數五十枚—三百枚)
出来ればシリーズとして分載可能な形態を具え一回分五十枚を越えざることを
8. 冗談奇譚新聞用コント
世相、時局を諷刺した、寸鉄人を刺す名文句を期待
一、締切は毎月十五日
二、送付先 奇譚クラブ編集部
三、開封第四種郵便にて御送り下さい
四、採用決定しました分は、折返し御返事の上、第表後相当地料を上げます。原稿の返戻御希望の向きは返寄御同封下さい。

直接讀者募集
半年分六期(送料別)五〇〇円
右の定額以上のお金を送金された方には、小冊子「奇譚」を贈ります。送料は別にお知らせします。
奇譚クラブ 第五卷第五号
五月号 毎月一円
定額九拾円
昭和二十六年四月三十日発行
印刷人 上田庄之助
発行所 大阪府堺市西區内通四丁三〇番
電話 二二四六
東京事務所 東京都台東区浅草橋三丁目一五番
電話 浅草(84)〇一五五番

裸身の魔鬼女

三方の壁に相當の高さまで鏡がはりつけてあるのだ。寢台の上の男女の姿態は、もはや二人きりの秘密ではない。同じ場所、同じポーズで八人の男女がたわむれ合うことになる。

もしかしたら、鏡が鏡をうつし合つて、その中の男女の数は無限に増すのではないだろうか。――

街でふと知り合つた娘、それは頹廢的な阿片性を持つた裸身の魔女であつた。





桃色查察使御入來



復讐言のドラマ

夕起には始めて見る貴子の肉体であつた。
きら／＼と光芒を放つまでに白い皮膚、
のびやかな四肢、
後手にしめ上げられている胸の隆起が見事な彫刻そのもの
であつた。嫉妬と羨望に狂う女のえがく、
絢爛たる情痴と變態、
責め繪巻、復讐のドラマ。



ヌ

ー

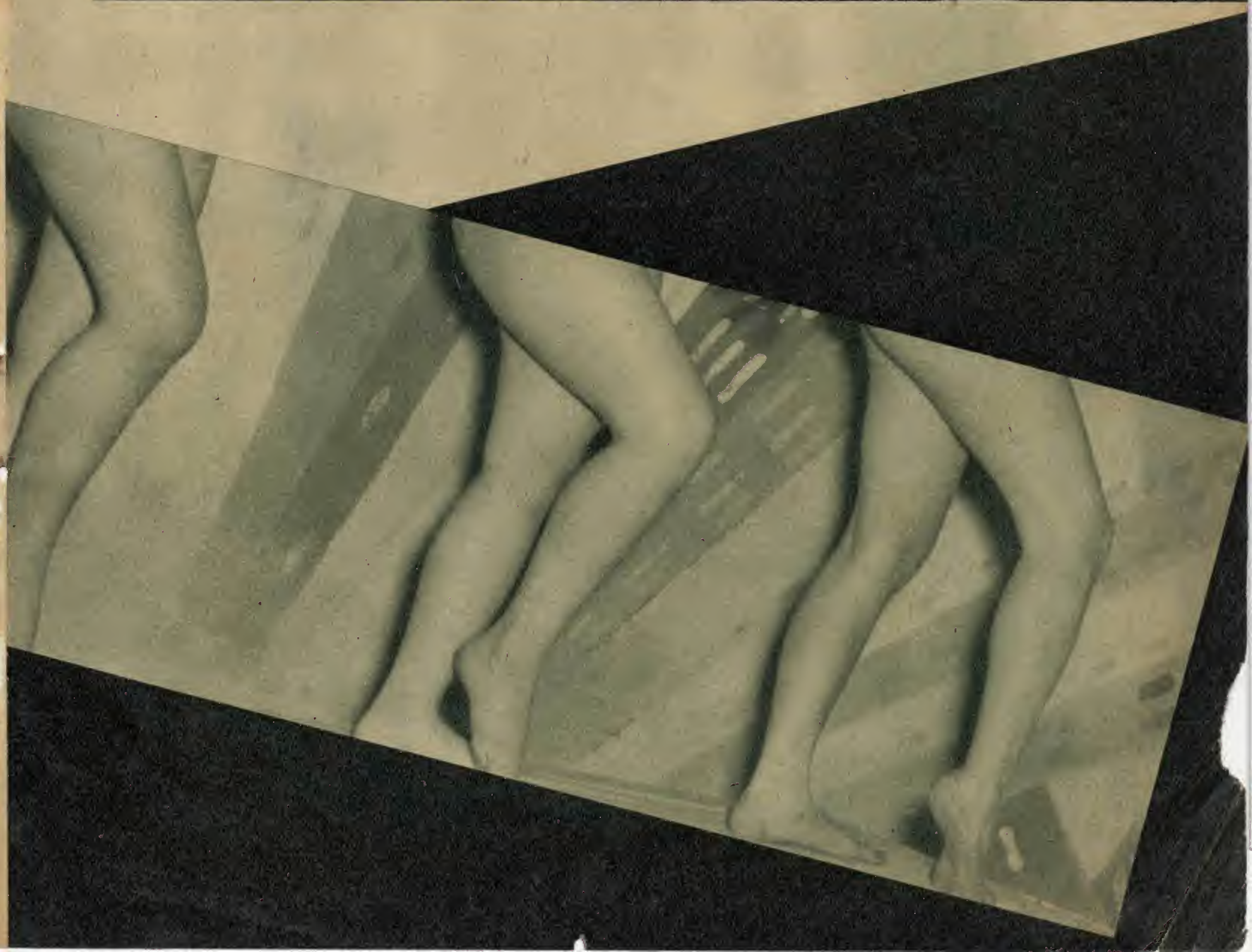
ド

は

踊

る





青いライトに照らされて
トランペットの恋のソロ

昨夜別れたあのひとゆえに
熱いページがとらわれぬ

脚光を浴びる
裸女たち





赤いライトに照らされて
踊る人魚の夢の肌
ルンバ唄ってタンゴで泣けば
つけたまっ毛ももの想い

情熱の踊り子





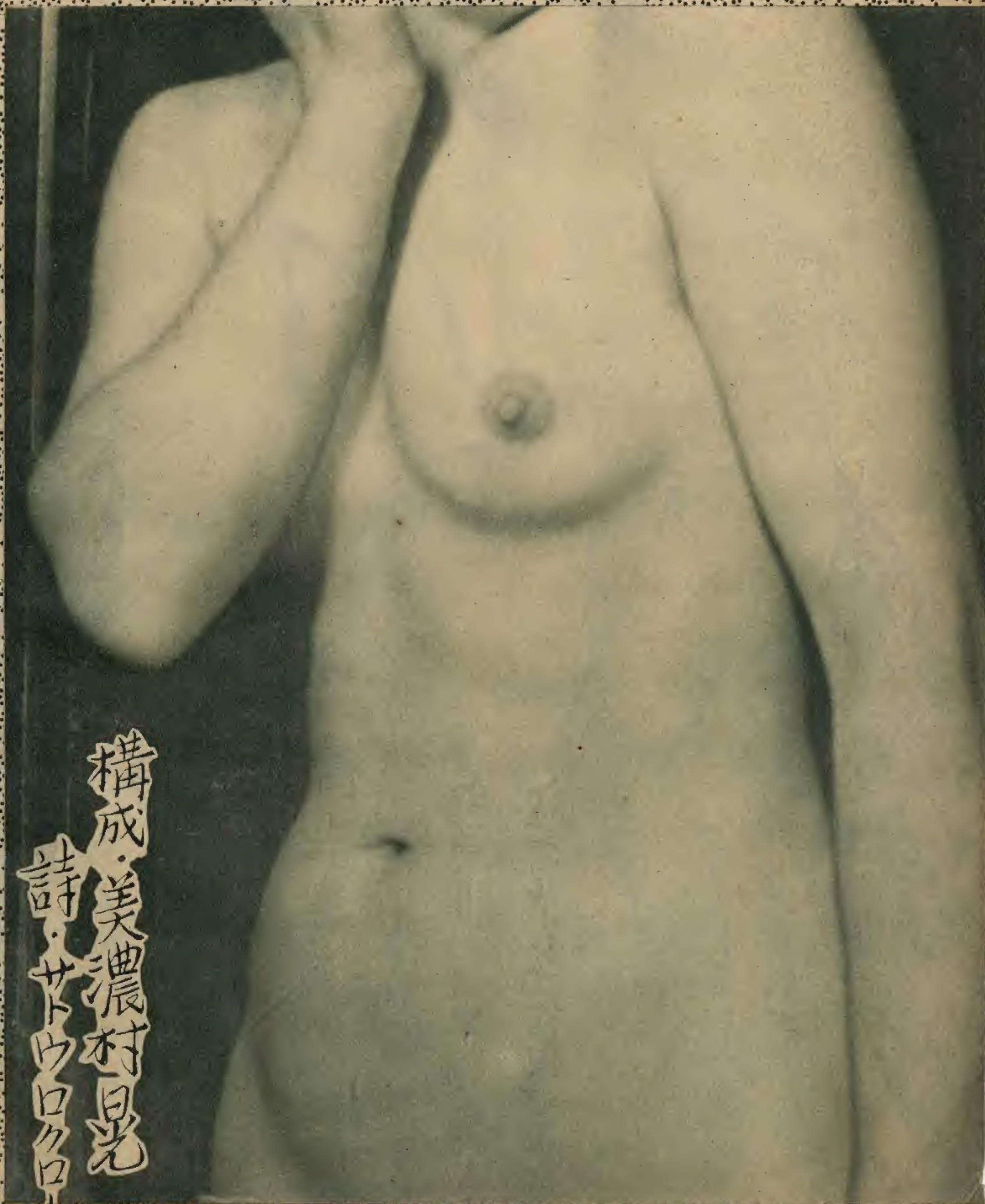


並べのライトに照らされて

クラリオネットがむせびなく

キッス投げよかウインクよか

紅のルージュに夜が更ける



構成・美濃村日光
詩・サトウハチロー

遊閑奇譚新聞

發行所 遊閑奇譚新聞社
編輯人 エロニヤ人生同人
風流太郎
明石三平
伊勢みどり

レツジョー軍

ズロース防衛地帯突破

デルタ市郊外にて激戦展開中

(デルタ三十八日M.V.イロスキー特派員「狂動」)

真地帯デルタ市侵入を企圖するレツジョー軍先遣隊は、三十七日深夜、乳房山脈より



南下、ゴム河を渡河して、雪崩をうつて、ヘソ盆地に乱入必死の抵抗を続ける防衛軍は、ヘソ市に於て主力部隊と合体ソケイ河の堤防を破壊したたの上、ズロース防衛地帯を突め、ワトモモ地方は、時ならぬ、目下デルタ市周辺の密林に洪水に見舞われて、大混乱を地帯に於て、激戦展開中であ

政府競輪問題に八百長か?

世評に刺戟されて、政府と通した。産省との間で競輪の存廃について、両者の間の、八百長ではないかと、専ら噂である。省の意見が通つて再開を決定する。

斜説 人間はすべてからく好色たるべし

古きいにしへの昔より英雄は色を好むと云われている逆説的に解説すれば色を好むもの即ち英雄である。世に我こそ英雄たらんと欲せざる人間はない筈であるからすべからく大いに好色たるべしと論ずる次第であるエへ

天の岩戸の昔より色に始まり色に終りレンメンとして今日に至るまで女と名のつくものは猫の子一匹見逃がさず当るを幸いなで切り込んでいる訳である。あゝ吾輩は英雄なるかな。かくも色を好むもの故

吾輩が奇譚新聞の主筆として現在この世に生存するのもかな。かくも色を好むもの故

吉田内閣遂に瓦解す

もめ抜いた銭形平次問題

政府では十日の国会々期切れまでに各種の法案を議了することはむずかしく、また新たな事態の発生も予想されるところから一ヶ月程度の会期延長を提案したが野党側では之に応ぜず議場は混乱に陥り組んつほぐれつの大修繕場を提出した。

その為、混乱をよそに銭形平次完結篇を就緒していた首相の興をまたげたので、また問題となつて野党側代議士の中には会期延長の責任は、銭形平次にありと叫ぶ者があり、与党中にもそれに同する者が出て来たので、ひとすらすら完結篇を就緒したい一急から吉田首相は内閣首班の椅子を投げると云う結果になり遂に吉田内閣は瓦解のやむなきに至つた。

日本に超原子爆弾完成!!

水素爆弾の三〇〇〇倍

日本理研田中博士の苦心の研究がこのほどいよいよ完成の域に達し日本にも全世界に類を見ない原子爆弾が出現することになった。

富士山頂での実験に依れば水素の三千倍広島長崎に投下されたものの約六万倍の破壊力を有すると発表された。

倫此の原爆の構成分子は秘密にされているが確言するとこのメチレンウムを主として水素ガスと結合させたものである

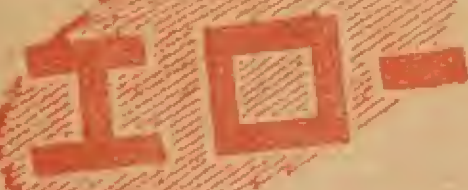
怪外通信

好色選挙乱立し

肉弾戦たけなわ

昨月来激烈な地下密行の事前運動を続けていた各地方好色選挙候補者達は本月に入ると共に愈々本格的な選挙運動を開始、すでに出先に於て激し

家庭染料なら



色鮮やかに染め上げよう

お好みにより
大小種々あり

安芸市町電一九四四

いッパゼリ合いを続けている出身地に確固たる地盤を築いている弓削道鏡は小学校の競利用、ゲンノ、好色人種の間に入気を高めているし、久米仙人は中年の男性に絶對的な人気がある。鶴川家康は、名の知られている割に嫌われ、女性間にも支持者が少い。それに比し豊臣秀吉は幾分有利に戦いを進めているが、妾の姫君を愛した事から、家庭の主婦からはボイコットされている。

新領ながら國定忠治はアナドリ難い大衆の支援に裏をかき、特に兄チヤン連中は拳つて忠治親分を推している。只今の所非合法的暴力行為は行われていないが状況によつては、赤城山に立て籠る憂いありとして関係当局は警戒している。

在原業平、津村浩三は圧倒的な女性の人気を持ち続けているので当選は確実と目せられている。女性候補としては、有力な小野小町、和泉式部、高橋おでん等もそれぞれ得意の肉弾戦を展開しているもので、その帰趨は予断を許さないものがある。

狂散痘 全国に蔓延す

きょうさんとう

不自由黨の服用を奨励か

厚性省必至の防疫対策

「狂散痘」神戸市に発生した狂散痘は、

散痘は其の後当局の必死の防衛不自由湯はワンマン博士の疫対策も効なく日本各地に散ソウ製に依るもので新薬エチの状態であつたが日を迫りケットと非合法結晶とによりて罹患者の増加を来し現在で混製した白色の液体である。は全国的蔓延の徴を示してい

当局では、これが最後の対応策として特効薬不自由湯の服用を国民に奨励する事になつた。

しかし罹患者は一般に勤労者中小商工業者、労働者等に多いので高価の不自由湯をそのまゝ受け入れるかどろかが心配が横暴になり患者が多数出る

ズロースを盗む少年

年少犯のアプレゲール

東都市警では最近ひんびんとして市内の民家からズロース腰巻シュミーズ等の盗難届があるの調査中のところ去る十日下京区股小路腰町上ル二三山坂坂太方長男登(九才)を容疑者として留置し取調べ中である

同人の自供によると幼児より女性の下着類に饑餓的な

興味を持ち蒐集を始めたもので同家の押入より押収した下着類はズロース三百枚腰巻百五十枚其の他で同人は毎夜盗品の中で埋もれて悦に入り寝るのもその中でなければ寝付かれないので当局では少年犯罪のアプレゲールだと言っている



（写真はその現場、同内は被害者）

深夜に男の悲鳴

下区成田町の好色事件

五月二十五日午後十三時二十分頃御毛佐賀市下区成田町二二八八番地今夜幾子方で男の喧え入る様男子誘拐暴行罪容疑で即刻逮捕された。

被害者M青年(特記名を略す)は近隣女子の間に評判の美男子で昨年も不良女工に誘われて暴行を受けたことがある。



今このところ淫智木病院に入院手当中であるがタタ／＼になつて人事不省である。詳細は不明である。同家の奥座敷には夜更が乱れチリ紙や腰巻等が散乱していた

大好物小説

とまらぬ小便

島らがい・作

「今夜はゆつくり寝て、山家の夜の気分を、味つてくれ給え」

「お床はこちらへとつておきました。」

「それでは腰さして貰おう」

「田舎だから廊下つづきといふわけには行かぬさ。それ其処に大きな櫃の木があるだろ。その後が便所になつてゐる。」

客はこゝで小便をしていたが五分たつても、十分たつてもやめない。二十分たつても三十分たつても、やつぱり其処に立つてゐる。いくら長い

小便にしてもあんまりだから「どうしたんだ、まだ小便をしているのかね」縁側から主人が声をかける

「小便が止まらない。いくら止めようとしても小便が止まらない。僕はここのまゝ死んでしまふかも知れない」

客はもう泣声になつていた「ナニ、小便が止まらない?それは大變だ」

主人はロソクを突き出し客の前を見た。

「止まらない。この通り、ジャ／＼音がしているじやないか」

客はもうおろ／＼泣いていた。「ナニ、ばか／＼しい前を見給え、小便はやんでるじやないか。ジャ／＼音のしているのは、水の落ちる音だよ」

珍妙案内内廣告

料金

二行 三行 五行 七行 九行 十一行 十三行 十五行 十七行 十九行 二十一行 二十三行 二十五行 二十七行 二十九行 三十一行 三十三行 三五行 三十七行 三十九行 四十一行 四十三行 四五行 四十七行 四十九行 五十一行 五十三行 五五行 五十七行 五十九行 六十一行 六十三行 六五行 六十七行 六十九行 七十一行 七十三行 七五行 七十七行 七十九行 八十一行 八十三行 八五行 八十七行 八十九行 九十一行 九十三行 九五行 九十七行 九十九行 一百行

珍妙案内申込所

二号 求容 容年 令不 問未 亡人 得ル 方、 但シ 終夜 勤務 二 堪

発禁 エロ本 売ります、 各 冊 進呈、 要切手、 在社 八三

間男 調停は 本社 へ是非 どの

ぞ、 御 報 酬 上、 氏 神 社

アル バイト 学生 募集、 健康

食給す 精力 的な 方 給 三 万 榮 養 未 亡 人 ク ラ ブ

主婦連の横暴に

男子労働者遂にストか？

パンパン組合は高見の見物

過日米交渉中の主婦会社に對する男子勤務員の労働時間短縮問題は遂に話がまとまらず決裂の域に達した。

原因は主婦会社重役達が弱き男子勤務員に對して横暴をきわめ晝夜を問わず肉體労働を求めたので始めの頃は堪えていた男子勤務員も昨今では遂に精力を消耗し疲勞の爲にラ／＼になるに至つたので前記の要求となつたものである。尙各関係者は次の如く語つてゐる。

主婦会社重役 戸手茂イイ女史。だいたいうちの男共は勝手すぎるのよ。入社當時は労働時間の長い方がいゝ、なんてデレ／＼云つておきながら今になつてフラ／＼になつてしまふなんて



だらしないわヨ。

労働組合代表者 尻野志太氏。我々は今これ以上の労働に堪へられない労働時間短縮は結局主婦会社の要望を全面的にふちこわすものではないと思つてゐる。今回附随問題として卵、肉、バター、アルコール飲料等の特別配給増加と出来得ればヨヒンビン、肥後ずいき、リンの玉、助け舟等の応急資材の入手とを要求したが拒絶されたのでこの上は断固ストに突入するばかりとなつた。責任は会社にある。男子組合側に商榷を送つていゝパンパン組合理事長 町野姉子氏は次の如く語つた。会社側は大いに反省すべきですわ。この際私達は男子に對して同情しストライキをすゝめていきます。主婦と男子の話し合いがうまく行かない方が私達に見れば生活問題が樂觀出来ずからね。

失業した男子勤務員はお金さえ持つてくれれば私達で引き受けますわ。

ニュース トピックス

豚子さんの誕生

関西第一と云われるノーテンフアイラ動物園の豚子さんは春頃より妊娠の兆候が見られ同園関係者を喜ばしてゐたが昨朝に至り無事出産した。ところが生れた子豚はなんと写真の如き代物で下半身は豚だが上半身は人間という變つた動物。



生物學上にも今までの例がなかつたので珍しめがられてゐる。好色大學生物學教授は研究室で研究の末これは變態的な人間が豚子さんを愛した結果であると発表した。噂に依れば子豚の顔は同園々丁の某によく似てゐるといわれている。

昨夜の地震

昨十二日夜十二時二十五分頃中腹地方に中等度の地震があつた。測候所よりの発表に依ると震度五、幅振〇・八ミクロン位でこれはなまずの夫婦が久し振りに楽しんだものと云ふことである。

娼妓名人戦

ケムラ名人

對

メスダ八段

ケムラ名人對メスダ八段の名入位爭奪戦七番勝負の中前二回メスダ八段二勝の後を受け、第三回目の大打合せは、山湯温泉浴槽の中に於て、能々明日より行われることとなつた。

流石メスダ八段も前二回の激戦にまさか疲れを見せ、閉居の誤りではないかと、説者から警告合せが殺到してゐるが、これは娼妓名人の手で目下調査中である。

家庭笑話

罪と罰

母親「お母さんはこの海岸で初めてお父さんにお近づきになつたのよ」
娘「あら！どう言ふ風に」
母親「海で溺れかけた時助けて呉れたのがお父さんだつたの」
娘「うっかり溺れも出来ないわね」

望みなき非ず

探偵小説作家「ああ、弱つた。親切は迫るし、原稿はあつとも書けないし、何か斯う、一読に眼を奪はれる様な物語を書いて貰ふでも無いかなあ」

「書生」先生、税務署から所得税の更正決定が来て居りますか……」

「愛は惜しみなく奪う」

夫人「おやちよつと来てよこのスタイルどう？素敵でしよう！これが最も新しいフランスの流行スタイルよ。銀座のバリバリのデザイナーに作らせて今さつき届いたばかりなの」

紳士「あの奥様、只今、警察から御電話がありまして、旦那様が自動車にねとばされて御亡くなりになりましたとさうで」
夫人「え？妾、どうしましやう？まだ、この洋服の御勘定払つて貰つてないのよ！」

純チールウキ
新編の良薬に
全薬堂百パーセント

男を掴む尻

美女のお尻ばかりをわらう男の影!!

主演 アーラ イヤール
監督 ナントーカ
シテクル

お七日より
伊太利映画
大阪 神戶 まったけ座

春風に
乗せて贈る
日曜会日
「お尻」

女性相

娘「何とかして、のど自慢に三つの鐘を鳴らしたいのですが、どうしたらよいでしょう……」

妻「ピアノを習いなさい。」

娘「この頃、会社への出掛けに、朝の接吻を忘れて困るんですが……」

妻「口紅で靴を磨いて置きなさい。」

母親「私の娘は、何とお見合をさせても、一通も縁談が纏らないんですが……」

妻「停電の晩にお見合して御覧なさい。」

新妻「夫は毎日バスで会社へ通勤して居りますが、途中に路切があるので心配で堪

詰将棋

持駒 妻、妻、

如何にして旦那を詰めるか正解者全部に、お座敷ゼン・スト優待券進呈す

と	金	銀	金	銀	金
△	△	△	△	△	△
△	△	△	△	△	△
△	△	△	△	△	△
△	△	△	△	△	△
△	△	△	△	△	△

りません……」
妻「あなたが路切番を志願なさつてはどうですか」

娘「この頃、主人は月給のピンをはねる癖がついて困つて居りますが……」

妻「あなたも負けない様に、含み資産をお作りなさい」

娘「子供が出来たのに、相手の男の人は仲々結婚して呉れません。お胎の子供がだんだん大きくなつてゆくので、気が気でなりません……」

妻「結婚したら、先づ男の子を作りなさい。そして、其の男の子を早く大きくして税務署に勤めさせてから、おもむろに商売を初めなさい。」

娘「離婚訴訟を提起しなさいさすれば、世間の人は結婚して居たものと思ひますから、男の人も誰々結婚するでしよう」

妻「家の中で火の車を廻して見せてやりなさい。きつと目を廻すでしよう」

家庭欄

磯野浜子先生担当

妻「お恥かしい話ですが、近頃、主人はストリップに凝つて、会社までさぼつては見物に入り浸つて居ります何とか、目を覚まさせる妙案はないでしょうか……」

妻「家庭であなただが実演しなさい。入場無料なら、きつと主人も転向なさるでしよう」

社員「滞納の為、自転車もよつと買物に行つて居る時を差し抑えられて、通勤に雨が降つたりして雨宿りしている間中乾したまゝになつてある洗濯物が気になることあります。そんな事のない様に始めから屋根の下へ乾し

方法
あわて、乾物を取り込みなすてもいい方法

主婦の聲

戦争はもういやでござんます。再軍備とかなんとか本当に気がいらいら致しますでござんますわね。

第一あの予備隊とか言うものは、必要ござんませんですよ、うちでもあの予備隊でね、もう本当に苦勞して居りますんでござんますのよ、いえ、ほかにでもないんでござんすけど、宅がねあたくしの

予備隊を二人も困つているのでしてね、え？え？その通りお姿をね、二号どころか三号まで置きましてね、どんな戦争を致して居りますことやら、くやしいやら情ないやらあんまり口惜しのごさア

赤ちゃんやんが夜泣いてお困りになる場合子供をわけなく寝かせる方法

これは至極カンタンです、間は絶対に赤ん坊を寝かさな

一、旦那ねかして腰紐といてこよい寝るのめかけ船

あととはしつぽりぬれよとまゝよ髪が気になる箱まくら

二、ひとよ明かして旦那を帰し電話かけよかあの人にどうせ浮草あたしは二号隠し男もあるものを

三、玉の素肌が汗ばむほどに女泣かせの夜が更けるいつそ逃げよか旦那を捨て、可愛い男と旅の空

▲電燈代やガス代を節約する方法

電氣は絶対に使用しないこと夜暗ければ爪に火をともしなさい、ガスで御飯や其の他のものをたかぬこと、炭か薪を

使う、それがいいやなら料理屋へ食べに行くのです。どうですか、考えではありませんか

馬競田飛

毎日夕方5時発馬
翌朝7時終賽
大穴アリ

と回復疲労
早漏防止に
ヨルピンピン

キダン君 (18) さん 平



失業卒業生街に溢れる

アブレゲール学生行状記

君、教科書はどうしたんだ
い？一冊もないじゃないか
学生 ビーナツの袋にした
よ

君、教科書はどうしたんだ
い？一冊もないじゃないか
学生 ビーナツの袋にした
よ

君、教科書はどうしたんだ
い？一冊もないじゃないか
学生 ビーナツの袋にした
よ

今日の番組

- 五・一五 変態奇人めぐり
- 「阿部さだの巻」
- 五・三〇 性教育音楽講座
- 五・四五 バンドタイム「院
- 六・四五 男の皆さまへ「私
- たちのアレ」

スポーツ欄

女子プロ騒グ

女子プロ野球のショート、吉
野淑子嬢がフライングプレイを
やり損じて顛倒、足首を負傷
してスタンドに引揚げ手当
仕合はタイム、傷の手当に時
間がかかるらしく、仲々仕合
は再開にならないのに、ごう

女子生従募集

募集 初等科一〇〇名
人員 技巧科一〇〇名
受付 毎日午後八時まで
夜間床好女子学園
(市電肉体柱前下車すぐ)
午後十一時より全
裸のこと
特典 卒業生はパンパン
会社に優先推薦、二
号にも紹介す詳細は
本校事務所に問合せ
られたし

を煮やした顧客は大騒ぎ
となつて、口々にショ
ト・タイムに願いますと
叫んだ。

(天気豫報)

東西南北の風

(奇譚氣象台正午発表)
家庭地方に張り出した低
気圧は本州全体を覆つて
居りますので今明日は晴れ間
が見えないかも知れませんが
所に依つては雨になることも
あり一時晴れることもありま
しょう。しかし、此所へ事主
風が一時吹けば低気圧と衝突
して暴風雨になる怖れもある
ので注意が肝要です
デパートよりのお届け品が着
けば明日中には驚く程の快晴
となる見込みです、風は東西
南北海上では波は高からず、
低からず、夜になると太陽が
西に沈みます、月の出は夜に
なつてからの筈です。
夜十時以後には各家庭地方に

空前の珍書出づ

大好評!!大歓迎!!見よ!!
必ず見よ!!百万の読者が
悉く大満足

男女濃厚 ねえ、あなた
恋愛情話 写真金六十銭送共
青春男女の恋愛情話!!色あり愛あり、情けある、あ
まじき恋まじき物語!!夢が現つか幻か、玉の合に乘る
心地する、是非一読を乞う。

真情燃ゆる心

流語 燃ゆる心 定價六十銭送共
春はのどけく鳥歌い、蝶々は花に戯れて人の心も自づ
から愛に戯れ、恋に憧れる若き男女間の燃ゆるか如き
熱き心を赤裸々に叫びたる珍本にして是れを讀む者は
皆「せつない文句に酔わされ」といふ頗る珍本なり
見よ!!見よ!!見よ!!見よ!!

男女浮世繪

類のない珍しい絵です、情愛深く無限の眺めあり、此
の絵を見て満足せぬ者は恐らく一人もなからう是非御
覧あれ、見れば見る程よくなる。

發行所 大阪市飛田大門通 寶文堂
振替大阪一六一六

素肌にふれる
その小気味よ
ア、もうた
ない

イイワ石鹸

シビレル會社特製

珍妙コント

裸にされた妖婦

泉 春 樹

戦後復活した銀座の裏通り
に上海クラブという二流のホ
ールがあつて、龍子はそのこ
ろに居た。彼女はその中
で、一見いかにも間の抜け
た顔つきをしてゐたが、頭丈
な体軀を流した背中に包み
よく見ると、左の薬指にギザ
な指輪をはめて、大方どこか
成上りの戦後派らしかつた。
彼はホールに現われると、し
ばらく入口に佇んでタバコを
吸ひながら、四曲
を見廻してゐたが、やがて、
黒紗のドレスに背中を半分位
見せた龍子の姿を眼ざとく見
つけると、惹きつけるように
そのそばに寄つてきて、勇敢
にプロポーズした。そこで、
彼女も立上るとニツと微笑し
た。

か——然し彼女と枕を共に
した相手は情事の喜びを知つ
たのも束の間で、やがては裸
にされた上喘いで吐き出すよ
うに、ベツと捨てられてしま
う。それでもデレ助には文句
が言えなかつた。全ては惚れ
た男の弱身である——。



て、早速彼と組んだ。
折りからホールはもうスツ
カリ夜の雰囲気包まれて、
妖しくまたたく五色の彩光の
下で、今タンゴの曲がゆるや
かに奏せられていた。——曲
目は、仄かな郷愁をたたえた
山は夕焼——
龍子は踊りながら時々相手
の顔を下から覗くようにして
ひとり快心の笑みを洩らして
いた。それというのも、相手
はだいたい好みらしい男で
おまけに微醺を帯びていた。
たしかに囁である——そう直
感すると、早速いつもの腕に
燃りをかけて、豊満な肉体を
相手の腕にピッタリ寄せ、情
熱的なダンスであつた。もう
追つた舞臺のホールの中であ
る。……

二人は間もなく喫茶室に來
たが、その奥まつたボソク
スで竝んで椅子に腰を下しな
がら、龍子は胸算用に怠りな
かつた。
「じゃ、指切りしてよ。でも
きつとネ。あたし、必ずお伴
しますから……」
「うん、僕も待つてゐる。」
彼女の柔かい腕が蛇のよう
に男の首へ巻きついて、コー
ヒを運んできたボーイが顔を
素向けるほど、二人の姿は他
變ないものであつた。
やがてホールが閉鎖される
と、彼女はと或る街角で落合
つて夜のタダシーを拾つた。



車は軽いエンジンの音を立て
ると、スーと闇に消えて行つ
た。
翌朝——彼女は新宿の或る
一軒のチャチな旅館の一ト間
で眼をさました。流石に阿
呆のうらにボカンとして途方
に暮れてゐた。服も、ハンド
バッグも、靴も、みんなタベ

の男に剃ぎ奪られてしまつた
のである。男は昨夜ここにき
て彼女と対談中、顔を巧
みにコーヒ茶碗の中に麻薬を
混入した。計画的な常習者で
お尋ね者の麻薬怪盗であつた
そしてそんなことにかけては
客は彼女より役者が一枚も二
枚も上であつた。
彼女はもう泣くにも泣けな
かつた。口惜しかつた。自分
の眠つてゐるヒマに、思ひ
ま弄ばれたであらう肉体を凝
つと眺めると、激しい悔恨の
情に胸を締められて、やつぱ
り大粒の涙を年甲斐もなく膝
の上にボタ／＼落した。その

冗談横丁

回覧板

落着き歓迎。但し冗談横丁の
住人に限る。

郵便目録休配
あ、我が恋は日曜と共に去り
ぬ。

貸間を求む。
廣さを問はず、なるべく離れ
家を求む。

未亡人附なれば尚可。
当方精力絶倫。

轉ばぬ先の杖。
死んで喜ばれる井矢田生命。

一刻も早く、あなたの妻子を
喜ばせ給え。

金銀大学入学願書受付開始。
但し、願書には必ず保護者の
履歴書及び財産目録添付のこ
と。

大呆超特作映画
三味線アメリカへ渡る

監督 石黒毛六
主演 三味線豊助

大蔵省印刷局
アルバイト課

ある遺書より。
僕が死ななければならぬ原
因は、伯父さんが百万長者だ
からです。

ああ、僕の命を賭けた恋人は
遂におばさんになつて仕舞つ
た！

新製品、べらんめえルージュ
一度附いたら一ヶ月は絶対保
証付、剥げず、落ちず、青春
の色艶。
一週間分、特価 五百円。

先般、小学校へ押入つた泥棒
は、盗んで帰つた品物が、修
身教科書だつたので、直ちに
自首して出ました。

或る印刷会社の社長は、修身
教科書の印刷用紙を横流しし
て、本日身柄送付になりました。

だより学校各種

スクール笑話

◎ スリ学校



(1)

先生「A君、君は近頃随分肥りましたね、何か滋養品を飲んでるんですか？」
生徒A「はい、毎日女性のミルタをスツて飲んでます」

(2)

先生「B君、昨日の実習宿題ができましたか？」
生徒B「うん、これ揃つて来たよ」

(3)

先生「ギョッ、バタフライ」
先生「毎日神経を鋭がらせているスリ商売も仲々樂ではあります、たまにはアベ

◎ 花嫁学校

先生「いゝえ、盛まれたのです」
生徒C「ハイ、婦人警官と」

(1)

先生「お化粧の秘訣は、濃くなく淡くなく、程よい所に御主人に倦かれない味のよきがあります」
生徒D「あら、ヤキモチとおんなじだわ」

(2)

生徒E「先生、結婚とは夢の國のようだつて先輩が言つてたけど、本当ですか？」
先生「夢を見てたんだわ、きつと」

(3)

生徒F「先生が婦人の星の今月号に書かれた、貞操は結婚前に興えるべきもの、つて何だか肯定できませんわ、先生はお与えになりましたの？」

先生「脱いで、自信が、あう」



◎ ストリッパー学校

(1)

先生「おや、エロー羽根子さん、今日はオクパイが見違える程大きくなりましたね、どうしたの？」
羽根子「オクパイ小僧の写真煎じて飲んだのよ」



(2)

先生「皆さん、ストリッパーは初めから裸体で踊るよりは一枚く、脱いでゆく所に非常なエロがあるのです。G子さんは巧く脱いでゆけますか？」

生徒G「はい、経験と自信があります。たけのこ生活ですもの」

(3)

先生「H子さん、腋毛はストリッパーには禁物よ、奇麗に剃つてくるんですよ、教科書のレッスンワンに書いてあるでしょう」

◎ のど自慢学校

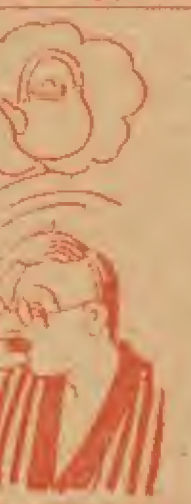
(1)

先生「NHKの、のど自慢ピアニストの方が書いた合格必勝法の教科書を勉強しましょう、I君、第一課を読んで下さい」
生徒I「はい、第一課、のど自慢合格の女性を誘惑するには……」
先生「……」

(2)

生徒J「先生、歌を練習するのは何処が一番いいでしょう」
先生「風呂屋なんか最適です、先づ誰でも二点位は喝せします」

先生「皆さんはたとえお妾であらうと、心を磨いてやがては正妻に出世するよう勉強しなければなりません、M子さん、貴女は磨いていますか？」



(2)

先生「旦那様を離さないようにするのが良妻です。N子さんはどうゆう手を打つていますか？」
生徒N「五十万円程融資して、がんじがらめに縛つて

生徒J「はあ、それで、此の間なんか三助がカンカンになつて、やかましいツて

言つたんだな」

(3)

先生「流行歌手の真似をしていては何時までたつても合格しません、自分の個性を出すようにすることです」
生徒K「ボ僕、個性を出すのすぐ、ド、吃つちやうんです」



◎ お妾学校

(1)

先生「皆さんはたとえお妾であらうと、心を磨いてやがては正妻に出世するよう勉強しなければなりません、M子さん、貴女は磨いていますか？」

生徒M「はい、旦那様のお顔を磨いています」

(2)

先生「旦那様を離さないようにするのが良妻です。N子さんはどうゆう手を打つていますか？」
生徒N「五十万円程融資して、がんじがらめに縛つて

あります」

(3)

先生「時にゼンスト等をやつて旦那様を喜ばせることがお妾のヒケツです。O子さんはどんなことをして喜ばせていますか？」
生徒O「はい、此の間若い娘を三人世話しました。旦那様大喜びです」

珍妙案内廣告

選挙 引受、但し当選は保証せず。
よし子 直ぐ帰れ、ムスコがろ知らせ。父、和田平助。
サジ 良、石臼の如き賢者を有する方。
結婚 容姿端麗なる五才迄の婦人を求む、将来妻として採用す。小平ヨシオ。
急募 大食漢、牛飲馬食に絶えず。対自信ある方大優遇。大日本人造肥料製造会社。
貸間 二階二間空。無料ニデ貸シマス。下モ可。戦後未亡人。
裸体 モデル急募、体重二十、身長五尺八寸以上、肉のきつ、所にあるべきものなき、方優遇。一時間給一万円。委託細面談。ハゲ高ビル内。ノド。
迷子 年七十五才、遺ナシ。動物園ノ中。迷子トナル、オ連レ下サレシ方ニハ感謝。星。
本廣告欄のお申込は、珍妙案内社へ。



裸体写真

蒐集集狂

吉丘垣根
志乃田じろ

「あたし、もう我慢出来ないわ。きょうまで、あなたに打明けなかつたけど、休えに休えてきたの。—あの人、色きちがいよ」
「色きちがい——？」
と、根城曲之助は、禮やかならぬ言葉に息を呑んだ。
これに対してゐるのは、処女だか人妻だか分らないまだ二十二三の、目はパツチリで色白く……という卑近な言葉で現わせない奇麗な女性である。
しかし先ほどから、この女性と根城曲之助の会話を聞いてゐるなら、もはやこの女性性が人妻であることは領けよう。この女性——虹村マエネは、その夫の虹村性根との夫婦別れを、曲之助に打明けてゐるのである。
「そうよ。あたし、こんなことあなたにお

話するの恥かしくて今日まで一言も云わなかつたけど、それはおかしい癖があるの——」
「性根が曲つておるのですかな——？」
「え、根性が卑しいの——。女の裸体にとっても興味を持つものよ」
「ハ、ア——」
と、曲之助はまともにマエネを見返した。これまで彼は、時折彼女の來訪を受けても何か面映いものを感じて正視し難かつたのが常であつた。彼に取つては、もうマエネは、高嶺の花という位置にある。虹村性根と、この女を張り合つてゐた当時は、彼に五分の、この女性との結合を期待し得る可能性があつた。それが、性根に敗れ、同時に初恋に敗れてから、彼はマエネを正視する力を持てなかつた。

「御存じの写真狂でしょう。それが夜分一人で暗室で現像してゐるのは、みな女の真ッ裸ばかりなのよ」
曲之助は頷いた。それじゃあなたも真裸に晒られるんですなと心の中で思つた。
「その写真を、書斎の壁に貼つてゐるのよ」
「どのくらい？」
「一面にだわ。初めはちやんと額縁に入れて、机の上に飾つたり、壁に掛けていたりしたんだけど、終いに、机の上は狭くなる、柱がいつぱいで壁土にちかき釘を打ちつけていたのも、第一額縁がつまなくてそれこそ、部屋の四方八方、大小取混ぜて女の裸、裸、裸ばかりなの……」
「これは凄い。四方八方、ね——」
「え、文字通りよ。天井もいちめん、ピンで貼りつけてあるの。畳の上にも所狭しと並べてあるわ」
「は——う、」
と、曲之助は感に堪えぬ声を発した。想像するだけでも、奇麗である。恐らく肉体のあらゆる角度を肉体の屈折しうるあらゆるポーズを網羅し尽してゐるに違いない。しかし、今マエネが求めているのは、彼の感嘆ではない。
「それは困つたことですね」
「そうなの。変態だわ。変態でなければ、変質狂だわ——」
曲之助はたゞかるく頷いた。変質狂は、世に珍らしいことではない。学者や発明家に往々見られるし、音楽、絵画、工芸、文学者などの藝術の部門にも、天才的な新機軸を示すものは、大なり小なり変質狂であり、またそれでなければ叶わぬことでもあろう。



「それじゃ、あなたの写真もたくさんある
のでしょね？」

「ところが無いの。——一枚も」

「写さないのですか？全然——」

「そうよ。それがあたし、たまらないの」

おや、と曲之助の目はマユネの顔に見開
かれた。マユネは、曲之助の意中を悟った
のか、思わず顔に朱を差し、

「アテ、話が飛躍したけど、そうじゃない
の。裸になつて写して貰うなんて真ッ平
だわ」

曲之助はうん／＼をした。

「考えても御覧なさいな。——あたし初め
は、藝術写真のモデル女なんかを写してい

るんだと思つていたんだわ。だけど、この
大阪で、神戸や京都なんかを入れても、絵
描きさんのモデル商賣をしている人なんて
それほど、机の上や四方の壁が一杯になり
天井から畳にまで並べなくてはならぬ程た
くさんいる筈がないじゃないの。日本全国
に見積つても、それは疑問だわ。あたし初
めて、この疑問に突撃つたとき、身震いし
たわ。だつて、素人のまともな女で誰が裸
になんかなるものですか、カメラの前に」

曲之助の顔は、深くなる。

「あたしが、あの人を色きちがいのうの
は、こゝのところなのよ。そうでしょう。

お金の報酬によつて、カメラの前に客易く
望み通りの裸体のポーズを取り得るのは、
どういふ商賣の女でしょう？」

「そういう商賣の女と、あの方は口を
利いているのよ。あの方の目は、カメラが
捉えた裸を見ているだけじゃなくて、その
女が裸になる前も、裸になつた後も見てき
ているんだわ。」

「それ以外に、その女と、どのような
話を交していることでしょうか？どのような
場所？ね、あの方と同じような裸体写真
蒐集狂がいるか知ら？ほかに——」

「さあ、どうですか？」

「いないわ。写された写真を集めるのとは
違つてよ。あの方のは、自分で写して集め
るのよ。ほかにいないとなると、どういふ
ことになつて？」

「——こういうことが云えるでしょう。そ
の女の人とあの方との場面に、別な誰かが
介在していないということ。つまり、たつ
た二人ツきりで、あの方は女の裸を眺め、
女は裸になつてゐるのよ。その女が裸にな
る前だか後だかに、きつとあの方も裸にな

つてゐるんだわ——」

と、終いに泣き声になつてきた。

「あの方の書きつづいたに、数えても数え
きれない位にある写真は、一人々々みな
異う多種多様の女との交渉を物語る。形見
の品でなくてなんでしょう——」

ハンカチで目頭を押えて、ゆつくりマユ
ネは云つた。

「立入つたことを聞きますが、虹村君との
夫婦の接触はどうなんでしょう？」

「しばらく泣かせていてから、曲之助は思
ひ切つて問うた。

「うん——」とマユネは首を振り、うつ
向いたまゝで、

「せんぜん——」

「え？一回も——？」

「あたしは、あの方に嫁いだ前のまゝの体
でゐるのですわ」

これは奇怪なことだ、と曲之助は思つた
なぜなら、性根がマユネとの結婚以前にあ
る女と交渉を持つたことを知つており、性
根が不能者でないことを、知悉していたか
らである。

「一度虹村君に会いましょう」

曲之助は云つた。

「あたしは、あの方と別れるつもりでいま
すの」

マユネは涙を拭き納めた。

日を改めてすぐ、曲之助は出掛けていつ
た。

一年前、親友であると同時に恋敵であつ
た性根にしてやられてから、曲之助は性根
の住居を訪問することはなかつた。しかし
彼ら三名が互に理智的であつた点は、恋の
争奪戦の勝負がついた後も、マユネを中に
介在して接触を保つた点にある。

訪ねていくと、マユネが出てきた。洋館
まがいの粹な造りである。マユネは、夫の
性根に取次ぐことをせず、すぐ二階の彼の
書斎へ案内した。

ドアを押して入ると、最初の一疊が板の
間で、後は一段高く床をかつて畳敷の和室
になぞらえてある、その向うの運棚を背に
して、ドテラ姿で机に向つていた性根は、
突然の二人を見て、驚いてパイプを口から
離した。音段は無闇矢鱈とどんな来客も、
この書斎に案内出来ないことになつてゐる
それをマユネに咎めるより早く、曲之助は
室内の光景を見てとつてしまつた。

晝でも電燈を点しているうす暗さだ。何
しろ、障子の棧に一枚々々びつしりプロマ
イド判から大きのはキヤビネット、八ッ切
小さいのは手札、名刺、プロニーとあら
ゆる型のを止めてあるのだから、外光の進
入は極度に弱められてゐる。それから一方
の襖も、襖の地が見えずにみな大小・濃淡
・遠近・全局・側腹・前後・上下・正斜・
縦横無尽、黒白の女体の図である。それが
上は鴨居から欄間、天井へ。横は壁から柱
へ。下は畳、畳の上に置かれた手画から本
の類にまで、このように写真、写真、写
真の展覧だ。見るとラジオのようなものま
で、手の触れるダイヤルの辺だけを残して
肉体の曲線を貼つてある、

正面床柱の上部には、一段と見事な全紙
の引伸が一枚、これは大胆に真正面から
全身を撮つてある。その両側にその半分の
大きさの二ッ切、その又両側に四ッ切、以
下縦横秩序なく八ッ切、キヤビネットと大
小取混ぜられている。判の大きさが区々な
ら、写されているものも、同じ角度で同じ
モデルを撮つたのは、目につく限りで見当

らない。

何と云つての正面いちばん大きいのが、王様格だ。宛然綺羅星の如く並んだこれらの群像は、酒池肉林の極地を象徴化したかのよう——。部屋には声なき声が、ねつとりと、たおやかに、雅歌の如く渦巻いている。

「圧観だろう——。アルプス連峰の頂上に登つて打たれる自然の偉大さに等しいものが、こゝにあるんだ」

ぼう然と見惚れている曲之助に、性根は目鏡をキラリと光らせて云つた。

「それ以上だね——。この眺めは、」

相変らず顎をさすりながら、首をキョロ／＼させて曲之助は答えた。

「そうかい、そう云つてくれるなら、この部屋の客になる資格はある」

と、性根はうれしそうにした。

曲之助はしばらく、性根に意見して来たことも忘れて、聞きしに勝る圧巻絵巻に、次第に忘我の境にさまよい始めた。そしてふら／＼と立ち上り、鼻を近づけて、そこらへんをうろつき出した。マユネは、坐つたまゝで口を開けて呆れた。

「君、どこかへ出よう——」

切りがないので、性根の方から口を利いた。それでもまだ、曲之助は生ま返事をして、首のかいだるくなるのも覺えず天井へ視線を這わせていたが、

「根城さん！」

というマユネの声に我に返り、

「あ？あ、あ、あ。そう／＼、出よう」とはじめて返事をした。

性根が曲之助を誘つた形で、街へ出ていき、喫茶店ルンバへ落ちついた。

「一体、あれで何枚あるんだい？」

曲之助は問うた。

「千枚に近い」

「すると千人を写しているわけか？」

「そうじゃない。引伸しがあるんだ。まあ三百人というところかな」

「見たところ同じものがあるように思えなかつたが、」

「あちこちに入混らせてある」

「いつから始めた？」

「いえないね。いつからとも」

「いちばん古いのはいつ撮つたんだい？」

「五年まえ」

「すると五年まえから集めているんじゃないかね？」

「ちがう。五年まえに撮つたのは三枚きりだ。蒐集しだしたのは、こゝ一年だね」

「マユネさんと結婚してから？」

「そう」

曲之助は、夫婦關係を一度も持ったことがないというマユネの言葉を思い出していた

「どういふ女だね？モデルは」

「想像に任せよう。説明するまでもないと思うがね」

「藝妓か？」

「それもある」

「娼妓もか？」

「イエス」

「パンパンは？」

「同様」

「素人の女は？」

「混つている」

「娘？未婚の」

「いるね」

「未亡人は？」

「問うまでもない？」

「その他に？」

「挙げるのを忘れてるね。女給、仲居、女中」

「飯焚きは？」

「婆さんでない限り」

「うゝむ」

「それから女優」

「その位のところか、看護婦や事務員は？」

「素人の女の部類に入れておいていゝね。……モデル女がいるよ」

「え？」

「絵描きのモデルになる女だ」

「あ、そうか」

「で、君は何を訊きたいんだね？」

先手を性根は打つた。

「さつくばらんて訊こう。それらの女と体の關係は？」

「みなあるよ」

あつさりいうので、曲之助は呆れ、驚いて、ただ相手の顔を見守つた。

「いや、みなあつたよ、だね。どれも金で買つたものばかりだつたから、一回きりだ」

「その時々で写したのか？」

「そう——」

「君の目的はどつちにあるんだ？体の方に」

「写真の方に？」

「写真の方に」

「なら、交渉を持つ必要はないと思うが」

「いやみな女が提供してくれるのでね。金の手前だか何だか知らないが。……それに中には遊るものがあるにはあつたがね、そんなのは、魅力が増してこちらから強引に求めたよ」

なるほどこれは色きちがいた、と曲之助は思わず独り言した。



「え？何を云っているんだ？」

訊き返す性根に、

「いや何でもない。すると何かね、その裸体写真蒐集は、何か悲願とでもいうものがあつてやつてゐるのかね？」

「そんな大袈裟なものでない」

何が大袈裟でないものか、と腹で思う曲之助に、性根はつづけた。

「カムフラージュをするためだ」

「何の？聞かせて貰おうか」

「話そう。君が僕の部屋で見た、正面に新聞紙より大きい全紙のがあつたらう？」

「——あつた」

「その両脇に二ツ切のと。あの三枚が、——あれは後から引伸したものだ——あの三つの原版が、五年まえに撮影したものなんだ」

五年まえ、僕は一人の女に恋をした彼女も僕を愛した。二人とも、それが初恋だつた。初めは清純な恋だつたが、次第に深みに、大胆に、彼女の凡てを僕が求め、僕の凡てを彼女は求めた。おのゝきつゝ、最初の体の繋りを経験した。一回、二回、それは重ねられた。僕はそれを、愛の極地の崇高な行爲と互に信じ合つた。淫らなところは、ちつともなかつたのだ——

君は分つてくれないだらうか？僕らが、その崇高清純と信じた行爲を永遠の形見として残すため、彼女の一条纏わぬ姿をフィルムに映像しようとしたことを。僕は納得ずくで彼女のそんな姿を三枚、別々の角度から写したのだ——

その後、僕はマユネの体に魅力を感じ、君がマユネに抱いていた心情を知つていながら敢て結婚した後も、しかし僕は、昔のこの初恋の女が忘れられなかつたのだ



何とか僕は、僕らの純粹な愛の形見を大ッぴらに書齋に飾れぬものかと思案した。いま君にいつたカムフラージュというのは、これなんだ。つまりこの三葉の裸体写真は妻の手前にも特に目立たせないために、これによく似たいろ／＼な裸体写真を一緒に並べることを思いついたのだ——

——はじめは藝妓とか娼婦とかに報酬を出して、写していた。ところが、これを一枚々々現像し、眺めているうちに、何とも云えん快感が湧いてくるのを発見したんだ。遂にはカムフラージュのための手段として裸体写真を捨てるつもりだつたのが、いつかたゞそのものゝ蒐集のために、僕は全力を盡す脇道を逸れたのだ——
「それでマユネさんを顧みる暇がなかつたんか？」

曲之助は言つた。

「いや、マユネは、そつとして置きたかつたのだ。そつと残して置きたかつたのだ」
「それは君の貪欲（強慾）の所爲か？」
「そうだ。あらゆる女を漁り盡した最後にマユネの体を愛そうと思つたんだ。しかしもういま、僕の考えは變つた。君がわざ／＼出赴いてきて、僕にこの話をさせたから。……マユネは君に進呈するよ。いや、返上するというのが、本当かな」

どう返事していいのか曲之助は分らなかつた。
「……」

「マユネの肉体を最後に取つておいたとてマユネを愛する迄に、世には無限に女が存在するというのを、発見したからだ。恐らく僕の一生をかけても、裸体写真蒐集が

完成したという時が來ないだらうから」
「君はまだ／＼それをつづけるつもりかい？」

「つづける。——君には、マユネが初恋の女だつたんだね？」

曲之助はちよつとうなづいて、すぐ止めた。

「連れていつてくれ。君にはその資格がある。だが僕には、君に、マユネを連れて行けという資格さえ、もう無いんだ——」
この裸体写真蒐集狂は、そう云つて顔を逸向けた。

「その、君の五年まえの女性はどこにいますか？」
曲之助は問うた。

「いないよ、どこにも。もう、……死んでいるんだ」

性根は、顔を背けたまゝで答えた。

ルンバを出て、性根に分れ、帰途を辿る曲之助に、後から一人の女——マユネがついてきた。

二人がルンバへ入つたのを見届けて、物陰から、彼らが出てくるのを、彼女は待ち受けていたのだつた。

「あ、あなたは、……性根君に会つたのですか？」

ふと背後に近づく人の気配に振り返つて曲之助はマユネに問うた。

「いゝえ——」

マユネは首を振つて近づいて云つた。
「あたし、もうあの人の許へは帰らないつもりですの。ねえ、根城さん、連れていつて下さいな、あたしを」

終——



千人の男の身体を満喫しながら、一人の男の心に
飢えきつてゐる夜の女達の奇妙な生態……始めて就
職した公立性病院で童貞の青年醫師は、夜の女達
の蛇のような誘惑とどう闘つたてあろうか。

—

阿部駿一が、母校の医大で可愛がつても
らつた主任教授の紹介状を携えて、こゝの
院長である山代博士を訪ねたのは、もう五
月も終りの、めつきり汗ばむほどの午後で
あつた。

「ほう、婦人科を専攻なさつて、しかも
飯田君の愛弟子であるあなたが、どうして
こんな性病院なんかに就職を希望なさるの
かね」

おだやかな童顔に意味ありげな微笑を
浮べて、山代博士は、若い医学士の顔をし
げしげとのぞきこんだ。

「はい、飯田先生は研究室に残るようにと
おつしやるのですが」

貧困な家庭の長男として、身を粉にする
ような激しいアルバイトの勞働に耐えぬき
ながら、ようやく医大を卒業した駿一にと
つては、主任教授の恩情は有難かつたが、
高遠な學問の研究よりも、まず老い父母と
数多い弟妹、養わねばならぬ責任の方が重
かつたのである。彼の告白を、山代博士は
ふん／＼と腕を組んで傾聴していたが、
「よろしい、よく判りました。ちやうど医
員の缺員があるから、この病院に就職でき
るように諸事取り計らいましょう、しかし
……、この病院は御存じの通り、府立であ
りますしね、給料なども国家公務員法に準
じるから至つて安い、これは我慢してくれ

ますかね」

と念を押した。

「よく知つています、かりに私が研究室へ
残るとしましても、五、六年は副手、助手
という悲惨な無給に甘じなければならぬ
のですから」

「そう、その薄給を辛抱してほしいことと
もう一つは……」

と山代博士はなぜか次の言葉を言い淀ん
だが、

「思い切つて聞きますが、あなたは異性と
の交渉を経験していますか、失礼だが、こ
の病院の勤務には普通の病院とは全くちが
う困難な空氣があつて、あなたが童貞かど
うか、相当大きい問題になるので」

駿一は耳の根まで眞赤になつた。

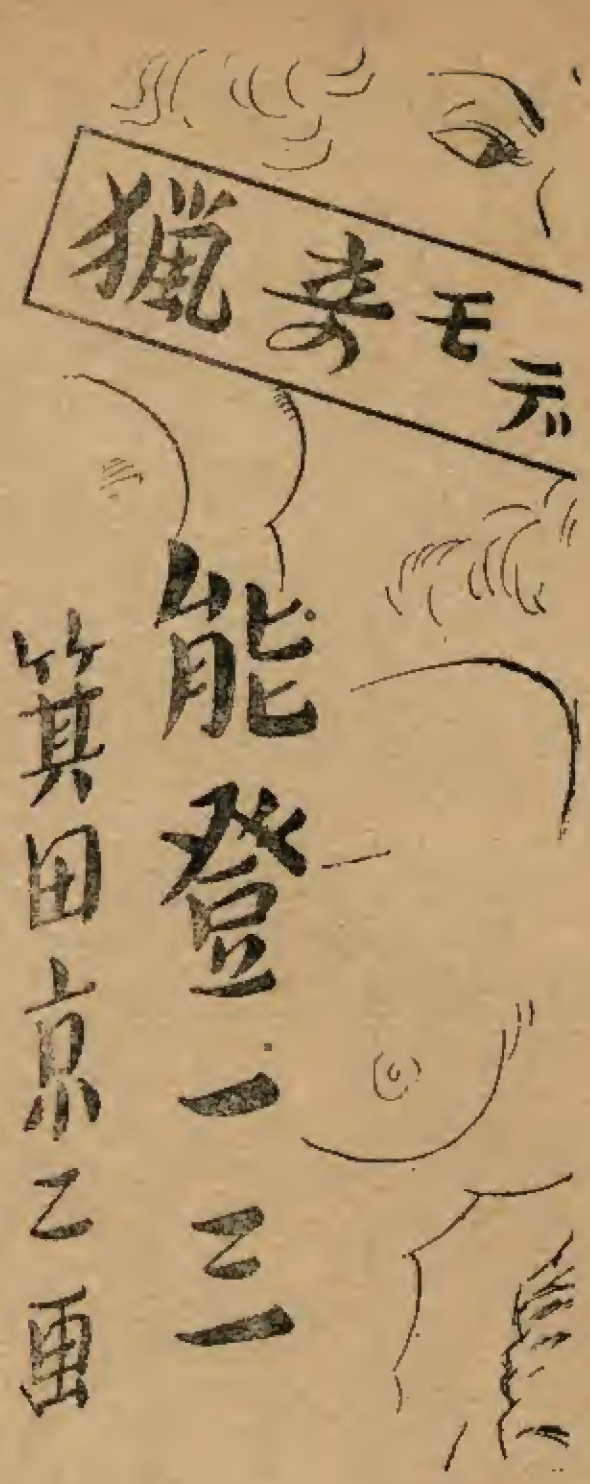
「……まだ経験がありません、でも、それ
と勤務となぜ関係があるのでしょうか」

「うむ」

山代博士は純真な青年醫師の困惑し切つ
た顔をじつと見守つていたが、

「あなたはやはり飯田君の膝下で、一心不
乱に医学の研究に没頭される方がいゝらし
い、女性に対する美しい観念を、こゝでは
無惨なほど叩き潰されますよ、……純真な
若い人々が耐えぬくには、氷のような理性
が必要なのです」

「……先生、私はどんな困難でも立派に我
慢します、ぜひ就職させて下さい、お願い



算田京乙画

「そうですか、あなたにそれだけの覚悟が
ありさえすれば」

駿一の懸命な懇願に動かされたのか、山
代博士はしぶ／＼ながら採用を約束してく
れたのであった。だが、やがて、勤めるよ
うになると、たちまち駿一は、山代博士が
なぜかといほど騒りかえして、「普通の病
院とちがう困難な空気」と言つたかが身に
沁みて諒解できた。

精神病院でもなく、結核病院でもなく、
又血なまぐさい大手術を要する外科病院で
もないこの病院特有の困難な特殊性とはい
つたい何であつたろう？……か。

二

……やがて、十人あまり医師の居る医務
室の片隅に机を與えられた駿一の第一の仕
事は、まず、患者に接する予備知識とし
て、分厚い綴込になつてゐる入院患者のカ
ルデと病床日誌、それから多くの統計表の
検閲であつた。

關西だけでなく、全国的に、夜の女達の
性病治療施設として知れ渡つてゐるだけに
この大阪南郊にある府立性病院には、毎日

毎日警察にあげられて送られてくる街
頭の夜の女の影しい数に、特殊喫茶の
女達が自発的に検診と治療を受けにつめか
けてくるのであつた……。

「あゝ、これが敗戦後六年間の日本女性史
の総決算なのか」

駿一はあまりにむごたらしい賈淫の実状
をまぎ／＼と見て、ぞつと背中の中毛穴から
冷汗が吹き出す気がした。

駿一は教室で學んだいろ／＼の医学書の
むつかしい理論よりも、もつと活きた痛烈
な教訓をこの二枚の統計表から受けた。

考えれば女も哀れなものである。花の盛
りを誇るのも僅か三年で、あとはもう男の
心を惹く魅力をみるみる喪つて行くのだ。
衰えてゆく肉体痛感しながら、小皺のよつ
て来た顔に、死者ぐるい濃い白粉を塗り
口紅をなすくつてゐる夜の女達の苦悩。

食わねば生きられない。食うためには衰
えた自分の肉体を幾枚かの百円札と交換し
なければならぬ。びく／＼と警察の眼を
盗みながら、病菌を怖れながら、夜毎に異
なる男の胸に抱かれてゐる女達……、それ
は他に食う手段のない、あるいは食つてゆ
くだけの収入を得ない女達の最後の白兵戦

である。

「男達は性慾を満す獵奇的な動物としてだ
けしか彼女達を扱わない……、同じ日本人
同志が相手人間扱いにせず、動物扱いに
するといふような侮蔑があつてもいいの
か」

駿一は、バサリと日記を閉じ、統計表を
たゞと、明るい初夏の光が漲る窓へ眼を
むけた。外は眼に沁むような快晴の青空で
ある。近々と迫る緑色の生駒連峰が美しく
輝いてゐる……、あゝ、暗いのは人間の世
界だけなのだろうか？

そのとき、軽く扉をノックして入つて來
たのは先輩の遠藤医師だつた。愛酒家で、
いつも快活なこの先輩は、若い助手である
駿一のふさぎこんでゐる肩をぽんと叩くと
「……だめだよ、阿部君、考えこんでは哲
学者になつちまう……、あはゝ、若い日に
は誰もその統計表を見てはふさぎこんでい
たものだがね、性病医に感傷は要らんさ」
とにこ／＼と光の煙を輪に吹いた。

「……でも、先輩」
駿一がこみ上げる感情を吐こうとしたと
き

「遠藤先生と阿部先生……！……検診の患者が
警察から参りましたわ、お願いします」
と看護婦が呼び立てに來た。

三

「いかん入院して徹底的に治療しなければ
君のはずいぶんひどく爛れてゐる」
「……そやけど、遠藤先生、わては別にな
んともおまへん、入院だけはかんにんしと
くなはれ」

「ごまかされはしない……、おい、小谷君
次の人を入れたまえ」

検診台から降りて裾を合せながら、入院
はいやだとだゞをこねる女をもてあましな
がら、遠藤医師は、廊下の方で、検診患者
の群を預つてゐる小谷看護婦に声をかけた
がや／＼と何か罵りあい喚きあう若い女
同志のヒステリックなさわざがしてゐた
夜の女達と看護婦の間には、それがどちら
も同じ若い女であるだけに、どうかすると
不穏な白けた対立が起きた。特に入院を極
度にいやがる夜の女達は、検診の医師の眼
をごまかそうとして、廊下で待つ間にも、
綿や紙片をこつそり使つて、患部の膿を拭
きとろうとする習慣があつた。そうしたこ
とが、なれた看護婦に見破れないはずはな
い。制しようとする看護婦と夜の女達の口
汚い争論はたいがいそれが原因となつた。
「……生意氣やわ、あの看護婦、ちよつと
顔がきれいなもんやさかい、つん／＼して
て」

ぶつ／＼と呟きながら、入つて來た女は
なれ切つた調子で、ぐるりとスカートの裾
をたぐると、カーテンをはねのけ、低い二
段の階段を昇ると、木製の検診台へ、ころ
りと仰向けに横たわつた。別に羞恥の様子
もなかつた。

「たのみまつせ、遠藤先生、大分ベニシリ
ン打つたさかいに、もうどないもおまへん
やろ」

「うむ、トリツベルの方は心配ないや、じ
やあ、採血してみる」
「かなわへんなあ……、梅毒で、わて、か
いつたおぼえはおまへん！」

三つの性病のどれをも徹底的に調べねば
ならない。検診台を降りた女は、ぶよ／＼
と青白く太つた二の腕をむき出すと、採血
針を刺されるのを待つた。

駿一はその腕へアルコール綿をこすりながら、女の腕がまるで種痘のあとのようにぶつぶつと十二三ヶ所も化膿しているのを見た。

「どうしたの、君、これは？」

「うふふ、注射の痕が腫みましたのや」

「注射……？、なんの注射かね」

「……まあ知り知らしめへんの、たよりないお医者はんやなあ、わてらたいがい自分で打つてますがな、ヒロポンですが……」

嘲けるように、ころ／＼と笑う女のあくどい口紅と、アイシャドウが、じんと駿一の心に沁みだした。

机の上の木の枠には、もう六本の試験管がとつぷりと、六人の女の血を満して並べてあつた。ブドー酒のように眞赤で美しい血液の中に、うよく／＼と眼に見えぬスピロヘータ菌がうごめき、泳ぎまわっているはずである。

前夜に警察に押さえられた夜の女は一夜を冷たい留置場で明かして、翌早朝、トラツクで検診にこゝへ運びこまれる。淋疾と下疳の検診にパスしても、梅毒の血液検査が完全に陰性である証明がされない限り、病院を出るわけには行かない。午前中に採血して、午後にはその試験管は一まとめに血液検査室へ運ばれる。検査室の主任は男性だが、係員はみんな若い女性なのである。汚れた同性の血液を顕微鏡で照し出すのが健康で清浄な血液をもつ彼女達の仕事であつたプラス、マイナスの結果が確実に判明するのはその翌朝である。夜の女達はどうしても、病院で一夜泊らなければならぬ肉体の切り賣は彼女達の神聖な「生きる道」だつた。それ以外に何ができるのか。

病院の一夜は、彼女達の収入を奪うことであつた。社会には彼女達よりもつと凶悪で破倫な犯罪をやつて、のう／＼と平気で暮している連中がいくらでもある。彼女達は、自分自身の肉体を男に與えるが、強盗でも窃盗でも詐欺でも、公金横領でもないのだ夜の女達を生んだのは決して彼女達自身の怠惰や罪ではないのだ、歪んだ資本主義社会が生んだ哀れな花なのである……。

けれども、たゞ怖ろしいのは、彼女達の肉体に巢食つている性病菌そのものである。彼女達の行為はキリストも許したまうだろうが、性病菌は撲滅しなければならぬ。人類にあくまで災禍を與える病菌に対しては勇猛果敢な殲滅戦を続けねばならぬ。これが医学に携わるものの当然の任務なのだ。

駿一は採血器の中へ、次第に吸いこまれてくる眞紅の女の血をじつと見つめていた

「……いやや、わてはパンパンとちがう、わては天王寺公園をぶら／＼歩いてたゞけや、こんな病院へつれて来られたらもう恥ずかしいて家へ帰られへん！、……かんにんして、看護婦さん、かんにんして」

検診室の扉の前で、小谷看護婦と必死になつて揉みあう女のひい／＼という泣声に駿一は、はつと眼をうばわれた。年頃はまだ十七八の少女である。お下げ髪で、垢じみた銘仙の着物に、メリンスの帯、見るからに見すばらしい田舎者の様であつた。

「……おや、牙ちやんじやないか、また刈りこみにかゝつたのか、これで五回目だなあはは」

駿一の感傷を吹きとばすように爆笑したのは、遠藤医師だつた。その一言で、少女の態度ががらりとかわつた。

「……なんや、遠藤先生の当番の日やつたんかいな、仕方あらへん」

カムフラージュを見破られたと悟つたのか、少女は大胆に自分から検診台へ上つて行つた。

「うむ、これは……」

うめいた遠藤医師は、眼顔で、駿一を招いた。露出した下腹を指しながら、低いドイツ語で

四

「……妊娠五ヶ月だ！」

疑いはなかつた。駿一にも婦人科医として妊娠の兆候を一眼で見破れた。哀れな奇蹟をまざ／＼と見せながら、十七才の夜の女はじつと検診台の上に横たわつていた。どうにでもなれという、ふてくされた不信と絶望の眼を、二人の医師に交る／＼注ぎながら……。

さぞ婦人患者に対して侮辱をきわめているように感じられるだろうが、便所に扉をつけないのは、病院として深い理由があるからです」

院長の山代博士は、駿一の抗議に対して静かに口を開いた。

「あなたは、毎晩数人の異性の胸に抱かれるという極端な性生活をしている彼女達が一週間から二ヶ月近くも禁欲を強いられたとしたら、どういう精神状態になるか、又そのありあまる情慾の吐け口をどこへ向けると思いますか……、異性と云えば、われ／＼医師の他にいないこの病院では」

「……オナニーでしょう、おそらく」

「もう一つあります」

「……同性愛ですか？、だが女学生ならいざ知らず爛熟し切つた肉体の彼女達がまさか、」

「いや、藝者や娼妓のようにつねに異性と交渉に飽きているものは、かえつて、同性にむかつて、変態的な異常性慾を発揮するものです、こゝの患者達もその傾向が非常に濃厚なですよ……、だが、病院の中で、そうした同性愛を満たせる二人つきりの場所は便所しかないわけです」

「なるほど……」

「もう一つは、早く退院したいとあせる彼女達は、医師の眼をごまかすため、いろんな勝手な處置を自分の肉体に試みます、その場所も亦、便所の他にはありません」

「それでしよう、それはよく判ります」

「だから、変態的な同性間の性遊戯と、勝手な自己処置をさせぬよう、こゝの婦人便所には一切扉をつけていないのです」

患者に対する大きな侮辱だと意氣こんで来た駿一は黙つて頭を下げた。怖るべき性

病の治療を徹底するためには、科学者として氷のような理性が必要だったのか。あまり同情や感傷は決して本当の愛情にはならないことを酸一は、「罪のない便所」から痛切に教えられた。

入院している女達に無理な禁慾を守らせねば彼女達を蝕んでいる病毒から救い出すことはできないのだ！酸一は頬がひきつるような苦笑を浮べた。それが性病医としての責任だった。彼女達が傷いているのは肉体だけではなく、性病院はあたゝかい愛情で治してやらねばならないのである。医

師としては冷徹な理性を、人間としては石のような愛情を持たねばならない板挟みの苦しみを、若い酸一はしみじみ悟るようになった。

だが、医師としてそうした態度をとるとき、彼女達が、信頼から、いつしか医師を慾情の対象としてすがりついてくる大きな冒険があつた。医師は患者としての彼女達に接して居なければならぬ。もしそのねばくした媚態の誘惑に負けて、男性対女性の立場に顛落したら……、それは想像だけではなかつた。実際にそうしたトラブルに陥つた若い医師はこの病院でも多く出て

いたのであつた。酸一は規定の時間になると、病院へ巡察に出かけた。

病室は五十人を収容できる廣い洋室が五つあつた。二十五つずつりと兩側にベツドが並んでいた。梅毒患者、淋疾患者、下疳患者と分けて一室づつにまとめてあつたが酸一の一番苦手なのは、潜伏期の梅毒患者の病室であつた。淋疾のように激烈な疼痛もなく、下疳のように自分でもはつきり判る症状もなく、ただ、血液検査のプラス1、2、3と出ているだけのこの病室の彼女達は、外見は全く病人とは見えなかつた。……

「妊娠五ヶ月だ!!」哀れな奇蹟をまざくと見せながら、十七才の夜の女は、じつと検診台の上に横たわつていた。ふてくされた不信と絶望の眼を二人の醫師にかわるがわる注ぎながら三……



しかも、潜伏性強陽性の患者ぐらい、治療の長びくものはないのだつた。ネオサルバルサンを三日に一本ずつ打つて二十本が一クール、その間に蒼鉛剤を注射してゆく六十日入院しなければ一回の完全な治療が終らなかつた。しかも時々血液検査で、プラス3がプラス2、プラス2がプラス1になつてゐるならいゝ方で、はつきりマイナス(陰性)を示す幸運なのは百人のうち二人か三人あるかなしであつた……。そのくせスピロヘータが腎臓へ入るか、脳へ進めばもう万事水泡であつた。性病菌の中で一番猛悪で執拗なスピロヘータが淋疾や下疳のような確かな自覚症状を伴わないことはなんという大きな皮肉であらう。

しかも、無智な夜の女達は、昔の遊女のように、梅毒で頭髪が脱げ落ちるのを、かえつて「トヤにつく」――一人前になつた、と歓迎するような習慣を持つていた。

「サルバルサンが発見されて、昔のように鼻の落ちる心配はなくなつた、しかし、そのためにかえつて脳梅毒や腎臓病が多くなつたのだ、文明の余沢かね、これも……」恩師の飯田教授が寂しい苦笑を見せて呟いた一言を酸一ははつと思ひ出した。

酸一が病室へ入つてゆくと、一番入口に近いベッドから、かぶつていた毛布をはねのけて、むくくと起き上つたのは、豚のように肥えた三十過ぎの、トシ子という大年増だつた。トシ子は、阿倍野橋界隈で顔の賣れた夜の女の大姫御であつた。

「ごくろうはんだす、先生」

「あゝ、どうだね、ぐあいけ？」

「看護婦はんはまだ強陽性やつて言わはりますけどなあ、わてはもうなんともおまん！」

「……」

「びん／＼してるのにまだ出られへんて、こんな殺生なことがおますかいな、先生」

「うむ、あせるのはわかるよ、しかしね」

室長という名で、もう入院して一ヶ月になるこのトシ子の我儘なおしやべりに、駿一はいつも悩まされるのだつた。

「さよか、まだあきまへんか」

いくら年若くても相手が医師だと、結局彼女達は、だまをこねるだけこねて、またごそ／＼とベッドにもぐつてしまうのであつた。

三十人ほどの彼女達は、もうすつかり暑いためか、シユミーズ一枚か、うすい肌じゆばん一枚で、ばた／＼と扇子を使つて、べたりとベッドに寝そべつていた。枕元に鉛の包み紙や、せんべいや饅頭の空袋が散らばり、表紙のとれたカストリ雑誌や古い映画雑誌が乱雑においてあつた。どこへ出すのか、安つぽい便箋に鉛筆を走らしている女や、所在なさうに、流行歌を口笛で吹いている女もあつた。薄いシユミーズや肌じゆばんだけの彼女達の身体は、やはり酷使がたゝるのか、みにく／＼たるみ、線が崩れていた。そのくせ、どの女もこつてりと化物のように首から上だけ白粉をぬり、あくだいほどに濃い口紅を塗つていた。荒れた肌と不似合な顔だけの化粧は、なぜか、哀れで滑稽な泥人形を想像させた。

「おや、君たち、なにをしているんだ！」

隅のベッドの上に、三四人が固まり、駿一の入つて来たのも気づかず、汗の光る背中を見せて頭をつきあわしているのを見ると駿一は不審におもつて声をかけた。

「あつ、先生や」

あわてゝ、はじけるようにベッドからと

び降り、自分々のベッドへ帰る女達。そのあとには、花札と百円札がごちや／＼に散らばつていた。病院の規則で、ベクチは厳禁されていたのである。

「こまるよ……、誰のかね、叱らないからしまいたまえ。みんな小遣錢にもこまつているんじゃないか」

「……すんまへん、二度とせえしまへんさかい、先生」

おづ／＼と花札と百円札を膝にかき集めたのは花枝という十八九の若い女であつた。「わて、阿部先生がやさしいさかいに好きでたまらへん……、遠藤先生やつたら、こんなん見つけたら、がみがみおこらはるもん、わてきらいや」

花枝は鼻にかゝつた甘え声で呟いた。

「ほう、君は？」

一番隅のベッドに、ぼつんと一人、ちやんと衣服を着たまゝ、淑やかに坐っている女を見ると、駿一はつか／＼と進んで行つた。昨日までは見かけなかつた新しい女であつた。

「何回目かね、こゝへは」

そう問われて、その女の耳許までかつと血の色が上つた。うなだれたまゝ返事はなかつたのである。

「……阿部先生、この人チェリーさんですが」

べた／＼とスリッパをひきずつて、室長のトシ子が近づいて来た。

「ふうん、チェリーさんという名前かね」

「いゝえ、ちがいますねん、チェリーさんというたら、わてらの仲間

で、オボコ娘のことですがな」

「処女……それがどうして」

「さいな、わてもなんや始めから

妙なくあいやおもいましてなあ、根掘り葉掘り聞いてみましたら、えゝとこのお嬢さんが、家出して来やりましたで、夕方に天王寺公園をうろろしてはつたんだす、それも、わてらの商賣場所だしたのが運が悪うおましたんや」

「じゃ、警察の刈りこみにまちがつてつれて来られたのかね？」

「そうどす、そやけど、こゝへつれて来られたら、一應は検診受けて、血液検査してもらわんなりまへん、この人がオボコ娘やちうことは、検査受けたらいつべんにわかりますがな……」

「だつたら、なぜ」

「わても口がすつぽうなるほど検査受けて身のあかしを立てなはれとすゝめまんのやけど、そんな恥づかしい目に会うぐらいなら、舌嚙んで死ぬいうて聞かはらしめへんのや、どないしたもんだつしやろなあ、先生」

娘はしく／＼とすゝり泣いていた。

駿一がなだめすかし、やつと遠藤医師と小谷看護婦の立会を得て、触診をしようとするとしても、娘は眼をとじ、唇をむすび固く合せた膝をわな／＼とふるわすだけであつたが……、やつぽり、正真正銘の処女であつた。

「早くお家へお帰りなさい、こんなところへまちがつて連れて来られてどんな気がしましたか、あなたのようなお嬢さんが、う

つかり大阪なんかへ迷い出して来たら、こ

わい目にあいますよ」

翌朝、こん／＼と戒めた上に、なけなしの財布から和歌山の田舎までの旅費を出して娘の手に握らせた駿一はわざ／＼阪和線まで送り届けた。久しぶりに晴れ／＼と明る

い気分であつた。いゝことをした喜びが軽い口笛の歩調となつた。娘はなんべんも頭を下げ改札口の雑踏へ吸いこまれて行つた

「いつも御厄介をかけます」

今朝も五人の夜の女をつれて来た顔見知りの若い警官は、医務室へ入ると、きちんと踵をそろえ、直立不動の敬礼をした。遅ましく日焼けた顔から玉のような汗が吹き出していた。椅子をすゝめて、

「いや、あなたの方こそ御苦勞様です、取締もずいぶん御苦心でしやう」

「はい、近頃は前のように本人が自分から街頭に立つて客の袖を引くことがありませんので、ボン引に案内させ、ちやんときまつた素人の家へ客をつれこむという方法をとるものですか」

「ホテルのような臨検のある所は危ないというわけですね？」

「そうであります……、現に今朝つれてま

いりました一人などは、全く我々の想像もしなかつた普通の大衆食堂の二階を根城に

していました」

「それをどうして発見されたのですか？」

「同僚が私服で巡察しているのを、ボン引

三十人ほどの彼女たちは、もうすつかり暑いためかシミーズ一枚か、うすい肌じゆばん一枚で、汗の光る背中を見せ

がそうとは知らずに、いゝ客のつもりで案内したのであります」

「あはは、警官を案内しちゃたまらない、ボン引もずいぶんぼんやりしてしまいましたね」

「近ごろのボン引は、素人が多いものですから」

警官が帰つたあと、駿一はこみあげてくる笑を押さえきれなかつた。その場の情景を想像すると、あわてふためくボン引と女の恰好が喜劇そのまゝだつたからである。五人の女をつれた駿一が、廊下を通つて、面会所の前を横切つたときのことである。

「あら、八重ちゃんちがうのんかいな、あんた」

面会所の中から声をかけた女があつた。旧日本軍隊の内務班のように、真中に長いテーブル、その兩側に細長い板の椅子が並んでいた。入院している女を訪ねてくる者があると、受付のおばさんが病院へ呼びに来る。外來者は恋人か情夫のあんちゃんか、同じ夜の女の朋輩らしいどぎつい化粧の女ばかりであつた。父母とか兄弟というやうな似た顔は一つもなかつた。

いま八重ちゃんを声をかけたのも、情夫らしい男と、土産の折詰のすしをさかんにばくついていた。

「なんや、町ちゃんかいな、顔見ひんおもたらこゝへ来てたのん？」

立ちどまつて、につと齒を見せたのは、いま警官につれられてきた五人の女の中で一番若い大衆食堂の女中風の女であつた。「八重ちゃんこそ、どないしたんや、あんたどこ、普通飲食店やもん、臨検あらへんのに」

「ボン引が素人で、刑事をひつばつてくる

ねんもん、さつぱりやがな」

「……それで、あんた、大丈夫かいな、検診うけても」

「さあ、わからへん、ちよつと怪我して膿が出るさかい」

「……ほんなら、又、十日ほど商賣があがつたりやないのん、そや」

「モクを持つてへんか、八重ちゃん？」

「OK、ほら！」

たもとからつかみ出した光の一箱。さつと投げるのを宙で受けとつて、

「サンキュー、あとで遊びにおいで、四号室や……」

あとをばら／＼と両方で笑つて別に羞恥の影もなかつた。夜の女達にとつて、父母や兄弟のある家庭には縁がない。親が冷たいのか彼女達が家庭へ寄りつかないのか駿一は、朗らかそうな彼女達が帰るべき温かい家庭を持たないことを寂しく思いやつた。うれしいことも、悲しいことも、分けあうのは同じ年頃の夜の女の友達に他ない娘達であつた

待合所の隣りにある賣店でつめたい牛乳やラムネをこく／＼飲んでゐる女達があつた。こゝには電熱器が準備してあつて、自炊を希望するもののために飯も炊けるやうになつていて、アルミ鍋が三つほど湯気を吹いていた。

おかずもいろ／＼揃えてあつて、一皿二十円均一の札が立てゝあつた。

「おつさん、なんぞあつさりしたもんないのん、天ぶらも飽きたしなあ……、沢庵ちようだいな」



ちよつと顔色の悪い女が賣店のおやじさんに注文していた。さすがに酒はおいてないが、餡、かき餅、まんじゅうなどのおやつ、それに多になれば、大鍋をかけて関東煮も賣るのであつた。どこを見ても、どぎつい化粧の女が、肉体の線もあらわな薄物で、にぎやかに元氣に行き交う性病院……

陰鬱などは全く感じられず、どこから陽気なジャズレコードでも流れきそうであつた。だが、駿一の心は鉛のように憂鬱であつた。駿一がすらりとした美青年でありしかも童貞であることを、敏感に嗅ぎつけた百人近い患者達は、禁慾を強いられて、

なお兇暴に燃え上る激しい女の情慾の吐け口を向けて來始めたのだつた。

口やかましい遠藤医師の顔を狙つては、なんとかかとか、彼に言い寄る夜の女達のなまぐさいまでの体臭や、ぎら／＼と妖氣を帯びて光る眼の色は、駿一にとつては、吐氣を催しそうな嫌悪と恐怖の的であつた。露骨な姿勢で挑発しようとする女、女、女の眼の色。それは、まさに淫猥そのまゝであつた。彼女達は千人の男の肉体を満喫しながら、たつた一人の男の心をも掴んでいないのだつた。

恋人といふ、情夫と呼んでも、夜の女の

彼女達につきまとう男は、決して彼女達を結婚の相手などとは考えていない。彼女達から小遣金を搾り取るのが目的にすぎないのである。

「哀れだ、この広い世の中で、たゞ一人の男も彼女達を愛してはいないのだ」

逃げるように医務室へ戻ると、駿一はしみじみと同情をした。だが、心では哀れとおもいながら、彼女達が示す媚態に、生理的な反感と嫌悪を感じる矛盾はどうしようもなかった。思いあたるのは、こゝへ始めて勤めたとき、山代博士が、

「あなたは重貞ですか、この病院特有の困難な空気に耐えられますか」

とくりかえして念を押したことであった

もしも駿一が医師でない普通の男性ならば、彼女達の執拗な誘惑もあるいは効を奏したかも知れぬ……だが、悲しいことに駿一は彼女達の「病む花」の正体をまぎ／＼と診ているのである。人間の女体とは思えぬほど、異常に発達し、爛れ、化膿しているそれを知っている医師の駿一に対して、いくら挑発を試み、誘惑をしても、ますます駿一の敬遠を買えばかりであることを、彼女達はとうとうわかっていないのであるか……。

六

いつの間にか日は沈んだ。

梅雨もからりと晴れて、もうすぐ真夏めくある夕方。駿一は非番をさいわい、浴衣に着かえ、病院内の独身寮をぬけ出すと、近所の夜店を見物に出かけた。植木屋をひやかしたり、五目並べをのぞいたり、手品の種賣りの口上を立ち聞いたり、難路の中をぶら／＼歩いていると、

「先生、阿部先生じやございませんの」と声をかけた娘があつた。大柄の浴衣のたもとを夜風にひら／＼させながら、娘はとまどう駿一をおかしそうにみて、くすりと笑つた。

「どなたでしたかしら、あなたは？」

「あら、いやですわ、先生！」

湯上りのクリームが甘くにおう顔を近々とよせて、

「小谷ですわ」

「ほう小谷さん……」

純白看護婦服姿を晝間見なれている駿一は、浴衣にお太鼓帯をしめた娘が、同じ小谷看護婦だとわかると、眼をばち／＼させた、

「おどろいたなあ、着物を着ると、あなたは一層美しいねえ……」

「おほ、お口の上手なこと！」

それとなく、娘らしいしなをつくると、小谷は斜め下からやさしく駿一に流し目をくれた。

「すこしそこらを歩きましたようか、寮へ帰つても、蚊が多くて寝つかれないから！」

「ええ」

夜店の灯影をせれると、人影まばらな川の堤防であつた。ちらほらと月見草の咲く堤防の斜面に、ならんで腰を降ろすと、二人とも黙つて、月光が碎ける川のさざなみを眺めていた。

「……先生」

「なんです、小谷さん」

「先生の御評判はともよろしうございませう、まじめで、熱心で、おやさしいつて、他の先生方も私達もみんな感心していますわ」

「……そう、いや、どうも」

譚 奇 新 聞

中村 米藏

昭和二十六年五月
一日発行
編集印刷兼発行人
伊勢みどり

愛情測定器發賣さる／

政府では予てノーマル賞受賞の湯河原博士に依頼して、愛情測定器の發明を計畫していたが、今回見事に完成、専賣公社を通じて販賣することになった。

同器はマツチ箱大のもので相手の心臓部に触れるだけで、相手方の自分に対する愛情パーセントが直ちにメーターに現われる貴（奇）重品である。之で恋人同志の喧嘩、夫婦間の愛情不認識に依る訟訴沙汰等の悲劇も緩和されようという政府のねらい。

空中キツスの惨禍

大阪市内の某所で開催中の大日本ゼンストサーカス団の花形空中飛行士の一人が、空中サーカス実演中誤つて墜落即死した。原因を調べてみると、同団の同じく花形女流飛行士と恋中で、空中難れ技の一瞬を利用してスリルセツプンを楽しんでいた、その瞬間の惨事であつた。

新税金査定法

モデルとかストリップパー（主としてお座敷でやるゼンスト）等の収入査定に就ては、カゲの商賣である為税務署では弱つていたが、今回政令で以て裸商賣の女性には全員貞操帯を用いる事になり、鍵は税務署が保管し、劇場キャバレ

1、或はお座敷の秘密ゼンスト、又はストリエのモデル等に出演する時は一々税務署へ行き、鍵を借ると同時に収入報告をしなければならなくなつた。之で完全に脱税防止の効果が上ると大蔵大臣は喜んでゐる。

街で拾つたニュース

(1)

メーデーの日、デモ隊に包圍された吉田首相の自動車は、警官の應援もなんのその一歩も前進することが不可能となつた。その時自動車内の首相側近の某氏は、氣轉をきかせて何やら筆にてさらさら……窓から出されたその紙には「当車内に猛犬あり！」
デモ隊「猛犬だつて？犬なら吠えて見ろ」すると車内より声あり、
「ワンマンツ、ウーウ、ワンマンツ！」



駿一はばつと顔色を赤くした。

「先生は」

ふつとためらつて

「まだ御結婚なさいませんか、どなたかお約束のある美しいお嬢さんがお有りでしょうか」

「あは、小谷さん、両親と弟妹に仕送りするのに精一杯なんです、僕は」

「でも……」

「うっかり女房なんかもらつたら、女房が可哀そうですよ、いまみたいな貧乏生活ではねえ」

「……お約束のある方はございませんのね」

「もちろん……誰かよほど物好きな娘さんでなければ、僕なんかに来てくれるはずはありませんよ」

小谷は黙つて、膝元の月見草をむしつていたが、

「もし、その物好きな娘がありましたら結婚していただけますか？」

「あは、居やしません、鉄のわらじをはいて探したつて」

「いゝえ、居りますの、先生となら、どんな苦勞もがまんできる娘が」

「どこに……」

「ここに！」

小谷看護婦はうつと駿一の肩に頭を凭らせながら、消え入りそうにさゝやいた

「……」

「でも、先生には、私などよりもつと立派なお嬢さんでなければお気に召しませんわね、公立性病院の看護婦の私なんかでは」

小谷はあえぐように絶望の叫びをあげたが、急に駿一の胸に顔をうづめると、

「いやいや、私……患者さんの誰にも私の先生を奪られるのはいや！」

とすゝり泣きはじめた。

……その夜、小谷看護婦の情熱に打ち負かされて、駿一は二十五年守りつづけた純潔を失つた。小谷も又、まぎれない処女であつた。

院長の山代博士が、だしぬけに駿一を院長室へ呼んだのは、それから一週間後であつた。

「阿部さん……まことにざんねんだが、あなたにやめていたゞかねばならぬことになつた」

「えつ、それは」

顔色の変つた駿一へ、やさしい微笑を浮べて、

「いや心配することは要らない、実は飯田君が、こゝよりもつと立派な市内の産婦人科へあなたを就職させることに決めたのだよ」

「……」

「私があなたの仕事ぶりをくわしく知らせたら、飯田君喜ぶまいことか、早速あなたを返せ返せと矢の催促じやつたよ、私はあなたにやめられてはこまるといつてね……実は二三日前、白髪頭の親友同志が、口角泡をとばして大喧嘩をやつた次第でねえ……でも結局は私の負けだつた、飯田君としてはあなたは眼の中に入れても痛くない愛弟子だから、あなたの事についてはやつぱり飯田君に任せる方が順当だ」

山代博士は、回転椅子をきりつとまわすと駿一の手を握つた。

「ありがと、短い間だつたが、よく患者の世話を見て下さつた。次の産婦人科病院は設備がいゝし、上流家庭の夫人が相手だし、あなたの給料もおそらくこの三倍以上になるでしょう、大いに腕をおふるいな

(2)

記者が友人Kに街で逢つた時、彼の胸には驚く勿れ緑の羽根、赤い羽根、白い羽根其の他黄紫黒と色とりどりの羽根をずらりと差しているの、目をバチクリさせて聞いてみた。

「君、色々と献金したんだね、緑化運動共同募金、赤十字募金、その他の社会事業にも……大したもんだね」

「いやあ、大したことはないさ、七面鳥の羽根だよ」

(3)

講和会議間近に行われた本年度のメーデーは、各方面から色々な話題を生んだが、首相の表彰を受けたブラカードは左記の通りであつた。

「吉田内閣絶対支持！」

「賃金を値下げしろ！」

「二合配給を即日実施せよ！」

「働く者に増税を！」

(4)

徳田、野坂両氏をはじめ、共産党の追放幹部一同は一体何処へ雲隠れしたのでしよう？と世論調査を致しました所、左

さいよ、私も期待しています」

博士は机の抽斗から紅白の水引をかけた大型封筒を二枚取り出すと、につこり笑つて、駿一の膝に押しつけた。

「一枚は私の餞別、もう一枚は……結婚のお祝です、可愛がつてやつて下さい、頭はいゝし、素直な娘です……正真正銘のチェリィさんだつたことは、あなたが実験済みでしょう、あは……」

記の答がそれ……重要なパーセンテージを示した。

一、宮城内の食堂残飯捨場に隠れている
二、省線各駅の赤帽の中に混つている。
三、炭坑々内員に化けている。
四、母親の胎内へ逆戻り。
五、地下鉄のストップ信号燈の辺りに隠れている。

(5)

アベックパトロールが実施されてから色々のは……笑ましい話題をなげているのに興味を持つた記者は、或る夜彼等の勤務ぶりを尾行した。すると彼等は暗い方へ……と歩いて行く。なるほど、犯罪は暗黒から生れるが眞理だ、と気がついて記者は感心した。が期待した犯罪らしい何事もなく、やがて明るい元の街へ出た彼等、何気なく男の警官の顔を見た記者は、とたんにギョツとした。何故？つて彼の顔には何時の間にか鮮やかなキスマークが三つ付いていたからである。

もしモシ、あのね、アノネ、

素敵に愉快な、面白い、

奇譚名物、うそ新聞、

これにてバイバイ、致します。

また来月の、お楽しみ——

恐縮し切つた駿一が院長室の扉を押して出たとき、軽やかなニールソックスの小谷看護婦がにつこり笑つて待つていた。駿一のと、自分のと、二つのポストンバッグを足元の床において……
いや小谷看護婦ではなく、もう阿部夫人と呼ぶべきであつた。飢えた女狼の巻く性病院から解放される日はついに訪れたのであつた。

(完)

時代小説 桃色査察使御入來



根来芳太郎
絵・今幾久蔵

1 鳩首の果に

文化三年五月、和州郡山藩に、江戸幕府から藩政検分のため隠密に査察使が差遣わされ、藩主柳沢光安以下、家老、御家人に至るまで、少なからずうろたえた。歌舞音曲、黄表紙酒落本に、槍一筋の武士ともあろうものが世の太平に馴れてうつつを抜かし、たるみ切っている。瀬戸物のかげらに墨を塗った目でないかぎり、随所に藩内のアラは目につくであらう。

——どうしたものか？と筆頭家老真鍋賛右衛門の宰領で、主だつた直臣十三名が広間に集り、首をあつめて対策に焦慮した。「何かよい名案は御座らぬものかな？」眉を曇らせて、賛右衛門は一人々々の顔を見回した。ある者はうつ向いて肩を落している。ある者は目をつむつて上向き、腕をこまねいている。一向に喋り出すものがない。

「いかゞで御座ろう。名案というほどのものが思い浮ばぬと致しますれば、この上は機略を用いて、隠密殿をトロリと軟かく参らせることにしては——」

末席に控えていたいちばん年の若い赤羽修理之亮が、献策した。

「して、その計略のあらましは？」

賛右衛門は、白髪まじりの鬘を振つて、一膝すゝめて云つた。

「されば、いかに猛きが武士の慣いとは申せ、酒と女に目のないのが古来男の道理——」

「うむ」

「朝に酒、夕に女と、次々に酒色女色の追討をかけ、足腰立たぬほどに溺れさせるので御座る。藩内をうろつく余裕なんぞなきまゝ至極く満足して引揚げは受合ひ。江戸表の報告はよきに見つくり、まさか藩情をありていに届けようとは、存ぜられませぬ」

「なるほど。——方々いかゞで御座ろう

？」

面々は筆頭家老の眼差が自分に向けられたのを意識した。しかし、修理之亮の策略を反ばくしても、これを薙つた後に差示す代案が思い浮ばない。

口を利くものがないので、賛右衛門は、弱り切つたこの三月間の疲勞に加え、年と共に頭のわるくなつたせいで、ワラをもすがる例えに陥り、

「では赤羽殿、貴公にその接待の全権をお任せ致す故、用意万端と、のえて下さるか？」

「お引受け致しますよう」

乗りかゝつた舟である。赤羽修理之亮は自ら編み出した名（？）案に、采配をふるう役目を引受けた。

2 待ち人、到來

「さすがに夜は冷えるのう」

「夜通し張番とは永いことじゃ」

「どん／＼火を燃やせ。どうじゃ、もう夜食を食べようじやないか」

焚火の回りに、六尺棒をかいこんだ人影が、思い思いに股倉をあぶつている。

「いや待て、もう見廻りのある時分じや。今晚の巡視は張切りの正木勝之丞殿だからうっかり握り飯を噛つているところを見られては拙い」

身分に高下のない足輕の間柄であつたがいちばん年の取つた分別臭いでつぷり太つた男が、あとの二人を制した。

河内の国枚岡から大和国南生駒へ通ずる山中、暗峠の関に、臨時に徹夜の見張が置かれてから五日め、獸の啼声も絶え、星の粒ばかりが無性に大きく、かすかに椎の若葉が匂うてくる人跡稀な夜更けの山中に、この警固はなんのためか——。

「待て、足音がする、正木殿の見廻りかな？」

「いや、正木殿なら駒のはずじや」

火に馴れた目には、十間先きの見通しが

あやふやだ。

「誰か？そこ来たのは？」「名乗れ」

返事がない。蓬髪にボロをまとい、菰を巻いた大男が、ぬつと煙に照らされて寄つてきた。

「名乗りを挙げる程の名も持ちません。強いて申せば、足柄峠の金太郎でござります」

三人は、熊のように喋り出した男の顔へ目を注いだ。

「足柄峠の金太郎？それが本名か？」

「いえ、通称名でござります」

「何を、渡世の稼業に致しおる？」

「これと云つて別に。人の情けで生さておる身分——」

「お蕪か？」一人が蔑むように云つた。

「どこから来た？」

別の背の高い一人が問うた。

「あちらから」と来た方向を指差すのへ、

「あちらからでは分かんらん！」

と、問うた男が断ち切つた。

「河内の国からでござります」

「河内の前はどこから来た？」いまままで黙つていた年長格の男が、物軟かく問うた。

「山城でござります」

「その前は？」

「近江——」

「うむ東の方じやな。そもくこの旅に昇つた初ッ鼻の國はどこ？」

「されば、相模でござる」

「お、東じや、——ちよいと手を見せられい」

右手を取つて、火に照らし見た。他の二人は覗き込んだ。そして、目を見合せた。

「さきほどから、どうも言葉つきが尋常でないと思つとつたが、貴殿、武士でござる

う？」

「いえ左様なものでは。これは、日暮ぎに取つた鈍の手豆でござる」

「いや隠し召さるな。まさに竹刀ダコー」

三人の表情が、真剣になつた。馬蹄憂々とひびいてきた。人馬が現れた。

「それは、何者か？」

鞍の上から、頸をしやくつて、侍が声をけた。年長格が答えた。

「どうやら江戸表より参られた御仁らしく——」

ほ——と云つて、侍はひらりと鎧から飛び下りた。異様な風態に見受けたのが、反動的に驚きへの要素を倍加したのである。

つかく——と、乞食に見まがう大男の傍に近づいて、

「江戸表より参られた？」

言葉遣いは丁寧であつた。

「いやこうなれば隠し立てはしませぬが、今はもう主を持たぬ浪々の路、天下太平のなれの果てでござる」

「いやく、打明けられたい。

拙者大和郡山添、直臣赤羽修理之亮に仕える正木勝之丞と申すもの。御役目柄、身分を秘匿せらるゝは尤もながら、お差支えなき程度に打明けられい」

「いかにも江戸から参つた者でござるが、弱つたな。ありていのまゝを申し上げておるのに」

「いやく。我々は、貴殿の到着を待ち受け申しおりました」

「待ち受けて？」

「左様——」

「これはどういふことになるのかな。弱つ

たな」

お蕪風態の大男は、しんじつ弱つた風情であつた。しかし正木と名乗る侍以下は、この男の弱りように疑問を持たず、

「この駒に相乗り願おう、城下まで一刻はかゝらぬ。間もなく鶏鳴じや」

と、ボロ衣の男を乗せ、三人の足輕に引揚げ方を指図して、急に重くなつて弱つて

いる馬の腹を蹴り、東の方、郡山城を指して坂道を下つていつた。

一人の男が襷一つになり、女共の三味線に合せて、手ぶりおかしく章魚踊りをはじめた。

酒席は大分みだれている。踊っている男は真剣だが、みんなは碌素ッぽ眺めていない。酌する女を手許に引寄せ、首へ腕を巻きつけて、早くも口説きにかゝっているものや、トロリとした目に口角泡を飛ばし、回らぬ呂律で議論を戦わし合っているもの

3 酒攻め色攻め

「テレルシヤン、ホレ、テレルシヤン……」

加藤清正が朝鮮征伐にいつた際仕込んで来た裸踊りを御覽に供します、と云つて、

「土佐のオ高知のお、はりまやアはーしイで、ボオさんカンザシ買うを見した、——突然、床柱を背にした正座の脇にいた赤羽修理之亮が、双肌を脱いで、真赤な顔に首を振つてうなり出した。修理之亮が一席やりはじめたということがみんなに分つたので、酔つた正氣の残りで家来共は謹聴し



出した。裸身は打つて変つた静止が自分の踊りの旨さのせいではないと気がついて、頭を掻いて座へ戻つた。

拍手が沸いた。修理之亮は得意げに、客座についているでつぷり太つた男を見た。男はニヤリと笑つて應揚にうなずいた。

これが今朝、逸早く正木勝之丞に運ばれてきた自称足柄峠の金太郎とは、似ても似つかぬ別人の顔があつた。

何か勘違いされているのではないかと拙者、成程元は江戸には主取りの武家ではあつたが、路についた放浪癖で、今は諸国流浪の気安い旅鳥……と、身分を打明ける機会も與えず、やれ風呂に入れ、髪櫛を直しまし、よう、衣服はこれにお着更え召されよ、とまるで藩の浮沈にかゝる使者を迎えたかのような歓迎ぶり。挙句の果は、領内御視察のお役目もさること乍ら、何分長途の旅、四五日は当家において骨休めに

逗留されよ、早速今晩は歓迎接待の宴と、と酒食饗應をはじめたのである。

人間が居心地よい環境に順應していく速度は速い。足柄峠の金太郎は、一段と男前を上げて、赤羽修理之亮に友達のような口を利きはじめた。

「いや愉快々々、貴公中々いゝノドを持つところのう。今晩はとても愉快じや」

「愉快でござるか？」

「こんなの、まるで生れて始めてじやよ」「忝けない、ウソにもせよそう申して頂くのは」

「何のウソなものか、全く夢にも思わなんだことじやよ」

「さあどん／＼やつて下されい、十人分、貴公のとてろへ持つて来るようになつておる、明日も朝から大いに痛飲して下さい。

ところで、こんばん、こゝな座にお目がねに叶うた女子がおりますかな？」

「ワッハッハ、——いやもう、山出しのこの乞食めにはどれもこれも美人に見えて、目移りしてかなわんよ」

「目移りしますか、ウム、それをお聞かせ願えて心強い。——わーッ、拙者も酔うたどつと一度に酔が回つてきたようだ。どれ拙者は失礼仕ろうかな。足柄殿、寢所は別間に取つてありますゆえ、いつなりとも女子に案内させて下されよ」

ヒョロ／＼とよろけて、修理之亮は、側女の肩に手を置いて引揚げていつた。家来の影も、一人二人と薄れていく。燭台の燭燭は、あちこちで最後の大きな焰を上げ始めた。

且つ啖い且つ飲んで、出ツ腹をだぶつかせ、睡氣催して金太郎は立ち上つた。

「圓でござりますか？」と女が寄つてくるのへ、「いやもう眠い。寢る」とそのまゝ別室へ歩きだした。終始酒を口にしなかつた正木勝之丞が、金太郎に声をかけた女に目配せし、すぐ金太郎の後を追わせ、狼藉の跡を片付け始めている女共の手招きしてずらりと呼び寄せ、

「よいか、ひる申し傳えておいたように、今晩から其方ら、各々二刻ずつを受け持つて、客人足柄殿の夜伽をする。話をしよう」と何をしようと、それは其方らに任せるが客人は開けていて堅造ではなさそうだから定めし扱い易いことゝ存ずる。何卒腕に燃りをかけ、何事も君公への御奉公であることを念頭において、足柄殿をそつこん参らせるように接待して欲しい。これに対しては、いづれ君公並びに筆頭家老より過分の下されものがあるはず。よろしくお願い申す」

女共は、神妙に聞いた。年は、二十歳前

後から、三十過ぎの年増もいたが、割合年の食つてゐるのは真面目に聞いているのに若いのは袖を口へ当て、朋輩と目を見合せて笑つた。

「では、今晩の順序は分つておるうのう。いまから子の刻になると、二番の者が出かけについて、あの弓江じやつたか、あの子と交代する。その際、客人がぐ／＼寢んでおつても、そのまゝ眠らせておいてはならん。無理にでもお起し申し、それからあらゆる手練手管を用いること。役目というのはこゝのことであることは、もはや説明するまでもなからう。いゝ加減に嘘をついてはならん。また客人の拒絶に遭うても、拒絶をそのまゝ受け入れてはならん。いゝ加減に嘘をついたかどうかは、翌る朝、其方らの顔と、それから客人の顔とを見れば分ることじや。頼むぞ」

一場の訓示を残して、足輕から「張切り」といわれた正木勝之丞は、引取つた。女らもまた、客人の寢に近い別間へ詰めていつた。次に交代するものだけを残し、後のものは横に並べた布団へ、白粉の香をさせながら目白押しに並び、二三話しごえのしている中に、早いものはもう高駟をかきはじめた。

4 榮耀榮華の朝

妖しい夢見に驚き、牙破と正木勝之丞ははね起きた。思わす寢過した。鶏がどこかで鳴いている。袴を着けたまゝで仮睡していたので、身づくろう手間は要らない両刀をた挟んで、見廻りに出かけた。今日でつゞく四日めなので、つい寢過すこともあるのだらう。





寝所の隣に来て、耳を澄ませた。起きて
いるらしい。

「もういかん、かんにんしてくれ」という
声がきこえる。

「そんなことをおしやつて、今日は妾は初
めてじゃありませんか」

そう云つてゐるのは三十女の鹿乃の声だ
鹿乃め、よく云付けを守つておる、と勝
之丞は北髪笑んだ。

初めて見廻りに来た夜は、側聞きして、
甘い私語に、役目柄とは云え大いにアテら
れたものであつた。

次の夜は、まだ一向衰えそりにないとい

ろを見せつけられた。三日目は、足柄殿は
大分へこ垂れて、少々色気を失われたかに
見えたが、今晩に至ると、もはや声もかす
れ気味――

「これ何をする、ねむいんじや、触るなよ
これ、これと云うに」

これを聞いて、満足して勝之丞は引下つ
た。

一刻経つた。勝之丞は再び起き上つて、
万事に粗漏がないか眠い目をこすつて。大
事な客人足柄殿の寝所を窺うのであつた。

「もう、もう、いかん、離してくれ」

「アレレ、そんなことを、おつしやいま

して、それでは妾が殿のお云付けに背きま
す」

ノドの細い可愛らしい声で、こんどは年
の若い一番器量佳しのお蘭であるらしい。

「そこは要領よく、いゝ加減に報告してお
けばよい」

「イケマセン、顔を見れば、ちやんとウツ
か本当か分ります」

「なんのく。これ、苦しい」

「無態なことをするな」

「大きな声を出してはいけません、みつと
もない」

「うーん、うーん」

唸り声は、正に死期の近づいた重病人の
ように、勝之丞には聞かれた。

「お腹が空いたでしょう、さあこれをお上
りなさい」

お菊は、やがて枕許の膳の上のものを奨
めてゐるようだ。

「もう、いかな山海珍味もノドが通らん」

「まあそう仰しやらずに。これは名物のス
ッポン料理で、大変身につく滋養があるそ
うよ」

「要らん、離してくれ、眠らしてくれ」

願ひ通りにぐつすり一刻ばかり眠つて、
ふと金太郎が目覚ますと、女が迎え酒に
肴を添えて持つてきた。それを一本呑んで

ふらくと厠へ上り、昨夜の酒精臭い糞尿
を垂れていると、庭石を蹴けてくる慌しい
足音がした。

「赤羽、赤羽」と呼ぶ声がする。

離れの障子が開いた音がする。

「何じや太刀掛、朝の早よから」

そういうのは、正に赤羽修理之亮の声で
ある。

「筆頭御家老がお呼びじや、貴公、思い当

る節はないか」

「何じやろう――？ 一体」

「江戸表の隠密査察使が、もう藩政の内情
を探つて、今日あたり藩領を立去られると
いうことじや」

「な、なんだと？ 然らば、身共の屋敷に
預かりおるのは――？」

「さあそれじやで、筆頭御家老のお呼びな
のは。すぐ同道せい、拙者と」

慌て、足柄峠は尻を拭いた。屋敷の主が
そゝくさと出ていつた氣配を見届けてから
邸内の遺造で勝手知つた裏口へ抜けていつ
た。

屋敷の者に見つかればすぐ言訳の利くよ
うに、衣服を改めずに寢巻のまゝである。

その姿で、彼は堀の細い橋を渡り、西の山
手の林の方へ出た。

もし赤羽修理之亮が、出かけに足柄を監
視せよと云い置いて行つたのなら、すぐ正
木勝之丞あたりが、跡を追つてくるだろう

金太郎は急いでいた。

つかまれば、命は危い。こんどは硬派の
拷問が身に加えられるだろう。無性に氣が
せく。櫟と松のつゞら折れの小路を、笹の
茂みへ分け入つた。

わん／＼と後から誰かが呼んでいる声が
する。頭の中で、それが渦巻いて聞える氣
がする。振向く余裕はない。けれども足が
ふらつくのだ。

足柄峠の金太郎は、偶然間違われた王侯
の生活から、急轉直下零落への過程を辿り
ながら、手ばかりを泳がせて、下半身に力
が入らずよろけ走つてゐるのであつた。

(了)

肉体を許しあうべきか

加茂三千彦
峯 玄太 画



新しい愛慾の新軌道 すそを亂すまで

画室から茶の間へ入つてきた大谷滋は、其処の火もなご長火鉢のそばに、シヨンボリと坐つている珠江を見た。

すきのうすい部屋だった。いつもは電燈をつけて、彼女の好きな人形造りか、愛人の靴下など繕う彼女なのに、今日に限つて、何一つ仕事をしたなごりもなく、ただうつむいて膝に目を落して、滋の入つて来た気配も、サツとドアから射すガラス越しの緑光すら知らぬげである。

「何してるんだ、珠江！」

アトリエ服の裾を畳にはわせて滋はしやがんだ。

「何も、別に」

珠江は低く答えたがいつものように面をあげなかつた、滋が片手を彼女の額にかけて、掬うように其顔をのぞこうとすると、珠江は其手を邪見に拂つて、膝で三十度ばかり反対へ身をねじつた。

なおも滋がひつこくせまると、珠江はプイと立て隅へ身をよせた二十四才の愛慾に燃えた肉体が、肩から腰へかけて、なまめかしい桃色の焔を吐いているように思われるのだ。性の泉からは、汲んでもく／＼汲みきれぬ、ほの／＼とした春の水がコン／＼と溢れて、その流には七色八色の恋の花をうかべて、五月の緑蔭へ運ぶとも見えた。

「おい！何をすねてるんだい？珠江」

滋はアトリエ服のよごれを気にしながら伊太利風な可憐なエプロンの紐と胡蝶と飾つた背を抱いて、熱いベージュを興えるようにした。いつもなら其の桃李のような唇をピタリつと合せる彼女だったが、今日はどこどこまでも彼に背いて、サツと腕をすりぬけると、画室へ逃げ込んでバターとドアーをしめた。

ぬけると、画室へ逃げ込んでバターとドアーをしめた。

× × ×

竹林の夕陽もうすれて、セード越しの電燈が夜のおちつきを呼んでいる。いつか機嫌を直したものとみえて、滋は機嫌に近い喫茶用の鋼管細工の軽便椅子に、珠江と差向いにかけて、野菜サラダの新鮮さをたのしんでいるようだ。

七時。それは珠江が退く時刻だった。長火鉢という明治好みの茶の間に比べて、伊太利好みのこのアトリエ内は、この三間しかないアプレ借家にはすぎた風景だった。まだ壁も塗れてない頃から家主に交渉して半永久の契約のもとに、滋の希望をいかせて、若干の改裝も加えただけに十畳は十畳でも、二重ガラス戸内の縁を、濡れ縁にかえてつくつただけに、廣々とした感じをうけるのだった。

繩子の香が、青磁の壺からほの／＼とおつてくる、このあまつたるい香が、二人の別れをひきのばしているようにたゞよっていた。

森珠江は大谷滋の愛人ではあつたが、はや一年も過ぎようとする交際であるのに、まだ彼女がこの寓居に目覺めた日はなかつた。七時よりもおくれる場合はあつても、そして滋と肩を並べて送られていく夜はあつても、夫婦らしく枕を交すには至つていなかった。

隣家とは十メートルをへだてた独立家屋ではあるが、そして殺人や暴行が行われようと、第三者のうかい知ることの出来ぬ

互に婚約者は

位置にあつた。とはいへ、珠江と滋の間柄は「裾を乱す性愛」の絆を越えようとはしていなかつた。

「おいとましますわ」

辞意は口に出ても、四肢はひたすらに椅子を離れようとしない、やつと立上つた珠江がドアの方へ二足三足あゆんだ時、「ちよつとお待ち」と滋がよびとめた。

「君、今日の午後何を泣いたの？」

「知らない！ きっかけで」

珠江は急いでドアのノックに手をかけた。

「お待ちつたら！ それをいつてからお帰

り」
滋は追いつがつて彼女を引戻した、あらがつた彼女は、滋の腕の中で身もたえながら、ソファアの上に轉んだ、そして男の唇と同時に、五ツのポイントに、五指の先端に力の籠つた滋の手を胸乳に感じた、その五指は、プロローグをかなでると、襟のホックを外して静かにジカに肌を歩んできた

「いや！ 今日はいや！」

喉でそういつても、口を奪われている珠江には、身もたえするばかりだつた、指頭の愛撫は上半身のセックスセンターを陥れようとしている。「痛い！」 滋は珠江の襟から手をぬいた、彼女の歯齒が彼の頸の間を咬んだのだ、それは愛咬にしては度が過ぎていた。

「何故珠江をそんなに苦しめになるの？ お憎みになるの？」

「憎んでなんかないよ」

「でも……」

「こんなに愛してるのに！」

「うそ、うそ！ いつでも珠江を追いかけして……」

「君をかえして、僕が何かやつてるとでもいうの？ 妬いてるんだな、よし給え、そんな臆測は」

「妬いてるんぢやありません、臆測でもありません、……帰ります、珠江は帰つてきます」

「晝の泣いた訳をどうしてもいわないのかい？ こんなに聞いても」

「いやよ、恥しいんですもの」

「じや書いてごらん紙に」

「それでもいや、もういいの、何でもないので」

「書かなきゃ帰さないよ」

「お帰しにならなきゃ、いつまでも此処にいますわ」

「だだ子だね、君は、お母さんが心配するじやないか？」

「いいのお母さんに叱られたつて、滋さんが監禁したといつとくわ」

「駄目だな君は、ベッドは一つしかないしそれも御覽の通りシングルだよ」

「何も御一緒に眠ろうなんて考えてませんわ、ソファアにだつて眠れてよ」

「よし！ それほど度胸があるんなら、泊つていきたまえ、だが僕の責任じやないよ」

「ずるいわ滋さんはずるい。」

× × ×
愛する男の腕が、頸を通つて肩をかゝえる感触、他のあいている手が、珠江の女体の上を、宝探してもするように撫かえすスリルと快感、自分よりはやく冷たい滋の頬が、上氣して愛の水銀をどこまで上げるこ

とやら、情熱に燃える自分の頬にふれる魅惑、次ぎにまちかまえている男性の王手の一駒と、珠江は身をちぢめながら、乾く唇をしめす余裕もなく、ひたむきに彼にまかせきつて夢心地でいるのだつた。

だがどうだ、珠江の女体に派遣された宝探しの一隊は、ひきあげてしまつたし、女体の下半球に上陸しようとしていた一隊も撤退して、その本国である滋は早スヤくと心地よげな寢息をたてゝいるではないかやるせなさ、自分

分に対する烈しい侮辱と、男に対する強い憎悪がこんがらがつて珠江は自分の全身から血の氣がひくような悪寒を感じたと其の次ぎには、全身に四十何度の発熱状態がおそつて、牝豹のように爪をたて

滋の胸をかき裂こうとする衝動に狂うのだつた。

× × ×
ベッドから轉げ落ちもせず、一晩ぐつすり眠つた滋が目覚めたのは、夜もあけきつた六時を廻つた頃だつた。あけはなされた窓からは、初夏を思わせる清冽な空氣が流込んでいたし、台所からは、トーストパンを作つたらしい、芳ばしい香が彼の食欲をそそつた。

× × ×
パジャマのままに濡襟に出て、我流のラジオ体操をみると、其足で「珠江！」と呼びながら茶の間、台所と歩を運んだが、彼女の姿は見えない。どこかに隠れていて



彼を驚かすのかとも思つたが、その氣配も見えぬ、念のために玄間を調べると、珠江の靴はセメントの上にしめりの足跡をのこして消えていた。

朝食の用意は出来ていたが、毎日やつてゐる独りの食事が、今朝に限つて無性に淋しい苛立たしいものに感じられた。

「珠江！ 珠江！」と訳もなく二三度彼女を呼んでみた。その声は木霊もせず消えていつた。

朝食を終つた滋は、玄間から朝刊をひらつてきて、

ベッドに腰をかけた、毛布はまだどこか人の体温を抱いていた、紙面に

滋の眼は上滑りして、すぐ読む興味を失つた。毛布の下へ手を入ると

たしかに肌の温氣がのこつてゐる、それが彼自身の温氣であつても、今

の滋にとつては、一も二もなく珠江のそれとして受取りたかつたのだ。一そのこと昨夜のチャンスに、全託してゐる珠江のすべてを奪つていたなら、こんな寂寥は感じなくてすんだのかもしれない、だがしかしモ

シ昨夜彼女に王手の一駒を進めたとしたなら……彼女はその一駒をどう受取つたであらう。そんなことを幻想しながら、い

うにいわれぬ苛立たしさから、手荒く毛布をひんめくると、ヒラ／＼と一葉の紙片が枕もとから舞上つた。オヤと思つてひらう

と、

と、

奇譚百話

都会の涸息

信士寒郎



第六十話

木曜夫人

さあ、こんな商賣だからいろ／＼の情事も見ては来たけど、あの奥様だけは一寸一風変つていましたわ。

若作りはしているけど、私のにらんだ眼ではどうしても、もう五十に近いわね。その立派な奥様が、毎週木曜日の午後六時になると、必ず判子で押した様にタクシーで私の旅館にお着きになるの——。

それから、半時間。遅くとも一時間許りすると、これ又きまつて若い、筋骨たくましい青年が、いつもハア／＼息を切らして訪ねてくる。きつとどこかで連絡がとつてあるんだわね。翌朝七時になると二人は別々にさつさとお帰りになる——。どうせ若い燕なんだらうけど、一風変つた逢曳でしょう。

そう／＼あれは先月の第三木曜だったかしら、私お茶を持つて行つた時、フト何気なく「あら、今日は未だお見えになりませんの

ねえ？——」

うっかりさう云つて訊ねると

「ハア、あのう、今日は息子、何か至急の用事でおそくなるそうなんです……」

と仰有る。

ハテ？息子さん……。それにしても何こんな連れ込み旅館でわざ／＼逢わなくとも、と野暮なセンサクして見たんだけど、私はハタと或る事に気がついて思わず顔を染めたわ。

だつて——、成程ムスコを呼ぶつて、そう云えばたしかに逞しいムスコには違いないんだものね、あの方なら……。

木曜日の夜、旦那様が二号夫人宅へお泊りになるその空白の一夜を、若さを保つたホルモン補給から、奥様の所謂ムスコと称するたくましき男を活用されていると云う事が、やつと近頃判つて来たのよ——。

第六十一話

稀釋・糞尿譚

長い冬から解放されて、霞え縮こまつていた僕等の青春も春と共に蘇がえつて来た

道頓堀川に早くもボートがちらほら点在し、春風にざわめき初めると、もう僕も彼女もデブとして居られない。

五色のネオンに照らされた川面に、未だ冷え／＼とした空気がたゞよつている中を僕等は二人つ切りで、静かに／＼ボートを漕いでいた。

裏から見た歓楽街は人生の縮図——。

乱れた着崩れを直す仲居、チップを数える女給、ダンサーに戯れる中年男、好いた同志の、人眼を忍んで交す抱擁のシルエツト。川から見た歓楽街は赤裸々の姿だ。赤い灯の下でじつとくままるストリップの寒々とした白い肌、ボクは彼女と何となく微笑み合つた。僕はその下でオイルの手を暫く止めた。ボートはゆら／＼とたゞよつた儘、そのキャバレーNの地下と覺しき辺りに静かに浮いていた。

手を延ばして彼女を引き寄せる。どちらからともなく熱いくちづけ——。一分……二分……。

ストリップパーが、フロアに出たのである。急に激しいルンバの響きが、一際高く夜空をついて流れた。

冷たい！——と思つた瞬間、あつと云う間もなく、僕等二人の丁度上に突き出た土管から、サツと流れ出したものが、避ける暇もなく、僕等の頭に、肩に遠慮会釈もなく振りそ／＼で来た。

たまらない汚臭と、人糞の香り——。

お、正しくそれはキャバレーの簡易水洗便所から排出された液体、固体そのものに違ひなかつた——。

泣きたい様な気持で、濁つた川水でヂャブ／＼洗つたものの、臭気は抜けるべくも

と、「何故珠江を女にしては下さいませんかしたの、憎い／＼大膽な滋様、珠江はもう貴郎のお手許へ通り勇気がなくなりまして」と走りかきかしてあつた。

× × ×

南禅寺の裏山から九條山へ登る山路は、今にも蟬の声をきかすかに見えた。疏水の堀割が一線を劃して、後門を始め七堂伽藍が森間に隠見された。眼をあげれば、蹴上の水源池や都ホテルがパノラマのように眺められた。滋と珠江は、山の中腹に腰をおろして、汗ばんだ肌を舐めていく薫風に、いき／＼した眼を見交わしてほ／＼えんだ。「君は僕のフィアンセじゃないのか？、フィアンセなら何故結婚の日までそれが待てないんだ。一昔前までは男性がそんな要求を女にした場合、女の方から初夜のその日まで、どうか私を其まにしておいて下さい／＼というのが常識じゃなかったか？万一妊娠でもすればどうするんだい？君のアプレ根性もあきれた」

「滋さま、珠江の考え方はアプレ的なんですし、どうか一昔も二昔も前から、いえ／＼千年二千年の昔から、女が男を愛し切つた場合、寸時も早く自分の全部を與え切りたいと思ふのが、眞実の愛情じゃないのです。どうか？賢振つてた婦人雜誌などの記事には、女は男に対して、殊に愛人に対して、底をつくように全部を與え切つてはならない、いつもいつまでも「こゝまでおいで」と先々に魅力をもたせてこそ、倦怠期も乗切れると書いてありました、珠江はいや



なく且つ水は切ない程冷めたい。
彼女は二度と僕の前に姿を現わさなくなつた。一張羅を合無しにされ、しかも悪人を失なつたボクの心も知らず、今宵も道頓堀は赤く青くまたいていた。お、呪われてあれ、汚濁と悪臭の道頓堀川よ。ア、メン。

第六十三話

お、ミス・テイク

妾をめとるには、容貌はもとより、もつとも肝心なる肉体が完全無缺に発達していなければ、妾としての値打がない。と、まあこれが奴の持論なんだ。彼が思い立つて出した結婚の広告文がふるつてゐる。
「絶対シロウトなる、未婚のモデルを求む。一日千円。住込」とね。

アプレガールは違つたもの、当日なんと集つたのが五十四人。狭い奴の家は華かに壽子詰めの盛況だつた。

事務員、タイピスト、女学生、洋裁生と色とりと、いづれも肉体に自信のある娘許り。何しろモデル応募とあるのだから、一応裸になつて貰つたそりな。五十四人の

娘の肉体をニヤ／＼悦に入つて眺めた奴はその中から一人と云う素晴らしい女体を見つけたし、奴は欣然と日頃の心臓振りで求婚したのだ。

見事金を射止めて結婚して奴は、全く幸福そのもの、様だつた。奴の嬉しくてたまらぬ様な面を見ると、僕は衷心憤然たる氣持にならざるを得なかつた。

その奴が三ヶ月程すると元氣のない顔でぼんやりボクを訪ねて来た。

「どうしたんだい？」

と、きくと、奴め、

「いや全くお話にならない。女房に毎月三万円ずつ、月給を拂う亭主つてあるだろうか。」

「……」

「一日千円の日当で月三万円、貰えなければ離婚訴訟を起すと、こうなんだ。これじや僕の財政がたまつたもんじやない。といつて今更別れられるボクでもなし……」

眼をショボつか

せて、三月前の元

氣はどこへやら、

榮養失調面でお

れてゐる奴の態に

ボクは胸のつかえ

がすつと下りた様

な氣持だつた。さ

まあ見ろい——

しかもその彼は

今も尚ベン／＼と

質屋通いで、女房の月給を捻出する事に努

力し、奴自身ストリップになりつゝあるん

だ。

愛情と金銭とはつきり割切る、近頃の女性の心理に、ボクはつく／＼ふれた様な氣

がしたよ。

第六十四話

我輩はノミである

人に嫌悪されるノミも、僕にとつては可愛いノミだよ。

「チョンちゃん（ボクのノミの愛称だが）は、僕の云う事なら何でもきく分ける、実に神業にも等しい才能を持つてゐる。何しろ、上海で蚤のサーカスをやつてゐた僕が終戦後、唯つた一匹だけ僕の腹に忍ばせて連れて帰つてやつたチョンちゃんの孫に當るのが、何を隠そう、このチョンちゃんなのだ。」

借金取りがやつてくる。僕は胸中秘かに合図をすると、逸早くチョンちゃんには目にも止らぬ早業で借金取りにタックルする。数分後、かの借金取りは挨拶もそこ／＼、体中ムズ／＼させて退却する。しかもチョンちゃんはいつの間にかチヤンと僕の肩で疲れを休めてゐる。かゆくはないかつて？ フン犬じやあるまいし飼主の手は絶対に咬まんよ。その可愛いノミ、チョンちゃん達が遂に死んでしまつたんだよ。まあ聞いてくれ。其の夜は僕の恋人との楽しいランデブーの夜であつた。中の島公園のベンチに



腰を並べて、淡い臘月に照らされた僕等二人のひたと寄り添つた姿は、世にも嬉しいに見えた事だろう。

「早く一緒に暮らしたいわ……私もう、とつても……」

です。そんなこと絶対にいやなんです。たとえ底までいつたとしても、男女の愛情さえ裏えを見せませんでしたら、キツト其処に創作が生れると信じます、誰が何とおつしやろうが、珠江はそれを強く強く信じますわ」

平常無口に近い珠江が、こんなにハッキリと流暢に熱弁をふるえるとは思わなかつた、激は驚きの眼をみはつた。

「君の心はよく分つた、主義主張のみこめたよ、だけど僕には僕の理念があるんだ」

「おつしやつて頂戴、承りますわ」

「君は僕に挑戦する氣なのかい？」

「ええ挑戦もいたしますわ、恋愛は男女の戦いなのでも、二人の戦いが激化して火花が散れば散るほど、あとに來る平和は大きく清らかで甘いのではないでしょうか？」

「なか／＼しつかりやるんだな、じやいり

がね、僕は君の肉体の最後のものを、最高

のものとして評価したいと思つてゐるんだ

よ、それに採点して計算することを心よく

思わないんだ、ことに此頃のように君の體

肉をモデルとして描いてゐる以上、せめて

其作品の完成する日まで、君の処女性を失

いたく思わないんだ」

「でもそれは滋養の個人的な利己的な御要

求なんじやないんでしようか？」

「威程、君の最後のものに評点を附するこ

とを恐れているのは、いわば個人的な我儘

かも知れない、しかし絵画として君の処女

性を描写しようとしてゐる欲求には、社会



と彼女は僕の胸に身を凭せかけて、さもやるせなげに咬いた瞬間、急にチラリと眉をひそめると体をもじもじさせ始めた。僕はハッとした。慌て、まさぐると、てつぎり肌身離れぬチョンちゃん姿を消している。

今の彼女の体を凭せかけて来たのを僕の合図と早合点したに違いない。とあれ彼女は体をゆすり出した。まさか僕の蚤だとも云いかねてハラ／＼しているうち、もう我慢なりかねたのか、

「私何だかいかい……」

と彼女はつぶやくや、素早く辺りを見廻し、僕に遠慮がちに、されど見ても体裁もなく、サツと上衣を脱ぎブラウスのスナツプを外した。スカートのホックを外しシュミーズをたくり上げると、血眼になつて、あちこち探し始めた。チョンちゃん、善戦奮闘に、遂に可愛い、オツバイが覗き、彼女の白い手があられもなくズロースの中に延びたかと思うと、

「あら、いたわ／＼。畜生！」

と悲痛な声と共に、僕がハッと止める間もなく、あわれ、彼女のお臀からつまみ出されたチョンちゃん、プチりとあざやか

な音を立て、殺害されたのである。

あゝ、親愛なるチョンちゃんを殺した、我が恋人、彼女を憎んでいゝのか、愛していゝのか僕は行きなやんだ。が、ハタとある事に気づいた。そうだチョンちゃん、雄だつたのである。僕も末だ知らぬ彼女のお臀に、一足お先きにキスをしたチョンちゃんに對して、僕は激しい嫉妬を感じる一方彼女のストリップを見せしてくれたチョンちゃんに、秘かに感謝の意を表した次第である。

何故なれば、彼女がストリップを始めてシユミーズをたくり上げたその瞬間、チラリとのぞいた彼女の偉大なる出ペツに、僕の百年の恋も、さめはてたのであつたから。チョンちゃんもつて瞑すべし。

第六十五話

パン／＼ワイフ

結婚する以前から、女房の奴、人並外れた日記狂だと云う事は知っていたが、まさかこれ程迄とは思わなかつたんだ。

女房の留守の間、チョイトばら／＼とめくつたその一頁を見ても

——×月×日、×

曜日

東南の風曇り、

後雨、夕方より西

北の風に変わり晴れ

午前六時二分目覚める。昨夜午後十一時二十分に、うちの人が例の様に私にキッス



二百八十九回アレぢから

オールナイト

百円にまけ

とくとして……

して始め出してから、終つたのが午前零時五分。お蔭で今朝は少し頭が重い。

正七時起きに行く。仲々起きず、少し過ぎたのかしら。七時四十六分送り出してホッとする。キッス二回約四十秒……。すぐお化粧にかゝつて二十二分間後……一日の平凡な出来事を実に丹念に二三頁に亘つて書き列ねてある。僕如き無精者にとつては、絶えず監視されてる見たいでろく／＼落付きも出来ぬ。凡帳面な女と、ずばら男とでは、所詮破綻がくる。

結婚一年半目に遂にかんしやくは爆発し、離婚する羽目になつたのも、あながち僕の罪だけではあるまい。

「正式に離婚するについて、これだけは是非敷き度いと思うわ——と女房の奴め、自分の荷物だけすつかり纏めた後、僕に勘定書の様なものを突きつけおつた。」

「何んだいこれは？」

と手にとつて見た僕に、

女房奴平然と

「結婚して一年半。メめて丁度三百八十九

回よ。オールナイト一回百円として、三万八千九

百円、市価相場のたつた

一割じやないの。

どう、安いもんでしょ

う。」

「?!……」

「へえ、そんなのであるかい。いやなんとも恐ろしき日記の威力もあるよ」

(了)

性が多分に盛られ裏付けられていると思うがね」

「この世の中に処女の絵画が一点殖えたからといつて、それが私達二人の愛情の上にどんな変化があるんでしようか。貴郎は社会性をおつしやいますが、恋愛と社会性とどちらが上なんでしょう、社会性のあるお仕事のためには、敝履の如く捨てねばならないのでしようか？」

「勿論人間の恋愛は至上なのだから、恋愛の前には社会性は屈伏されねばならない、しかし又一面社会性の裏付けがあつて、恋愛が完成されるということも、知らねばならない、だから二人で辛抱が出来ることなら。出来る範囲で社会性との衝突はさくべきぢやないか」

南禅寺か？真如堂か？はたまた黒谷か？

どこかの鐘が山に木霊してイン／＼となりひびいてきた。愛人に全託した女性が逆に男性の肌を求める「新しい愛慾の新軌道」を、ただ單なる人間の煩惱として、一笑にふそうとするのか、はたまたそのひたむきな女の愛慾を、人の世の華として謳歌しているのか、梵鐘の余韻は、山を下りいく二人の後姿を、いつまでも／＼追うようにひびくのであつた。

やがて其日から数日は過ぎて、珠江の日記の一頁に、左の一首が書きこまれた。

「恥じらいは、君に抱かれて離されて裾の乱れを直すひととき」

(完)

オキヤンスカの戀

穴吹 武
松岡 敏一 画

人間に與える餌、

それはいろ／＼とあるが、ソ連には一寸變つた餌がある。それは性欲を餌として人間を馬車馬的に働かすと言う恐ろしい政策である。

「一生懸命働きなさい。作業優秀者には女をあたえましょう」と叫ぶのである。

ウラジオから海岸沿いに北東へ

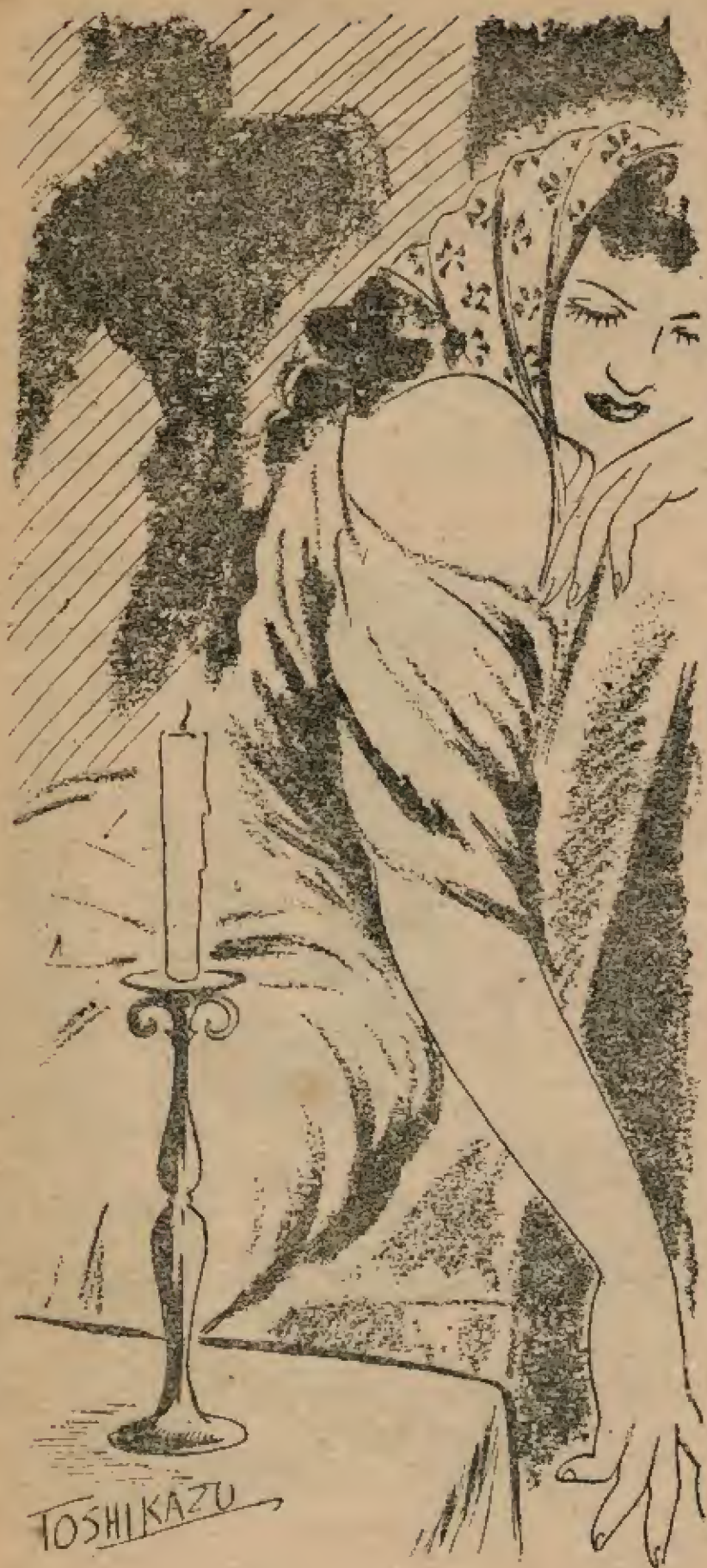
二十軒少々、オキヤンスカと言う海岸町がある。海軍航空基地であると共に黒海のクリミヤ半島にも比すシベリヤの保養地で、海岸に迫つた山々の間には、一般労働者

軍人の立派なサナトリウム（こゝで彼等は有給休暇の一ヶ月或は二ヶ月を、のびり遊ぶのである）が点在して来る。

此のオキヤンスカの軍人サナトリウムのすこし山の手に鉄條網で囲まれた四棟の小さな木造の家がある。

門の所にマンドリン（自動小銃）

人間的なあらゆる自由を奪われた俘虜たちには、堪えがたい本能の悩みがあつた。それは食欲と性欲であつた。



を持つたソ連兵が立つて居る所を見ると囚人でも居るのだろうか。おや、家の中から女が出てきた。よく聞けば日本語を喋つて居る、日本の女なのだ。

此の女達が日本人俘虜に対する慰安婦である、恐るべきソ連政策の犠牲者である。

旧軍隊はなやかなりし頃、軍人相手の醜態婦を「お前達は皇軍將兵の明日の英気を養う名譽ある大和なでしこだ」とかりたてた。亦ソ連は同じ手で俘虜相手の大和なでしことかりたてたのである。

半年を通じ一二六パーセント以上の作業成績をかちえた日本人俘虜は、一週間此のオキヤンスカの女收容所で休養がとれるので、遠く奥地から二日も三日もかゝつてやつてくるのだつた。

此のオキヤンスカの收容所には二十人少々の日本女が居た。彼女達は旧関東軍の事務員、タイピスト、或は領事館に務めていた女達で皆二十代の娘ざかりばかりだつた。

「貴女達は日本の民主化を希望しますか」

「はい一日も早く民主国家になる事を願つて居ます」

「そうでしょう、日本を一日も早く民主化するには、ソ連を強化しなければなりません、ソ連の強化は、世界民主陣營の強化であり、日本の民主化になるのです。ソ連の強化は此の偉大なるスターリン

五ヶ年計画を一月も早く完成する事なんです。私の言う事わかりますか」

「はい、わかります」

「その為にソ連に居る旧日本軍將兵は働いて居るんです。それで貴女達も働かねばなりません。その仕事は此のスターリン五ヶ年計画完成、即ち日本民主化に努力して居る日本人を慰めはげまし元氣づける事なんです。作業への明日の英気をあたえるのです」

とソ連人はまわりくどく、ていさいよく彼女達を説き伏せた。

最初彼女達は死んだ思いで日本人俘虜の相手をした。

「こんな惨めな境遇の日本人同志だもの仕方ないわ」

「若し、此れがロシア兵だつたら――。せめて日本人相手であるだけでも幸だわ」

「肉体は汚れても心だけは……」

等いろ／＼自分の心に言い聞かせあきらめと、すてやりの氣持で辛抱していたが、いつかそこには

若い男女である、恋が芽ばえてくるのは当然である。その上作業優秀者としてくる連中は殆んど顔が

きまつて居た。いつか「オキヤンスカの恋」と俘虜の美望の的になつた。

二

菅村美智子は今日雲過ぎから、半年ぶりにやつてくる中谷茂雄を迎えるお化粧の前に風呂に入つて

いた。
風呂と言つてもシャワーで浴槽はなかつた。丁度食事当番だったため、遅くなつて美智子一人だった。

あの新京の大きな官舎のタイル張りの風呂に入つてた頃は、自分ながらほれぼれする様な肉体だったが今の此の体はどうだろう。

あのピンとはちきれそうなビラミット型に盛り上つて居た梨の花の様な白い双の乳房は薄汚れた老婆の乳房の様に垂れて居た。あのこんもりと豊かな曲線をえがいて居た腹部は、たるんで所々いやなしわがよつて居た。あの妖しく燃えていた白い太腿は蒼黒い二本の枯木の様になつてしまつた。

裸になるなんてとてもはばかりしくて、風呂に入つても前を隠して赤くなつてたのに、今では隠す所が、人前立膝で平気で喋つて居る女になつていた。

「なんてつまらない女になつたのだろう」

美智子は、思わず涙が頬を流れた。

彼女が待つている中谷茂雄は、彼女と同じ長野生れで、彼女の最初の相手、処女を捧げた男であつた。

「無事に帰れば必ず結婚しよう」
「でも私はこんな女ですもの、貴方が一週間で帰ればその後は、沢山のひと……」

「そんな事、心の純潔さえあれば



シベリヤの事は、すべて夢として忘れるのだ。肉体の純潔なんか——馬鹿な——俘虜と言う境遇なんだ」と彼は固く帰還後の結婚を誓つてくれた。

「あと一時間もすればそのなつかしい中谷さんと——」

何か嬉しさと不安の入り乱れた気持で風呂から出ようとした時、さつと入口の戸があいて一人のソ連兵が入つてきた。

「はつ」と驚いた彼女は、そのソ連兵の顔を見て一層身をかくして後ずさりした。

そのソ連兵は五日程前、彼女達の警戒に轉任してきた兵隊で、日本の女が珍らしいのか、よく宿舎に入つてきては後から抱きついたり、スカートの前をめくつたり悪戯するのだった。

「オ、スバラシ！」
と早口に喋るや彼女の方に近づいてくる。異様な輝きを見せた茶色の目が彼女の全身を舐める様に睨む、彼女は手拭で前を押さえてジリ／＼と、壁ぎわに後ずさりした。

もう駄目だ、と思つた瞬間彼の大きな手が彼女の双の乳房を鷲掴みにした。

三

美智子と中谷は三方を板で囲まれ、前にカーテンの垂れた一畳半ばかりの小部屋の襦布団の上にぼんやり腰掛けて居た。

半年ぶりに会つた二人の若い顔は此の一畳半ばかりの部屋狭しと一杯に燃えたのだが、そのすぐ後には二人の心に暗いやな蔭がさしてきた。

美智子はその一時間程前の風呂場での出来事が苦々しかつた。ソ連兵に中谷以外にはあたえてならないものをあたえてしまつたのだつた。

最初彼女はソ連兵の肉体の下に恐怖におのゝいて居たが、いつしかソ連兵のすぐれた体力と技巧からくりだされる躍力に、思わずひたつた彼女だった。

中谷を迎えたのは、半年前の日本娘ではなくして、一人の醜態婦に過ぎなかつた。

血色の悪い蒼黒い顔、野卑な笑言葉、醜態婦らしい、たるんだ肉体。彼はすっかり失望してしまつた。心の純潔も疑わしくなつてきた。しかし笑は彼の心も純潔でなかつた。彼が美智子に此の様に失望したのは、実は美智子に替るべきすばらしい女があつたからでもあつた。

金髪に大きな眼、白い透き通る様な豊かな肢体。よく通るソプラノの声、その上美味しい白パンに饅頭迄呉れる彼女。すべての点で美智子より優れていたが、たゞ日本人でないだけが缺點だった。

四

或る日、作業の帰り中谷達のトラックが丁度川の真中でエンコしてしまつた。川と言つても深さ五十厘たらずだったが、丁度そのトラックには十八人近くのロシア女が乗つて居た。

彼女達は中谷達の作業場の附近の人達で、その夜収容所の近くの映画館に行く為に同乗したのである。

俘虜達は膝をまくりあげて一人づゝ女達を背負つて川を渡つた。その時の中谷の背負つたのが、此の美人のロシア女であつた。

彼女はナターシャと言つて二十六才の未亡人で、中谷達の作業管轄の事務所書記だった。

背負つて川を渡つて以来、二人は会えば、言葉をかわす様になつた。とかく彼女と親しくしておけば作業上いろ／＼便利であり、その上彼女は、如何にもロシアの代表的美人と言つた美貌の持主であり、あの背中に感じた柔かな感触は美智子以来、しばらく忘れて居た彼の若い血を妖しく燃えた／＼させた。

男に飢えた女と、女に飢えた男同志である。いつか中谷は晝の休みにナターシャの部屋に遊びに行く様になつた。時にはチャイヤーが監督に話して中谷を自分の家で仕事をしてみようとか何とか言つて半日程連れて行く事があつた。

しかし中谷は未だ友達としての附合いしか怖くて出来なかつた。ソ連女と俘虜の自分である、万一の事があれば最後の線を越す事は中谷には出来なかつた。それから二ヶ月近かつた頃、作業の都合で中谷達は作業場の近

くの工場の一室で寝泊りして作業をする事になつたので、中谷はナターシャの部屋を尋ねる回数がますます多くなり夜遅く迄遊んで帰る様になつた。

実は一人の警戒兵は、日が暮れると女の所へ寝に行つて朝帰つてくる状態だつたので、他の仲間達もそれ／＼適当な所へ遊びに行くのが常だつた。

当時ソ連の女達は独ソ戦に多くの男を失い男に不自由し、特に未亡人は惨めなもので、一人の男に十人もの未亡人がやつと十日目ごとの快楽を楽しみに働くと云う状態なので、勇敢な日本人俘虜は重宝がられた。

中谷はナターシャの部屋でウオツカを御馳走になつていゝ気持ちになつていた。ナターシャも目

のふちをほんのり赤くして中谷を陥落させようと企んで居た。「中谷いゝもの見せたげましようか」

「何ですか」

「ロシアの有名なもの、日本では見られないものよ」

「何んですか、食物ですか」

「いゝえ」

まるで二十の扉である。

彼女は椅子を立つや「あれー」と見てる間に、洋服を、シミーズを、ブラデエアーを、ズロースを取つて、一糸まとわぬ裸体になつた。

「ロシア名物の裸ダンスよ。」と踊り出したのである。今流行の、ストリップショウの比ではない。

膝を、胸を叩き、足を腰を妖しく動かして、速く或は緩やかなテンポで部屋中を所狭ましと踊り狂う。櫻色に光る肉体が胡蝶の様に、独楽風の様に回り狂う。均整のとれた手足が今にも彼にからみ付きそうに息苦しい。

跳ねるたびに太腿がブルン／＼とふるえ、ふつ／＼起伏した腹部が、黄金色に光る影を作る。大きな双つの乳房が桃色の波を打つ。中谷は思わず顔を伏せた。此れ以上見る事は彼の荒々しい野獸を押さえて居る事が出来ない。その途端バツと電気が消えた。

「あら停電だわ」と言ひナターシャの音が耳もとでさゝやき、暖い肌の香に、思わず「はつ」と顔をあげた彼の目に、生物の様に大きく波打つ豊かな乳房の上に黒く光る櫻ん坊の乳首が、カーテンの間から差し込む僅かな光りにばつとうつゝた。

五

「ねえ中谷さん、私はこんな女なの。つまらない女なのよ。なぐつて。弱い女なの、あれだけ貴方と約束しておきながら、そんな目で見ないで力一杯なぐつて頂戴」

と美智子はソ連兵の事を告白して泣き崩れた。

中谷は彼女を責める所か、彼自身、心で苦しんで居た。

「此の純情な美智子に比して己は何んて男だろう。結婚迄誓つて置きなぐら——。俺こそ彼女の前に土下座してその鞭を受けるべき男だ」

中谷は彼女の肩にやさしく手をかけた。

「美智子さん、僕こそ君に許してもらわねばならない男なんです。美智子さんの事は、許すも何んの不可抗力などにもならない事なんです。美智子さん僕こそなぐつて下さい。恐ろしい男なんです」

中谷はナターシャの事を告白した。

その次の日の夕方だつた。中谷は一人でぶら／＼と収容所内の白樺林を歩いてゐた。丁度その時右手の薪置場の方から「あれー」と女の悲鳴が聞こえた。中谷は横つ飛びにその声の方に走つた。

積まれた薪のかげで一人のソ連兵が日本の女をねじ伏せようとして居た。中谷の足音にソ連兵が振り返つた。その肩越しに女の顔を見て思わず彼はあつと叫び声を挙げた。

「美智子さん」

「中谷さん」

それから後、彼は何をしたかわからなかつた。ふと正気にかえつた時には彼の目の前にはべつとり血の滲いた斧と、頭をさくろに割られたソ連兵が倒れて居た。

彼は俘虜として恐るべき罪を犯したのである。ソ連兵殺人——。

六

私は中谷茂雄と菅村美智子の比翼塚に頭をさげて居た。あのソ連兵のあとを追う二人はソ連兵の拳銃で心中をとげたのである。オキヤンスカの白樺林に。(終)

長い「心の旅路」から「帰郷」する私を待つて居たのは「宗方姉妹」であつた。

「安城家の舞踏会」で相知つた

「真珠夫人」の「火の接吻」に

「誘惑」されて「山のかなた」

に「曉の脱走」をしたのは「晩春」であつた。

されど「夢は儚なく」「破れ

大鼓」のように崩れた。「白い

野獸」にも似た女の「野性」は

やがて其の「偽れる感傷」を脱

ぎ捨てて、「鬼あざみ」か「夜

の緋牡丹」のように「破滅」と

「墮落の詩集」の「白夜行路」

を、私を振り捨てて走つた。

何時までも「君待てども」帰

らず、遂に思い諦めた。背き去

映画題名小説

東京夜曲 有藻亞郎

つた女の「花のおもかげ」を「し

のび泣き」「今ひとたびの「幸

福への招待」をはかない「夜毎

の夢に」通わせつゝ、窓に破れ

た「傷だらけの男」は「悲しき

口笛」で「湯の町悲歌」を吹きながら、「哀愁」の「影法師」を淋しく曳いて、「遙かなる母の国」に「帰国」するより仕方

がなかつた。

私の「二十の青春」を帰らぬ

ものにした「東京の門」よ「蛛

蜘蛛の街」「美貌の海」よさらば

「また逢う日まで」。

あゝ「誰か夢なき」。過去の

「醜聞」はきれいに「愛と憎し

みの彼方」に捨て去つて、「夢

よもう一度」「七色の花」を咲

かせて呉れ。若き日の「或る婦

人科医の告白」より。



青春小説 わが口髭に悔ありき

高村 暢 兒
曾根三、太郎 画

佐川晴子の唇の少し左上に、小豆色の小さな黒子がある。笑うと口許に片えくぼがぽこんと窪み、ちよどその黒子はその片えくぼの窪みの底に吸いこまれてしまう。

薄いそい気味の、いわば知的な冷たさを堪えた唇である。その唇と片えくぼと黒子の配合が、妙に艶やかで、柔らかな風情を添えている。

世に言う泣き黒子だの笑い黒子だのと、黒子の名称も様々だが、さしずめ彼女の黒子は、俗な言葉で言えば、接吻黒子^{キッス}とで

も名付くべきか。とにかく、彼女の唇の魅力はその黒子によつて倍加し、熱い煽情的な彩りを添えている。

「あのえくぼのところ可愛い黒子のある子」と言えば、佐川晴子を指して言われるほど、事務所の受付に坐っている彼女は、出

入する大勢の客たちの焦点的になった。彼女は二月前、この銀座のS商事会社の受付に入社した。年齢は二十二と言う。洋装より和装に自信があるのか、洋装万能のアプレジャーとしては珍らしく着物はばかりであつた。着物の上から紺色の事務服を着込んで、神妙な表情で受付の椅子に坐っている姿は楚々として、ちよつと銀座界隈の派手な事務所では見当らない、珍しい日本趣味豊かなものである。

彼女の物腰にはどこか日本舞踊のなめらかな嗜みがほの見えて、最近の粗雑な女たちに見馴れている宮崎省造の眼には、まるで沙漠の中に見出したオアシスのように潤いのある、じんと沁みるような思ひであつた。

宮崎省造は一月に一度づつ、このS商事会社へ大阪から出張する慣例になつていたが、彼は受附に彼女の姿を見る度に、自然と瞳孔の拡がるのを禁じ得なかつた。

四十過ぎて、独身者だと言えば、体に故障があるか、冗談だと茶化されるか、どちらかに決まつているだけに、彼は曾つて、女の話が出る酔うた酒席でも、独身者だといふことは明かしたことがなかつた。彼を知る一部の友人を除いては、誰も既に子供のある男だと信じていた。

彼自身そのことを別に否定もせず、うん／＼と受け入れていた。芦屋の小じんまりとした住居に五十過ぎの女中と暮している彼は、女との華な噂もなく、本町のKビルに事務所を持つて、毎朝夕、普通の勤人と交らず、キッチン／＼と通つていた。

地位も一應出来、生活力も豊かな彼が、たゞ飲んで食べての生活に満足していると人も人は信じず、誰もが、彼に秘めた女の存

在の一人や二人を想像していたのも否めぬことであつた。

しかし、彼には更々そんな隠し女の存在などなく、世に言う石部金吉の類に似た地味な生活の明け暮れであつた。

一度、彼の事務所に使つていた女事務員が、彼のその堅い性格を知らないで、政策的な媚を賣つて来るのに、彼は冷淡にも、すつぱりと蹴首してしまつた出来事があつた。

再度、彼の友人たちからも縁談が持ち込まれたこともあつたが、彼は真剣な表情で「女房なんて煩雜さ。何かと男はマイナスになる……性欲の問題がい……そんなものの氣の持ち様でなんとでも制御出来るよ」と徹底した独身論を吐いた。

そんなわけで、インポテだと陰口をされたこともあつたが、何にしても、彼は普通の男たちからは変つた存在に見えた。

「要するに遅れた青春なんだね……四十になるまで女に興味を持たないなんて、正に医学的研究材料だよ」

彼に就いての友人たちの結論はこんな冗談口であつた。

2

宮崎省造はS商事会社へ三度目の出張であつた。

旅の疲れで、宿屋で朝寝し、正午近くS商事会社の金文字の扉を押した。

佐川晴子の笑顔が迎えて呉れるのに、彼は彼女が自分を忘れていないのだ、と勝手な意味にとつて、何か心の暖む氣持であつた。

社長はまだ出社して居ず、應接室のソフ

アで彼は眞をくゆらしていた。

ドアが開いて益に茶をのせた晴子が入つて来た。九月の残暑の烈しい日であつたが彼女は大柄な模様の錦仙をきちんと着附けていた。着こなしが上手く、足をむき出した夏服姿よりも、数倍涼しげな風情であつた。

彼は自づと彼女を観察する沈んだ視線になつていた。

「何か……あたしの顔に……」

茶をテーブルに置いてから、彼女はさして差じる風もなく、彼の眼を見返した。笑顔になつた彼女の右頬の口許のえくぼの中に黒子がぽこんと沈んだ。

「いやあ、失礼……悪気はないんですよ」

彼は慌て、打ち消した。

「お宅のどなたかに似てらつしやるんですの？」

「え、まあ……」

「お嬢さんにでも……」

省造はそう問われて、今更のように自分の年齢を胸の中で指折るのだつた。

四十五歳。普通なら、この女位の娘を持つていてもいゝ年齢である。彼は彼女のえくぼの中に沈んだ黒子を見詰めたが、何か心のどこかを隙間風が通りすぎるような寂しさを覚えた。

「失礼ですが、あなたはおいしくつ？」

「二十二ですの、お宅のお嬢さんは？」

卒直に答えて、訊ねて来た。

省造は当惑した。

「わたしは、そんな齢に見えますかね……」

わたしはまだ独り者なんですよ」

「まあ、御冗談を……」

微かな笑い声を立て、彼女は胸の底から湧き上つて来る娘らしい笑を押しこらえて

ぽつと顔を赧めると軽く一礼して、ドアの外へ消えて行つた。

ぶつと噴き出して、今頃は笑い轉じているかも知れない、彼女の姿を想像して、省造の胸の底寂しさは波紋のように拡がる一方であつた。

テーブルのすぐ横の高足台の扇風器から生暖い風が吹きつけている。その風は妙に彼の心の底まで吹き込んで来て、寂しさを一層波立たせるようなのだ。

彼は四十三歳までの過去を反芻した。

異性との交渉は地味過ぎた。早く父母を喪つた彼が、今の位置を築き上げるには浮いた出入りがあつては出来なかつたろう。

女に魅力を感じたことも再三あつたにはあつたが、彼はそれを押えてきた。それが彼に奇妙な女嫌いな性格を植えてしまひ、女に無関心ではなく無感覚にしたのかも知れない。

佐川晴子への得体の知れない執着は彼にとつて、遅れたる青春の季節外れの遅れ咲きと言う外はない。

ふと吾に返つて、とり上げた氷の碎片を入れた茶は咽喉に冷たく苦くしみ通つた。

「いやあ、お待たせしました」

社長の堅木氏が、肥満した顔を見せた。

商談を済ましたあと、省造は冗談半分で云つた。

「受附の女の子は美人ですな……銀座にもあんな純日本女性がいたとは意外ですよ」

「あ、佐川のことですか……何しろあの子の母親が生え抜きの新橋の藝者だつたんで、そのお仕込みなんです。踊りならばバレエは野蠻だから花柳流。ロングスカートは野蠻で和服は高尚。ピンからキリまで

こち／＼の日本趣味を娘にまで押しつけてんですからね。しかし、あの子も表面は日本趣味でしやなり／＼ですが、頭はやはりアプレガールですよ」

「何にしても凄く美人ですよ」

「謙に御執心ですな、まさか嫁に欲しいと仰有るんじやあないでしやうな」

堅木氏は根から冗談なのだ。

「実はその思つてゐるんですよ」

「どなたか、御知り合いの方にでも……」

そう問いつめられると、自分だ、とは云えず、省造は苦い顔をして、黙りこんでしまつた。

彼は飲み残したコップの茶をぐぐりとあふると、決心した眠つきになつて堅木氏を見た。

「堅木さん、こんなことを言つて年甲斐もないことなんですが……実は……」

彼は汗する思ひですべてを打ちあけた。

「へエーそうなんですか、全く驚きましたなあ……じやあ一つ力になりましよう。私はあの子の母親が新橋に出ていた時から馴染みでしてね。今度も是非使つて呉れつて頼まれたものだから入社させたんですよ……」

……なあに餘なんて当節は問題じゃありませんよ……それにあの子の母親は友人ですか

ら話は簡単ですよ」

堅木氏からそう気軽に引き受けられてみれば、打ち明けてよかつたとは思つても、額に滲んで来る羞みの脂汗をどうすることも出来なかつた。

3

宮崎省造は佐川晴子が深く考えていたように、簡単に、自分の申出を受け入れたの

に、半ば疑心暗鬼であつた。

銀座の料亭で堅木氏と晴子の母を離れて正式に話し合うことになつた日の朝、寢覚めの胸の中は妙に浮き浮きして、髪を剃る鏡に写る顔の表情がいやに下つてゐるな、と苦笑した。

彼は鼻下にチヨボ鬚を貯えてゐる。若い娘に会うのだから、剃り落した方が若々しくて好感を与えるかも知れないと、剃刃の刃を一度は当てかけたのだが、何か一種の情別の情に、そのまゝ置いておくことにした。

養子という料理屋の奥座敷を借り切つて彼は一時別荘から復しの訪れをまつた。妙に若やいだそあゝした気持ち、貰ばかり喫い、灰皿に数珠の山が出来た。

仲居に案内されて入つて来る気配に、省造は年頃變もなく顔を赤らめて緊張した。

額が開いて三つ指ついてすらりと礼をした晴子の白い襟足が印象的で、傍の母親と堅木との存在は視界には薄かつた。

型どおりの自己紹介が済み、膳を囲んで食事を終じ、省造は堅木氏と省造との話を遠慮せずを受けて、いゝ顔色になつた。

「新橋時代は大した潤益だつたんですよ」

堅木氏に言われて、母親のミヨはぽんと堅木氏の顔を覗き難な流し目で堅木氏を睨んだ。

「むかしのことほしやべりつこなし……寂しくなつちやいますわ……こんなお婆あさんになつちやつてゐるんですもの」

省造は四十五になるといふ彼女のそんな時の表情や拳動から、若やいだ波紋のひろがるのを感した。

佐川晴子はそんな母親の酔いの廻つた姿

を無表情に見詰めていた。無口であつたが絶えず、銚子をとりあげて、三人の盃をみたしていた。彼のそんな氣遣いを省造は玄人を母に持つ娘の氣さくさだるう、と晴子の性格の一端を、覗くような思ひであつた。

日本舞踊は花柳で三味線は軒屋で、長唄は松永和風さんにも習わせたことがあるとミヨは晴子に仕込んだ藝事の苦勞を、くどくど酔うた上づつた口調で云い、やがて傳法口調になつて、

「娘をどうぞお願いしますよ、宮崎さんなら晴子もきつと幸福になるでしょう」と上機嫌であつた。

しかし、省造は母親の言葉よりも、ずつと無口で一座を見守つてゐる晴子の言葉が氣懸りだつた。それで彼は訊ねた。

「娘さんのお意見をおききたいのですがねえ？」

「晴子は特別の意見なんてありませんよ。こゝへ今日来たのはすべてのお返事でしよう？このお話が嫌なら、来やあしませんよ」

それもそうだと省造は晴子を見た。彼女は無表情だつた。彼は晴子のその表情が少し氣になつた。何か考へてゐる眼だ。あの唇の片えくぼと黒子も動かない。こゝらで彼女のあのチャーミングな微笑する顔が欲しいと思つた。

「晴ちゃん……どうしたんだねえ、一言位何かしやべつたらどう？」

母親のミヨに云われて、

「だつて、何もしやべることないじやあなのいの」

と、ちらつと省造の顔を見詰めて微笑した。その微笑を彼は口蓋に感じた。剃つて

置けばよかつたと軽く後悔した。話は進み、その夜の会合で婚約は成立した型になつた。

省造は滞在を二日ばかりのばし、とりあえず堅木氏を通じて、正式に結納をおさめた。一度彼女を大阪へ伴つて帰り十日後に再び上京して式を挙げるといふことに決定した。

4

省造がその日の夜行で大阪へ帰る日の早朝であつた。

女中がお客様だと告げに來た。昨夜、晴子親娘と歌舞伎座を觀、夜遅くまで街を歩き廻つた寢不足で、眼を眼をしばたゝきながら、女中の差し出した名刺を見ると、

「S商事会社、繁村經一」とあつた。多分堅木氏からの使だろ、と軽い気持ちで、早速女中に部屋を整えて貰い、迎えた。

入つて來たのは背の高い、嫌に沈んだ生氣のない男であつた。

「あなたが宮崎さんですか？」

テーブルに向ひ合う男はぽつりと訊ねた。

「そうです。何か御用ですか？」

「用があるから來たのです……」

突けどんに男は云つて、ガラ／＼するよるな視線で、穴のあく程省造を凝視した。

常識的な挨拶もせず、なんと無礼な高飛車な口のきゝ方をする男だろう、と彼はむつとして、男を見返した。

「あなたが佐川晴子と結婚されると云うのは本当のことですか？」

「僕の問いに答えて下さるうちに、僕が何の用で來たか分る筈です……佐川晴子と結婚されるのは本当のことですか？」

「本当だよ、……それが君と何の関り合いがあるというのだ」

「あなたは彼女を愛した上で結婚されるんですか……氣紛れじやあないでしょうね」

「勿論、愛した上で……そんなことより早く君の用件をいゝ給え」

「ぢやあ云います……僕はあなたに彼女との結婚を取り止めて貰ひに來たんです」

「な、なんだつて……」

「彼女は僕の恋人です……あなたは泥棒です……僕の幸福をみんな盗んだのです……僕はあなた憎みます……今日、僕は決心して來たんですよ」

「決心？」

「とにかく反省して見て下さい。あなたが彼女を愛せる資格があるかどうか……考へても見て下さい、あなたと彼女とはまるで父と娘じやありませんか。あなたは彼女を玩具扱いにしようとしてゐるんだ……僕はそんな卑劣な結婚には命を賭けて反対します。あなたと彼女との結婚は神に対する甚しい冒瀆です、どうです、宮崎さん、このことについて、眞剣に考へて頂けませんか？」

男は徐々に柔らかな嘆願口調になつて來た。

「君は失恋の恨みを云いに來たのだね。嫌だね、お断りするよ、私は佐川晴子と結婚する」

省造は冷たく彈ね返した。

「あなたは神に恥じない人ですね？」

「どうして神に恥じなきやあならないだ」

「そうですか、じやあ仕方がありません」

男は荷広の内ポケットから折り疊んだ紙片をとり出した。そうして、拡げると省造の目の前に置いた。

「読んで下さい」

省造は見た。

「決斗状」と下手な金釘流で書いてある。

場所、時日、道具は貴殿の御希望に委すと物々しい字句がならべてある。

省造は、こんな芝居がかつた男に苦笑した。

目ざとく、彼の唇に滲んだ笑いを見つけて男は烈しく云つた。

「何を笑うんだ、僕は真剣なんだ……今度の戦争で五年も血生臭い野戦を駆け廻つて来た男だ……そんな間に、内地でどつそり金を儲けたあなたとはわけが違ふさ……どうせ一度死んだ軀なんだから命なんか惜しくないんだ」

「君は私を脅迫するのか」

「決斗の申込みは脅迫じゃあない」

「しかし、君と私と決斗する前に、君はもう少し冷静になつて晴子さんのことを考えて見る必要がある……君は私をたゞ年齢だけで計つているが、男女の愛情なんてものは年齢とは別もんだ……君が愛するようにもつと以上に私は彼女を愛しているかも知れない。とすると、問題は晴子さんだ。晴子さんが私たちをどう思つてゐるかが重要になつて来る……晴子さんが私との結婚を承諾したのは君より私の方をより愛してゐると見るのが、至当じゃあないだろうかねえ」

「そんなのは詭弁だ……とにかく決斗しよう。僕の方から指定する。場所は上野、今夜の八時、道具はナイフ、夕方五時頃僕は迎えに来るから、それまでに用意して置いて欲しい……」

て欲しい……」

「ば、ばかな、冗談は止し給え」

「冗談？ 冗談だと思つてゐるのか、僕は真剣なんだ」

男はさつと立ち上つた。

蒼白にさえ見える男の顔に、省造は困惑のいろが濃くなつた。

彼が男を呼び止めようとした時既に男は荒々しく廊下を鳴らして消えていつた。

省造はテーブルに頬杖ついて、思わぬ恋仇の出現に、男の置いて行つた決斗状を睨みながら、狐に憑かれたように果敢として貰を喫つていた。

5

どうせ、一時の昂つた感情から思いついた芝居染みた決斗申込みだろう。と鼻をくくつてはいても彼の晴子を恋する情熱は、省造にとつて、無関心では居られなかつた。云つても四十三と二十代の男の相違だ。裸対裸でぶつかつて行けば、若い女にとつての魅力は若さに味方しよう。生活力だの地位だのという物質的な飾りを自分から剝いでしまえば若い女に與える魅力は一体何が残ると云うのだ。

省造は佐川晴子も表面は淑やかな日本趣味の情愛こまやかな感じだが、頭腦ではやはり戦後派の打算に長けた一般普通の女なのだ。と、彼女の外觀から受けた、理想の女性のタイプに、疑問を懷いた。また、二、三も違つた若い女から、真実愛されるこ

三太郎



とを望むなんて、四十面さげて、よくも能々とセンチメンタルな考えを起したものだと思つた。まるで、ニギビ面の中学生のやうな感傷。省造はあの蒼白な顔で決斗状を叩きつけて去つた、男の若々しさに、到底抵抗出来ない、と考えた。

あの男に彼女を譲つてやろう。彼がそんな年寄染みた同情から思いついたのは、女中が朝餉の膳を運んで来た時であつた。

味噌汁の味はいつになく塩辛かつた。省造は晝過ぎ、S商事会社を訪ねた。受附には佐川晴子の姿はない。彼女は今家にあつて嫁入りの仕度で大忙しなのだ。彼女に代つた受附のカボチャ娘が、彼に愛想笑いで迎えた。既に社内では晴子との噂が拡つてゐるらしく、省造を見る事務員たちの視線が意味深であつた。

應接室で省造は堅木氏に、朝の一件を話した。

「へーあの繁村がねえ……」

堅木氏は驚いたという風に大仰にのけぞった。

「大した芝居を打つたもんですね。決斗だつて……まるで十八世紀ですな……で、宮崎さんは、彼に圧倒されちまつて、今度の結婚を取り止めると云うんですね」

「別にその男に圧倒されたわけでもなんでもないんですよ……たゞ自分の考えなんです……いわゆる自分を知つたというわけです」

「どう知つたんです？」

「年齢とか」

「まだ歳にこだわつてゐるんですか……そんなの心配いりませんよ……あなたなんか私にくらべればまだ鼻たれ小僧ですよ……その口髭を剃るんですな。その口髭がなければ立派な若者ですよ。はははは」

六十近くになる彼は省造の口髭を指して笑つた。

「とにかく繁村はけしからん。鹹だ……」と独り呟いてから

「決斗なんてほつて置けばいいですよ。繁村の芝居に過ぎません。今頃彼は大変なことをしたと頭を抱えて後悔してゐるでしょう……何にしても莫迦な真似をやつたものだ」

「それでしようかね……何しろ芝居とは思えない真剣な顔でしたから」

「大丈夫、繁村つて男は社内でも評判の小心者でしてね。金の計算にしか役立たない男ですよ」

「しかし、恋は何んとかいつていゝますからね」

「大丈夫、私が大鼓判を捺しますよ……そんなことより、暫しの東京の別れに、彼女

と汽車に乗るまで散歩したらどうです」

省造は堅木氏の快活な言葉に、再び考えは逆轉して、堅木氏の云うとおり、晴子と街を逍遙する気持に傾いた。

S 商事会社を出てから、彼は飾窓に写る自分の顔にふと立ち止つた。

堅木氏の言葉を思い出したのだ。

「その口髭を剃る事ですよ。口髭がなくなれば立派な若者ですよ」

指で口髭を押えて隠して見る。他人の顔のように若く感ずる。堅木氏の言葉は彼の胸に福音のように響いた。

銀座裏の赤と白のネゼン棒の看板を認めると彼は躊躇せずに入つて行つた。

鏡に向つて回轉椅子に坐ると、彼は鏡の中の自分の顔を仇のように睨み据えて云つた。

「口髭を剃り落して呉れ」

剃刀を研いでいた理髪師の青年が、彼の言葉を独り言だと思つたのか、そしらぬ顔で、あの娘可愛いや……と流行歌を口唱んでいた。

6

省造は晴子を連れ出して、銀座に出て来た。彼女は口髭を剃り落した顔の変わり方に

気付いてゐるのか、知らないでゐるのか、何も云わなかつたし表情も変らなかつた。

省造は何か期待外れであつた。

映画を観、食事ををし、二人は宿屋に夕刻帰つて来た。

例の繁村は決斗の迎えに来ていず、その代り堅木氏夫妻と晴子の母親のミヨが来ていた。

堅木氏は省造の口髭の喪失をニヤ／＼眼

で笑つた。

とう／＼繁村は現れず、省造と晴子は東京駅から発つた。

汽車が動き出し、プラットホームを離れてから、晴子は云つた。

「宮崎さん、どうして口髭お剃りになつたの？」

「変ですかね」

「変ですわ。宮崎さんらしくない。若く見えて」

「……？」

「お髭のある方がいゝわ……威厳があつて」晴子はそう云う意味が省造にははつきりとくみ取れなかつた。

彼は黒く影つた車窓のガラスをそつと覗いてみた。

晴子と向い合つた、二人の顔が写つてゐる。どうみても晴子と自分との対比は父と娘だ。と何かしら、口髭のない自分の顔が間拔けて見えた。年齢は口髭一つ位では隠し切れない。浅墓だつた、と思つた。

「ねえ」

甘い声と共に、晴子の弾力のある掌が省造の手にのびて来た。

「このまゝ、大阪まで帰るおつもり……」

「……？」

「熱海で降りませんか？」

「……？」

「あたし、熱海で降り度いわ……ねえ」

ぎゅつと晴子の指先が締めつけて来た。

省造は晴子の唇から洩れてくる、妙にねつとり拗む挑発的な声に奇妙な氣持になつた。

晴子の瞳は笑つていた。

「熱海で降りてどうするの？」

そう云つたあと、野暮な質問だと苦笑し

た。

「あら、変ねえ。そんなこと訊いて……」くすんと微笑した晴子は、省造の掌を軽くつねつた。

省造は降りようと思つた。佐川晴子の淑やかな第一印象はこの煽情的な誘いによつて粉々に碎けたものゝ、この女の容貌と肉体との距離を見極め度い欲望に駆られ、年

甲斐もなく、彼は欲情した。こんなに自分からほかくと情を炎やしたことは久し振りの様に思えた。

「降りよう」

「うれしい」

省造は弾んだ晴子の声に、熱海の宿の一夜を空想した。

晴子は案外、自分との年齢差を気にしてゐないのだ。自分の肉体の中でどんなに炎えて来るだろうか。空想は空想を生んで、彼は若やいだ氣持になつた。

省造の臉の中には、いま微笑している晴子のその時の素裸になつた表情がほの見えるようだつた。

「ねえ、あなたつて、呼んでもいいですよ？」

「そりやあ……」

省造は口ごもつた。

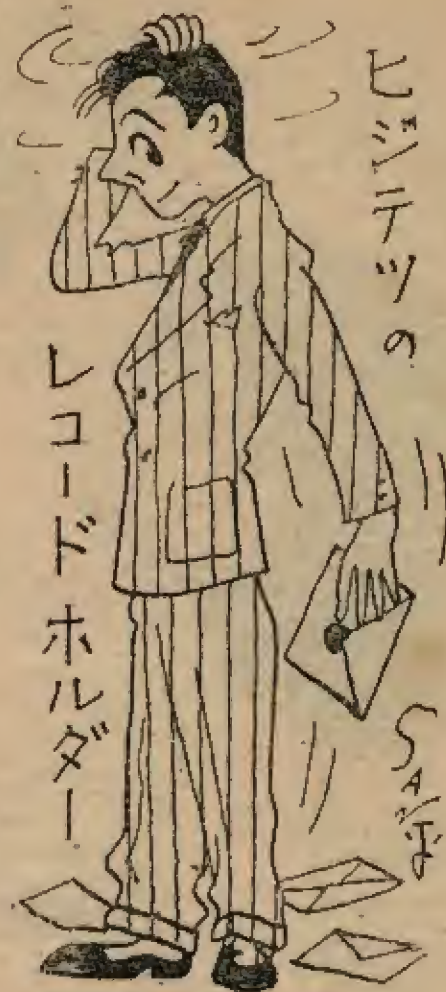
晴子は例の黒子をえくぼの中に沈めて、省造を見詰めてゐる。

彼はこの娘の氣持が解らなかつた。いや近ごろの若い女の氣持が解らなくなつた。列道は車輪の音を高鳴らして疾走してゐる。

二人を抱擁する熱海はもう目の前に迫つていた――。

新作 結婚報告書

○鶴和千年
△亀和万年



ヒジテツの

レコードホルダー

○「い、陽気ですな、目に青葉山
ほととぎす初結婚——」
△「あれ、初結婚？ 違うよ君、
初婚だ」
○「いや、僕のは正真正銘の初結
婚なんだ」
△「誰も君は再婚だと言つてやし
ないよ」
○「そうか、同情してくれるか、
いや有難う」
△「変だな、君の結婚は同情して
貰うのかい」
○「目に涙、山の借金初結婚なん
だ」
△「俳句の気持はよくわからない
ね」
○「とにかく結婚するには資本金
がいるだろう」
△「会社の設立みたいだな」
○「所が僕はフラレタリヤだつて
ことは税務署も認めている」
△「プロレタリヤだろう、貧乏階
級——」
○「いやフラレタリヤだ、今日ま
で僕は無慮千数百人にプロボー
ズした」

△「プロボーズとプロレタリヤと
どんな関係があるんだ」
○「それが君、驚ろく勿れ、全部
ヒヂ鉄を食つた」
△「ははあ、それでフラレタリヤ
か」
○「だからそのラブレター代で破
産した」
△「それからプロレタリヤに進化
したんだね」
○「そうだ、だが捨てる神あらば
拾うモクあり……」
△「モク？ すると君の奥さんは
モクか」
○「コラ、呼捨てにするな、モク
子さんと言え」
△「変つた名前だな」
○「何しろ結婚には金がかかる」
△「そりやそうだが、モ「ニングの
借着にしたつて千円は要る」
○「涙の出る程借金が出来た、と
ゆう悲壯なる心境を藝術に表現し
た俳句なんだ」
△「それでやつとわかつたよ、時
に奥さんはシャヤンかい」
○「うん、背が高いんでシャヤンと

立つている、足も動くように出来
ている」
△「人形だなるで、美人かと聞
いているんだよ」
○「うん、後ろ姿はね」
△「ウシロシャヤンか、前は？」
○「心配しなくつても顔はあるよ」
△「顔がなかつたら裏表がわから
ないじゃないか、僕の聞いている
のは造作なんだよ」
○「眉毛も植えてあるし、鼻も立
て、ある。目だつてちゃんと二つ
はめ込んであるよ」
△「家の造作みたいだな、それじ
やあまり大したことはないね」
○「まあ君一度逢つてみてくれ、
実に驚くよ」
△「そんなに物凄いいんか」
○「凄いと、高峰三枝子そつく
りなんだ」
△「えッ、僕は又お岩様のような
と思つた」
○「冗談じやない、顔から身体か
ら盲腸まで瓜二つ」



△「ほほ、ほんまか」
○「まあ一度逢つてみてくれ、然
し前以て断つておくがね」
△「野で豊で精神病で……」
○「なぐるぜ不具者じやないぞ」

△「じゃ何を断るんだ」
○「一度、足の裏を舐めさせて下
さい、なんて言つたら承知しない
ぞ」
△「僕は変態性じやないよ。それ
で奥さん洗濯やお勝手なんかして
くれるかい」
○「あ、その方なら喜んで奉仕
的献身的にやるよ——僕がね」
△「妻ノロボーイか、それで君、
夫たる資格が何処にあるんだ」
○「役所の戸籍の上に——」
△「家庭ではドレイだな、君はそ
れでも朗らかか？」
○「朗らかだね、御飯を炊く時だ
つて歌でゆく——」
△「ほう、どんな歌？」
○「まあ聞いてくれ、
燃える火よあおぐ風
お釜がグツグツ煮えるも愉し
朝の御飯を笑顔で炊けば
希望はてない新婚家庭
あゝあこがれの飯炊き男——」
△「のど自慢なら合格だね、いや
実にくまいよ」
○「奥さんもそう言つてくれる。
貴男の炊いた御飯実にくまいわ」
△「洗濯の方はどうなんだい」
○「晝めし前だね、これも歌で行
く、
高く明るい太陽に
汚れは消える水を汲む
ジャブ——洗う洗濯男
泡はわが家の夢を呼ぶ……」
△「洗濯も又愉しからずやだね」
○「奥さんの下着まで僕は洗濯す
る」
△「そうすると、君んとは全く
円満だね」



せんだくもやり
ます

○「と思うのが素人のあさましさ」
△「と言うと喧嘩することもある
んか」
○「先づ一週間に五回はな、とに
かく夜の帰りが遅いだろう」
△「商賈だからね」
○「それも決つて酒を飲んで、ぐ
でんぐさ」
△「何をッ、酒を飲んで何が悪い
んだッ」
○「自分の甲斐性で飲んでいるん
だぞッ」
△「口惜しかつたら飲んでみるッ
——ウーイ」
○「その調子なんだ、全く鼻息が
荒い」
△「閑白の位を知らねえかッ」
○「するとシットの出すんだ」
△「あなたッ、又飲んで来たのね
ッ」
○「そんな事言わないよ」
○「じゃ何んて言うんだい」
△「又今晚も男とホテルへ行つた
んでしようッ」
△「男と？ 男と男がホテルへ行
くかい？」
○「君は感違いをしている」
△「何が？」
○「酒を飲んでくるのは奥さんな
んだ！」

(中村米蔵作)

女闘美小説

血に護られた乳房

北海 千 珠 子



螢籠をさげて玄關へ入ると、あとだと思つていた明石先生はもう縁の藤椅子によつていらつしやる。

「アッ、先生お早かつたのね」

「君のようにスロモーじやないよ」

「まあ憎らしい、先生ぶつけてよ」
私が螢籠をふり上げると、小川で

しめした水滴が先生の見えていらつしやる外誌ルツクに飛びました。

「乱暴するなよ、螢が悲鳴あげてるよ」

千珠子が籠を本棚へのせて、お轉婆をまる出しに、先生と差向いの椅子へドシンとかけると

「おい北海君、君、相撲を取つたことある？」

とおつしやつた、

「從姉とふざけあつたことはあつてよ」

「負けたんかい？君が」

「勝つたわよ、負けるもんですか」

「じゃ一番揉んでやろう」

とお立ちになる、驚いたが今更「いや」

と云うのも癪だし、知らぬ異性ならいざ

しらず、お兄さまのようにしたしんでいる先生ですもの、恥しかつたけど千珠子も立

上つたの、するといきなり先生は千珠子を抱込んで、ハツと思ふまに腰車にかけて投

出したわ……そんな手荒なことを初手からされると思つていなかつたので、何だか急

に悲しくなつて其まゝ其の場で泣いてしまつたの、先生は私を抱起すようにして、耳

もとで何かいろ／＼なぐさめて下さつたけど、

「いやよ！もう二度と取らない！」

と無理に倒れて反抗しつづけたのだつた

そんな日もあつた千珠子なのに、この頃は平気で先生のお相手をするようになった

私は一体どうなつたのかしら……やはり根からお相撲が嫌いじゃなかつたのだと思うわ。

それから半月ほどたつてしまつた。いつものように明石先生のお宅へ絵のお稽古に行くと、千珠子の顔を見るなり、

「北海君ちよつとこつちへ来給え」

と、いつにない恐いお顔でおつしやる、

何が御機嫌を損じたのかしらとビク／＼しながら、

「何か御用でも」としらばくれてお部屋へ伺うと、

「君はあれほどいつておいたのに、佐々木や村上と相撲を取つたね、駄目ぢやないか？」

しまつたと私は思つた、たま／＼昨日先生が外出なさつたので、あとにのこつた自分達門下生は、若い娘のもつありあまつた

エネルギーを消化するつもりで、三人で相撲を取つたのであつた。かね／＼先生から

「相撲は教えてあげるが他人と取つちやいけないよ」とおつしやつていたが、それは

千珠子が怪我でもするのを心配して下さつてのお言葉と解釈していたのに、……

「でも千珠子から挑んだのじゃありませんわ」

「じゃ誰が手を出したんだ？」

「佐々木さんなの、だから私も負けずにかかつていつたの……いけません？」

「いけない絶対にいけない」

「でも女同志ですもの」

「同性であろうと何であろうと僕以外の人の相手に出ちやいけない」

「先生はヒドイ独占主義ね、それとも妬いていらつしやるの？千珠子の体を何故そんなに束縛なさるの？ふざける位は自由にさ

せてほしいわ」

悪いとは知りつゝ私はつい反抗してしまつた。

「妬んでいるのかも知れない、それでもいい僕は君一人が可愛いんだから……」

先生が私を愛して下さることはそれとなく知つていた。しかしこう真正面からいわれると苦しくなつた。

「肉の感覚は同性間にもある。僕は清純な君であつてほしいんだよ……慾が深過ぎるのかなア」

「そんな事ありません……先生、お相手して頂戴そして一度でも穢れかけた千珠子の肉体を裸して頂戴！」

珍しく和服姿先生の胸へ、英ネルの單表に三尺帯をしめていた私は、しやにむに喰付いていつた。

× × ×
言い忘れていますが、私の敬愛しています明石淑郎先生は、新興美術として、最近やがましく取上げられてきた「女闘美」の研究家なのです。

だからアトリエには、他所のアトリエに見られぬ設備がしてありました。女と女を裸で揉み合わせるリングがセットしてありました、そして京阪神から招かれたモデル女が、そのリングでいろ／＼な女闘美の姿態を演出していました。先生のアトリエには掃除婆サンのお重サンがいるきりで、外に

は猫の仔一匹いません、ですから私は金、

土、日のお稽古日以外の日も伺つて、それとなく先生のお身の廻りお世話するようにしているのです。そんなことから、時々先生のお友達や、出入りの画商なども同席しますので、美術界の近況や海外の女闘美に対する探求の状態など手にとるように分りました。

ある日などは女闘美ファンの方々が集つて、先生のそばに坐つてゐる私を、好色な眼でジロ／＼とみなさるので、いたたまらなくなつた日もありました、そうかと思うと、雑誌社の写真班の方がきて、先生とヌード写真の話をしているのをきくと、今にも自分が裸にされるような圧迫感を感じて、自然と襟をおさえる気持になりました、お客がおかえりになつてからのことですが、

「おい北海君、君のヌードを見せないか？」

といわれて、
「殺されてもいいや、死んでもいいや」といいますと、

「死んでしまつたら、何されたつて仕方がないじゃないか」

つておつしやるの、先生つて本当に憎らしい方です。

「ぢや先生は殺してでもヌード写真をとるうとおつしやるの？」

となじると、

「誤解しちゃ駄目だよ、僕は君をモデルにしようなど思つちやいない、まして他人の眼に君の肌をさらさせるなんて考えたことすらないよ」

「でも先生は……」

「まあ、まあたまえ、君は僕のベターハーフ以上のものなんだ、たとえばだ、蓮の葉の上におちた二つの露の玉のようなものだ、最初は個々のものでも、風にゆられて葉っぱの中心でビタリと合つたが最後、もうどれがどれやら分けられない一つの大きい水玉となるね、そんな君と僕じゃないのかい」

「わかりました、御免なさいね……でも先生のおつしやり方がまずいもんだから……」

「僕がメトミの絵を描いてるね、そしてリングにはモデルが組合つて争つてゐる、そのポーズは又しても醜態になりがちだ、そんな場合に、一々僕が坐を立てて修正にくままでに君が僕に代つてその役をして呉れる、そんな君であつて欲しいんだよ」

「よく分りましたわ、先生のおためになるんなら、千珠子も潔くヌードになりますわ」

「そんな無理はしなくていいよ」

「いえ是非一度私のヌードを描いて頂きますわ、青春の思い出の記録として……」

「有難いな、そんなに理解して呉れるんなら」

そいつて先生は千珠子を強く／＼息がとまるほど抱いて下さいました。私の張切つた胸乳がつぶれるんじゃないかと思つた

位でした。

× × ×

ロスアンゼルス市から日本観光をかねて女闘美を探索するめにやつてきた、ケント氏とクラーク氏の二米人が、いよいよ明石先生のアトリエ蓮花荘を訪れてきました。両氏は先生の出された十数枚のメトミ画を鑑賞しながら

「ワンダーフルだ、この絵のポーズを実演で見せて頂けませんか、日本娘のメトミはすばらしい」

「ごらんに入られないこともありませんしかしこれらのポーズは、今スグに出せるかどうかは諸合えませんが、一回で出るか百回でも千回でも出ないか、真実が必ず美しいともいえませんしね」

「分ります／＼真実以上のものが創作なんですから、貴郎の心と腕がそれをつくる、よく分ります」

「では一度やらせてみましょう」

とおつしやつて、先生はモデルの小泉初枝サン吉田麗子サンを呼んで、日本流の相撲の型で五六種のポーズをやらせてごらんになりました、珍らしいので、ケント氏もクラーク氏も見えてはいますが、「極」の型が充分に出ません、外人が見てるといふ刺戟が、彼女達をかたくしています。

「日本の娘サンはレスリングをやりますか？やれますか？」

「やりますよ、でもまだ充分に馴れてません、汗だくなつた初枝サンと麗子サンは、

今度はレスリングの型で争ひ出しました。

作者北海千珠子さんは、素晴らしい健康美の本年十七才になられるメトミーズ（女闘美演出者）です。女闘美についての御照会
は編集部氣付北海千珠子さん宛に願います。
編集部

しかしどう見てもスムーズさを失つてギョチナイのです、先生はいろく指導をなさるんですが、それがかえつて彼女達をおずくさせるのです、其処へ塾生の村上サント佐々木サンが入つてきました。モデルも年長の関浦和子サンと下村恭子サンにかえられました。でも演出は大した変化をみせません、先生はいろくしてきなさるし、外人の二人は退屈そうに見えます。

メトミの表現が如何にあるべきかを知りぬいている私は、身も心もない焦慮に追込まれて、手足が自然にふるえてくるのでした。和子サンと恭子サンは年長だけに、やゝグのある取口を見せましたが、モデルはどこまでもモデルでした。金銭で身を賣つてゐる人といえは失礼でしょうが、やはり先生の理念をハッキリと擲んでいられない悲しみが其処此処にのぞきます。

「先生！千珠子を使つて下さい！」

「何ッ？君が？馬鹿な！」

「いえ、いいんです。千珠子にやらせて下さい、先生のお心のまゝに表現出来なくても、キット今迄のポーズより段を抜くと思ひます」

といふながら私はワンピースを脱いでスリッパ一枚になりました。

「千珠子、お前は本当にやる気なのかい？」

「本当もウソもありません、先生の御主張が立つか倒れるかの瀬戸際じやありませんの」

「いや今日のはステージに於ける公演のよゝうな重要なものじやない、いわば余興的

な催しなのだよ」

「余興？いけません。そんなお言葉をお使いになつてはいけません、たとえ寸劇にしろ、女性の肌を異性の前にさちさす以上、そんな軽薄なお言葉はいやです。千珠子は先生の焦慮が見ちやいられませんか」

「じや誰と組む？下村君とか？関浦君とか？」

「モデルの方とはいやです、相手には佐々木サンに出て貰います」

「何ッ、佐々木君と？」

私と佐々木光子サンとは仲が悪かつたのです。手をかけた事はありますが絵のこゝとや先生のことと互に言い争つたことは再三ありました。

「佐々木サン脱いで頂戴！」

佐々木サンの顔は何時の間にか緊張してました。その緊張が急にとけると、鼻先で笑つたような、憎悪に燃える歪んだ表情になりました。下村、関浦の二人がリングを下りられると、全裸になつた私と佐々木さんはマツトの上に立ちました。

チラリと先生の方を見ると、先生は充血した眼に、何となく悲しいような色をただよわせて、無言のまゝ二人をみつめていられます。二人といつたのはウソです、私を千珠子を見詰めていられます。急に私は何だか悪いことでもしているような、先生をだしぬいて我儘をしたような気持ちになりました、がもう此処まで来ればすべては鉄砲の引金に指をかけたも同然で、ひつこみのつかない二人でした。

佐々木サンは五尺三寸十六貫の長身、私

は五尺一寸五分十四貫五百です。互に身構えましたが、勝気で男性的な佐々木さんは大膽にスグ組付いて来ました。二三度は肩口を突こうと、先生に習つた双手突きを予定したのに、早くも相手の腕の中におちいつてる自分を見出して「しまった」と思いました。

生れて初めて同性と真剣に組んだ私は、すべつこい持つところのない相手の肉体をもてあましました、相手の腰の贅肉を掴むようにしてこらえながら、佐々木さんの頭と交叉して四つ相撲に入りました。相手の腕は私の首を捲こうとします、それでは苦しいので顔が醜悪になるのにきまつてます。佐々木サンのパーマを掴んでチョット牽制すると、相手は反抗して私のパーマを鷲掴みにしてきました、こゝでお客の方へ顔をむけては醜態です、痛さと憎さに戦いながら、顔をそむけて堪ええました。

相手の攻撃を分散させようとして、佐々木サンのブエスを探りますと、相手はパーマをはなしました、スグ様私の胸乳をさぐつてムズと乳房を掴みました。それはあまりにも醜態な掴み方でした。憎くなつて自分も相手のを掴みかえそうかと思ひましたが、それではポーズが崩れるのです。

「カチリッ？」外人の誰かがライカを使つたらしいです。佐々木サンが下腹を引いてブエスにかけている私の手を切ると、腿を掴んで引倒そうとします、倒れまいと軽く反抗しながら、ポーズの変化を見せるために、私は我から相手の術中におちいりました。マツトの上で二三轉して争ひまし

たが、私は常に守勢だつたので、佐々木サンのために組敷かれ、私の下腹部に相手が跨がりました。それを揺つて私は体をねじり、相手に再び首を捲かせて、佐々木サンの美事な乳房を掴みました。自然に佐々木サンの上半身がカーブして、私の上半身も反りかえつて、二つの曲線が胸の隆起を花と散らせ、腹の重量感が鈍重性の美を發揮しました。

「ベリーナイス！」外人の指は又シャッターを切りました。惨忍で兇暴な佐々木サンの闘志は、その白い歯を私の左の乳首へ近づけてきました。「噛まれる！」とトッサに私は胸をひこうとしましたが、背はマツトに押つけられていて動きがとれません。耳にきこえてゐるのは、十六ミリ映画の撮影器の器械音です。多分先程からクラーク氏の方がとつていたらしいのですが、夢中の耳には入らなかつたのです。自惚れじやありませんが、たしかに私が実演に出てからメトミの真髓は發揮し得たように思へるのでした、なればこそ映画の撮影を始めたのだと思ひました。

メトミは全裸の争いですが、女性のもつ崇高の表情である、胸乳の個性美を表現せしめなくては、如何なる部分を巧みにあしらつても駄目になります。顔のそれは胸乳のつぎにくるものであり、ブエスは第三で多くは腕の方向や指の表情で、其処への幻想を高めます。そんな意味あいを百も承知している私は、勝負は度外視して、憎らしい佐々木サンの攻撃を反撃にも出ず、歯を喰いしぼる思いでこらえぬきました。苦し

い内にもチラ／＼と眼をうつすと、先生の満足そうなお眼が私の眼とカチ合い、カラミ合うのでした。格闘は早や最後の段階に追込まれて、いよ／＼もの凄い乱闘に入りました。

マットの上を二三轉すると、私は完全に佐々木サンの為組敷かれずした。佐々木サンの腿が私の腿を、胴締めをずらした形に締めてきました。佐々木サンのパーマが



私の顔の前で振りまわされ、私の腕は佐々木サンに駕籠みにされて動きを失いました。それでも私は何とかしてはね反そうとあせつて、首をや／＼おこしますと、蛇のような鱗光をはなつ佐々木さんの眼が、私を睨んだかと思うと、頬がひきつって、バット大きい口が白歯をむき出して、再び乳房へせまつてきました。

「殺される！」

そう思いながらも、全身は完全に相手のために捕捉されて微動も出来ないのです。ひたむきにメトミの表現に熱中して格闘として自分を護る道をたつた後悔が、ヒシ／＼と胸にせまつてきました。先生がとめて下さったのに、自ら好んでこの危機を買って出た自分がくやまれました、愛している先生にすらムゴイ扱いをうけたことのないこの乳房を、我から

ライバルの生贄にささげるおろかさ、全力をふるって死地を脱しようとしてもがきましたが駄目でした。冷汗がたら／＼と額と背に流れて、自分の頬が青白むのが意識されました。佐々木サンの腹がや／＼せり上つて、ちぎんだ首がのびると共に、ガツブリと乳房へ相手の歯の立つのは一瞬のにせまりました。

先生に救いを求めるにも、口が乾いて舌がつつて音が音になりません。ハツと眼をつぶった瞬間に、私は左の乳房に異状なシヨックをうけました。と共にヌメ／＼としたし／＼りと、ブーンと生血の臭いがかぎました。やられたと思うと、急に気が遠くなるのを覚えました。そのくせ肝腎の乳房には何の痛みもありません。

何時間たつたのか何日たつたのか分りませんがフト気がついて眼をあけると、私は先生のお部屋に寝ておりました。驚いて頭を上げようとする

「静かにしているんだよ。もう大丈夫だ。

僕の顔が分る？」

そうおつしやつて先生は私の手を握つておいかぶさるように顔をお近づけになりました。私は急に悲しくなつて、眼に一パイ涙をうかべて声もなくうなづきますと、先生は寝汗にべつとりとぬれた額のおくれ毛をなであげて、顔をかいえるようにして、切った果実を合すような全きキッスをして下さいました。

一時に胸に血が逆上する思いでしばし目をとじましたが、ニツコリほ／＼えんで先生

を見上げた私の目につい驚きがかびました。

それは先生の右手の人差指と中指が、純白の繻帯でまかれているのを見たからです。先生のお指にはまだ歴然と其傷はのこつています。

千珠子の乳房を護つて下さった傷痕それは囁付こうとした佐々木サンの口へ、啞啞に我と我が指をほり込んで、危機一発で千珠子の生命と乳房の美を救つて下さった愛のサインなのです。

読者の内には、そんなにまでしなくつても、頭髮を掴むとか外に方法もあつたろうと批判されるかも知れませんが、たとえ頭髮や肩口などおさえても、囁もうとする女の一心で動いた場合、その行動を阻止することは不可能なのです。

千珠子と先生がかくもかく結ばれたのも、もとはといえば逆説ながら佐々木サンのお蔭だともいえます。

一時は絵筆はおろか、お箸の上げ下げも出来なさいませんでしたので、御食事は全部私が赤ちやんのようにお運びしましたが今ではただ月形の痕があるばかりにいえませんでした。

千珠子は入浴いたしますたびに、三面鏡に向いますたびに「血に護られた胸乳」の幸福を、我身ながらにねたま／＼くさえ思ひ錯覚におちいるのでございます。

(完)



復讐のドラマ

片矢 薫

森 あきら (画)

雨の激しく降る夜半だつた。お不淨に起つた夕起は、從兄夫婦の寢室からしのびやかな話聲がするのを聞いた。

呪われた運命に結ばれた哀れな引揚女の辿る美望と嫉妬の茨の道、責めの小説、復讐のドラマ。

夜の勤めを持つ夕起は、眼を覚ますのが定つて晝に近い。朝の陽の光りも夢の中で意識しながら、寢覚めの物憂い感触を寢床の中で心ゆくまで反芻する。そんな習慣からその日もやつと床を離れた頃は、春の日射しが部屋いっぱい射し込んで、台所では義姉の貴子が晝の仕事に忙しい最中であつた。

着物を着替えると、鏡の前に坐つて見る眼の大きいやゝ險のある顔が、寝起きのせいか、蒼褪めて、脂気のないかさ／＼した皮膚に写つてゐる。毎晩の寢酒の故かとも思つてみる。何となく最近のいら／＼した氣持が急激に表情までを老いさせてゆくようにも思ふのだつた。

手拭とシヤボンを握ると、陽氣らしく口笛を吹いてみた。

勝手では貴子が味噌汁の味をつけるのに匙にすくつて試してゐる所だつた。夕起の姿を見ると

「目覚め」

と笑つた。大きな子供だといたづらつぽく笑つてゐるように見える。が夕起にはそれが素直に受取れない。何か嘲笑されてゐるみたいな氣がするのだ。自分の夜の職業を蔑んでゐるようにも受け取れる。毎朝、貴子のこの笑顔にはいら／＼させられる。

慌てゝ貴子がそこらあたりを片附けると夕起は不機嫌に金盥に水を汲むのだつた。貴子にはそんな不機嫌さには差程氣にかけない。毎朝のことだが、寢覚めの憂鬱位にしか氣にとめていない。

「昨夜は遅かつたのね」

貴子は何氣なく言う。

「あゝ、お客さんによべれたの」

「そう」

夕起の突ッけんどんな返事にも貴子は馴れてゐる。あれこれと話題になるようなことを探してみる。夕起の不機嫌などには、全く聞かない調子に話しかける。それが又夕起には煩わしくてならないことだつたが、貴子には無口では過せない所謂家庭の主婦的なタイプが身についてしまつてゐるかも知れない。

顔を洗い終えると少しは、さつぱりした氣持になれた。手拭の爽やかな感触を鼻のあたりに感じ乍ら、聞いてみる。

「兄さんは」

「もう、とつくに出掛けましたよ」

貴子は再び今頃滑稽なといわん許りに笑う。夕起も從兄がとつくに会社へ出勤してしまつてゐることはよく知つてゐる。ただ何となく毎朝聞いて見ないと氣がすまなかつた。それも習慣になつてゐるのかも知れない。

夕起は貴子の笑い声を後に庭に出た。庭といつてもほんの汚い空地でしかなかつた。雑草が一面に生え出し、そこらには硝子の破片や、丁度溝から浚ひ出したような瓦のかげらなどがころがらつてゐる。貴子は一度庭の手入れをしなければ、と口癖のように言つてゐるのだが、今時、汚くても庭のある家に住める者は大いに幸せだと夕起は常に思う。自分が外地から引き揚げて来てから、從兄にめぐり逢つてこの家に來る迄のことを考え合わせてみれば、毎日定つた帰り場所があるという氣持の安定だけでも幸福だと言わなければなるまい。

「夕起さあん」

「はい」

「御仕度出来ましたよ」

これも毎日の習慣で、夕起は朝と晝の食



事を一遍ですます。夕起にしてみれば従兄夫婦に少しでも節約になつてゐる筈だと得心しているが、貴子は、一日に四度の食事の仕度をしなければならぬと、大いに手間のかかることにしている。がそんなことはおくびにも出さず甲斐／＼しく世話をする。

夕起は食卓につき乍ら、昨夜のことを思い出してみている。

夕起の勤めてゐるバー・コロンバスがはねたのは十二時近かつた。常連の遠山と其処から自動車で何処へ行つて、どう廻つたか全く憶えがない。遠山は金廻りのいい紙屋で、さつぱりした性質から氣を許して出掛けしたもの、その後の記憶がまるで、崖の途中で切れた綱のように跡かたもない。泊らなかつたことは確かだが、家に帰つた時刻など、尙更、知らない。義姉に聞くのも業腹だと、上目使いに貴子の顔を見た。

貴子はまるで平和そのもののような顔物などしてゐる。夕起にはこんな貴子が一度に憎くてたまらなくなるのだつた。女の郷愁は、矢張り家庭にあることを夕起はよく知つてゐた。然も夕起もその例に洩れてゐない。二十四の今日まで苦勞つゞきで、外地で両親に生き別れをし、内地へ帰つてからは、男から男へと浮いた女としか見て貰えず、又それでなければ生きても行けない。

従兄の俊吉に拾われるようにしてこの家へ入れて貰うようになったもの、俊吉にしてみれば、單に血統のある夕起を捨て、もおけないという常識と、幾分の憐れみからそうしたものとしか考えられない。そう思えば思うほど夕起はたまらなくやるせない。

いつそこ、から出ればこんな焦燥に悩まされなくて済む、と思つてみるもの、そんな勇氣は到底なかつた。そんな想いが凝りに凝つて、だん／＼自分がこの家の邪魔者のようになひがみも出て来る。従兄夫婦の一挙一動が何かにつけそんな目に解釈されて来る、夕起がこの家から出れば二人がどんなに嬉ぶだろう、と考えることが愈々自分を居辛くしてしまふ。

然も嘗て夕起は俊吉を愛したことがある。何も知らない貴子は平和である。それがいかにも女らしい満足を夕起の前で見せびらかしてゐるようにさえ見える。

「あら、もう済んだの」

貴子の声も、もう聞き度くないのだ。夕起は黙つて立ち上つた。その拍子に簾簾の上の小さな額にはまつた俊吉の写真に打突かつた。若い頃の写真である。丁度夕起が俊吉を愛してゐた頃の写真かも知れない。

夕起は子供の頃、官庁の役人であつた父と一緒にあちらこちらの土地に移り住んだ父の轉任に伴うことであつたが、従つて故郷に住んだことは殆んど無かつた。たま／＼年に一度だけ墓参りには必ず国へ帰るならわしだつた。その年に一度の墓参りの時だけ、俊吉に逢ふ機会があつた。子供心にも従兄の俊吉の存在が何となくほの／＼と嬉しいことだつた。

やがて女学校へ通うようになると、俊吉は大学へ進んでゐた。当時の女学校では男との接触は盲目的に禁制で、僅かに親類や知人に若い男を持つてゐることが誇の種であつた。その中で夕起は俊吉の存在を友達に見せびらかし、誇りもした。友達も簡単に羨んだ。それがいつか夕起の偽らざる氣持にさえなつて行つた。そんな状態から生れる心理は俊吉にあてはめても同様のことであつた。二人はロマンチックな雰圍氣で手紙を交換し、逢えばしみ／＼と睦言も交わした。むん／＼する草いきりの中で抱擁したことだつてある。が流石その頃の純真な二人は、変にいかめしい時勢のせいもある。結局それ以上の何事もなかつた。その当時感激して語つた言葉の一つを借りればプラトニックであつたのだ。

その中、夕起の父が満洲へ招かれて赴任する時などは、一生愛し合おう、と秋草の繁る窓の下で固く言い交した。結婚という約束をしなかつたのは、流石激変する世相に夫々生涯の不安を抱かせられていたからであらう。

夕起が満洲へ渡つてからは、二人の仲は何時とはなく遠のいた。あまりにも遠い距離感が二人の氣持を次第に諦みへと誘つて行つたからであらう。夕起は遠い満洲の果

てで時に俊吉のことを想い出すことがあつた。もうその頃は、どうしてゐるだろうと考える必要はなかつた。当時の青年達のユースは全く決まつてゐた。たゞ或は銃を担いだ俊吉がこの満洲の國境辺りに來てゐるかも知れないと考えて見ることもあつた。

二三年して戦争が終つたのは、夕起が丁度二十の時である。一家離ればなれになつて、幸運に日本へ辿りつけたのは夕起だけだつた。父も母も皆目どうしたのか分らなかつた。が日本に帰りつくまでたゞ夢中であつた。父も母も果ては自分が女であることさえ忘れてしまふ旅であつた。その間に夕起の性格は、すっかり変化してしまつたのだ。

四年も経つた今日でも時に夢の中で見るパン一片を与えて身体を求めた中年の商人風の男、親切ごかしに毛布を着せ、その中で身体中を執拗な指先で撫で廻した官吏くづれらしい男、疲れ果てゝ身動きも出来ない夕起のモンペを無理矢理はがした農夫、等々、夕起にはそれらのことが、一度自分を世間の片隅へぐい／＼押しつけようとする力として想い出されてならない。

満員の貨物列車の中で、飢と寒さに絶え難い苦しみをどう処理したか下意識な位である。箱の隅に置いてあるドラム罐にまたがつて用をたした女。夕起は最初どうしても勇氣が出なかつた。が堪え切れなくなると自棄氣味になつた。沢山の男達の眼の前で、モンペを下し、下半身を曝した時は矢張り卑屈な、いかにも不運の底まで落ち込んだ氣になつたものだつた。満洲の北から日本迄、長い道中を、それこそ涙の中で暮して來たことがだん／＼うすれてゆく記憶の中に、齒痒い位辛い経験であつた。

ねして生活してまで居つて貰うわけはないわ」

「僕もそう思うけど」

「それでしよう、だい、ち、貴方がお人よ
しだわ、こんな狭い家に」

「うん、つい言つちまつたんだ」

寢室のひそやかな会話に、夕起は次第に
顔の蒼醒めてゆくのが分つた。常に想像は
していたが、矢張りはつきり聞くと、唇の
ふるえるような憤怒と屈辱感が潮のように
全身に沸いてくる。

「近頃の女給つたら、そりや身持ちの悪い
ものだつて評判よ」

「そうかい」

「あの人だつて、どうしてたか分つたもん
ぢやないわ、それに貴方まであの人に取ら
れやしないかと思つて——」

「馬鹿なことを言うんぢやないよ、僕はお
前を愛してるよ、誰があんな過去の知れな
い女なんぞに……」

「嬉しい」

二人の抱き合う気配がすると、夕起は丁
度何処かへ落ち込むような眼まいに似た症
状に襲われ、足許もつい乱れた。俊吉もあ
んまりだと思ふ。自分の過去はそれに違ひ
ないが、それが丁度夕起自身のふしだら
の故のようにして語る。貴子も平生の柔順し
さと打つて変つた言草である。夕起の心
中には、再び嘗て満洲の曠野で陥つた絶望
と自棄、それに太々しい敵意とが甦つて来
るのだつた。

x

x

x

x

夕起はたゞ夢中に貴子を憎んだ。と同時
に俊吉との間の、所謂夫婦の愛情を憎んだ
然もこの愛情を壊すことが最も近い腹いせ

でと思いついた。もう夕起の殺伐な心の中
には少しの余裕もない。情も義理も、勿論
理性もない。ただこの家庭を破壊すること
が、不幸な自分を更に不幸に突き落そうと
する幸福に飽いた二人への憎しみの表現で
しかないようであつた。然もそれによつて
少しでも自分の救われる途があるような気
さえするのだつた。

或る日、郵便受に俊吉に宛てた手紙が一
通入つた。

——前略、貴殿の妻、貴子は小生とは数
年前、夫婦の契をなし、既に肉體關係も
あつたもの故、貴子をば小生にお返し下
され度く、本人にそりお申しつけ下さい
草々——

夕起がバーの客に酔つたまぎれにそり書
かせたものであつた。夕起は毎夜、深淵に
前後を忘れなければ身の置き所に苦しんだ
幸福、絶望、憎悪、復讐、罪と罰、それら
の象徴が酒と一緒にぐる／＼と廻轉し、意

識の無くなるまで止めなかつた。その果て
はどんなフリーな客にも身体を任すように
なつた。

俊吉の家庭では夕起の思ひ盡に落ちかけ
ていた。俊吉はその手紙を貴子には見せず
陰気な表情でそれとなく尋ねるようなこと
を言い始めた。善良な氣の小さい男だつた
から、すべてを毅然と解決する方法を知ら
なかつた。一週間程して再び手紙が俊吉の
手許に届いた。前の手紙より更にあくどい
貴子の貞操をいぎたなく書いたものであつ
た。

俊吉は次第に酒を飲んで歩くようになって
た。酔つてしまつたと眼が坐つて、兇惡な光
さえたゞよわすようになった。

「お前は、俺と結婚する前に男があつたん
だらう」

「何を真逆／＼しい」

と最初は受けつけなかつた貴子も、あま
りにしつこい俊吉の口調に不安を感じるよ
うになり、だん／＼真剣になつた。

「貴方の所へ来る迄は、男なんか一人だつ
て知りませんでした。神様に誓つて言い切
れます。情夫だなんて、あんまりだわ」

俊吉は、貴子が真剣になればなる程、疑
わしいと思ひ、彼女が口惜し涙で泣き伏す
時は、泣いて誤魔化そうとしていた。しか
思えないようにまでなつてしまつていた。

二通目の手紙を出した翌日、泥酔した俊
吉が夕起のコロンバスによるめくように入
つて来た。その姿を見ると、夕起は舞台装
置の効果を見るように微笑んだ。

「どうしたの兄さん、まあ、こんなに酔
つぱらつて」

「酒だ、酒だ、夕起、酒持つて来い」

「はい、／＼」



俊吉は平生あまり飲んだことはなかつたが飲むと強かつた。ウイスキーを立てつけにあふつて怒鳴つた。

「養生、もつと持つて来い」

「本当にどうしたのよ」

「放つといってくれ、それよりもつと注いでくれ」

夕起は俊吉が何にも言わないのに少しづれ／＼した。何としても言わせたいのだつた。

「早くお帰んなさいね、家でおくさんが待つてらつしやるんでしよう」

「うるさい、あんなやつ」

夕起は看板返俊吉をねかせて置くと、帰り途を、俊吉の手を肩にかけて歩いた。夜風に吹かれると俊吉は幾分落着いたように言つた。

「家がどうも面白くないんだ」

「どうかしたの」

「うん、女房のやつ強情だから」

淋しげに言うのだつた。

「何かあつたの」

「とに角、俺はたまらないんだよ」

「そんなに嫌いな奥さんなら別れつちまえばいいのに」

「別れられる位なら、こんなに苦しみやしないさ、愛してるからこそいら／＼して仕様がないんだよ」

俊吉は半分涙声で述懐し乍ら、夜更けの川沿いの道を夕起に連れられて歩いた。こゝ迄になつて尙愛していると俊吉は言う。

一夜逢えばもう他人である世界の夕起にはそれも判らぬ氣持だつた。判らぬ乍ら貴子に対して、新しい嫉妬がむら／＼と燃え立つのだつた。

「私が貴方の奥さんになつて上げようか」

「いゝんだよりッ、僕は貴子が好きなんだ」

酔つたまぎれの冗談とは言え、夕起にはかあつとする恥しさがあつた。自分を浅墓な女だと思ふ前に貴子を憎いと思う。果ては自分の夫となるべき俊吉を横取りされたような氣もしてくる

「いゝ奥さんだこと」

「うん、いゝ女房だ」

酔つた他愛なさに、俊吉はまるでだらしがなかつた。蒼い顔色で迎えに出た貴子に俊吉の身体を任すと、つんとしてさつさと夕起は二階へ上つた。

その後夕起は、何の思慮もなく、三通目四通目の手紙を出した。四通目には、もう最後だと思つて、

——どうしても貴子を返してくれないのなら、俺の余り物として、お前に恵んでやるから、喜んで受け取るがいゝ。——
といった風のこと迄書いた。

貴子が知らぬと突張るのは当然であるし俊吉が責めるのも当然であつた。そこに掘られる溝の広さと深さの恐しさは測り知れないものがある。俊吉はだん／＼手荒なこともするようになった。貴子を殴つてゐる音が夕起の所まで聞えるようなことも多くなつて来た。最初はどうかして誤解をとき度いと努力していた貴子も近頃は、その問題が出る度に、頑強に黙りこくつてしまふようになった。顔色は日々にあせ、身体も瘦せて行くようであつた。

そんな貴子の様子は夕起にこの上ない満足を感じた。私の嘗めた苦勞の何分の一かを味つてみるがいゝ。貴子の顔を見る度に何時か寢室から立ち聞いた貴子の声が思ひ出される。……近頃の女給つたら、身持ち



の悪いつて評判よ、あの人だつて分りやしない……

同じ女の癖に女一人で生きる苦勞に同情せずたゞ輕蔑する思い上りが新しい怒りを持つて想ひ出される。

二人の苦しみを解く鍵に私だけが持つてゐる。この思いが夕起には楽しいことのようにであつた。

× × ×

晩春の香りがコーヒーにまで移る或る夜久し振りに早く店を仕舞つた夕起が、灯の華やかな街を過ぎて家へ入ると、

「夕起さん？」

忍び声で貴子の声が寢室から聞えた。

「はい」

「お願い、一寸這入つて」

貴子の真剣な声に夕起は道具を階段に置くと襖を明けた。

「あら」

思わず口走つた。

其処には、明るい電灯の下に、一条まとわぬ裸の貴子が後手に縛り上げられて、轉がされてゐる。

「どうしたの」

「主人に又責められたの、お願いだから、

この紐を解いて」

夕起には始めて見る貴子の肉体であつた。きら／＼と光芒を放つまでに白い皮膚、のびやかな四肢に、後手にしめ上げられている胸の隆起が見事な彫刻そのものである。清いと言えればつたりする形容の裸身である。我を忘れて見ている夕起の心の中に、色んな激情が一時に吹き荒れた。貴子の裸の前で自分も裸になつて見せよう。

「ほい、ほい、ほい」

夕起は笑つた。笑い声に貴子はぎくりとしたように車体を硬ばらせて、表情を変えた。

「いい、恰好ね、お姉様」

次第に夕起の心には嗜虐な慾望が沸いた。まだうら若い瑞々しい貴子の肉体を思い切り虐げれば、今迄の憤りも飛散するに違いない。

「お姉様、私今日限りこの家を出てゆきます。長い間お邪魔したわ、い、機会だから今迄のお礼をしたいの。お兄さんの聞き度いことを私が聞き度いの、貴女の身体に聞いわ。それが何よりのお礼よ」

「何を急に、今そんなことを」

貴子はわけのわからぬ乍ら、不安な予感に脅えたように後づさりした。

夕起はそれに構わず、貴子の縛られていた手を掴むと、ずる／＼と縁側へ引き出した。

縁側の柱に、貴子を縛りつけると、扱帯で足もくくりつけた。貴子は柱を抱くような姿で、泣いて怒り、又哀願もした。白い大柄な貴子の裸身は腰でくびれ、臀部がむつちりと豊満な肉附きを見せている。夕起は玄關から俊吉の藤巻きのステッキを持つてくると、

譚 稽 滑 色 好 版 私

三人の色事師

葦田郁也

秋田冷光画

櫻がすっかり葉になつたある日の夕方、駅からも十町と離れて居らぬ小山健一の古本屋に、いきなりハイヤーで乗りつけた客があつた。降りてきたのは二人の青年紳士。リエウとした服装に新しい皮靴とボストンバック。健一が読みさしの月遅れ雑誌から眼をあげたまゝぼんやりしていると

「やあ、しばらく」と一人が帽子をとつて笑いかけた。

「おい」しばらくして健一が驚きの声をあげた。中学の同級で、戦後しばらく交通の絶えていた鳥居英吉だつた。もう一人を、柴田信夫君と紹介して、出された名刺にはいづれも課長の肩書きがあつた。どうせ新興会社の一つには違ひなからうが、裁り立ての背広も今を流行のバステルカラーでウールの軽そうな合オーバズといういでたちはこの町にもたくさんある会社や官庁や銀行などのどこの課長よりも押し出しが効く。

「久しぶりに故郷の風が恋しくなつてね。柴田君がこちらを知らないから温泉を案内がてらに帰つて

みたのさ。少しはインフレのおかげで懐も暖かいし……」

鳥居はそう云つて、これからすぐに一緒に出掛けようと健一を誘つた。そんな相手に気圧された形で健一は一寸躊躇したが、丁度出て来た母親に、ほんの手土産でと純綿一反ポイと差出して、

「ねえ、二三日案内役に連れ出してもいいでしょう」と鳥居は人なつこく相手をそらさなかつた。

親父の跡をうけて小さな古本屋の店に坐つて二三年、戦後の古本の高値にも彼の若さでは大した儲けもなく、まして田舎町の読者層ではいくら書物に羽根が生えようとまたかが知れていて、健一は飲みに出ても腰掛けの上でコップのやみ酒をひつかけるのが精々の有様だつたが、この豪勢な客のおかげで、町のカフェーにも少しは顔をよくすることが出来たわけであつた。

さて、湖畔をめぐる三崎温泉の一流旅館に落着いた三人は、朝食の膳にもビールを一本づゝ並べる上客で、互に三十前後の若さが、夜はパン助一人づゝかゝえても宿

の女中達の取り持ちにぬかりはなかつたが、何しろ田舎のことだから大阪神戸を食いつぶして流れこんだパンパンしか居ないのは鳥居たちには物足りないのだつた。

「何もこゝまで来て大阪弁をきくつもりはなかつたよ」と、酒より女目当ての柴田がこぼした。

「小山君、町の方にいゝのはないかい」

だが、しがない古本屋の健一には、カフェーに掛飲みの顔は知られていても、おいそれと引っぱり出せる女の心当りはないのである。彼らが健一を誘い出したのは、遊びに来たとは云つてもかつぎ屋からたゝき上げた戦後派課長のこと。会社の賣込みの瀬踏みと女の取り持ちに利用しよう下心半分だつたと知れるのである。

「とに角町へ行こう」

で、商賈の瀬踏みは会社、組合等の訪問を半日で切り上げ、バーやカフェーのハシゴがはじまる。小さな町の中だが、きつと車を呼ばせて次へ行く彼らは一夜で町の歡樂街でも上客となり終せた。しかし、田舎は田舎なりに世間

「お姉様、兄さんは、貴女が可愛いものだから思い切つて聞けないのよ、私に仰言い昔の情人つてのは誰なの、さ、仰言い」

貴子が答える筈はなかつた。答え度くても答えることも出来ないものである。

「言えないの、ぢや言う迄ぶつわよ」

夕起は力任せに杖を貴子の臂に振り下した。氣持のいい手応えであつた。貴子は身体をそらせてもがいた。夕起は続けざまにぶつた杖が貴子の臂に当る毎に、快い陶酔が腕から心の核心まで響いてくるようだつた。裸の肉体に打突かる杖の音が、冴えた音を立て、夜の中にひろがつた。

貴子はちつと激痛に耐えていた。この時になつても尙思慮を失わなかつた。隣近所へは醜い悲鳴を聞かれ度くない。と我慢した。が耐え得る苦痛ではなかつた。一撃毎に、臂から背を通つて頭の髄まで凍るような痛みの和らぐ隙もなく次の痛みが襲う、ちつと噛みしめた唇から呻きが洩れる。

そんな貴子を

「強情ね」

と、夕起は躍起になつて杖を振つた。

どれ位打ち続けただらうか。夢から醒めたように夕起が吻つと手を措くと、半死半生の態の貴子が乱れた髪の散つた顔を振り向けた。

「言、言うわ。それはね、その情人の手紙というのは、貴女よ、夕起の仕業よ」

憎悪のこもつた眼差しで、貴子は、はつきりそう言つた。打ちくだかれてゐる苦痛の下で夕起の憎悪の正体を讀み取つた確信があつた。

夕起は、すべてが終つたと思つた。

「そうよ、そうだわ全部私のしたことよ。」

が狭いからその筋の眼を憚つてバーの主人も困り。勝手に応じる分には仕方がありませんが、と自由主義の寛大さを示すのだが、蔭では女達に信用問題だから何処の誰とも知れぬ客に金で釣られるなど云い含めるらしい。尤も最近賣春強要のカフェーのマダムやバーテンが挙げられた事件の直後でもあつたのである。こうなると小山健一も案内役が重荷で肩が凝る。思案の挙句、ハイヤーの運転手に心当りはないかと持ちかけてみた。

「キヤバレー・ロンドンのダンサーはちよいちよい三崎へもこの車で送りましてぞ」

この返事に健一は驚いた。彼も時々踊りに行く家だが、十一時にはかつきりカソバンでひどく酔つた客にはマスターが意見の一つもしようという店なのだ。町でたつた一軒のキヤバレーだがその筋の受けはいゝのであつた。

「おい、踊りに行くらう」

健一はにやりと笑つて車に乗り込んだ。キヤバレーとは云い條バラツク並みの建物で、フロアも五坪あるかなし、ダンサー五人、女給五人と唄つてあるがそのうち三人はどうか踊れるので女給兼ダンサーの一人二役、結局七人の女達が居た。誰れも一応は健一と顔馴染になつてゐる中でもキミ子が一番好意を示してきていた。平凡な顔で智慧のなさそうな小肥りの女だが

「あんたプロレタリアでしよ。チップいらないわよ」

と云うのが何よりも健一にとつて助かるのだつた、プロだのブルだのインテリ

だのリアルだのと聞きかじりの言葉を使いたがるのが智慧のない証拠だつたし、チップいらぬわよ、にしても浅薄な彼女の優越感と感傷で、本当の好意ではないこと勿論であつたが、今日の健一は特にキミ子のそんな魯鈍が却つて利用出来るとすぐに考えをきめて、さつと立つてフロアに引き出した。ピカ一のユリ子と組んだのは柴田で、十人並だがどこかにきりつとした魅力を持つてゐる多恵は、鳥居が掴まえた。暮れるには早い時刻で他に客のないのが好都合だつた。

「お友達？」

「うん、俺にだつてあんなポンユイがあるんだぜ。三日も前から三崎の白鳥館に陣取つて豪遊してゐるよ」

「あんたも、ずっと一緒に？」

「もちろん。田舎の温泉じゃ三日も居ると退屈するから毎日この町へ遊びに来てるよ。温泉だつて好い相手がないからね」

「そんなことないわ」

「すれつからしのパン助じゃ気分が出ないよ。どう、行かんかい」

「……」

キミ子はにつと笑つただけだ。充分気はある。

「でも一人じゃ心配だわ」

「そりや、同じ行くなら三人だね。第一、踊ろうにも一人づつ、パートナーがないと面白くないよ」

健一はぞくつとする嬉しさを

噛み殺した。次のタンゴもキミ子とそのまま組んだ。

「晩飯一緒に食べよう」

「でも、自由行動はカンバンからでない、とてもうるさいの」

「じゃそれでもいい」

「あんただけそう云つたつて……」

「馬鹿な。あの二人だつて同じ氣持さ。誰か遊びに来てくれる人ないかつて云つてゐるんだぜ」

「そう？」

「夜もう一度来るから他の二人も誘つて相談しといてくれ」





(終)

俊吉さんにそう言つて頂戴、すべてが一つのドラマよ。二人の人生だつてドラマと思えないわ。女の貴女が女の私を淫蕩婦だと言つて輕蔑する。俊吉さんが私の昔の恋人だつた。

貴女がその俊吉さんと結婚して幸福な生活をする、私は異国で見知らぬ男に汚されつくし、國に歸つた揚句、貴女の言う通りの淫蕩、私が貴方の幸福を嫉妬する、これが一つのドラマでなくてはなんなの、でもこれで全部終つたわ。明日から私は又元のうちに都金の隅に集う女、貴女は再び平和な家庭の主婦、だつてドラマが終つたんだから仕方がないわ、おや、さようなら。」

貴子の白い裸身が、あたりの夜気に、丁度真珠の光沢のように限をつくつて残されるのも眼にやきつけて、夕起は家を後にした。

「三崎へ行つて又来るの」
「自動車だもの三十分だよ」

田舎町のダンスにはハイヤーの魅力も強いのだ。今だつて自動車で乗りつけたというだけでどの女もがティブルに飛びついて悶んだではないか。いくら他に客がないと云つてもこんな情景は滅多にないのだ。パーテンがす早、暑くもないのにおしほりを出したのでもそれはうなずける。健一は少し得意にもなり、もう今夜の成功は決つたと思つた。

彼女達を連れて三崎温泉に歸つたのは十二時近くだつたろう。それから飲んでさわいで、部屋の片附かめうちに健一はキミ子呼び出して別室に入つた。そこには赤い寝具が二つの枕を並べて敷かれてあつた。キミ子はそれを見ると、「あらつ」と叫んで出ようとした。

「おい早合点するなよ」

健一は慌てて相手の手を握んだ。

「わたし、知らない、知らない」

何が知らないもんか、十一時過ぎて温泉宿に連れ込まれながら、素人娘じゃあるまいしカマトトぶりもいゝかげんにしろ。

健一は腹の中で冷笑したが、一応は相談させておかねばならぬ。キミ子をとにかく坐らせて、柴田とエリ子、鳥居と多恵の組合わせで一応話してみてくれ、君が嫌なら僕は別に休むよ。

キミ子が出てゆくと、鳥居が入つて来た。

「どうだつた」

「今相談しろつて云つてやつた。一応は承知させておかんとその場になつて駄々をこねられちゃまずいからね。しかしキ

ミ子の奴、私知らないつてさ。カマトトだよ。一番ルーズだつてことちやんと聞き込んでるのに」

「そりや面白い、からかつてやるよ」

鳥居は笑つて広間の方へ引き返した。

それぞれ、部屋に引取つたのは二時を廻つていた。健一はしばらく横になつていたがキミ子が入つて来ないので出てみると、廊下に立つたまゝだつた。

「おい、入れよ」

「だつて、私、こんなこと初めてだもの」

「いゝよ。何もしないつて約束したら本当にしやせんから」

「でも……私、女中部屋に寝るわ」

キミ子はそう云つて廊下を駆け出した。これには健一も驚いたが、バタ／＼追つかけるほど恥知らずでもなく、むしろ中つ腹で部屋に入つてしまつた。二三十分経つた頃出てみると、さすがに五月とは云え冷込む夜気に肩をつぼめて襖の外に引き返して立つてゐるのだつた。

「馬鹿だな。嫌なものを強いるほど僕は馬鹿じゃないよ」

連れ込んで、健一は自分の手で押入れから夜具を取り出した。

キミ子は床の中で雑誌をめくりながら仲々眠ろうとしない。健一が狸寝入りをするきめこんでいると

「小山さん、寝た？」

と声をかけた。

「なんだい、君は眠らんのか」

「多恵ちゃんも温順しそうな顔してるけど、とてもチャツカリしてるから鳥居さん、きつとねだられるわ」

「何をねだられようと金持ちだから着物の一枚や二枚サービス次第で明日にでも買うだろうよ」

そろそろ本音が出たな、と健一はおかしかつた。こうなると彼には興がさめて何の欲情も起らない。

「キミちゃん、今からでもいい、から行つて代つてやれよ」
「知らない」

キミ子はすねて背を向けたが、すぐに「あたし、そんなんじゃないわ」と向きなおつた。そこへ「いゝかい」と鳥居が入つてきた。

「おや／＼、振られてるね、別な床に入つてるじゃないか」

鳥居は坐りこんで煙草に火をつけた。「鳥居さん、気をつけないと多恵ちゃんにはチャツカリ屋だからあれこれねだるわよ」

とキミ子は他のことを云う。

「それが又可愛いのさ。しかし僕たち三人は協定しててね、誰の相手にも同じようなお礼をすることになつてるんだ」にやりと鳥居は健一に目配せした。

鳥居はにやりと笑つて出て行つた。もじもじ出したのはキミ子である。

「何だか寒くなつたわ」

健一だつて貧しいながらも一通りは遊んできている。女を嬲しがらせるテクニク位は知つてゐるのだ。やがて、彼は頃合を見計つて、さつと相手を離れたのである。タオルを取つて、部屋を出ると、にやりと笑つて浴場への階段を下りて行つた。

「馬鹿な奴にはあの手で仕返しするより仕様がないうらう」

翌朝、柴田と鳥居に健一は語つてきかせ、三人は朗らかに笑つたのである。

祇園戀しやダラリの帯の

花の舞妓の偽らざる生態を衝く――

花見小路のたそがれ

加 茂 川 清 子

薄れゆく京の情緒を、ふくよかに匂わに
せているもの祇園の舞妓がある。

京は祇園町、花見小路の入口が、電飾と
ドギツイ外国映画の絵看板に彩られてもそ
の下を、コスチュームカーニバルから抜け
出した、ドルマンスリーブのコートを羽織
る娘さんを通つても、花見小路の曲り角昔
大石藏之助が遊んだとかいう、一力茶屋今
の万事の赤壁と、くすんだ暖簾に京の滋味
はしみ込んで、昔の色をとどめている。

舞妓の小糸さん

「なんぼ金閣寺が焼けて灰になつてしま
うたかて、千年の滋味言うもんは、やつぱり
灰の中に残つてるもんどつせ、あてらかて
洋服着たかてアツパツ着たかて、祇園で
育つたもんのは、抜けてしまふもんやお
へんわ」

と言つた。

四條通りをジープが走り、ストリップ・
ショウが流行を魁けても、昔ながらの髪結
うて、だらりの帯をしめこぼ、鈴の音
を響かせて、シールズ軍のオードル監督に
歓迎の花環をかける祇園の舞妓、それは、
とつくにの人に負けた国の、ひからびた世
相の中に、古き都がせめてもの色どりと
して、花に添える花ならぬ花。
都おどりの幕が下りて、賀茂の河原をつ

はめが飛ぶ今日、四條の橋をくると絵
日傘廻し、地方から来た女学生に呼止めら
れて、赤い顔の娘達からサインを貰められ
白粉に汗を滲ます舞妓も、京都だけが誇れ
る一幅の絵なら、四條通りの突当り、祇園
さんの赤い棧門のあるきざしを、霜柱と
けぬうちから、掌に白い息ふきかけて、朝
参りする可憐な後姿も、京都という名工の
彫る、人形でなくてはならぬ。

清き流れ、白川のせうらぎ。辰巳橋を渡
つて、門前の片山師匠の稽古場へ、お腹を
満たす事を忘れても、ひたむきに、藝を身
につける為に、通いつめる藝妓。世の中が
どんなに移り変つても、秘めるともなく秘
められた、姿も心も昔のまゝの、不平を知
らない舞妓――

花柳街と言へば、まるで女身を人身御供
の祭壇に捧げる、封建の獣獄のように言わ
れ、語られている場合が多いが、京都の祇
園は所謂紅燈青楼の泥沼ではない、遊廓と
呼ばれ、女郎街と言われるものでは勿論な
い。そこに棲む舞妓にしても、運命に束縛
された性人形でも、金権と人情の鉄環に緊
められた、賣春機械でも更でない。彼女ら
には、祇園舞妓独特の見識もあれば、高い
プライドもある。だから、ロマンは無いか
も知れないが、学もあれば、リアルの厳し



祇園
舞妓水揚げ帖

さも知つてゐる。——それは、この祇園という、生きた美術品になり切つてゐるからである。

キヨ子も祇園町の藝妓の娘に生れ、立派な藝妓になるように教育されて、花見小路の藝妓の家で大きくなつた。

姓は高野というんだが、近所では桔梗屋で通つてゐたし、えり代えを落ませたばかりの十六になる幸子という子飼藝妓が居て姉さんのように振舞つてゐたし、自分の母を、おかあさんおかあさんと呼ぶのが、子供心にも氣になつて仕方なかつた。

この町のしきたりで、藝事を習うのには六才の時の六月六日から始めるといふことが云われ、キヨ子も六つの年のその日から、井上流の京舞を習うことになつた。勿論習つたつて、始めから藝事が身につく訳ぢやなし、ほんの行儀見習として、他家へ通うといつた程度のものでつた。

七つの四月には小学校に入り、八つの年に踊りの稽古入門を許されて、師匠から舞扇を買つた。

そしてその頃までは自分が花柳界に育つた娘だといふ事が、そんなに苦にもならなかつたし、卑下する事もなかつた。何故つて、彌栄小学校の同級生の中では、地域的に、藝妓屋の娘も少なくなつたからである。そのうちに彼女は、京の年中行事の一つである、都踊りのお茶席の「お運び」や、島原の太夫の道中のかむろに出たりなどしてゐるうちに、近所のお内儀さんなどから「あの子舞妓はんにお出しやすや」と言われて、いよいよ「女の一生」なる運命が他力によつて必然とされてしまふのである。そうして、藝事を身につけるといふ事に、本格的な努力が拂われ、藝者とな

る為の予備教育という点に、全ての行動や動作が、歩調を合されて行く。

しかし、そうした年頃になつて来ると、漸く女というものに刮目し始め、自分の位置の他の女の子と違つてゐる点に、羞恥や不安を感じ始めるし、男の子たちが

——あいつ、藝者の子やぞ——などと押搦うと、知らない間に自分を決定してしまつた。運命の不可抗力に対してみじめな惨敗を悟るようになる。

そして最初は、それでも幼い反抗を試みようとするのだが、やがて一つの諦めから涙の後で自慰の心が生れ、それが運命に屈従する姿になり、運命を克服して、自己をそこから見出そうとする、真摯な努力へ進んで行く。それが一つの、祇園というものを身につける、自分が象徴になり切ろうとする一つの階段へ入つた証拠なのである。

「うち藝者の子かてかまへんわ、うちかつて綺麗な舞妓はんになるのんやさかい祇園一番の舞妓はんになつたわ。そしたらお母ちゃんも喜ばはるし、それが祇園で育つた娘の、ほんまの親孝行いもんや思うわ」と違ひまつしやるか——

彼女も又運命の線に沿つて、いろいろの藝事を身につけさせられた。踊りもお茶もお花も、検番の黒板を見られると分るが、長唄科、三味線科、小唄科などというのまである。

踊りには試験があつて、昔は屋壽栄、初子さんなどという、厳めしい試験官が居て中には泣き出す子もあつたという事だが、現在では、ハイカラな、八坂女子技藝実践女学校という、恐ろしい名前になつてゐるが、これが舞妓学校であり、戦後の舞妓たんとするものは、強制的に入学せしめら

れ、月のうち十日間は、茶華書道、歌舞音曲の他に、英語まで教えてくれる。

伝統床しき「都おどり」を、チェリーダンスと呼ぶようになったのも、彼女達の文化的向上だと祝福しておく方が、戦後派的エチケットかも知れぬ。もし末世なるかなと、古風な感傷にでも涙しようものなら、先生、駆落ちて、英語で何て言いまんの？、あの紅唇で平然と訊く事だろう。

祇園の伝統と格式からして、それは幾分か時代錯誤的な香がしないでもないが、それは祇園の後退ではなく、寧ろ祇園の一つの前進として、同化を許すべきものである。

以前は小学校四年を終えたと、こゝで普通学科を教えたものだが、現在では奇妙な法律のお蔭で、大分やゝこしい事になつてゐる。

例えば、児童福祉法の制定で、満十五才以下は酒席に侍る事が禁止され、又労働基準法に従うと、「義務教育を終えたもの」という規則になつてゐるので、これでは十七才以上という事になる。

勤務時間の方は、基準法でも、自分の意見によつて働くので、免れてはゐるが、十時には引揚げて帰る事になつてゐる。

舞妓の数は大正十五年頃百五十人位あつたものだが、終戦当時二人に減り、現在では十九人、昔は四年の義務教育を終えたら出られたので、十二才位で舞妓に出て、四年位して襟替えて、一本の藝妓になつたものだが、

現在では満十五才になつて、一通りの藝事を身につけると、店出しの前に、お茶屋へ二ヶ月位見習いに行く、この時からダラリの帯はしめるが、正式の舞妓のものより

は短い。

舞妓は現在では二年位で藝者になり、いよいよ一本になると菱形で一般に傳へる、尚襟替えというのは、舞妓の赤襟から、襟が代るところからの名称で、この時から肩あげが取れる。

とんだ舞妓風俗史に脱線してしまつたがキヨ子も十四になると、もう舞妓になる為の最後の仕上げに忙がしかつた。

そして十五の春から、彼女は清香と名乗つて桔梗屋から舞妓に出た。

色は抜ける程白く、生れながら器量のいいキヨ子は、調つた京風の顔立に美しい紅化粧を施され、地につく程の長い振袖を着せて貰い、鈴のついた紅緒のコボコボを履いて、舞扇を手にして立つた姿は、誰もが驚く程で、予期してゐたものの、余りにも素晴らしく、艶かな半玉振りに、まず母が仰天してしまつた。箱丁に連れられて挨拶廻りした家々の中にはキヨ子の美しさに圧倒されて、挨拶も忘れて見惚れる人さえあつた。

しかし、姐さんにひいて出て貰う時、姉さんとの間にも盃事があり、結婚の時と同じように結納をおさめ、帯料だの、慰斗、目録、松魚などを贈るので、キヨ子自身は来るべき将来の運命と、もうどうにもならない諦念にと、複雑な悲しさを知つてゐた。彼女らの着物は、袂が長いので、二反は必要とし、帯も帯留めも長いもので、鹿の子でも全て別誂え、一揃え七、八十万円はかかる。昔つゞれの帯模様は、鳥の目にダイヤを入れただらりをしめた子もあつた由税金だけは一年間舞妓奨励の意味から、組合負担という事になつてゐる。

ある夜、清香は自分と同一年の、若梅の

還蝶という舞妓に、西花見小路のお湯屋で会つた、桃蝶はおととい水揚げがすんだとの事である。

その日まで、桃割れの前髪の手でふつくりと隠して見せなかつた鹿の子絞りを、今日は開いて、赤い絞りを覗かせていた。見る人が見れば、男の肉体を知つたというしるしの髪形である。

清香は一番先に桃蝶の髪を見て、自分の方が羞しいような気になり、意味をこめてニツと笑うと、桃蝶は鬢のあたりに手をやつて、羞しげに身体をくねらせた、それは一人前の藝者のような色つぼさを発散して清香はギクツとしたものだつた。

二つある湯槽の廻りには、顔馴染の女達で占領されていて、彼女らのお喋りはいつ果てるともなく賑かで、色街の湯屋らしい雰囲気を作つていた。

いつものように、仲居や姐さん達の肩を流す必要もないので、二人は隅の方に陣取ってヒソヒソ話を始めた、近く自分の上にも起るべき重大な事を、つい三日前に済ませた桃蝶に、清香は出来るだけ詳しく聞きたかつたのである。

「おととい……やつたんやてねえ」

桃蝶は微笑で頷いた。

「——どうやつたの？」

「どうつて、何が？」

「何ともあらへんかつたか？」

「何とも？——別に何ともあらへんかつたけど」

「ほんま？何やえらい苦しいもんやそうやないの？」

「そら、苦しい事は苦しいけど、そない言う程の事もあらへんわ。でも、何やケツタゝな具合やわ」

いつも活潑な彼女も

この問題には曖昧な返事しかくれなかつた。

その不明瞭な点を清香

はもつと聞きたかつたのである。

「どんな人やつたの？」

「五十位の株屋のおつさん、けつたいな人やつたわ、うちあんな人

大嫌い、そやけど仕様ないわ、嫌いやなんて言うたら、それこそかあさんに、酷い目に遭わされるさかい、なア」

所へ入つて来た幸子姐さんが、桃蝶の髪に気がついて、大きな眼をむいてみせ、

「コラコラ、二人共そんな隅の方で、何言うてんのや？ハハラン判つた。桃蝶は水揚げが済んだんやな、ゆうべ？おととい？幸子姐さんに黙つてるとはケシカラン。清香さんももうすぐやなア、こんなえ、妓のお初を頂く奴は、一体何処のどいつやろなア、其奴は果報者やで。なるべくおぢいちゃんに揚げて貰うように、うちのやかましやに言うといたげるわ、水揚げは年寄りに限る。怪我が無うてなア——」

聞いてる方が頼くなつたが、幸子は平氣



でそんな事を言つて、周囲の女達を笑わせていた。

この幸子姐さんは、鉄火気質で有名な、界隈の名物藝妓である。

彼女にこんなエピソードがある。

お座敷は都豆腐の二軒茶屋。下河原鳥居前に有名な中村楼、そこへ繰込んだズングリ型の洋服氏、年の頃は四十前後、肥満短軀を流行の背広に包んだ所まではいいが、お里は争えないもの、両手は八ツ手の葉並の如く、一見して土建関係の職業氏。その相棒というのは、いづれは官庁筋のお役人だろ、乾しすぎた八ツ目鰻みたいなコチコチ氏、言わずと知れた「談合」ヤミ取引の一幕である。

どうせこれも策戦のうち、土建氏は言う

事なす事お金の一点張り、一級酒が出ると「これは一升何ぼやらの奴やろ、こんなのはアカン、金に糸目はつけへんさかい、白雪の萬歳紋でも一本探して来い、それ駄賃や」

と鰐皮の鞆から百四札を五十枚、ボンと幸子姐さんの前へ投出した。

こんなお客は祇園の拾度に合わない、何さらしやがね、このアホたれ！と幸子さんカツと来たらしく、へえへえと早速階下へ行つて、幸いあつた合成酒の残りを一級酒に混ぜて、恭しく持つて行くと、奴さん鼻をうごめかして、

「どうだす、やつぱり萬歳紋は天下の銘酒どすなア——」

どうせこんな奴の座敷は決つたもの。飲

女闘美開眼

栗津 實

（女闘美ファンの讀者に答えて）

「メトミ」という語は大正十年（一九二一年）に創作され、時の大毎紙上に活字として其姿を見せた。

「メトミ」は「女闘美」の片言読みであり愛称読みでもある、生みの親は勿論筆者である。そして「メトミ研究所」なるものゝ看板のあがつたのは大正十五年の春、場所は京都市山科の里であつた。

漢字で見れば、狙いがどこにあるかはおぼろげながら察しつゝころが、「メトミ」とは「美女の相撲美」をいうのである、ここで相撲というのは、日本独特の四十八手を云々する土俵の相撲をいうのではない、広義の「すまい」争うとかあらがうことを意味するのである。

女性美には人工美と自然美とがある、前者は人体という自然美に着衣其他の人工美とポーズをプラスしたものであるが後者は自然そのまゝの肉体に若干の加筆たとえば結髪とポーズを与えたもので、自然面露出の肉体は、前者が顔と手足の一部分なるに反し、後者は全面露出のいわゆるヌードである。

次にこのヌードを取り上げてこれを分類すると、静的美と動的美に分つことが出来る。静的美と動的美といずれが勝れ

りやの問題を論ずるのは愚であり、両者はスタートポイントに於て既に異つたものをもつてゐるのであるから、甲乙は論ずべきではないと思ふのである。

譬喩的に語れば、静的美はジリ／＼と切下げていくような深味があつて、こざざみに進んでいくし、動的美は唐竹割の一刀で、一瞬に深く切下げてしまふところによさがある。静的美は刻々に深さを増すが、一瞬に底まで行きついてしまふものだ、だから其点ばかりに目をとめて動的美は浅薄だと評する人がある、ところが大違いである、仮に静的美が底まで切下すのに十秒かかるとすれば、動的美はスピーディだから、其十秒の間に十人の人体を唐竹割に切下げてゐることになる。静的美には老成の美があり、動的美には青年の美が躍動してゐるのだ。

動的美を更に分類すると、軌條車的なものとは無軌條車的なものになる。ストリップショーの如きものは一つの筋と振付の軌條を走つてゐる美である。「メトミ」の美は、水陸両用の戦車のように、軌條は勿論、道路すらない山林も河や沼湖も横断する無軌條の美である。何となればスタートと決勝点以外は、コースの

む程に酔う程に、背広の手前もクソもあつたもんぢやない、靴下を脱いで大胡坐。右手で垢のたまつた足の裏をベチャ／＼叩きながら、ワイ談の連発。その果ては清香や桃蝶などを捉えて、お前の唇は助平好みだとか、お乳の張り工合からして処女やないそれが嘘やと思うなら俺に觸らせてみな、もし俺の眼が狂うてたら、千円の罰金を出すとか、いやもう醜態痴態の限り、舞妓は恐ろしいやら羞しいやら、キャ／＼と逃げ廻る。それが又彼の劣情を刺激して、杯盤狼藉の乱痴氣騒ぎ、その揚句の果に、八ッ目鰻氏との最後の取引となつて談合しつゝ。そこで話はついたと見えて、再び御氣満で座に戻ると、

「今日の記念に、その舞妓の帯を賣つてくれんか、こゝに五万両あるさかい、お前らも大儲けやろし、舞妓も小遣が出来てえ、やろ」と、

と、食卓の上に五万両の札束を積重ねたこのアホンだら！と幸子姐さん大いに憤怒して、札束を叩き返してやろうとした時まだ十五の舞妓清香がほ／＼と笑つて、「まさそんな汚ない紙片、うち要りまへんわ、それより千代紙の方が、ずつとましどつせ」

寸鉄殺人、正に溜飲三斗の一撃である。

近頃人権問題がやかましいが、彼女達は舞妓というものにある誇りを持ち、悲しみだの苦痛だのを感じず、この世界に住む事が、彼女達の夢の実現であるという、少し位悲しいこと、情ない事がありそうなものと思つたが、

「アテ、かなん事であらしまへん。そんなけつたいな事あつたら、逃げて帰るのドスエ」

と舞妓達は自己を主張する。そこに祇園という国際的文化財の意義が、脈々と流れてゐるのだらう。

それから数日後、母はいつになく上気嫌で清香を呼んで、今日はお前の水揚げの日だと言つた。

清香は舞妓になつた日から、いや初潮を見た日から、この事のあるのを予期し、観念はしてゐたものの、さて今晚だと聞かされると、烈しく胸が波打つた。

その相手というのは、大阪の綿布問屋の老主人で、有名な百万長者だと、母は得意げに語り、お前程仕合せな子はないと、心から喜んでゐる風だつた。

更にまた衣替えの事もあるし、今後はこの旦那がどれ程大切であるかという事を、諄々と云い聞かせ、仮りに水揚げの床から、逃げ出すような事があつたら、それこそ芸妓として最大の恥辱であると、懇々と言い聞かせるのだつた。

——清ちゃん、この土地の妓は、みんな恋愛する権利はないのよ。運命が與えてくれる、旦那という人を愛して行ける人だけが、僅かに人間らしい女としての、幸福が得られるだけなの、それが祇園の不文律なのよ。

幸子は彼女にそう言い聞かせた。

どんな下等な動物にしても、異性を選ぶ権利は與えられてゐる筈なのに、自分達は全く動物以下なのだ。これに反抗する事は許されない。所詮彼女が恋をしたとしてもそれは泡沫よりも儂いものである、唯一つの思出としては貴重であつても——

事実彼女達に施される教育は、現にどんな下らない女性も感ずる筈の、処女に袂別する時の、一片の哀愁すらも感じないよう



も曲折高低も、其場に至るまで未知数なのだ、其処に「メトミ」の新鮮さと魅力がある。

「メトミ」を表現する技法としては糧いろくのものがある。しかし女体美の効果的な美感を第三者に誇示しようとするには、バストをかくさない工夫が必要となる、其点に於て私の大正年間に創作した女子スポーツ「メトミング」(當時は「アウーゲーム」と称し邦名を「押道」といつた)が最適のものと考えている。

「メトミング」は肉体をもつてする剣の舞である。

「メトミング」は徑二メートルのリング(輪)を中心として、其内外に於て覇を争うものであるが、すべてが女性的に工夫されてあるし、運動生理学上の裏付も

長短ある、「メトミ開眼」としてこの技に勝る適技はないように思っている。しかし「メトミング」は正規兵の正攻法的見地に於ける表現機関であるともいえるメトミの六輪三略は筆端に尽せぬデリケートポイントを多く抱合している。

「メトミ」の演出者は、健康で若くて美しく、敢闘意欲に燃えた人(容貌も肢体も)でなくてはならない。その女性達を「メトマーズ」と呼ぶのだ。其処には怨ずる女の美があり、憤怒の美があり、勝利の美があり敗北の美がなくてはならない、優趣の美や屈辱の美もなくてはならない、これは顔面の表情のみをいうのではない、肉体が其筋肉を表情として表現するところの喜怒哀楽をいうのである。

「メトミ」は美の合唱ではない、勿論独唱ではない、「メトミ」は「美の言葉」のやりとりである、しかしそれは台詞ではない、脚本によるソレではない、対決の論争にあたるものなのだ。それはドォランに塗込められた脂粉の乱舞ではない熱汗淋漓の生気溢れる乱闘である。松葉相撲ではなくて、相撲取草(莖花)の力競べである。

「メトミ」の園内にはバレエの美、アクロバットの美も抱合されている。その三つの美に「スポーツの美」をプラスしたものが「メトミ」に近いものだといえるだろう。女体の美を探索している人であれば、おそらくその大多数が心ひかれるのが「メトミ」である、「メトミ」の話をきき、これを幻想するだに魅力を感じるのであるから、その人達がその二つの肉眼で、間近く「メトミ」の演出を鑑

に、極めて巧妙に、極めて安易に考えられるように馴けられていた。

自分が祇園の妓になり切ろうとしながらその反面、こうした矛盾と反抗を感じるのは、やはり若い乙女の本能が、生理が、心の深奥で、嘆き悲しんでいるからなのだろうか。

その夜

彼女は母の切火に送られて、お座敷へ行つた。送つてくれたのは幸子姐さん、彼女が女になる最後まで、面倒を見てくれる姐さんが、今夜はとても嬉しく、頼りになった。ふと我家の方を振り返れば、いつまでも灯影に立つて、じつと送つてくれていた母の姿、

あたしはい、舞妓になります

そんな事を胸に思つて、狐の嫁入りのように連続する、花見小路の軒行燈の道を、清香はカラカラと歩を急がせた。

今宵は風も風いだ星月夜。東山も加茂の流れも皆一様に霞んで、晩春の夜次第に更ければ、夢路囁く音締めめの音も淋しく、まるで清香の処女を送る挽歌のよう。

「——お姐さん——」

動揺した眸が、そつとのぞき込む。

「キヨ子さん心配なのね、判るわ、でも大丈夫よ。そんなに辛い事やないわ、何でもない事やさかい、元気出してお行き、姐さんがズーツとお帳場の方に居てたげるさかいなア」

「おききに、心配ばかりかけて、えらいすんまへんどす」

「何言うてんのや、うちをほんまの姉さんやと思つて、そんな固苦しい事言わんとおきき、これから何でも心配な事があつたらうちに言うてなア、出来るだけ力になつた

げるさかい……」

何か言つたら涙になりそうなので、清香は唇を噛んで黙つてしまつた。行交り藝妓達は皆朗らかそうに歩いて行く、自分もつと元氣を出さねばいけないと思つた。京人形よりも美しいこの晴姿が、屠場へ行く小羊より淋しいものなら、祇園の傳統を冒瀆するものだからである。

出先は「百合屋」という一流の待合、その二間続きの奥まつた部屋には、すでに旦那が、彼女達の到着を待つていた。その人は六十あまりの白鶴の姿を、床柱を背にしてきちんと座つていた。品の良い、どこから見ても寸分の隙もない、大家の御隠居という風格。その人格を判断する力はないが、その第一印象は決して悪いものではなかつた。

老人の背後の床には、四條派の墨水が掛けられ、流儀正しく掛けられた、古代の竹に葉蘭の前に悠々と坐る姿は、最も洗練された日本の美を誇る、一幅の名画とも見えた。

旦那はその容姿にふらわしく、始終品よく幸子や女中相手に二三本を過し、清香には、甘いものや、おすもじ(壽司)などをすゝめた。

今宵は清香が主賓であり、待合の女将も女中も、みんなチャホヤしてくれしたし、幸子が傍に居てくれるので、何よりも明るく穩かに心を落着けてくれた。

そのうちに、不要な女たちは適當に席を外し、清香は始めて旦那と二人きりになつた。隣家から洩れる爪弾きの音も止んで、もう十二時近いのである。皆が居なくなると、さすがに清香は少し

賞するに及んでは、其の美にうたれて恍惚境にさまようのは当然のことである。

筆をおくに際して、筆者の構成する

「メトミング」(メトミを表現する演出技)の一つを語ろう。それは深夜の星空を思わせる背景、中空は樹立の黒いシルエット、草むらには夜光虫を散らす演出のメトミーズは三組六人で、全裸に夜光塗料をほどこし、燐光の発光体となつて登場、互にレスリングと日本相撲からビクアップした最も「メトミ」の表現に効果的な型をもつて攻防のファイティングを演出している、ステージ上の六人の外に、灰色のベールをまとつた魔女があらわれ、舞台を駆け廻つて三組の格闘者に嘲笑をあげせかける、これを上げますかと思えば、見るにしのびないおももちを見せ、又正反対にもつと残忍であればと強いる、其処に魔女の妖性美がある。三組互に疲労の極に達してそれ〴〵に打伏せば、魔女は灰色のベールをかなぐりすて、中央の大樹を一回りしてエロスに変身し、六人のメトミーズをゆり動かして眠りから目覚ましめる、ステージに春光満ち〴〵て、百花爛漫の内にエロスとメトミーズの乱舞となりエンディングとなる。

以上の構成は平凡な一例であるが、暗黒のステージに全裸の発光の女体が格闘する美は、「メトミ開眼」の甘露として此上無きものと考えるのである。あか〴〵とスポットライトによつて女体の細部まで明示するやり方は、野暮であり好

色すぎるし、演出者に対するエチケットに缺けるものと思う。

あくまで「メトミ」はほのかなる幻想の内に終始されねばならないのだ、其処に妖艶の美があるのだ、「メトミ」は女体に対する外科的手術ではないのだ、身体検査でもないのだ。ライトをかけるにしても、明度の低い寒色を用いるのを常識としている、このライトに暖色をつかうことは欲情的であつて、私達のノードとするところである。好色を第一の狙いとするならば、それはまたそれで行方がある、私達の狙いは、どこまでも「メトミ開眼」であらねばならぬ、それは雷雨の美ではなくて「稲妻」の美であるどこまでも。(完)



硬くなつて、母に教えられたように両手をつき、幾久しく、末永く可愛がつて頂けますようにと挨拶した。旦那は満足そうにニコニコ頷いて、ともすれば逃げ出したくなるような彼女を、仔猫のように膝の上に抱いた。

「清香いうのやつたなア、え、妓や、え、妓や、十五になつたんか、そうかそうか、去年一ぺん逢うたんもう忘れたやろな、一年のうちに大きくなつたなア、ほんまにえ、妓や」

旦那はそう言つて彼女に頬すりし、たまらないように愛撫したが、清香は寧ろ薄気味悪く思つた。しかし母が言つたように、何でも旦那に任せねばいけないのだと思つて、じつと我慢していた、母はこの旦那から、沢山のお金を受取つていた事を、清香は知つていたからである。

「さア、ほんなら清香ちゃんをえ、藝妓はんにしたげるよつて、わしに委しとき、え、妓にしてたら、衣替の時には、高島屋で一切整えたげるさかいなア——」

旦那は清香を抱きしめて、その含羞の瞋に似た唇を吸つた。それから暫くしておひけになり、隣の寢室へ連れて行かれた。

頃合を見て、幸子は清香の着替えをさせ心配せんとアと耳許で囁いて、そつとひつじ(櫻紙)を手渡し、階下へ降りて行つてしまふと、カアツと血の烈しく上るのを感じた。

夜具の支度はすつかり整つていた。彼女には始めて見る閨房の光景に、ますます怖いような血が騒ぐ。彼女は旦那にすゝめられて、先に夜具へ入つた。朝からの気疲れに、急に眠むさを覺えた。このまゝ朝まで眠れるのなら、どんなにいいだろうと、し

みじみ思つたのである。

旦那はゆつくり着替えてから煙草を一眼つけ、女中に言付けて生卵を取寄せた。

平常は絃歌嬌声のさんざめく色街だけに今迄隣家から洩れていた三味線の爪弾きがびたりと止むと、この待合の奥まつた部屋は、針の落ちる音さえ聞える程の、静けさに包まれていた。

時々帳場から顔戸物の触れ合う音が深夜のしじまをついて、金属的な響きを傳えるだけであつた。

それからの羞恥も苦痛も、唯夢中で、心の中でお母さんと呼び続けていた。その後の不快さをじつと噛みしめて、清香は間もなくぐつぐつと眠つてしまつた。

祇園さんのきざしを登り、朱の楼門をくぐつて、今日も朝詣りする絵のような舞妓。赤い鹿の子絞りをのぞかせた桃割れ姿の清香である。道行く人が眩ゆげに彼女を振り返つてゆく。カメラを向けるGIさんも居る、田舎女学生の吃驚したような眸もある。

しかし彼女は案外平気で居られた。下腹部の感覚が、昨日と違ふのに気付いたが、それでも彼女は平気で居られた。

旦那は又四、五日したら来ると言つていた。考えるともなく考へて、絵日傘をかざしながら、彼女はお神籤を引いていた。

彼女はもう今日という日から一個の祇園の象徴として。立派に生きてゆくやうと努力し、決意し、それを神前に祈つてゐるのだ。だから衆目の中の舞妓は、祇園というものの為に、平静で居られるのだらう。

— おわり —

よる 夜の都會ち

草薙久人

天野 健画

なやまし奇譚

第1話

毛を見てせざるは勇なきなり

掛小屋のきわどいストリップで、いさゝか春情を催した三平は、内ポケットに納つてある半月分の給料袋の有無をもう一ぺん確めなおすと、ぐつと鼻を射すようなえぐいホルモン煮の匂いの漂う、ジャン／＼横丁を、生暖かい初夏の夜風に吹かれながら、人の波にもまれてぶら／＼歩き出した。

潮三平は卅二になるチョンガの看板屋である。

彼が男娼の町で名も高い旭町に越して来たのはつい二ヶ月程前ではない。駆け出しの看板描きの三平に皮肉にも、ストリップやエロ劇の興奮を駆き立てるような、春画めいた看板ばかりが廻つて来るのでくさつた。

十日、二十五日が三平の月二回の給料日で、手帳のその日附の上

には秘かに小さくPの記号がついてあるのは、即ちPanpan、を購入し欲情を放出する予定日なのだった。彼自身此の目を内心生理休暇と名付け、男やからオンスやと一人悦に入っていた。……

市電の蔭暗いガード下をくぐり抜けると、ぼつと明るくなつて、肉体の門に通ずる飛田大門通、三平は屋台の、のれんをくぐると一本四田也の串カツでカストリ三杯ぐつとひっかけ途端に気が大きくなつて、パチンコ屋の雑踏を横眼で睨み、賑やかな爆音を張りあげて客を呼んでいる社交サロンを左へ折れると、怪し気な連宿やホテルのごみ／＼と並んでいる蔭暗い露路裏へふらつく足を踏み入れた。

その途端、彼の足もとへ、ひら

／＼と夜櫻ではなかつたが、一枚の紙きれが舞い落ちて来た。

千円札だ／＼と思つたのは永い貧乏生活のいぢましきで、あわて、拾うと、新生の二十本りの箱の破れたので、何んだつまらねえ、捨てようとする、と、どっこい、煙草が未だ一本残つている、抜き取るうとして、三平は図案の上に鉛筆で何か書かれてあるのにふと気付いた。

街燈ですかして見ると、「ダレカスケテコノウエ」と電文のようなもの書きなぐつてある、余程あわてたものと見え、字が目茶苦茶だ。三平は思わず今それが落ちて来た頭上を見上げた。

ホテル、「くじやく」はそこ、書かれた安っぽい看板燈が点滅している。隣の二階の障子に、男と女が必死に争つてゐる怪しい人影がゆらめいて映つてゐるではないか、影はますます妖しく大きく今にも障子が破れて飛出して来そうな気配、あわや女の唇に無理強い

の男の唇が重なつて行く、押さえつけられたような女の呻き声が断末魔の絶叫の如く、微かに洩れて来る……

三平は暫らく呆然と此の様を眺めていた。幸か不幸か、此の薄暗い露路には人影はなかつた。三平は一大決心をした、よしと勢よく叫ぶと、その家の玄關から素つ飛びように二階へ駆け込んだ。

ひい／＼と絹を裂く女の悲鳴と同時に、ざつと襖を開けて踊り込んで部屋中を見廻したが、何と云う早業、男の姿は影も形も消え失せていて、女が正に窓から身をのけぞらし、シユミーズ一枚の全裸に近い姿態で髪ふり乱して倒れていた。

「お怪我はありませんでしたか」三平は一寸戸まどい乍ら、むつちり肉付のよい肌があらわになつてゐる肩に手をかけて優しく聞いた。それでも女は顔を伏せたまま、まだわな／＼と肩を波うたせて震えている。

「もう大丈夫ですよ、男は逃げたらしいですから」と更めて部屋中を警戒して見てみると、

「本当に危ない所を有難う御座いました、もう少しの所で、あたしの一番大切なものを奪われてしまふ所だつたんですわ」





と今迄あんなに泣きぢやくつていたのに、ほんのり妖艶な媚を匂わせ、三平の手をぎゅつと握ると、「どうしてお礼したらいいでしょうかしら」

と倒れかゝるように三平の胸に顔を埋めかけてきたではないか。「い、いや、お礼なんて、丁度下を通りかゝつたら、これが落ちて来たものですから何も考えずに飛びこんだけなんですよ、強いて云えば、義を見てせざるは勇なきなりとでも云うんでしようか、はゝゝ……」

女の濡れたように美しく光る切長の黒い瞳にまじ／＼と視つめられると三平は柄になく照れてしまった。

それに女の引きぢぎられた、シユミーズからはみ出している櫻色の餅肌がどうも、かぶりつきたいような食欲を駆り立て、三平は此の女となら三十八度線を突破しても後悔はあるまいと思つたが、「ぢやア気をつけて下さいよ」

女の引き止めるのを腹の中で予測しながら帰りかけようとした。「あら、お帰りになつちやア嫌、お母さんが帰るまでいらつしつてよ」

三平の泥絵具くさい手をぐつと引つぱつて部屋の中へつれ戻した

「しめ／＼うまく行くぞ」

と腹の中で舌づゝみうち乍ら、女が進めるまゝに火鉢のわきに坐つた。

「一寸待つてゝね」

女はシユミーズの上に軽くオーバをひつかけると階段を駆けおりていつたが、ものゝ五分ばかりすると、「お待ち遠さま」と今度はお銚子を二三本と関東煮の湯氣の立つているを二皿、盆に乘せて持つて来た。

「何んにもありませんけど、ゆつくりしてらつしてね」

しどけなく膝を投げ出すと、むつちりした太股もあらわに三平ににじり寄り、喘ぐ様ななやましい息使いでしなだれかゝつて来る。

三平は余りにスミースな事態の進展に一寸気味悪くなつたが、春宵一刻価千金とは正に此の事かと覺悟をきめて愉しむ事にした。

だん／＼酔が廻つて来ると、女は

「ねえもう遅いから泊つて行かない」

誘うような淫らな眼付で云つた。たらふく御馳走にあづかつたこの上、据膳まで戴いては罰が当るようなものだが、其処は三平の得意とする、義を見てせざるは何とかで、OKの返事に女の真つ赤な

唇をちゆつと吸つた。

女も三平の首に、くね／＼と白蛇みtainな腕を巻きつけると負けずに吸いついて来た。

ふと見ると隣の部屋に何時の間にか用意したのか、なまめかしい緋ちりめんの布団が敷いてある。

女はシユミーズ一枚になると、「あんた先に寝て」と彼の横になつて枕もとで、さつとシユミーズを脱ぎ始めた。

ふさ／＼とした女の脇毛が、ちらりと見え、三平の欲情は頂点に達した、あゝ毛を見てせざるは勇なきなり、と女が彼の横へすつと暖かい肌を寄せて来たのをかき抱こうとした、あゝその瞬間……

「やい手前は一体誰だ！よくもよくも人の女房を……」

驚愕して三平は布団の上に飛び起き眼を白、黒させた。

年の頃は三十七八、片眼のこれ以上人相も悪くなれないだろうといつた凄惨な形相の男が、ジャックナイフを冷たく光らせて、つゝ立つていた。

「ひ、ひとの女房を寝とつたなんて、君、それは何かの誤解だよ」「誤解も六階もあるけえ、やい！此の仕末は一体どうつけて呉れるつもりなんだ」

「そ、そんな大声を出さなくつた

つて、つい、ぢやないんですから……。」

三平は女に救いを求めるように女を見たが、うつて変つてけろりとした顔つきで、新生を氣持よさそうにふかしている。

「僕は未だ一回戦も終つてなかつたんです。プレーボール寸前だつたんですから、これで勘辨して下さいよ」

三平はもうすつかり酔いざめがして、ぶる／＼震える指先で、虎の子の給料袋を、男の前に投げ出した。

女は給料袋を横眼でちらりと盗み見て、にたりと笑つた。

「ぢやア、僕はこれで」

と這々の態でズボンをはき、轉がり落ちんばかりにして階段を駈下降りようとすると、背後から男の声で

「旦那、今度はあつしに斷つて来ておくんなさいよ。安くしときますぜ」

と嘲笑するやうにあびせかけられた。

三平はきよとんと化かされた思いで表へ出た。すると足もとに、さつきのと同じ新生の袋箱が二つ三つ轉がついて、それにはやはり「タスケテ、ユノウエ」と書いてあつた。

第2話

「ステツキを差し込む

二号さん」

「あゝ誰かあたしをぎゅつと抱き
しめて呉れないかなア」

悩ましい声で呟くと浪江は身を
くねらせた。屋根の上で三毛猫が
にやんとも出来ませんと鳴いた。

浪江はヒステリックに三毛猫眼
がけてパイナップルの空罐を投げ
つけた。

「あゝ痛、たゝ……こらッ上から
物を投げる奴はどいつや！」

空罐は三毛猫には当らず、事も
あろうに、彼女の旦那の金田氏の
禿頭に命中したのである。

「この頃ちつとも厭めに來て呉れ
んから罰が当つたんやわ」

「そんなに怒らんかてえゝがな。
此のところ糸へん景氣でわしも忙
がしいのやから無理云いな」

金田氏は六十の坂を越えた御老
体とも思えぬ力で生毛の濃い浪江
の腕に手をからませていつた。

新世界は動物園を北東へ約一丁
の露路裏にある安アパート紅粧の
12号に住んでいる彼女は、もつぱ
ら金田氏の夜の方の予備隊員だが
色と欲との二筋道で活躍している

金田氏はこのところ週に一度ぐら
いしかやつて來ない。禿頭のお爺
いちゃんでも予備隊員の本分を守
らねばならず、浪江はこのところ
三十二の熱れ切つた肉体を持て余
していた。

「明日東京へ出張やさかい、今晚
は泊られへんのや。土産をたんと
買うて來たるさかい、楽しみに待
つとりや」

と、別れの額のキスもそこそ
こに帰つてしまつた。

彼女はもうにも我慢がならなく
なつた。こんなに燃え上らせてお
いて帰つてしまふなんて、よし、
そんならそれで、うちにも考えが
ある。と、隣の壁を、トン、トン
と二度叩いた。

「何だい」と若い男の声が山彦み
たいにはね返つて來た。

「ねえ、こッちへ遊びにきて」と
鼻を鳴らして誘つてみた。

「今夜は忙しくて駄目なんです」
何と素つ氣ない返事ではないか
彼女はつぼら屋のフグみたいに
ブンと脹れて、壁をドンと蹴つた

これで八度目のノウ、サンキュー
を喰らつた訳であつた。

浪江はつい二週間前、隣へ越し
て來た高木良介を一眼見るなり、
ぞつこん惚れこんでしまつたのだ
つた。今賣出しの鶴田浩二にそつ
くりで、笑うと子供っぽい表情に
なるのが何とも云えない魅力があ
つた。

けれど、アパートの中の女を騒
がせ乍ら、高木はまるで木石同然
彼女が四十八手の奥儀を公認して
誘つて見るのだが、一向に反應を
呈さないばかりか、毎日夜遅くま
で、こつ／＼と何か一心に研究し
ている様子だつた。たゞ三日に一
度ぐらい。ダンサー風な若い女が
夕方からやつて來ては、終電車間
際まで、ねぼつて行くのが、不思
議だつた。

「こんばんは、高木さんいらつし
やる」

もう十時だと云うのに廊下で囁
く様な低い女の声がする。音もな
くドアが開いたらしく、二言、
三言何か話していたが、それつき
り、コトリともしなくなつた。

浪江は壁に全身を耳にして様子
を伺つている、氣のせいかな、女の
やる顔なさそうな、なやましい吐
息がきこえてくる。

彼女は思わず自分の両手で乳房

をぎゅつと抱きしめた。今夜はど
んな事があつても高木を陥落させ
て見せると、歯ざしりをした。

一時間ばかりたつと女はひつそ
りと歸つて行つた。浪江は入念に
化粧すると真つ赤な長襦袢の上に
羽織をひっかけた。わざとしどけ
ない恰好で、強引に高木の部屋の
ドアを開けた。

「あつ、誰！」

高木がひどく狼狽した声でベッ
ドの背後の白いカーテンをさつと
引いた。

「無断で入つて來ちやア困るね」
「あら、サントリイの上等が這

入つたから差し上げようと思つて
持つて來てあげたのに、冷たい御
挨拶ね」

「君、あれを見ただろう」

「あれつて？」

「本当に見なかつたのかい？」

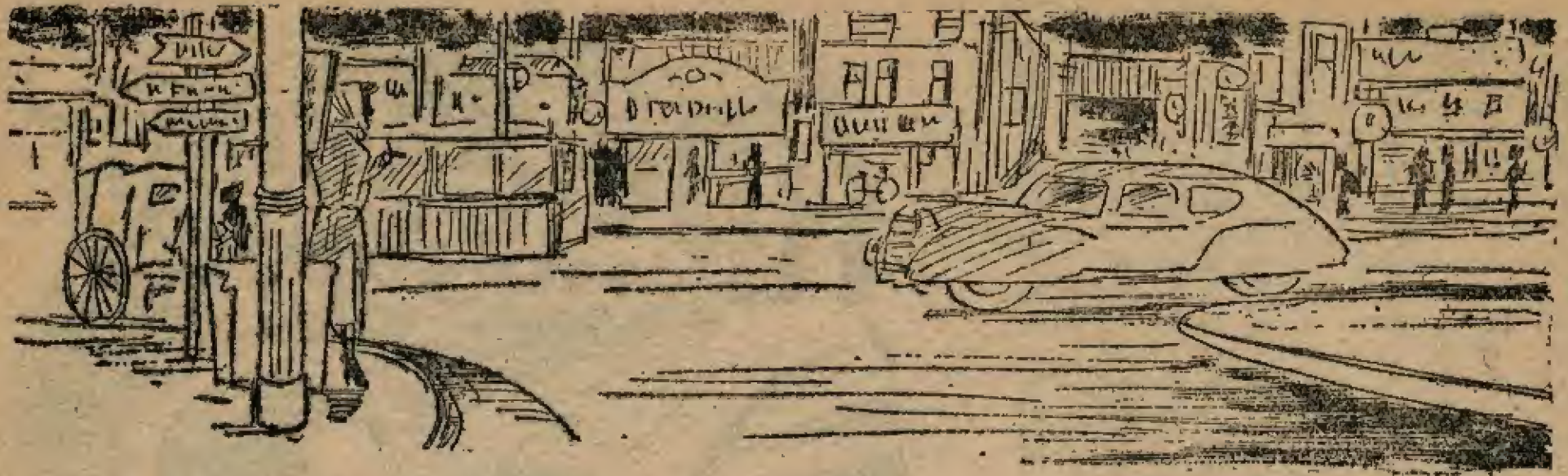
「何だかちらりと見えただけだつ
たわ」

「君が秘密を守つて呉れるのなら
見せてあげてもいいがね」

「えゝ、指切りしてもいいわよ」

高木の細いきやしやな指先を力
一杯握つた、ベッドの背後の白い
カーテンをさつと開くと、彼女は
思わず眼を瞠つた。余りに美事な
20号の油絵が朝の光りがさん然と
森の樹々の隙間から射しこんでい





る中に全裸の男女が抱擁している場面が、生々しく描き尽されていく。

「今夜とう／＼完成したんだよ」
「ぢやアお祝い、乾杯しましょう」。

二人は、その絵の前で、ウイスキーを煽った。

若い女はモデルだったのだ……
酔いが廻るにつれて、浪江は、苦しいから介抱してと、もうはだぬぎになった。露わな姿で、高木の首に、ぬめ／＼と白蛇のような腕を廻していった。

その夜から、二人に金田氏が来ない夜は、壁がなくなつたも同様で、大抵、高木が裏の窓からそつと忍びこんで来る。二人が愉しく今夜も杯を交している、と、「トントン」と、ドアをノックする音がきこえた。昨日、金田氏が来て帰つたばかりなのに、変だと思つたが「うふん」とえらそうな咳拂いは確かに彼の癖だ。

二人は狼狽した。

高木が裏の窓から、大あわてに逃げた後へ金田氏が入つてきた
「もう寝てたんか、」

「え、一寸気分が悪かつたの」
「そら、氣いつけなあかな、ステッキ忘れたさかい取りに戻つた

んやけど、今夜は用事もないさかい、泊つたるわ、」

彼女はげつそりした。こんな事なら、さつき氣がついた時、ステッキを持つて追いかければよかつたのにと後悔した。

金田氏は珍らしいステッキ、マニアで、年に十本ぐらいいは色々なステッキを買い、今使っているのは、友人の専務がアメリカに行くので、是非買つて来て呉れと頼んだ象牙の十二万円したと云う御自慢の代物なのである。浪江は、ステッキが怨めしかつた、

事業が一段落ついたのか、近頃金田氏は不意にちよくちよくやつて来るようになった。

此の前のように、高木とかち合つては一大事と、浪江は旦那が来ている合図に、御自慢のステッキを裏口の窓に差しこんでおく事にした。これで安心、高木はそれを見てやつて来ればよいのである。ところが或る日である……

金田氏は不気嫌な表情で部屋へ還入つて来るなり、さつき車の中にステッキを忘れて来たと言ふ。

「ぢやア、連絡せんと勿体ないわ……」

「それが車の番号も判らんや、……まア、災難や、あきらめなしようないわ」

と至極あつさり諦めてしまう様子。

その時、隣の部屋から、トン、トン、トン、外出から帰つて来た高木が、何も知らずにサインを送つて来た。

浪江はうろたえた、今晚二人で映画を観に行こうと約束してあつたからだ。

旦那の金田氏は、
「なんや鼠かいな、大きな音がしよる」と天井を見廻して、にやりと笑つた。

浪江ははつとなつた。だが、金田氏は何も感付かなかつたらしい
「もう寝ようか」と、未だ電燈が点いたばかりなのに、金田氏はステッキの齧痕を忘れるためにか、ウイスキーの酔で禿頭まで真つ赤にほてらして誘つた。

浪江は氣が氣ではない。うつかりすると、ステッキの暗号が今日は伝わらないから今に、高木が裏口から、しのび込んで来るのに違いない。その時はどうしようと思ふと、思わず体がぶる／＼震えて来る。

「何やお前酔ざめしたんと違うか震えてるがな」

「あゝ」と思わず溜息を吐いてしまった。

「そんなにわしが来ると悩ましい

か、可愛いやつちや」

金田氏は何を感違ひしたのか、ぶる／＼震えている浪江の体を抱くと、「よし／＼」と云い乍らベツドに運ばうとした瞬間

「あッ、泥棒や！」

と金田氏は素つ頓狂な叫び声を発した。

何も知らずに、しのびこんで来た高木は、今更ら出るに出不れずそれこそステッキを呑んだように茫然とつゝ立つていた。

味気ない沈黙の瞬間が続いた。と、急に高木が

「はゝゝ……」と笑い出すと、唇を歪めて

「浪江さん、今夜のステッキは随分、太そうで、御立派ですね、では、御ゆつくり、お休みなさいまし」

そう云うなり、今来た裏口の窓から悠々と出ていった。

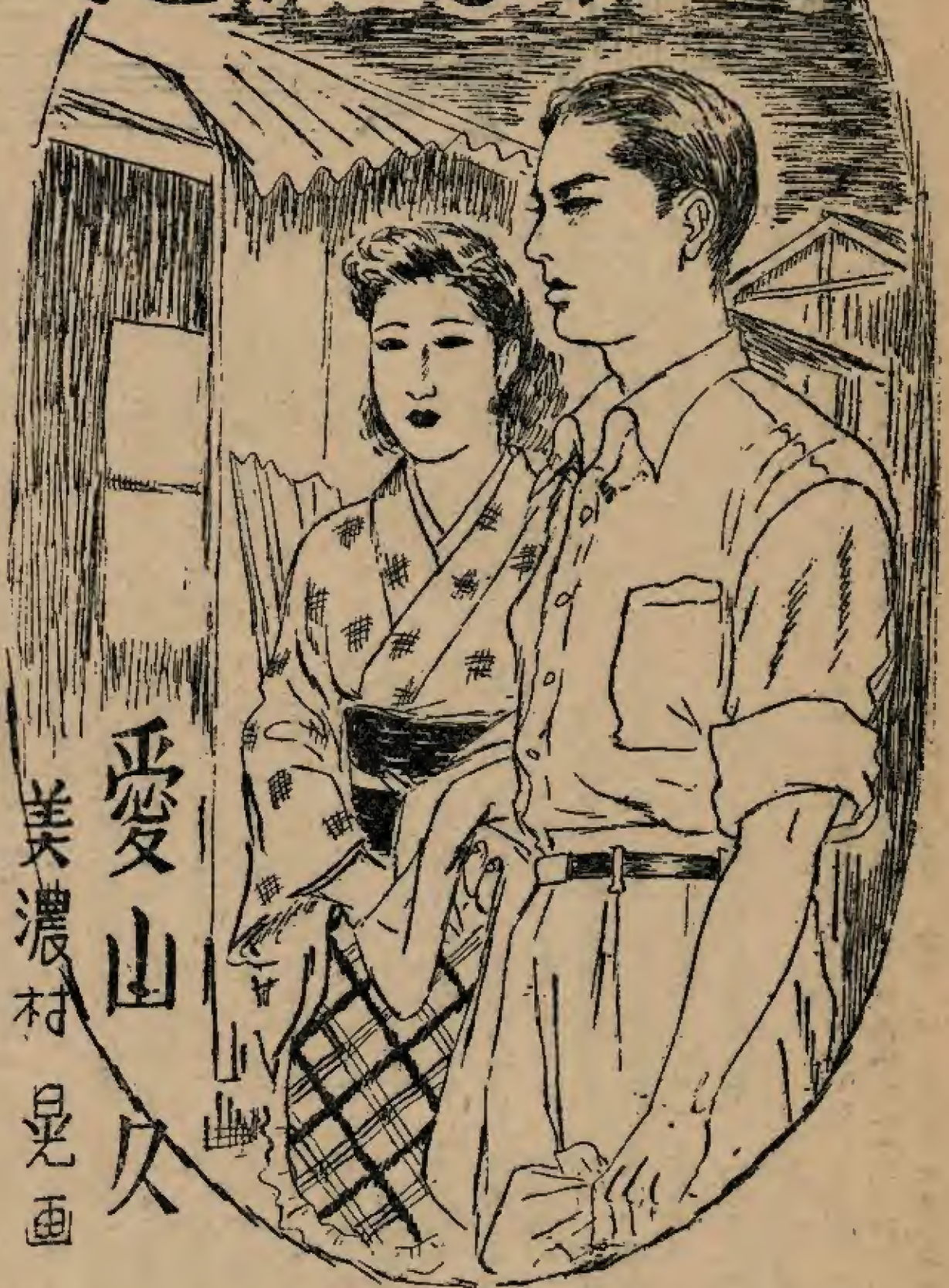
旦那の金田氏は、大きな口をあぐり開いたまゝ狐につまゝれた様子で阿呆のようにつゝ立つていた。

窓の外では、夜空にネオンがそ知らぬ顔で点滅していた。

——おわり——

× × ×

町裏の文化



愛宕山
美濃村 日光画

労働組合の公金を消費して顛落した青年委員長の失意の日、やさしい救いの手を伸べてくれたのは、彼に肉体を許した美貌のダンサーであつたらうか、それとも火葬場裏の陋屋に住む斜陽族の処女であつたらうか。激動するこの世代に生きる若者は、明るい希望の日を求めてやまなかつた。……

(一)

エメラルド色に晴れ渡つた初夏の空。大阪のメインストリート御堂筋の並木は旺盛な青葉をひろげ、耳を聳するばかりに雀達がさえずつていた。

淀屋橋交差点の信号の色が変わるを待ちな

がら、清水文彦は、眼の前を燕のように行き交うひっきりない自動車の群に、チエツと舌打ちした。ロールスロイス、スチュールドベーカー、ナツシュ、セダンなどの高級車が瀟灑なボディを輝かして、滑つてゆくかと思えば、尻に炭俵を積んだタクシーががた／＼のろ／＼とあえいでゆく。頭が小さくて胴体のふくれたトラレーザバスが傍若無人にゆるぎながら走る……。

文彦はふと自分のボロ靴に眼を落すと苦笑を浮べた。靴だけではない。めつきり日中は暑さが増して、橋の畔にはもうアイスキャンデー屋が屋台店をひろげている陽気なのに文彦の服装は脇と膝の抜けた古い冬服のまゝである。腋にかゝえたズツクの靴の中には弁当代りのコッペパンが固くなつていた。

「とり／＼日曜の筆耕屋にまで落ちぶれたのか、僕も」

繰りかえしても仕方のない愚痴がこんなときはやつぱり口から洩れる。この惨めな落魄の姿を、誰が、一万人の組合員を指令

ドルを握つているかとおもえば、髭ずらいかめしいむさくるしい日本人の男が木炭車のハンドルにしがみついている……。

信号燈がぱつと青になつた。今度こそ向う側へ渡らねばと、文彦が意気こんで一足踏み出したとたん、さつと風をはらんで、一台のレモン色のセダンが彼の前を横切つた。間一髪、かつとなつて、

「ばかつ、あぶない！」

きゆうんと無気味なひびきを立て、急停車した自動車の運轉台から、ぬつと突き出たのは外人の中年紳士の顔だつた。なにかべらべらと早口でしゃべる。言葉はわからないがその表情で、彼が心から詫言っていることを悟ると、文彦は黙つてうなずいた。

「すみません、ごめんなさい、私たちが急いでいたのですから」

背後の座席からはつきりした日本語の、それも若い女の声をかけられた文彦は、思わずその座席をちらつとのぞきこんだ。明るいみどり色のニューロック、ふくよかな盛りあがつた両乳房の間に垂れている真珠入のロケット、派手な布で髪を包んだその女の、きりつと引きしまつた頬の線や、薄い皮膚を透すバラ色の血色……、夢にも忘れぬあの人の面影をいま眼の前にみて、思わず

「あつ、あなたは笛子さん」と窓枠にすがりついた。

「笛子さん、高槻笛子さんでしょう、あなたは……」

泣くような、訴える男の顔を、女は不審そうに見返して、冷やかな笑を頬に浮べた。「存じませんわ、あなたはどなたのですか？」

「知らないって、そんなことはない、僕は僕……」

あえぐ文彦を見向きもせず、女は鋭く短い会話を運轉台の男と交すと、セダンは文彦を突き放して、すうつと動き出した。みる／＼速力を加えて、他の自動車の列へまざれこんでゆくセダンの後影。

「……忘れてる、すっかり忘れてる、それが女の正体か」

文彦は棒立ちになつて、こつばみじんになつた自分のおろかな夢を哀れんだ。

(二)

「おい、君！」

見まわりに来た文書課の若い男は、後から憎々しげに文彦の肩をこづいた。

「なんですか」

むつとしてふりむくのへ

「こまるじやないか、もつと能率を上げてくれなきゃあ、今日中に五千枚発送しなきゃならないのに、まだ千枚も書けんじやないか」

こゝは北浜のあるビルの三階。ふだんは物置小舎に使つていらしい、古伝票や古帳簿の乱雑に積み重ねられた埃だらけの部屋であつた。煤けた天井から、ぼんやりと暗い裸電球が一つぶら下つていた。

「昨日来た男なんか一時間で楽に千枚位は書いたぜ、君はずぶの素人だろう、字もまづいなあ、中学校くらいは出たのかいあは

は……。」

あまりの侮辱に、文彦の耳にはかつと熱い血がのぼつた。どこの会社へ紹介されて行つても、筆耕屋といえは人間あつかひはしてくれなかつた。わな／＼と拳がふるえた。

「まあ／＼、私の方が二千枚近くできていますから、盡すぎには二人で五千枚にはなりますよ、せい／＼馬力をかけます、えへへ」

陰湿な空気をやわらげるつもりか、文彦の相棒の太田老人がとりなし顔に割つて入つた。

「うん、それならいゝがね、油を賣つていはこまるぜ」

光を横ぐわえで吹かしながら、ポケットに両手をつゝ、こんだ若い男が部屋を出てゆく音を聞きすまして、どこかに気品のある老人はぼつりと言つた。

「清水さん気持はようわかるが、これが世の中じや、仕事、仕事……」

その暖いいたわりはうれしかつた。だが便所へ立つ間も、惜しみながら、かつきり八時間、山のような封筒の一枚ずつに宛名を書いていると、指がしびれ、腕がしびれ、肩が凝るのであつた。その苦しい味気ない仕事の報酬はわずかに一日二百円。しかも手数料二割をさし引かれて、周旋屋のおやじから渡されるのは正味百六十円にすぎなかつた。

「いやならいつでもやめとくなはれや、失業者は何万人も居ますさかいになあ」

官吏上りで、在職時代に方々の会社と馴染みがあるというだけが資本で、この筆耕周旋屋のおやじは一日百人近い男を顔一つでこき使うのだつた。むろん看板をあげな

いモグリの周旋屋でたし、一あつ日五六千円もの不労所得がふところへころがりこむくせに、おやじは一文の所得税も拂つては居なかつた。築港あたりの風太郎にも劣る青白いインテリ失業者のいくじない弱さはこゝろしたひどい搾取をされながら、日当にありつくために、この狡猾な脂肪ぶとりのおやじの前に、野良犬が尾をふるように哀願するのである。

「さあ、帰りましょうかな、清水さん」

書き上げた封筒をたんねんに一枚ずつ数え、百枚を一束にして、五十束を机の上に積むと、老人はほつとした様子で、半分に切つたバットを煙管につきさしてマツチをすつた。

「お先にどうぞ……」

「……清水さん、あなた、なにか心の中に煩悶がありますなあ、仕事が手についていなかったようだが」

「……」

「あはは、あてゝみましようかな、女の人のことでしょう、わかる、かくしても色に出にけりわが恋はとかくですよ、あはは」太田老人は、なつかしい故郷の父親のように眼を細めて静かに笑つた。

「どうですか、今夜は仕事のくたびれ休みに私の家へよりませんか、天六の裏町にある汚い家だが……、なあに、娘が一人居るきりの香気な貧乏ぐらし、誰にもえんりよはいりませんわい」

(三)

名物のバクダンというガソリン臭い強烈な安酒屋。胸のむつと悪くなるようなホルモン料理屋のにおい。酔つぱらつた職工の群と、ダニのように男とみればへばりつい

てくる安パンパン、その天六のごみ／＼と狭い横町をくる／＼歩きまわつて、気味悪いほど寂しい長柄火葬場の裏町とおぼしい長屋の一軒へ太田老人は文彦をつれてきた。ふりむくと、夜空へむつと突き立つ火葬場の大煙突から、うすく煙が立ちのぼつていた。まわりが暗いためか、初夏の夜の星がきら／＼と美しく澄んで見えた。とんと／＼と戸をたいて

「おい幸枝、帰つたよ」

「お父さん？、はい、たゞいま」

がたびしと戸があけられた。

ばつと部屋の電燈の光がまぶしく洩れた父一人と思つたのが、後に立つていた文彦に気づいて、娘はぎよつとしたらしく、

「どなたですの、お父さんのおつれ？」

「おどろかなくていい、わしの仕事の友人だよ……、いつかお前に話した清水さんといつてな」

「まあ」

娘はあわて、エプロンをはずす気配であつた。

一足中へ入れれば、眼もあてられないような寒々しい貧乏世帯をいやでも見せつけられるものと覚悟していた文彦は、あつと眼をみはつた。見たところ、三畳と四畳半の二間きりのせまさが、きちんと整理された、清潔な部屋であつた。茶ダンス、ラヂオ、ミシン、それにいかにも若い娘らしい華やかな姫鏡台や油簾のかゝつた琴。壁の裾は、淨るり本をほくしたらしい腰貼り。形ばかりの床の間だが、季節の花を挿した花筒と青磁の香爐、それに風雅な和歌の半折がかけてあつた。耳を澄ますとちりんちりんと風鈴の鳴るかすかな音も聞こえる。

「清水さん、世間でよく云う斜陽族とは私などのことを云うのでしようなあ、戸屋の邸は家財もろとも賣り拂つて、手まわりの物だけ持つてこゝへおちぶれましたよ、あはは」

そうだったのか、しがない筆耕にしてはどこか物腰の上品なおつとりした老人の素性が文彦にはじめて合点ができた。

「あなたとは、どうしたもののか、匠々同じ仕事場で落ちあいますなあ、そうく、これは私の娘、幸枝といふましたな」

「はじめまして」

淑やかに挨拶する幸枝に

「僕、清水文彦です、お父さんにいろいろ……」

と文彦も膝を揃えた。爪先の破れた靴下が気になった。

幸枝は十八九、洗いざらしのホームドレスを着て、薄くコールドクリームを塗つただけの顔だが、清純な処女の美しさはかくしようもなかつた。高槻笛子を妖艶なダリヤとすれば、幸枝はまさに清楚な朝顔の花であつた。

「ときにね、清水さん、失礼だが」

老人はとつておきらしいサントリーをグラスについでくれながら

「あなたのような若い人が、日雇の筆耕なんかして居られるのには、何か深い訳がありそうだと……と前から感じていたが、さしつかえがなければ話してみませんか」

それは文彦にとつては一番痛い質問であつた。そばでつゝましく膝に手をおいて聞いている美しい幸枝の横顔を見ると、なおさら平気で答えられなかつた。

「なあ清水さん、世の中は持ちつ持たれつという諺もある。私もいまはこんなに落ち

ぶれてはいるが、昔の友達の中には相当出世している男も多いから、もしあなたが御希望ならどこかの一流会社へ紹介してあげることできますよ」

やさしい慈父のようななぐさめに、く人の情にうれない文彦は眼頭がじんと熱くなつた。

「……有難うございます、しかし、それなら、私などより、どうして太田さんが」

「いや、私などはもう世に出る年ではあるまい。又、かりにも一時は大阪の財界ですこしは名を知られた太田浩吉が、旧友の情にすがつて返り咲いた……と噂されたくはない、意固地なようだが」

「でも、それじやお嬢さんがお氣の毒ではありませんか」

「深窓にぬくく育つて、嫁入の世話万端を親に任せるといふ世の中ではなくなりましたよ、あは、娘は、やはり私の友達の紹介である会社の重役秘書を勤めています」

「ほう、どちらの会社の……」

「ご存じかも知れませんが、日本物産ですよ、あすこの稲垣専務は私の親友です」

「え、日本物産の稲垣……、それでしたか」

文彦の顔からみるく血の気が引いた。

(四)

文彦が驚いたのも無理はなかつた。日本物産は新しい合成繊維メーカーとして誰知らぬものはない大会社で、文彦はこの営業課に勤めていたのである。終戦後、労働組合が組織され、文彦は選挙の結果、最高点で執行委員長に推薦された。組合委員長は専従員であるから、給料や日当はすべて組合費から支給される。従つて、形式上は一旦会社をやめることになるのが一般の慣

習である。

日本物産は

関西に五つの

工場をもち、

職員と工員を

合計するとそ

の数約一万。

共産党系の産

別所属の尖鋭

労組として、

その名を謳わ

れていた。時

代もよかつた

労組の圧力を

加えれば経営

者は一たまり

もなく屈服し

て、希望通り

の賃金が獲得

できたのであ

る。文彦の若

い血潮は躍つ

た。

たとえば、

経営協議会な

どでも、立派

な会社の会議

室を当然のよ

うに使い、会

社側と組合側

が卓をへだてて堂々と相対した。組合を代

表する文彦の最大の強敵は会社側代表の稲

垣専務であつた。

若さの血気に任せて火のような雄弁で迫

る文彦に対して、いつも氷のように落ちつ

いて靜かに納得のゆくように受け答える



稲垣専務は、その風貌が物語る通りに、重厚で威厳な英国型の紳士であつた。

労働者第一主義をモットーにして、激烈な正義感で迫つてゆく文彦に対しても、悠たる態度をすこしも崩さずに、

「まだ眼が覚めませんか、会社の発展は決

して勞資の対立と反目から生れるものではないはずだ！、第一、あなた方は何かといふと、この人間の世界を支配者と奴隷、資本家と労働者の二階級にまつ二つに分裂しているような考え方をするが、大きなまちがいだ。勞資の協調がない限り、事業は発展しないし、又、労働者諸君の待遇を改善するには、なんといつてもまずそれだけの余裕を生み出すために、事業を盛大にする他はない」

どんな小さな会社でも、又社会でも、国家でも、愛情と融和を缺いては自滅する他はないという稲垣専務の強い信念には、文彦も胸を打たれた。しかし、じゅんじゅんと調子専務の言葉でさえ

「古狸にだまされるな」
「会社のトリックにかゝるな」

という激烈な左翼分子の怒号の前にはむねしく圧倒される他はなかつた。しかも、そのころには、会社に共産党細胞の組織が根強くはびこり、それに踊らされる若い従業員は、穩健派の文彦をめざして

「ダラ幹！」

「会社の犬！」

「御用組合委員長を葬むれ！」

などと罵倒するのだつた。

一体労働組合は労働者の生活条件をよくするために生れたのか、それとも共産党の集結になるために出来たのか……ジレンマに悶々とする文彦は、苦悩をまぎらせるために、いつしか酒と女の渦巻く歡樂境に足を運ぶようになった。

道頓堀のダンスホールで、ナンバーワンと呼ばれる美貌の高観笛子と、ある夜ふと

抱擁しあつてステップを踏んだのもそのころであつた。風のようになややかな身体を、うつとりと文彦の胸にまかせながら「まあ、あなたがあの日本物産労働組の委員長さんですの、お噂はよくうかゞつていますわ」

と熱っぽくさゝやく彼女であつた。それがきつかけとなつた……。判一つ押せば、何万円でもの組合費でも支出できる委員長として、文彦をちやほやもてなす笛子に、うぶな文彦がずる／＼と泥沼へ引きずり込まれるように足繁く足を運び出すと、たいせつな組合費にみる／＼大きな穴があきはじめてた。

「いけない、あぶないぞ……」
もしばれたらという恐怖と自責はあつたしかし、花やかなホールで、にぎやかなジ

ヤズバンドを聞き、脂粉匂やかな笛子の女体を抱く悦楽は、文彦の若い官能をそゝつてやまなかつた……。それが、自然のなり行きのように、熱い接吻をかわし、さらにある夜、ホールがはねてから、誘うとも誘われるともなく、近所のホテルへつれ立つて、肌を許しあつてから後は、もう女蜘蛛に弄弄され生血をすゝられる哀れな雄蝶に過ぎなかつた……。

文彦がひたかくしにかくしていた五十万円の組合公金の費消は、ついに代議員会の激烈な会計検査で暴露してしまつた。攻撃の火の手をあげたのは共産細胞に属する代議員達であつた。

「委員長を即時更迭しろ」
「日和見主義から積極的闘争主義へ轉向しろ」

犯罪 實話

萬引令嬢の殺人事件

瀬戸川 宏志

森 あきら 繪

自分の女体の秘密を知らなかつた女が惹き起した獵奇殺人事件の顛末

一、小さい罪から

小さな一つの罪を隠そうとすることから、其のために大きな別の罪を犯すに至ることが少くない。例えば或る郵便局の一事務員は赤行囊を差立てるとき、内の

一個忘れたために、是れはきつとひどい目玉だろうと恐れをなして、其の赤行囊を天井裏に隠したことがあつた。

赤行囊の行方が判らぬというので大騒ぎとなつたが、つづめてみれば上役に叱られるのが怖いためにそんな大それた事

件を惹き起したのである。私が今取扱つている殺人事件もまた原因は極めて小さなことからあつた。

大阪地方檢察廳の都筑檢事は土曜日の夕方、少し酒の匂いをさせながら私の家へ立ち寄り長話しの末にそんなことを言

それが共産分子の組合乗っ取りの策戦であつた。絶対大多数の採決で罷免された文彦の代りに、新委員長として推薦されたのは、細胞を牛耳るもつとも強力な共産分子であつた……。

委員長罷免、つゞいて組合からの除名を宣告された文彦はさすがに顔色蒼白となつた。クロードショップ制をとるこの労組では、組合員の地位を失ふことは、すなわち日本物産社員である身分を同時に失ふことであつた。

十年近く勤めた退職金全部も、費消した組合公金の穴埋めに押さえられた。そうなる文彦の今後の生活は、六ヶ月間給料の六割程度もらえる失業保険金でさゝえるしかなかつた。誰一人の味方もなく、惘然と会社の玄関を出てゆく文彦の肩をしずかにたいて、

「清水君、これもいゝ人生の教訓だ、立派

つて、其の殺人事件の概見を語り出した。尤も其の事件というのは起訴されているが、犯人の健康上の支障があつて未だ一回の公判も開かれていないので、本名を茲に公にする訳には行かないが、読者諸君の中には、昨年十一月の末、大阪市北郊の或るホテルの一室で、若い紳士が絞殺されていたという記事を見た人もあるだろう。

而も其の犯人は前夜被害者と共に同宿した二十二歳になる美しい女であり、これも恐らく何処かで自殺しているのではないか、女が男に強い無理心中かも知れない——。

という簡単なニュースで其の日の記事は片付いていた。

今の時世、此の大都市で、人が殺されたり心中したりすることは余り珍らしいことでもないので世間の人々から此の事件はとうに忘れられている殺人事件なのである。

二、魔がさした日曜

晴れた日曜日であつた。美佐子は正午前に一人で百貨店の中をあちこちぶらついていた。丁度日用品大売出期間中であつたので、三階までは各階共物凄い混雑であつた。別段これという買物の目的があつて来た訳でもないのに、彼女は人いきれと埃からのがれようと、四階の洋家具や電気器具類売場へ上つた。

さすがに此の階はひっそりとして客も少く売場の店員たちも、あちこちかたまつて雑談を交し油をうつていた。電気器具類の売場には受持の店員らしいものが

いなかった。

彼女はふと装飾用の豆電氣スタンドを一つ手にとつて見た。机の上に、或は本箱の上にそれを置いたら一寸粋であろうと思われる品物である。無論コードも付いているのだから電氣を通しさえすれば点るのだろうけれども、それは明り用ではなくて愛玩用装飾用の物である。値札を見ると四百三十円。

魔がさしたというのか彼女は、誰も見ていないのを幸いに、ハンドバックの中にそれを忍びこませた。尙其の階を一廻りして気付かれなかつたことを確かめ、四階から三階へと西の階段を下り初めた階段の中程位だつた。彼女の背後から「もしもし」と声がかかつた。

二十六七歳の洋服の紳士であつた。ハッとして彼女の顔色が変つた。足がすくんだ。

「保安係のものですが、一寸地階まで来て下さいませんか」

丁寧な言葉つきであつた。ハンドバックを持つている手が震えた。

「ゆるして下さい。どうか見のがして下さい。お金は此の通り持っていますから払います」

彼女は必死となつて哀願した。

「いや、御手間はとらせませんし、御心配もいりません。そのまゝ兎に角来ていただければ話がすみますから」

紳士がやさしく小さい声で、しかも強く言つた。

三、微罪のために

美佐子の父が彼女を迎いに来たのはも

う夕方であつた。百貨店はスツカリ灯が消え扉は降され、唯横の通路から下つてゆく地階保安部のみが明るかつた。

父が退職官吏の中流家庭であること、一人娘で相当教養のある未婚女であること、全くの出来心で初犯であり價格も小さい品物であること、等の理由を並べ、保安部長は彼女の父に恩情的な言葉で「今回は一切内密にすませますから御安心下さい。唯今後充分家庭でも氣をつけ



てあげて下さい。」

と訓戒めいた口調で云つて彼女を引渡した。彼女の万引事件はそれで片付いた筈であつた。彼女の精神上の打撃は大きかつたが、それは自業自得であることは十分知つてゐるし、もう金輪際百貨店などへは出入すまいと決心した。

四、訪れた運命

ところが其の事件があつてから二週間

に再起を祈るよ、……小さな英雄氣取りが自己をはらほすことを決して忘れたまうな」

力強く励ましてくれたのは、たつた一人稲垣専務だけであつた……。

文彦は必死になつて二度目の就職先を探しまわつた。しかし、文彦が日本物産勞組から追放されたという噂を知らないところはなかつた。どこを訪ねて行つても木で鼻をくくるように、冷たい嘲笑を酬いられるだけだと悟つたときには、もう失業保険の期間も切れていた。文彦が哀れな日雇筆耕におちぶれた裏には、そうしたいいきさつがあつたのである。

(五)

「そうでしたか、よく思い切つて告白してくださつた」

文彦がすつかり話してしまふと、大田老人は、おだやかに言つた。文彦は、じつと自分を見つめてゐる幸校の視線に氣ずくと額に滲み出す冷汗を手の甲でそつと拭いた。「清水さん、あなたが身に泌みて後悔なすつてゐることは私は十分に認めましょう、人間は得意の絶頂にいつもひどい失敗をするものですよ」。

老人はちりちりと涼しそうに鳴る風鈴に耳を澄ましながら、ひとり言のようにつぶやいた。

「そのダンサーはあなたを愛したのではなく、金が自由になる地位に居る男ならば誰でもいいわけですよ、清水さん、その女はいまは外人に身体を任せて一時のぜいたくを楽しんでいる……、あなたがいまだんな窮境に落ちてゐるとしても、女にはなんの責任感もないのですよ、……忘れな

程たつた月曜日の午後二時頃のことである。もうその頃は父母は勿論、美佐子自身も、あの時の苦しい記憶が漸くうすれて平安な自分を取戻していたのであつたが――。

表に一人の紳士が訪れた。美佐子は玄関に出てみて、途端にサツと顔から血の気がひいた。百貨店の保安係員ではないか。あの洋家具、電気器具類売場の四階から三階へ下る階段で彼女を呼び止めた地階へ連行したあの怖い保安係員その人ではないか。彼女は慄える声で辛うじて應對した。

「いらづしやいませ。いつぞやは申訳ありませんでした。あの、今、父も母も出ていますので――」

「いや、皆様御不在で丁度よいところで。実はあの件はあのまま隠便に済んだのですがどうして洩れましたか新聞記者が聞き込みまして、いろ／＼あなたのことなど私に尋ねてくるのです。尤も私は甘くかわして何も言っていないのです。が、ついでには此の次の月曜日午後一時頃阪急梅田駅の共栄薬局の前あたりで待つていて下さい。そのことで一寸内密に御相談いたしたいことがありますから」

「用件はどんなことでしょうか？」

「いや、その節申し上げます。御心配は要りません。ではまちがいない。お待ちしていますから。私は申しおくれましたが久保田と申します――」

を包んだ。新聞に私や父の名が出たら？警察沙汰になつたら？此の町内にも逆も恥かしくて住んでいることが出来ない。是は何としても頼んで揉み消して貰わねばならぬと彼女は不安と焦燥にかき乱れた。

約束の月曜日は雨だつた。美佐子は映画に行くつもりで家を出た。百貨店は休日だし、雨だつたので駅構内は余り雑踏してはいなかった。十分間も待たないうちに久保田がやつて来た。颯爽とした男振りである。

「お待たせしました。まだ一時には十五分もありますから、もつとお出でが遅かろうと思つていました――」

「いろ／＼お世話かけて相済みません」

「いや、そう云われては恐縮なのですが立話しも出来ませんし――ええと――何処か郊外へ出てほしいと思つていたんですが生憎雨ですから歩けませんし。とも角お茶でも飲みに行きましょう。」



おびえている彼女を少しでも早く安心させようと、久保田はつとめて馴々しくやさしみの微笑みを湛えながら明るい朗さで軽く誘うのであつた。

五、花を散らす者

Dホテルであつた。二人は差向つて小さな卓子を間に、しげ／＼と相手を見た。「こんなところへ御案内して失礼ですが実は新聞記者があの日夕方、あなたとあなたのお父様とが保安部を出て帰られるところを見たらしいのです。新聞記者は、あなたのお父様を在官当時からよく知つているというのです。」

百貨店の門が閉つてから保安部の地階階段を出てゆく子供や婦人の殆んどが、あつた事件で保護者とか或は警察とかへ引渡されてゆく者だ位のことは彼等は職掌柄すぐ察しをつけるのです。それであなたのことにいついていろ／＼尋ねて来るのです。でも私は体よく濁して何も話していませんし、あれだけは掘つてくれなと、キャバレーなどをおごつて掘っているのです。尙今後も絶対に口外せぬつもりですから御安心下さい。ただ此のことで私とあなたとが打合せをしたとか会つていたとか言うことは御両親は勿論誰にも内密にしていして下さい。それはあなたの名譽のためにも大事なことでありますから。――」

久保田は親切に彼女へ説いてきかせるのであつた。かねて注文してあつたのか女給仕がコーヒとケーキを置いて行つた。扉がしまると再び静かな二人の差向いがつづいた。

「い、悪い夢だつた」

「はい」

「あなたが使いこんだ組合の公金、かりに組合があなたを背任横領として訴え出ないとしても、あなたは道義上、たとえ生涯かゝつてもお返しなさい、それが正しい男のすることだ、又、人間はそうしなければすまない良心というものを持つてゐるはずですよ」

「太田さん、返します、僕はわきめもふらずに働いて必らず返します！」

「よろしい、そうしてください、その氣持を聞けば私は心からうれしい、あなたは決してわるい人ではない、……たゞ小さな英雄に祭りあげられたことがすべての誤りの原因だつたのです」

老人は心底からしみ／＼した調子で述懐すると、ちらりと娘の方を見て

「幸子、たしか、日本物産もこの間徹底的に共産分子を追放したそうだなあ」

「え、いま清水さんのおつしやつた細胞は根こそぎなくなりましたのよ……、組合も産別を脱退して、総評に参加しましたわ」

「ごらん、清水さん、すべては時代の流れが決定してゆきますよ、人間はささいでいるときは自分の行先を見ないが、落つてくると結局一番正しい方向へ辿つてゆきます」

文彦は、ばつと心が明るくなつたように思つた。あせることもない、さわぐこともないのだ。しづかに正しく、おごらず、自分の天から授かつた仕事を地味に歩いてゆくことが一地堅実であり幸福なのだ。

女性にしてもそうなのだ。自分と苦勞を分けあい、喜びを共にしてゆくのは、金のために身体を任せる笛子のような女ではない

「どうぞよろしくお願いいたします。なお新聞記者の方への費用も要ったことと存じますから、少いのですけれど取つて置いて下さい。今はこれだけしか持ち合せがありませんが又お払いいたしますから——」

久保田の態度や言葉に不審や疑いを懷くほど美佐子は世間を知っている女ではなかつた。彼女は久保田のいうことは一々尤もだと信じ口を引き緊めて聞いていた。ハンドバッグから百円札だけを残して置いて千円札三枚を抜き出し卓子の上に置いた。

「いや、こんなことはどうでもよいのです。私も職務上知り得た他人の秘密は濫りに洩らすことを許されぬこと位は心得ていますから——お金など納めて下さい。」

そして彼はポケットからウイスキーの小壺を出して煙を抜きコーヒーの中に滴々と落しこんだ。千円札にウイスキーの雫が飛んだ。

六、強姦か和姦か

二時間はたつたであらう。二人は履物をボロイに揃えさせてホテルを出た。雨はまだやんではいながつた。

彼女はホテルの門ですぐ彼と別れた。知つた人に見られてはお互いにまづいと思つたから。帰りの市電の中で美佐子はたつた今のホテルの中で二人のことが遠い日のことの様に思えてならなかつた不思議なさつきまでのひとときを考え直してみた。

「強姦されたというのであらうか? いや

強姦ではない。私は殆んど抵抗しなかつたではないか。」

「でもそれは抵抗しても免れられない鍵のかかつたホテルの一室の中だつたから結局はあんな外はなかつたのだ。それに久保田は犯罪を新聞に暴露したらお前の地位や名譽どうなると思うか」と、それは口にも態度にも表わさなかつたけれども、それだけの武器を内に潜めて持つてゐるのだから、それが恐ろしいために私は抵抗が出来なかつたのだ。矢張り強姦されたというべきであらう。」

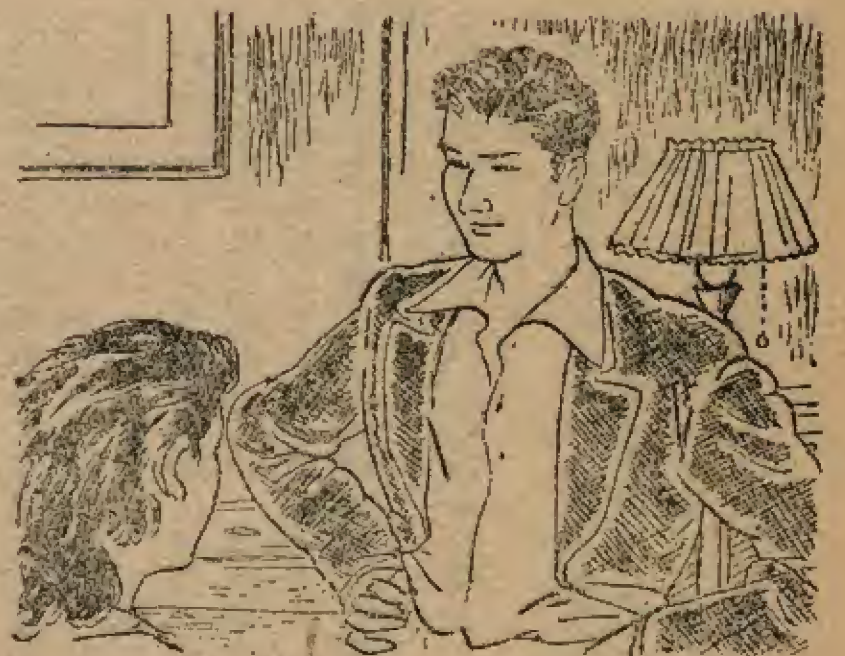
「然し久保田の言つた言葉は親切であつたし後には私に対する愛情の告白もあつた。ベッドの上でのおのきほは、私の肉体が未だ経験したことのないことを経験するといふ不安のためのおのきで、久保田の暴力に対する恐怖や憎悪のためではなかつた。二人が服装を整えて室を出るときなど私は彼を憎む心を少しも持つてゐなかつたではないか、何が強姦なのか。」

美佐子が自問自答している間に電車はアベノ終点についた。彼女はあわてて降りた。

何という心のやるせなさや身体のかたさであらうか。その時突如として悔恨の涙がボタリ／＼と頬を流れた。

七、爛れの果て

毎月第一、第三の月曜日午後一時が久保田と美佐子の婚喪の時間に約束された時には變更されることもあつたがそれは其の前に逢つた時話し合つて置くことにした。今は彼女には久保田という男がな



くてはならぬものになつて来た。

ところで如何したことか此の二三月末というもの、久保田と逢つても彼は美佐子に肉体を要求することがなくなつた。その上ホテルに支払う休憩代や茶菓の代の外に小使錢をせびられる様になつた。而も其の額はだん／＼多くなつてきた。別に勤めをしている彼女ではなし、親から貰う自分の小使錢の中から久保田へ其の要求通りの金がどうして貰けるであらうか。詰つてくるのは当然である。今や彼女は金の苦面が大きな苦惱となつて来た。

十一月中程の或る嬌曳のとき。彼女は生憎く手持金がないから此の次まで待つてくれと泣き／＼頼んだ。其の時久保田は今迄に彼女が見たこともない程の恐ろしい顔をして脅し罵倒し初め、果ては、既に他に愛する女があることを美佐子にハッキリと言明した。今後の美佐子には

いはずである。男は派手で妖艶な肉体をもつ女に官能を刺激される……、けれども、肉体には飽きる日が必らずある。男が女から逃げるか、それとも女が男を捨てるか、どちらにしても決して長くつき合ひ得るものではない。

男が生命をかけて愛してもいい女性、清純で健康な肉体と、汚れない尊い魂の両方を持つ若い女性の他にないはずだ。その人はどこに居るのか、ミチルとチルチルが探し求めた幸福の「青い鳥」のように、遠いお伽の世界に住んでいず、かえつて、一番自分の身近かにつくましく微笑を浮べて待つてゐるのではないかしら。

短かい初夏の夜は、いつの間にか八時を過ぎていた。茶タンスの上の時計がチンチンと澄んだ音を立てるのに気づくと、文彦はあわて、腰を浮かした。

ウイスキーの微醺気分が出たのか、いつの間にか老人は、ごろりと横になると、手枕ですや／＼とうた／＼寝をしていた。

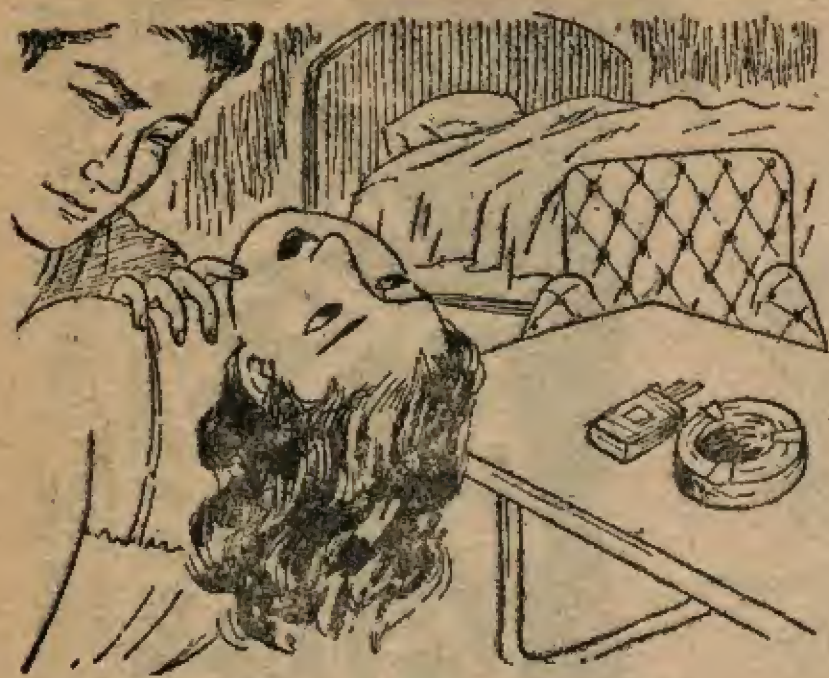
「お嬢さん、御馳走様でした、お父さんに」「いゝえ、よろしいのです、父はこうしたうた／＼寝が一番楽しいのですもの、おほほ」

恐縮する文彦のボロ靴を、幸枝は揃えてそつと靴下をさし出してくれるのであつた。

「あら、今夜は月がまだですわ、はじめていらしてお帰り道がおわかりにくいでしょう」

気軽に下駄をつゝかけて文彦と肩を並べると、幸枝はなんにも文彦を警戒する様子はなく、暗闇の外へ出た。

「いゝですよ、お嬢さん、おうちが不用心ですから」



只月々定つた金を久保田へ貢ぐことだけが残された様な言いぐさであつた。それが実行出来ぬときは今迄の二人の関係を両親と社会へ告白して失踪するといふのであつた。彼女は一時にクラクラと奈落へ蹴落された様な眩暈を感じた。

初めて肉體を許し、そして金を貢いで来たことが凡て彼の謀略であつたと知つたとき、彼女の口惜しさと思ひさは全身の血を凍らせた。蒼白の顔をもたげて美佐子はかすれた声で久保田に言つた。

「よくわかりました。元を言えば私が電気スタンドを万引したのが悪かつたのです。然しそれを寛大に取扱つていただいた御恩は御恩として忘れまいと思ひます。其後の交情からも私はあなたを信じて来ていました。私はあなたを離れることが出来ません。次の月曜日に必ず三千円持つて来ますから今日のところはどうか堪忍して下さい。」

其の日は二人共ベッドに入ることもな

く、唇を触れることもなくホテルを出て別れた。

そして約束の月曜日、美佐子は久保田の来ぬうちに、少し早目にホテルへ行つた。

「間もなくいつもの私の連れの男が来るでしょうから此の手紙を渡して下さい。私は一寸用達しに行つて後ほど来ますから。今夜は二人共或は泊めていただくかも知れませんから夕食の用意と、部屋の都合も御願ひします。」

ホテルの給仕に頼んで置いて外へ出入り替りやつてきた久保田は美佐子が銀行へ金を出しにゆくため遅くなるが四時迄には必ず来るから夕食を摂らないで待つていてくれという意味の手紙をボーイから受取り、一人ベッドに横わつて時間のたつのを待つていた。

四時頃美佐子が来た。夕食のとき二人は洋酒を少し飲んだ。

「先日はすみませんでした。申訳ありません。今日は調べて来ましたから——」

でも此の間のお話によると、私という者のからだはもうあなたは必要がなくなつたとのことです。私も辛いけれども諦めます。唯今後は兄弟の様に会つていただければどんなにか嬉しいでしょう。尚あなたの愛人だと仰つた真田幸枝さんにも紹介してほしいと思ひます。私も諦めた以上妬きもちは致しませんから——

考えてみますと私の身体の中にひそんでいた女というものの門を初めて開いていただいたあなたに、せめて今夜だけはもう一度愛撫していただきたいのです」

美佐子の必死の口説きに久保田も泊る

ことにした。

美佐子の手にいつもの腕時計と指輪がなくなつてゐることに彼は気がつかなくなつた。

深い覚悟を内蔵した彼女はうろたえたり、そわ／＼したりしなかつた。その真剣な熱烈な男への求愛は男をして或る程度満足させたに違ひなかつた。

翌朝七時頃、彼女は

「あの人はもう一時間程してから直接会社へ行くそうですから——」

と給仕に言い置いてサツサとホテルを出て行つた。

久保田がベッドの中で死体となつて発見されたのは正午頃である。

八、哀れな女

都筑検事が参考人として調べた久保田の愛人だという真田幸枝の供述によると美佐子の身体の一部の異状でありながら彼女自身未だに知らぬことが唯一つある然しこのことは犯人美佐子の刑を輕からしめる理由にはならぬのみならず、それを公にすることは余りにも彼女が惨めだし、何かの機会に彼女自身がひそかに自分で知ることが出来たらそれが一番よいと思うので、調書には其の部分だけは載せなかつたと、検事は附加えて此の話を打ち切つた。

省かれた幸枝の陳述というのは斯うである。

「——或るとき私が久保田さんとベッドの中で夜を過したとき、久保田さんは後で私にささやきました。——以下略——」

「あら……、不用心なのは家より街路ですわ、それも追刺なんかにより、方々にある水溜りが」

若々しい含み笑いが洩れた。

火葬場の不気味な長い塀が盡きると、天六商店街のあかるい灯影と、ざわめきが次第に近くなつた。

「……清水さん」

ためらいながら幸枝がささやいた。

「なんですが、お嬢さん」

どきりとして文彦が立ちどまると

「……いゝお勤め先がありますのよ、もし清水君をどこかで見つけたら、ぜひ待つてゐるから傳えてほしい、とおつしやつてましたのよ」

「え、誰が」

「稲垣専務さんが」

「あなたがどうして……」

「おほ、私、専務さん付の秘書ですものあなたのお噂を始終聞いていましたわ」

ぐくつと胸が迫つた。

「お嬢さん、いや、幸枝さん」

おもわず握ろうとした文彦の熱い手を、

ひらりと外して、

「またお立ちより下さいませね、お待ちしていますわ、父が……」

下駄の音が闇の中を次第に遠ざかりながらたゞ一つ、明るく幸枝の音がひびいた。

「お待ちしていますわ、私も」

「幸枝さん」

「希望を失わないで……文彦さん」

次第に遠く、清水さんと云わずに、文彦さんと呼んでくれる裏町の処女のおもいを

文彦はいまはつきりと悟つた。熱い泉のよう

に腹の底から吹きあげてくるよろこびを

文彦は噛みしめた。

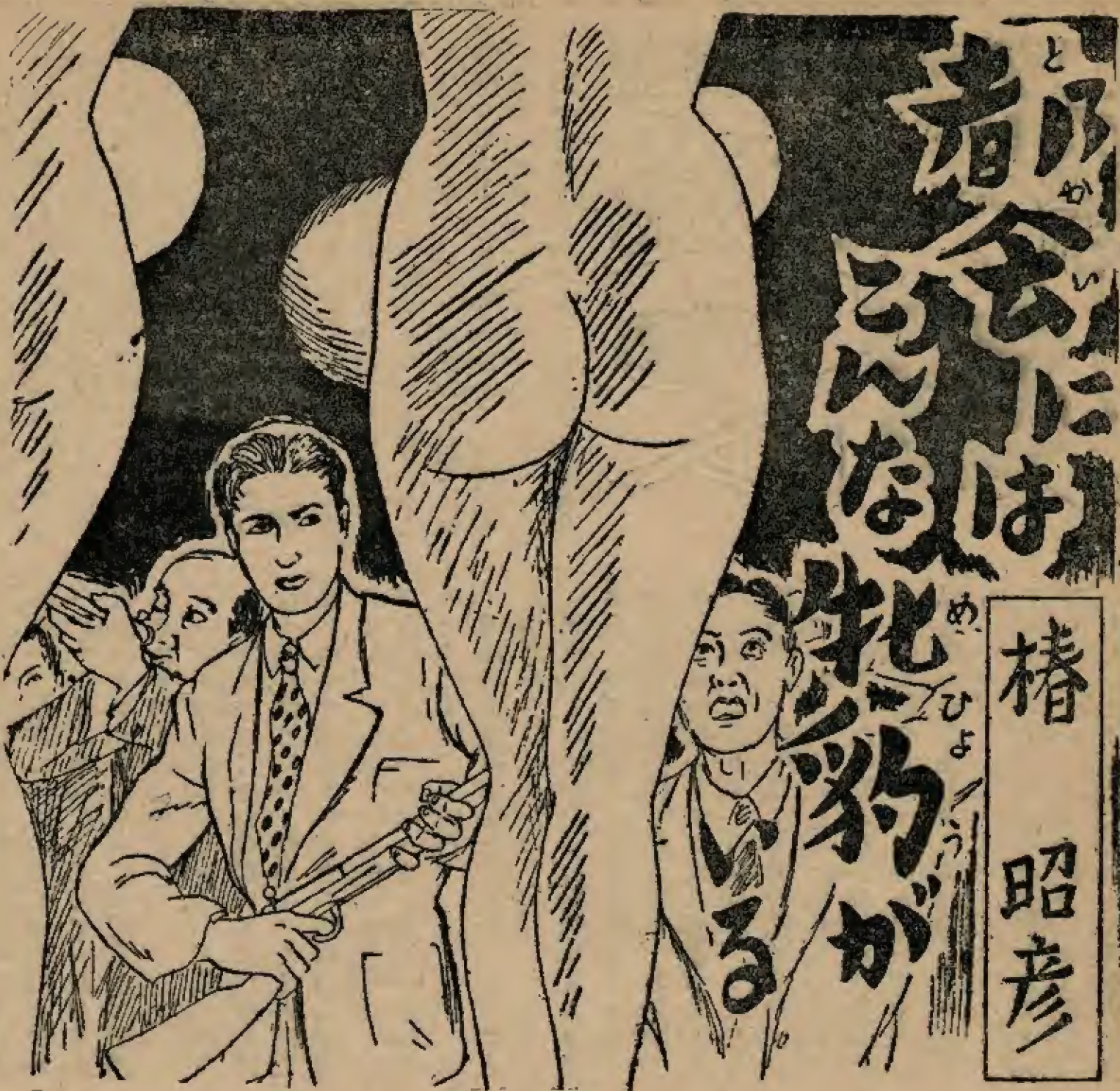
……みんないゝ人なのである。憎んでい

ゝ人など、この世の中に誰一人もないので

ある。五月の美しい星空の夜であつた……

昭彦桃色劇場探訪記

椿 昭彦



「超戦後派お嬢さんを尾行する」が予想外
讀者諸氏の反響を呼び、聊か喜色満面の筆
者は、再び編集長の命を受けて、今宵颯爽
として一刻千金の春の黄昏へ飛び出して来

た。
街は櫻景気で陽気に浮かれ、頬撫でるそ
よ風さえも、妙に不思議な悩しさ、えある
況して舗道の男女のそよる歩きは、筆者で
なくとも、独り者なら、見渡す限りの濃厚
なアベックに

「畜生ッ、うまくやつてがらア」
と羨望の舌打ちに呻きかねない。実際、
私も因果な役目が無ければ、ハイボールの
一杯もひつかけて、可愛い、ガール・フレ
ンドの腕の一ツも組んでみたい。

明眸のように媚の虹を点滅して、喫茶店
あり映画あり、青春に囁き掛ける夜の公園
も、自由思潮を葉蔭に漂わせて、もうすつ
かり、恋のお膳立を整えている。いや、緊
湊一番、享樂の軌道に拍身をかければ、燃
え立つような逆さ海月が、赤いネオンで招
いている。

「温泉ホテルか悪くはないなア」
フ、フ、と、独りで妄想の虜となつて、
いましがた廻転扉を押して這入つた、若い
アベックの後を見送る。そして、不図、職
業意識に呼び戻された時、皆目、思惑の無
い私は、フランス調のシャンソンの流れる
アベノ橋の繁華街に立止つて、暫く途方に
暮れてしまった。

「扱、今晚の特種だが？」
何うしたものかと、考えあぐんで唇を噛
む。今更編輯長のところへ、素手で歸れた
義理でもない。何はともあれ、特種の片割
れでも拾つて歸らなければ、私の面子も丸
潰れである。困つた！……探訪記者の肩書
の手前、下手にお茶を濁してもいられなく
なり、まア何んとかなるだろう——と、実
はショウチンの足取りで、旭町のだら／＼
坂を降り、其の儘山王町の一團に足を伸し
て、コンクリートのいかめしい城壁を張巡
らす、肉体市場の飛田へと出た。

此処も戦後の風潮に依つて、昔ながらの
籠の鳥も改善されて、翼を伸した夜の不死
鳥群が、妍を競つて遊客の本能に呼應して
いる。

「ネエ、鳥渡寄つてらつしやいな！」
カフェーともホールとも見さかいのない
綺麗美やかな電飾の門口で、極楽鳥みたい
な派手なドレスの女の子が、朱唇をギョッ
と引き歪めて呼ぶ。

「ねえッたら、洋服さん！澄まさないで寄
つて頂戴。うんとサービスするわよ。ホ、
、」
精一杯の秋波に、きどつた標準語を濁ま
せて、一騎当千の覚えの腰をしなを作つて
ふつて見せる。斯うして、私の行手行手に
は蠱惑的な寝台の精が、ワイセツ罪に触れ
るばかりの、淫らな挑戦を繰返してくる。

此の慾情の排泄体を相手に、アダムとイ
ヴになろうと思えば、関西流に謂う一時間
で多寡が五百円どまり、後でベニシリンの
御厄介にさえならねば、鳥渡氣紛れ半分の
一夜妻に心惹かれぬこともない。いや、い
ゝ方に解釈すれば、泥沼に喘ぐ転落の女性
を救う意味柄に於いて、あるいは、慈善行
為？になるかもしれないと勝手な、いゝ不逞
なむほんを慰めてやる。

十数軒、妓楼の前を素通りして行く中に
私は、とある純日本風の、庭木の繁つた門
構えの中の、粹な燈籠を眼敏く見た。庭に
面した吉原廻りの軒燈に映えて、夜目にも
くつきりと松の枝葉の根元に建つ、打水に
濡れた其の燈籠は、自然の浸蝕作用の芸術
なのか、何んと男子の象徴にそっくりなの
だ。

「ほほう！こいつあ一級品だ——」
暫くものゝ見事さに見惚れた儘、始めて
眺めた素晴らしい天然現象の奇抜な形に、
思わず知らず一歩二歩と、妓楼の中庭に這
入つてしまつた。途端に私は、其の燈籠の
傍迄来て、またもや奇怪な立札を発見した

木の香も新らしい立札には、墨痕鮮やかな筆勢で

「パンパンくじあります」と書いてある。

パンパンくじ？——オヤ？私は道に苦笑がこみあげて来た。燈籠の珍奇な姿は、水商売柄、おそらく縁氣をかついだ凝つた趣好だろうと判断出来たが、女郎屋にパンパンが居ることは一寸変だ。それに、宝くじ復興くじ、三角くじ等およそ籤と名のつくものには、万一の僥倖を狙つて一応捨て金をしてきた私である。パンパンくじなんて未だ一度も聞いたことがない。

「これはどうやら、特種になりそうだぞ！」

嗤嗟に心が躍つてき始めた。

二

絶体に泊はつけないと釘を打つて登楼て見ると、間もなく相方の女の子が、こぼれる程の愛嬌を湛えて、ドレスの裾許を曳摺つて現われた。写真と違つて実物が玄關の控えの室にウヨ／＼屯して居るのに、故意とお茶子のおばさんに委したのは、私の獵奇趣味より、特にパンパンくじに足を引き止められた、記者としてのこれからの探索の自由を欲したからである。

お茶子のおばさんに訊いてみるとパンパンくじとは、此の色町の界限に住む、未亡人達のアルバイトだそうである。戦争で良人を喪つた、若い寡婦ばかりが合意の上で特種な余興を演じているらしく、それを俠氣のある此処の楼主が、臨から応援やら指導に當つてやる傍ら、好色趣味の遊客にも密かに宣伝しているのだと言つた。

「然し最近又、其の筋の取締りが厳しいようだが、危い綱渡りだな」

私がそれとなく水を向けると、お茶子は驚喰えと言ふ顔付で、

「せやけど、道頓堀のストリップ・ショウみたい、えげつないことおまへんで、こつちは素人だんがな。だいたい後家はん連中にこんな事をさせるのが、政府の無責任からだつせ。雀の泪ほどの扶助金で、どないして喰べて行けまんのや」

とさすがに楼主の一族郎党の事はあつて、警察や政府を眼の敵のように喰つてかつた。

安物の珈琲を置いて「ごゆつくり」と、お茶子のおばさんが立ち去つた後、相方の女の顔を改めてみる。そして、

「キミは初店だそうぢやあないか」と訊いてみた。

「そんなに初心にみえます？妾、これでも四箇月勤めてるんですわ」

「へー、それぢや初店はお茶子の術だつたんだな？」

「は、は、丁度今の話みたいね。表面は生活に困つた未亡人にして、都合の悪い場合の言い遁れにしているのと一緒だわ」

「？後家さんの余興とは違ふんだね」

「警察の取締りが五月蟻いからよ。皆んな事務員や女店員から墮落した半処女ばかりだわ」

「は、は、半処女はよかつたね。然し、それにしても、庭の所のパンパンくじの立札は、ちよつと其の点まずいなア」

警察の取締りがうるさいのなら、何も眼に着き易い庭の真ん中に立てなくても、よさそうなものだと重ねて訊くと、

「あれは一時遊廊で派行つた、元祿遊びへ眼かくしをして、数人の中から自分の相方を選ぶ」を現代式に書き替えただけなのよ」

と取締りの対象にならない訳を話してくれた。つまり楼主は、客の注意を惹く効果を狙つての看板なのだが、実は其のパンパンくじなるものが、現に此処では売られていて、客の素性に危険がなければ、お茶子も女の子も分付で密かに売っているのたと言ふ。

「一枚幾ら？」

「五十円よ。でも当然なくても怒らないでね」

女は笑い乍らハンドバッグを取つて来て五枚の祝儀袋のような、小さな包紙を渡してくれた。くじ運の悪い私が、然もたつた五枚のくじで以つて、好奇の夢を實現しようと言ふのだから、何う考えたところで金的を射止められそうなどがない。が、兎も角話の種に其のパンパンくじを開いて見たすると、五枚の中に、私の諦め半分的眼を喜ばす、幸運の「松」「竹」「梅」が三枚揃つて現われた。

「あら、當つた！」女が頓狂に叫ぶくらいだから、余程不思議だつたに違いない。呆れ顔で、くじと私を交互に眺める女の掌にいきなり百円の素見代を握らせると、後が見ずに妓楼の廊下を走つて出た。

三

パンパンくじの裏面の略図をたよりに、よりやく目的の簡易ホテルをさがし当てる

と、成程玄關の外燈に「松竹莊」の名が架つている。ボーイが居ないので、キヨロ／＼と辺りを見廻している時、

「いらつしやいませ」

と、鄭重な物腰で若い女が現れた。一応客を迎える一般ホテルの態度と少しも變らないので、黙つて例の三枚のくじを見せてやつた。女の様子がすぐに變つた。警察の者かと警戒して居たらしく、

「済みません、どうぞこちらへ」と払得顔で奥の浴室と書かれた一室をそつと促した。

「此処は風呂場ぢやないか？」

立止つて念の爲に訊いてみた。

「いゝえ、此処が入口なんですの。どうぞ」

たつてそう言う女の後から、一步中に這入つて見れば、こわいかに、浴室どころか扉が二重に構えてあつて、係の女が持参のくじを集めている。

つまり此処でくじを集めて、それと引替

えに、射的鉄砲と十発の玉を入場の客に手渡して、愈々本舞台の余興？とやりに移るのである。いづれを見渡しても、卑しからぬ服裝の中年紳士ばかりが、玩具を貰つた子供みたい、ニヤリと北叟笑んで、射的鉄砲をいぢくつて居る。

「ほほう！これは二百五十円は安そうだぞ」

パンパンくじなると、と多寡をくつて居た矢先だけに、趣好の凝つた前触れを眺めて、ちやちやローマ風呂の連想も一瞬にして吹き飛んだ。調子のよさそうな鉄砲を一挺私も提げて、客の一人となつて次の室に注意をはらい乍ら這入つて行く。まるで白

晝夢の幻想を辿る、痺れる程のスリルを覚えて、緞帳の降りた薄暗い舞台に詰込れる

と其の刹那！固唾を呑んだ観客の眼を睜らせて、スル／＼と緞帳の揚つた舞台一面に、上から、五色の紙吹雪が乱舞し、引

玉が飛び、快速調の歌劇カルメンの旋律に乗つて、ブルーの照明を全身に浴びた、十

数人の肉体美人が滑るように躍り出た。

然も彼女達の扮装は、なんと前を赤いゴム風船が一ツ蔽つていただけで、それが脚を振る度に、フワフワと腰の谷間に大きく揺れる。

「成程ね、あの風船を射撃する仕組みか」やつと訳を呑み込んだ時、ざわめきだした観客の機先を制するように、突然、後ろの拡声器から、うぐいす嬢の声が響いた——皆様に申上げます。皆様方の幸運は、只今、舞台に躍動しております。獲物はズキナス。狙う皆様は夜の騎士。扱て、如何なる官能の夢を皆様方に贈物するでしょうか？銃の番号をお覚えになつて、思う存分お射撃下さいませ——。

うぐいす嬢の説明に呼應して、舞台の裸女達が一列横隊の標的の姿勢をとつた。濃化粧も艶麗な顔が、象かな腰の線と相俟つて、たまらなく男の慾望をかきたてた玉を鑲嵌する者、鉄砲を構える者、手練の腕に氣負込んだ連中は、もう照準を定めている。

「パーン！パーン！パーン！一齊に白い彈道が糸を引いて飛んで行く。腹に当つた。乳房に命中した！太腿のきわどいところに音をたて、数発集中する！それが銃口を揃えた機関銃のように、飢えた其の眼が、皆、白い女の股間を狙っているのだ。其の間髪にんまりと微笑む女の隠し場所が、パチン！と小気味よい音をたて、ゴム風船が破裂して飛んだ。

「わーッ！」と言う喚声がどよめいた。好奇の眼、淫らな眼、淫蕩に酔い痴れた破廉恥の眼が、風船の飛んだ女体を覗こうとして、群めき合つて舞台に到する。だが女は小さな性隠しを着けていて、少女のようにあどけなく笑い、

「当り、十六番！当り、十六番！」

と。始弾の命中番号を叫び乍ら、小指程の白い弾を舞台にかざして射手を探す。其の幸運？の射手が合せて、九名。彈丸には一連番号を着けてあるらしく、同時に二発が命中しても、決して彼女等は見誤りにしない。あちらでも、こちらでも、命中彈の番号を呼ぶ、最高潮の亢奮の顔が、それ／＼鉄砲の番号を讀んで、ふた／＼爆笑が湧き起る。

「当り四番！当り七番！」

「オヤ！七番と聞いて、私は胸をはずませた。鉄砲の銃床を道にして、舞台の明りに照らして見ると、正しく幸運？の番号である。

「しめたッ！」私は腹で叫んでいた。

四

栄冠をから得た十名の射手は、褒賞に、黄金色のセルロイド製の小判の入つた袋を貰い、纏て、最後の余興を見せる、広い日本間に通された。

此処にも凝つた和風の舞台がもうけられていて、幕が揚がると、徳川時代の將軍家の大奥を見せ、夜半を告げる山寺の鐘の音も淋しく、薄明るい燈芯の灯影に映えて、行燈一ツの腰元部屋は、寝息も夢の中に彷徨っている。

火の見廻りの拍子木の音が、時々、もの寂しく聞える中に、部屋障子の音もなく開いて、みめうるわしい一人の小姓が、疊の上を匍うようにして。腰元の寝顔を窺つた。友禪模様の掛布団も艶めかしい、十数人の腰元の姿は、高枕に委ねた白いうなじの襟許は乱れて、燃えるばかりの緋の長襦袢から、胸のふくらみも見え隠れている。

其のあられもない寝姿に、小姓は暫し魅せられた儘、切ない恋路に、身の危険さえも忘れていた様子。

やゝあつて、小姓は一人の腰元の唇を、物狂わしく吸おうとして、ハツとなつて身じろぎをした、恋人が眼を覚ました。愕いた顔が、すぐに歡喜に一變して、癖と男女がいだき合う。其の間、寝て居た管の腰元達が、皆、はじかれたように二人を眺め「あ！銀之助様！」

と、口々に叫んで二人を囲んだ。前から、後からも寄つてたかつて銀之助に御嚙付き、邪恋に朋輩のへだたりもなく、忽ち小姓の銀之助は、大奥の女癖の虜となつた唇を吸う者、胸に抱きつく者、背に身も世もなく崩れかゝる者、恰ら女體島愛慾の図絵だ。其の争いで、腰元達のしごきは解け肩が見え、乳が見え、腿の見える腰の物が夜具の上にはねかえる！

「た、助けてくれッ！」
銀之助は最早抵抗の力もなく、女体の下



で絶叫した。舞台は正に佳境！観客は固唾を呑んで手に汗を握る一瞬。再び時代の感覺を破つてうぐいす嬢の声。

「皆様！お願いでございます。どうか此の美少年の銀之助を、腰元達からお救い下さい。地獄の沙汰も金次第、俠氣と腕に覺えの夜の騎士、皆様方の黄金の力で、果して腰元達は恋を運ぶか黄金を運ぶか、大奥の一夜は既に皆様方の掌中でございます」と思わせぶりだが此の趣好も變つて面白



い腰元達が嬌声を挙げて、女郎蜘蛛のようにむらがつている。斯うなると小判を持つた我々は有頂天。すぐさま小判を驚嘆みにして、舞台を眼掛けて思いきり投げる。バラバラバラッと、女郎蜘蛛ならぬ腰元達の鉢の上から、黄金の雨が散乱する！「あ、小判！小判が」

掴み合つて横倒しになる、取られまいと長襦袢を握る、折重つてどつと争う度毎に肌は次第に露わになつて、黄金欲しさの必死の女体は、其処此処に全裸のきわどい姿を展開する。それが真に迫つてゐるだけに、実に観て居てもドギドギとなる。時間にして、凡そ二十分間。

惜し哉、此処で照明が消えて、幕は亢奮裡にゆる／＼と降りた。果ッ気ないきお物劇だが、それにしても、火を点けて置いてすぐに横から水をかけられたような、心残りの胸の余蘊が、観客を引き止めて帰る氣配もない。

廊下に出た時、さつきのくじを集めた女が、数人の客と話して居た。それも女の写真を見せてゐるので、何気なく覗いて見ると、「旦那はん、え、娘だすけど、何うですやろ？」

と来た。プロマイドにしてはおかしいと思つたら、案に違わず売春のひきこなのだから、然もよく見ると、写真の女は、いずれも先程舞台に現れた標的ガールに、腰元となつた女。舞台ですつかり刺戟した揚句、亢奮

を待ち構えたからめ術の誘惑なのだ。

「ねエ、考へんとげん付けてやつとくれやす。皆んな若こうて、別嬪さんぽつかりだつせ。それに此処は遊廓やペンペン宿と違つて、病氣の心配かておまへんのや、ほんとの素人で女店員はんや事務員はんぽつかりだす」

と切口上は仲々雄弁。ペンペンくじを売出し乍らこれだから、危いもんだ。だが、見るのは無料とからかい半分に、「皆処女だな？」と急所を衝くと。

「へ、へ、処女とは言いまへんが、素人は素人だつせ。嘘やと思つたらいつでも」

あそこへ行つて見なはれ、と某百貨店の売場迄洩す。氣持がフツフツとしてきだした。四千円が三千円に値を落して、尙、実物を呼びかねない氣配に「長居は禁物！」と掴んだ其の手をふりほどいて、「桃色劇場」を飛び出した。

其の翌日。桃の節句を後数日に控えた×百貨店の雛人形売場を偵察して、一人／＼女店員の顔を言葉検してみた。昨夜の話では屹度此の売場に居る筈なので、客を装うて一往復して見ると、居た！まぎれもない写真その儘の整つた丸顔。扮装こそしてないが、彼女の顔にかずらを付けたら、忽ち美貌の腰元となるのだ。それが、いやにつんと澄まし込んで立つて居るので、ムラムラツと惨酷な悪戯ッ氣が起きてきた。売場に近づく、

「いらつしやいませ」

丁寧な物腰しで、つゝましく会釈をする「人形をニツ欲しいんだけど——」

「はい、どんなお人形でございましょう？」

離段をひとわたり眺めて、凝つと私を眺

めてゐる。苦笑がこみ上げてきた。

「腰元と小姓の人形をニツ。子供が是非欲しがるんでね。何んでも今流行つてゐる、銀之助遊びと言ふのがしたいらしいんだ」これだけ暴露せばかなりこたえたろうと手応えの程を盗視みると、途端に彼女の面が赧らんでいつた。

「……………」黙つて、私の顔を睨むように僅かに見た。羞いより私を警戒する眼の方が鋭い。事が暴露れば当然敵首の彼女なのだから、無料で銀之助劇の実演もものに出来そうである。

「昨夜、妾の舞台をご覧になつたのですのね」

腰元嬢はようやく観念した様子で、おず／＼として、伏眼がちに囁いた。

「あゝ見せて貰つたよ。舞台も、そしてキミのあの写真も——」

「まア……」

美しい睫毛をはツとしたように上げて、俄かに乳のあたりをはじませだした。

「お願いですから百貨店では絶対洩らさないで下さい……そのかわり——」

彼女はあたりをはじかつて、今晚、アベノ近鉄のすぐ近くにある、茶房セリシーで七時にお逢いします、と思ふ處の色よい返事だ。

——斯う言う約束では、たゞの一分と遅れたことのない私。誇張でなく、實際初恋の逢良の錯覚で茶房セリシーで彼女と落合つた。見違ふくらい艶麗にお化粧を施した彼女は、百貨店でのあの弱々しい素振りは何処へやら、茶房を出ると先に立つて、電車道を斜に横切つて、とある小路の小綺麗な家に案内した。

「此処よ。一寸待つてね」

玄關から馴々しく奥へ声を掛け、お内儀と一緒奥に消えたが、間もなく、「どうぞ」と二階へ促した。

襖を開けて這入つて見ると、なんの事はない、たゞの座敷。ちよつと、期待を裏切られた感じがたいていではない。其処へお内儀が愛想笑いを泛べて、お茶と生菓子を運んで来た。

「旦那はん、まことに恐れ入りますけど、お座敷料として五百円頂戴出来まへんでつしやるか」

小腰をかぎめて、慇懃お内儀が正体をあらわす。私は思わずムカツとして、

「それぢや話が違ふぢやないか。誰がパンを買ふと言つたんだ」

「いゝえ、パンパンぢやおまへん。純粹の

素人はんの娘さんだつせ。まあ見るだけで

も見てやつておくんなはれ」

益々以つて怪訝話なので、お内儀のすゝ

める儘に襖の押入を覗いて見た。すると押入の内部は八疊程の純日本間で、然も電気の灯影を仄かに照らした絹行燈の枕辺には箱枕に結綿の濡れ羽色の黒髪で、朱色のしほりの蒲団の中には、いつの間にか女店員嬢が、昨夜の舞台その儘に、艶めかしく仰向いて寝込んで居るのだ。

「どうでつしやる、旦那はん。お泊りでボンと手を打つとくれやす」

にやりと妖麗な褥を見返つて、お内儀はまだいゝとも、悪いとも言わない中に、す

つと襖の外へ消えて行つた。後には彼女と私二人。否応無しの渡し舟に乗り掛つて暫く浮世絵その儘の色つばい情緒に見惚れ

ていると

「ねエ……」と彼女は身をずらせて、鼻声にかゝつた小聲で、

「妾に恥をかゝせるお心算？ほんとに今夜が初めての経験なの……よ貴男だつたら後悔はしないわ」

図々しい台詞だが、掛蒲団に顔を蔽つて居るところを見ると、満更、常習犯でもなさそうである。それが真実？なら性病の心配もあるまいと思ひ、私は全身が燃えてき

だした。半歳ぶりの慾情らしい慾情である翌朝私は睡眠不足で充血した眼と、鉛の

ように重い頭で、もう陽の高いアベノ橋の雑沓を、眩しくテレ顔で歩いてゐた。

五百円は兎角安い？が、昨夜一晚中私は男の本能をとうとう満足さすことは出来なかつた。接吻を求めて、其の勢いの情熱で

一挙に最後の一線を突破しようとしたところ、何と彼女が、局部に頑丈な貞操帯を

着けていた。私は其の固い手触りで、オヤ

！と失望すると同時に、一夜の代償にしては安過ぎる、五百円の謎がやつと解けた。

執拗求めると、彼女は終いにすゝり泣いて

「それだけは許して……そのかわり、今夜

一晚どんなにしても構いませんわ」と哀願して、何うしても貞操帯の鍵を渡

そうとはしない。とうとう高いキツス代に

ついてしまつたが、私なら後悔しない……なんて思ひやうな台詞の綾に、不覺に自惚れていた私も一杯喰された訳だ。

大阪ジャングル——其の名にそむかず、夜の巷に妖しく跳梁する、男に挑む獣の中には、斯うした雌豹が幾人あろうか？

甘い夢と桃色の夢

久富 浩司

加住 としを

人とも珍らしいね。」

管理人の老眼鏡の奥で、くぼんだ瞳が笑つてゐる。

「ふん」誰にとつつかず笑つて

から、つんと澄ました彼女は、ぎし／＼鳴る階段を上つて行つた。

志津子と二人で借りてゐる部屋は、鍵がかかつたまゝである。

「ちえッ、何してんだろ」

暗い廊下に汚点のような影が落ち、くると踵で廻ると、彼女は階下に降りた。

北の隅は靖彦の部屋である。ノックしよと立止ると、男と女の

声を無理に殺した話ぶりが、ひっそりと洩れて来た。女の声にも聞き覚えがある。

つい先刻の明るさは、急に彼女の顔から消えた。美しい眉根がぎゅ／＼と寄せられ、矢庭に扉の把手に手を掛けてゐた。

粗末な木のベットのの上に、靖彦と志津子が、たつた今陶酔が覚ため許りの、気倦い快さに浸つて

いるところだつた。

跳び起きた志津子は、瞬間血の引いた顔を向けてゐた。

「志いちやん、よくもこんな事したわね。」

叩き付けられた言葉に、志津子は顔を伏せた。慾情の名残りに、

ほんのり赤みを帯びた円い肩が、小刻みに震えている。園子に隠れて悪い事をした、罪の想いに戦っているのであつた。

「僕が悪いんだ、」

靖彦が是も奮ぎめた顔を昂然と掲げて、志津子を庇うように言う

「あんたは何も知らないのよ、志いちやん彼方へ行つたらどう、言

い訳はあとよ」

です。」

「お前、面白半分でこんな豫業を選んだのかい。大した度胸におなりだね」

園子は、わざと焦点を外らさうとした。然し志津子の頭が大きく振られた。

「そうぢやないんです、姐さんに悪いと知つてながら……」

「ふん」鼻で嗤つた積りが、中途で消えた。

「とにかく、出てつておくれよ」シミーズ一つの志津子は、椅子に掛けてあつたワンピースを引つ

かぶつた。園子と揃いのグリーン

赤いマフラーをいつまで振つて名残り惜しむか あの娘の馬車は夕暮の微笑に映えた疎水ばたの柳には、竹色の新芽が萌えていた感傷的なリズムをハミングに乗せながらも、園子は、明るい気分で靴音を響かせる。古ぼけた木造のアパート、早線荘の灯が、彼女を待つていた。

「鍵は志い坊が持つてつたよ、二

て、

「逃げる気かい、部屋で待つてな話があるんだ。」しおくと、志津子は出て行つた。

「あんた、一体何時から、あたいの眼を誤魔化してたの。靖ちゃん」

優しく、と思いながら、詰問してみる。

上眼使いで、突つ立つたまゝの園子を見る靖彦の眼に、オーバ釦の金色が、きら／＼と突き刺さる「二ヶ月程前からだ……」

二ヶ月の間二人に欺かれていた口惜しさが、急に憤りを新たにし園子は頬の筋肉の引き吊るのを覚えた。カーッと血が騒いだ。

「見損つたわ、碌で無し。」

平手が靖彦の頬に高い音を立てた。瞬間、その昔に、はッとしたのは当の園子だつた。

殴つてしまつた、と思うと同時に、蒸し暑いあの夏の一日が、まざ／＼と蘇つて来た。

二

海一つ隔てた向うから、動乱の足音が脅かしている、と言うのに午後五時の繁華街は装いも華やかな女達で群れている。その中でも園子と志津子の、一見しても金のかゝつた装いは、すれ違う娘達の眼を集めていた。

羨望と嫉妬と、軽蔑と嫌悪と、その総べてが入り交つた眼であるあれバンスケね、と、その眼が皆

語つていた。

痛い程險しい視線の中を、二人は意識し乍ら誇らかに歩いた。優しく親切で、いつも明るいGIが二人の恋人であり、お客でもあつた。二人共決つた男があり、思い通りの物を買つてくれた。

恋情では無かつたが、三日会わねば、やはり男の上が思われる、そんな仲なのだ。異国での旅情に彼等が愛情の対象を求めた時、同じ国の男達に絶望していた彼女等は、その愛情に抱かれたのである

四條通で装身具を買ひ求める積りだつた。河原町の交叉点を西へ渡ろうとした時、西から歩いて来たサンドイッチマンが、車道の辺りで足を纏れさせ、ぼつたり横倒しになつた。躓きそうになつた志津子が、あらと、声を立てた

「何によ」と振向いた園子の眼に蒼白い男の横顔が映つた。「うちのアパートの人ぢやないの起したげなさいよ」

「厭だわ、人が見てるし、」

警官が走り寄り、「脳貧血だな、一寸手を貸して下さい」

園子は手伝つた。警官が男のポケットを探り始めた時、

「私、知つてる人ですわ」

と、言つてしまつた。警官は救われたように、男の重い荷物——看板——を角の菓子屋に預けて、

空車を眼で追つていた。「僕、朝つかから食つて無かつたん

です」

車を待つ間、彼、靖彦は、頭を掻きながら言つた。悪びれない態度だつた。

「何アんだ、ぢや車なんか要らないわ、志い坊、何か食べようよ」

園子は二人を連れて、新京極の裏へ入つて行つた。ふと男へ好奇心が動いたのだつた。

あと、一年足らずを、工科大学の学生靖彦は、働きながら学ばねばならなかつた。実験だけでも時間が足りぬ程忙しいのに、アルバイトせねばならない。極つた時に飯を食ふ事は少かつた。昨夜、追いつ出ず、と脅かす管理人に室代を払つたら、今日は飯を食ふ金が無かつたのだ。学ぶ為には生きねばならない。園子にも生きていれば同じ年頃の弟があつた。彼女の唯一の肉身だつた。



「姉さんの、体を売つた金で勉強なんか出来やしない」

弟は未だ十九か二十で、そんな生意氣な口を利いて、給仕になり夜学へ通つた。だか胸を患つて死んだ。彼女マリーと呼んで愛してくるGIのジミーがいなかつたら、彼女はもつと荒んでいたかも知れない。

疲れ切つた靖彦の顔が他人事に思えない。

「一休月に幾ら要るの」

「六千四百位かゝるんです」

「それ位なら、あたいが上げるよ——」

靖彦よりも志津子が、驚いた顔を上げる。

「どうして、だつて頂く訳が……」

「わけ？そんなものが要るの、面倒な人だわね」薄く笑つて、

「好きだからよ、あは、い、い、何

んて顔よ。冗談さ、あたいの弟があんた見たいになつて死んぢやつたのさ。ばかげてるよ、ね」

「姐さん、あたしにも出さして」志津子が口を出した。二人は三千円づゝ持ち寄る事にした。何か弾んだ氣持だつた。

「お前も粹狂だね、あたいの道楽片棒担いでさ」靖彦が出て行つた後、園子は笑つて言う。

「あの人を弟の代りに一人前にしてやりたいよ。無傷でね」瞳が、窓から遠い、ざら／＼と青い空を睨めていた。

極つた男が出来た迄は色々の過去があつた二人、男を見る眼は唯一の武器である。靖彦に重責を感じるのは、理窟抜きのお勤である。「きれいな氣持で親切する、つて良いもんだよ。あたゝい選にだつて

純な気持、持ちたい」

念を押す園子の言葉の意味を、

志津子は感付いていた。微かな反抗を感じて、

「あたしにはウイリーがあるんですよ」

わざと憎体、横眼で睨む志津子の頬をちよいと、小指で突いて園子は立つた。

三

もう直ぐ卒業式を待つ許りで、お金も要らなくなつた、と靖彦は言つていた。然し勤めるにも身の廻りに金が要るのだ。園子は、少し纏つた金を用意していた。

ジミーも何時出征するか判らない。今の内に出来る丈けの事を靖彦にしてやりたい。ジミーには少しも疚しい気はしなかつた。もう直ぐ一人の男を立派な学士にするんだ、と彼女は誇らしく思つていた。

それが今夜の彼女を浮きくさせ、センチな歌も口ずさましたのだ。春を言触れる柳の芽が、彼女の心を暖かしていた。

此の頃、志津子が何か隠し事をしてゐるのを、園子は氣付いてはいた。然しお互いに傷だらけの女であつてみれば、何を問い訊す要も無い。まさか靖彦と、とは思つてもいなかつたのだ。油断とは考へたくない。

「あんだ、それでも人間の積り」荒々しい言葉が彼女の口を突い



て出る。

「あたいは、そこいらの子供の言うラシャメンか知れないさ。だけど恩を仇で返すのは大嫌いだ。志津子もだ、ふざけやがつて」

きりりと眼尻が吊つた。判り切つてゐる筈の男への不信が言い知れぬ絶望感となつて彼女の胸の中を掻き廻す。

彼女の弟が死んだのも、半ばは女の為だつた。体をこわす程働いても、と、彼女が時折与える金を弟は、

「駄どもが姉さんの体から血を絞る金だ、俺は学問に使いたくはない」

と、筋の通らぬ理窟を附けて、

その金で女を買いに行く。

その台詞を聞いた時に、かッとして、

「ばか、何を一人前の口利くんだい」

と叱り付けたが、実は予てから彼女の金で女を買つた、と告白されてゐるのだつた。

「此の金の為に姉さんがどんな事をされてゐるか。苦しくて堪らないんだ。俺はね、姉さん。女と寝てると、何だかざまあ見やがれつて気になるんだよ。誰に向つて吐く睡か判らない。自分にかゝつて来るのかも知れないんだが……」

姉の体を金で自由にする男共の所行が憎み切れない、弱さと、も

どかしさの内証する苦悶であつた「俺はもう駄目だ、姉さんに会うのが一番辛い」

その呻きの中に、彼女は、始めて愛慾の淵に溺れようとする弟を感じた。

女と会う金を工面する為に彼は公金を拐帶し、馴染の女と逃げた園子は、その日の新聞を細々に千切つた。直ぐ捕つた弟は、半年後に拘留所で血を吐いて死んだ。愛慾と労働と學業が、彼の体を蝕んでいたので。

弟も、そして靖彦も、愛慾には勝てない。急に靖彦が薄汚くさえ見える。童貞の光は既に此の男には無いのだつた。

「済まない、と思つた。だが……あゝ、僕は意気地無しだ。自分に勝てない、当り前の人間なんだ。あれからは学問以外に考える事が無さすぎた。時々、訳の分らない嵐が吹くんだ。どこから吹いて来るのか、何故吹いて来るのか、頭がじん／＼鳴るようだつた。そんな或る晩に、志いちゃんが遊びに来た。僕は……」

園子の瞳には、今、足下に俯伏して熱い涙を流している靖彦の姿が、志津子と抱擁している彼の幻影とダブつて行つた。

夜の静寂に無気味な余韻を震わせて、独白が続く。

「僕は……、姐さんに叱られるつて言つたのを、無理に……。僕は厭だつた。志いちゃんの心まで墮

落させた。二人で泣いた時、涙が塩辛かつた」

彼女の思考は次第に茫と霞んで行く。彼の言葉が耳に入つて来るのに、意識に残らないのだつた。

闇の中を行くように頼りない気分であつた。その闇の中から、しん／＼と鳴つてゐるものがある……

彼女は自分の錯誤に氣付いた。靖彦が童貞だつたのは、機会に恵まれなかつたからで、童貞で在りたいと意識したのではなかつた。

それが人間の真実の姿であつた園子の知つて来た男達が童貞で無かつたので、靖彦を貴いものゝように思つて来たが、今は彼女の描いていた幻の機關が、惨めに崩れて行く思ひであつた。

「おばかだよ、あたいは」

口の中で呟いてみる。自分の甘さが哀れであつた。彼女の本心は貧乏しても向上心を失わない此の男が、好きだつたのだ。恐しい貧乏に屈せず戦つて行く強さが清潔であつた。金の為に貞操を溝の中へ投げ込んで悔いはなかつた自分の、二十才前後を振り返つて、彼の童貞が羨しく、いつそ自分の手で奪いたかつた。

然し、こんな汚れた体で無く、まともな生娘と一緒にしてやりたいたいんだ、と、まるで親身の姉のような氣持を殊勝らしく持つても見て、自分の心を抑えて来た。

志津子を牽制したのも、一つは、自分自身を縛る為であつた。今は

それも無駄になつた。総べての徒勞を悟ると同時に、彼女の胸の中に勃然と、愛慾の情念が萌して来る。道徳的な制禦で、恩義も抱負も、総べてを超越して人間を狂わせる、衝動的な発作であつた。

廻り、オーバーを脱ぎ棄てた。ワッピースの釦を手荒く外し、すっかり頭から脱いだ。どこか引つかつたのか、釦が一つ千切れ、ちんちんと音を立て、床に落ちた。志津子に負けない、白く艶やかな、喉から肩の肌が光る。胸の隆

起が、激しい鼓動につれて、ぶる／＼と震えた。

「さあ」

声が喉に絡まるのを、無理に振り絞つて、

「そんなに女が欲しけりや、あたいのも上げるわよ、どう——」

どさつと体を投げ出す音に、靖彦は、はつと振り向いて眼を瞠つた。瞬間、涙に濡れた瞳に神経が集中し、陰火のような閃きが、とろとろと燃える。

「何ぼんやりしてるのさ、恥づかしい柄でも無いのに、それともあ

たいじや駄目かい」

大切な人形をこわされた子供がその残骸の一片迄も、自分で泣きながら踏み躪るように、彼女は狂ほしく苛立つていた。

罪の意識に泣きながら抱擁した志津子と靖彦の、その抱擁は救われても、園子のそれは、救いの無い暗さであつた。その暗さが彼女を、尙苛立たせるのだ。

接吻考現学

風流太郎

「違ふよ、パパとお帰りのキッスをしただけなんだよ。」

「あなたが、あそこでキッスした居た男の人誰れ？」

「知らないわ」

「そんな莫迦な！」

「心配要らないわ。口紅の買溜はうんとあるから……」

×

「停電がこんなに長いのなら、暗いうちにキッスするんだつたな」

「まあ、あなたつたら、いやですわ！こんな所でキッスなんかして……誰も見て居ないぢやないの！なたちやなかつたの」

「だつて、口がきけなかつたんですもの」

「うん、この口紅買つたら、実物見本を押して呉れたんだ」

「まあ坊や、その唇はなんです、男の子のくせに口紅なんか塗つて

「お、あなたはふるえて居ますね。僕と燃ゆるが如き接吻第一号に、流石に純情の乙女らしく……」

「どうしたんだい？」

「昨夜ね、彼女を誘つて、久し振りに映画を見に行つたんだ。そして、途中で、停電しやがつたんだ」

「ああ、何と言う甘味なキッスの味だろう！」

「ああ、御免なさいね。あたし、うっかりして、飴玉を捨てるの忘れて居たんですもの」

×

「まあ坊や、その唇はなんです、男の子のくせに口紅なんか塗つて

「お、あなたはふるえて居ますね。僕と燃ゆるが如き接吻第一号に、流石に純情の乙女らしく……」

「どうしたんだい？」

「昨夜ね、彼女を誘つて、久し振りに映画を見に行つたんだ。そして、途中で、停電しやがつたんだ」

「ああ、何と言う甘味なキッスの味だろう！」

「ああ、御免なさいね。あたし、うっかりして、飴玉を捨てるの忘れて居たんですもの」

「あたし、おしつこが出そうなんですもの」

「そんなこと位……」

「うんさ、彼女の奴、風邪をひいて、マスクをしてやがつたんだ」

「あなた、彼氏と郊外へ、たつた二人でドライブするつて言うけどあの男、要心しなきや駄目よ」

「大丈夫だわ。あの男、まだ新米で、片手で運転して片手でキッスするなんてこと、絶対できないんですもの」

「あなたはいいつも、あんな男にキッスされたら、男の舌を噛んでやるつて言つたのに、何故、やらなかつたの？」

「坊や、先刻ね、おちさんがキッスして居た女の人、誰だか知らない？」

「あなた、彼氏と郊外へ、たつた二人でドライブするつて言うけどあの男、要心しなきや駄目よ」

「大丈夫だわ。あの男、まだ新米で、片手で運転して片手でキッスするなんてこと、絶対できないんですもの」

×

「あなたはいいつも、あんな男にキッスされたら、男の舌を噛んでやるつて言つたのに、何故、やらなかつたの？」

「坊や、先刻ね、おちさんがキッスして居た女の人、誰だか知らない？」

「あなた、彼氏と郊外へ、たつた二人でドライブするつて言うけどあの男、要心しなきや駄目よ」

「大丈夫だわ。あの男、まだ新米で、片手で運転して片手でキッスするなんてこと、絶対できないんですもの」

×

「あなたはいいつも、あんな男にキッスされたら、男の舌を噛んでやるつて言つたのに、何故、やらなかつたの？」

「坊や、先刻ね、おちさんがキッスして居た女の人、誰だか知らない？」

「あなた、彼氏と郊外へ、たつた二人でドライブするつて言うけどあの男、要心しなきや駄目よ」

「大丈夫だわ。あの男、まだ新米で、片手で運転して片手でキッスするなんてこと、絶対できないんですもの」



「だつて、自分の舌を噛んぢやうんですもの！」

「あなた、あんなに誰とでもキッス

「あなた、あらいやですわ、おじいさん、あたしの入れ歯を返して下さいな」

— おはり —

淫獣と美女をめぐる怪奇實話

難波船の怪談

竹中 英三良



一、屍臭と白骨の部屋

焼けつくような陽光を浴びて、巨大な起重機に取りつけられた巻上機が軋るような音を立てて廻轉している。私は甲板に立つて不吉な前兆を漂わせた海面をじつとみつめていた。

大きな渦巻きが海面に湧き起つた。一心にみつめていた私の眼に、忽然と異様な怪物が映じた。海洋丸の痛ましい骸だつた。

海洋丸は三年前、事變のまだ起つていない朝鮮に向けて往復していた一千噸の貨物船である。沈没当時新聞が報じたところによると、乗組員の誰一人として完全に脱れた者がなく、船と共に海底深く葬り去られてしまつたのだ。

気味悪い海藻が甲板一面に生え、海藻は船側を充たし、在りし日の面影はどこにもみられなかつた。

私は五六人の部下と共にボートに乗り、引揚げられた海洋丸へ乗りこんだ。

「用心しないと海中へ滑り込むぞ！」
私がそういつた程、甲板の上は危険で、うっかりすると足をとられて海中へ投げ出されそうだつた。

木造の部分は、すべて朽ちていたので、腐つた棺桶の中へ片足を突込んだように不気味だつた。

私達は、注意をはらいながら排水作業にとりかかつた。

ところが、排水作業を終り、一應船内を改める必要があつて部下に命じた私は、妙な報告を受けとつた。

入口の扉を固く閉ぢた、まだ浸水してない一個の船室があるというのだ。

私は大きな好奇心を覚えた。その報告が真実なら、船室の中で、海水を防ぐため努力した何人とも知れぬ数人の白骨死体が轉がつてゐる筈である。

私は好奇心のため、船内へ入つていつた真夏だつたが、船の中は墓場のように冷めたかつた。鉄の壁は泥にまみれ、まだ乾ききらない海藻が執念深く一面にくつついていた。私は、この上ない恐怖に襲われた。今にも眼前に怨霊が現れやしないかと思つた。しかし、一度湧き起つた好奇心を止めることができなかった。

そのとき、足を濡らせて、私は、床へもんどり打つて倒れた。服は汚れ、その部分が妙に冷めたので不気味さが一層ひどくなつた。部下を連れてこなかつたことに不安を感じて引き返そうかと思つた。が、勇氣を振り起こし、なおも船底へ降りていつた。

恐怖と好奇心の混乱した中で、私は目的の部屋に辿りついた。足が打ち震えた。入口の扉は、部下の報告どおり固く閉ぢられて、表面に海藻が密着しているの、ハンドルを持つて強く引張つても手がつかつるにばかりだつた。

その時、天井から、ボタリ！と冷めたものが首筋へ落ちた。私はビクッとした。心臓が激打ち、血液の循環が一時停止したかと思つた。落ちたのは海水だつたが、なおもその驚きは止まなかつた。

扉が開かないので、用意の金槌で力一杯叩いた。すると、元來ならボキリと折れる筈のものが、半ば腐つていたのか、ボコンと嫌な音を立てて大きな穴が開いた。と同時に、むうつと、凄じい悪臭が鼻をついた。

屍臭だつた。

なんという胸の悪い臭いだらう。まるで腐つた卵のようで、思はず吐きそうになつた。私は、五六歩ばかり飛びのいて、ハンカチで鼻を掩い、そおつと、扉の破れ目から中を見渡した。そこに何物も認めることはできなかった。

部屋の中は、ひっそり、かんとしていた。左手に立派なベッドがあり、その上に二枚の毛布が重なつて中央が高くふくれ、その上に一個の額がのつかつていた。

右手には机、椅子、鏡台、いろいろな化粧道具、時計、花瓶などが処せまいまでにあるいは床に轉がつて割れ、あるいは机の上に轉がりして、まるで大地震の跡のようにならなかに散らばつていた。品物の上等な点からみて、この部屋は高級船員のものらしく、その主が、女性であらうことは容易に想像された。

だが、その臭気がどこから発散している

のか、分ないので、私は、じろりと注意深い視線をベッドに集注した。

私はベッドに近づいた。毛布を取り除けようと手に触れた瞬間、何となく重い感じが伝わつてヒヤリとした。

どうも、このベッドに死人が横たわつてゐるらしいのだ。

私は眼を閉ぢたい思ひので、いきなりその毛布を取り除けた。

激しい臭気がパツと部屋一杯にみちて、私は、あッ！と叫んだ。

なんという奇怪な場面だらう。白骨が、しかも二個の白骨が互いに抱きながら横たわつてゐるではないか。それはもう人間ではなかつた。人間の死骸というよりは、なんだか、もつともつと異つたものであつた。それに驚くべきことには、二つの白骨のうち、一方は、まるで佝僂のように背が彎曲しており、一方は、腰部の異状な発達からして女と推察された。

「心中じやないだらうか？」

私はそう思つて、ふとベッドの下をみたとき、黒衣に包まれて横たわつてゐる異様なものをみとめた。そして、黒衣の裾から何か白いものが、にゅつと出ているのに気がつくつと、思はず夢中になつて逃げ出そうとした。

が、なおも勇氣を振り起こして、覆いを取り除いてみると、正しく完全に白骨化した死体であつた。

「布にくるまつて死ぬなんて妙だな？ 殺されたのじやないか？」

と、そのとき、私は重大なものを発見した。それは、色あせた血潮？ が、一面に擴つて印されてゐたのである。どうも白骨から吐き出されたものらしく、更に怪しいのは、手形の血跡が薄く、まだ消えないで床に残つてゐるのであつた。

それから、更に、色々なものを発見した。六連発のピストル、血痕のある鋭いメス、そして、一個の美しい女子用の便箋であつた。はじめの二三枚がめくられていて、乱暴な男の筆蹟で何か記してあるのをはつきりみとめることができた。むさぼるように眼を注いだ。

——私は今、死につつある——。

なんという怖しい言葉であらう。私は更に次の行を読み続けた。そこには、あまりにも怪奇な、小説的な物語りが記されてゐた。三つの白骨に関する謎を解く鍵をあたるものであることは十分に察しられた。

二、臙にかすむ

美女の面影

私はいま死につつある——。

奇蹟的に、この手紙を拾つた者は、これから物語る事件にたいして理解と、正しい判断をしてくれることと思ふ。

私は春木千吉という若者である。が、私をひとめみた者は、若者であるとは思わないうだらう。それほど私の顔は酷いものであつた。

鼻は低く、不恰好に空を仰ぎ、怒るとそのあぐら鼻は、更に上を向く性質をもつてゐた。おまけに、左の眼を痛めてゐたのである。一点をみるに、首を右に傾けたり左に曲げたりしなければならなかつた。その様子がおかしいといつて皆がよく笑つた。

それに頬骨が高く、口が大きく、顔一面にひげが生え揃つて、更に悲しいことには右の眼から頬にかけて、大きなあざがあつた。

「お前は森の人間をつくりだ！」

そういつて笑われた。

また、私は佝僂男であつたから、四つ這いと何等異なるところがなかつた。

海洋丸の船員達は、私を仲間に入れることを恥と考え、また、人情を知らぬ彼等は私をまるで奴隷のように酷使した。

私の体は毎日綿のように疲れ、このまま死んでしまつたなら、どんなに幸福だらうと思ふことが毎日続いた。海面をみつめながら、ぼんやりと一人で涙ぐむことがよくあつた。

船長は三十歳位の若い男で大男であり、学問はないが残忍性を帯びた人間だつた。海の荒くれ男達も、彼の前にはさすがに二の足を踏んだ。

二三年前に親父の船長が死んだので、その後をうけて船長になつた。

この暴君は、海の荒くれ男どもを指一本



で支配し、命令をきかない者は海中に投げこんで溺死させようとする恐れのない男だつたから、私のような人間などはそれこそ、虫けらのように思っているもので、もし意欲でもしたら、ひねりつぶさないと限らなかつた。

「ゴリラ！」

船長は、私をこう呼んだ。休息をあたえることを惜しみ、残酷に使役したが、一月の給金も、ろくにくれなかつた。

「お前でも金の使い途があるのか」

私は反抗心を抱いたが、彼の逞しい腕をみると、熱い涙をのんで黙っているより仕方なかつた。

夜が訪れてきた。

私は十時頃、皆が寝静まるのを待つて甲板へ出た。月が海面に映えて美しかつた。様々な過去が思い出され、何かこう、気が変になつたように頭がぼやけてきた。だがじいつと海面をみつめてみると、次第に心も冷静を加え、自分のとるべき道をはつきりみとめた。

そうだ！私は死のうとしているのだ！

今は亡き両親や、故郷のことや、懐かしい思い出が次々と浮んできた。私は、もう死にたい。何もものも恐れはしなかつた。

上衣を脱いで甲板においた。一度青白い海面を覗いてから、ズボンのかぐしに入れた。おいた薬瓶をとり出した。麻酔剤であつた。海中で苦しい目をしないための用意だつた。

私は、とうとうそれを口にしました。

そして、いきなり欄に片手をかけて海中へ飛び込んだ。いや、飛びこもうとしたのだ。その瞬間、誰かが私を危く引き止めた。私は甲板の上へころがり落ちた。

私は激しい興奮から、抱き止めた者をみようとして急いで立上つた。

「あッ！」

私は意外なものをみた。いまだかつて、私のみたことのない美しい女が、月光に照らされて女神のように立っていたのだ。

私は眼がくらんだ。口にした麻酔剤が早くも全身に廻つてきたのである。そして、

美しい女の顔が朧にかすんでみえろと、やがて、何もわからなくなつてしまつた。

幾時間かの後、私は夢の国から我に還つた。ベッドの上に寝かされていた。船長や水夫長と、もう一人見知らぬ女が立っていた。

女は私の顔をみつめながら

「気がついたらしいですわ」

といつて、その柔い手で私の額に触つた

私は異様な感覚に、胸の奥底が大きく鼓動するのを覚えた。

死から生に戻された瞬間、もつとも大きな印象が、その女の手であつた。今に思え

ば、それは新しい人生の経験だつた。私の一生を通じて最も幸福な瞬間だつた。

三 覗きみた情痴の世界

私は恋を覚えた――

「お前みたいなゴリラが女を恋したッ」

水夫達が知つたら忽ち嘲笑の的にされるだろうが、私は、たしかに恋を覚えたのであつた。しかも、その恋は、まるで火のよ

うに熱烈に燃え上るのだつた。もちろん相手は私を救けてくれた、あの女であつた。

海洋丸に女の乗組員がふえたことは、私も知らなかつたが、二日ほど前に、船長がこの船を去つたので、代りに彼女が入つたものらしかつた。

彼女は好子といつた。こんな美しい女が何故に荒くれ男ばかりの海の生活なんかに入つたのか不思議だつたが、彼女は船長と以前から交際があるらしく、船長のことを

親しげに「留造さん」といい、船長は彼女を「おい」と呼んでいた。

私は、この恋が成功するとは思わなかつた。それは奇蹟でもない限り、この醜い私を、好子が愛してくれる筈はないと自覚していたからである。

それでも、私は彼女を恋した。二十有余年の今日まで、女を知らずに過してきた私である。不可抗力で激しく流出するこの情熱は止めようがなかつた。

私が麻酔剤を口にしておいてベッドに横たわつていた間、彼女は私を看護してくれたのである。これは、私にとつて驚異に値することとで、私の人生始まつて以来の大きなショックだつた。

「なぜ死のうなんて考えを起こしなさいましたの？」

彼女がいつてくれたその言葉は、永久に忘れないであらう。死を決した日から一週間ばかり経つた。

私は甲板で立ち働いていた。時々腹が痛んだが、船長は、あまり長い休養を許してくれなかつた。はげしい労働が再び私を襲つた。その苦しみは以前どころでなかつた

しかし、好子が甲板へ出ている時は楽しかつた。高い欄の上で非常な冒険をさへ演じた、我を忘れて彼女の美しい顔をぼんやりみつめていて、ハツとすることもあつた

食事時には、彼女の姿を最も間近でみつけることができた。みんなが食堂へ集まる時、彼女は、私の食事も運んでくれた。あの白い手が、私の前に伸びたとき、理性を失つて夢中で接吻したくなつた。

草花模様の筒単服にびつたり包まれた胸の隆起と、腰の曲線が、たまらなくなよなよとして、傍へくると、気も遠くなるような



甘味な匂いが漂った。

「ああ、あの柔いからだを——いや、手だけでもいいから、自分のものにできたら——」

そんなことを毎日思っているうちに一ヵ月経った。

好子は私の話にも相手になつてくれた。人間らしく扱ってくれた。しかし好いてはくれなかつた。だが私にとつてはこの上なき大きな喜びだつた。

その頃から私は美顔術を行い初めた。物陰にかくれて、鼻の高くなる機械だとか、あざのとれる薬だとか、化粧水をつけたり美眼液をさしたり、いろいろ試みた。「フ、フ、ゴリラが化粧しとるぞ」

あるとき、船員達がみつてからかつた私は泣きべそをかいで逃げた。幾分でも人間らしい顔になりたい、悲しい願いを無惨に笑われながら、止められぬ私の気持、それは好子に対する激しい恋心のなせる業だつた。

日影淡い甲板に椅子を持ち出し、疲れ果てた体を休めるため、じつと神秘的な海を眺めていたときだつた。ふと、船長室の辺りから女の声がしたので耳を澄ました。

そつと立上り、足音忍ばせて近附いた。医師が手術する時のような細心な注意を配りながら、扉の錠穴から中を覗こうとした。が、運悪く錠穴は塞がつている。

二言、三言、また女の声が出た。好子の声だつた。私は感電でもしたようなショックを受けた。大きな不安が胸にこみあげてきた。

私は床に這つて、泥棒のように扉の裾と床の、狭い空間を利用して中を覗いた。そして、ああ——私は、男と女の二対の



足が向き合つて立つてゐるのをみた。

船長の大きな靴に、ぴつたり爪先をくつつけた、可愛い好子のスリッパをはいた足が、爪先立つていた。接吻の音がした。それから、好子の足が、ひよいと見えなくなつたかと思ふと、ドシンドシンと荒々しい音がして船長の足が視野から見えなくなつた。

ベットが大きくきしんだ。くつくつという好子の笑い声がした。

私は、それらをみているうちに、危く卒倒しそうな興奮を覚えた。扉を叩き破つて飛び込んでやろうかと思つた。しかし好子は強要されているのではないらしい。そう思うと、また別な思いに胸を掻きむしられるような嫉妬を覚えてきた。

それから、しばらくたつて、好子の声がした。

「——惚れてるらしいのよ——いやな男——あんな顔して好いてくれる女があると思つてんのかしら——でも可哀そうな男ね、あたし、とんだ罪つくりをしたわ、あまり親切にしてやるのも考えものね」

これを聞いて私は血が逆流した。奈落のどん底へ突落されたような絶望感を受けた。遂にたまらなくなつてその場を逃げ去るより外なかつた。

寄生！船長と好子が、あんな仲とは気がつかなくつた。恐しい恋の強敵が現れたのだ。大きな幸福を破壊するため——。私は彼と戦わなければならぬ——。

四、狂ほしい慾情の狂奔

それから三週間ばかりも後、私は好子に恋を打ち開けた。船が横浜に着いた日のことである。好子は受け入れてくれなかつた。見事にはねつけられた私は、その苦しさで忘れるため、もう船へは戻らぬつもりで黄昏時にぶらりと街へ出て酒場へ入つた。飲みなれぬ酒を無理にあふつて海岸の方へふらふらと足を向けた。

夕陽は西の彼方に沈まんとして名残りの光を海面に投げていた。真紅の美しくも壮麗な天然の詩景であつた。

白波は寄せては返す、そのほとりを、私は行つたり来たりした。そして、遂にたまらなくなつて砂上に俯伏して泣いた。

やがて私は起き上り、ふとあたりを見廻したとき、彼方の岩の上に女が立つてゐるのをみとめた。好子だつた。

私は、もう、前後も忘れて駆け出した。好子は珍しくも和服で、青みがかつたパツルをさしていた。ほんのり匂うような化粧の美しい顔は輝くばかりだつた。

私は魂を奪われたようにその顔をみつめた。好子は不意だつたので、あッといつて二三歩よろめいた。私の顔が恐しかつたのだ。

「好子さん」

「——」

「なにを、していられますのです？」

「——」

「おりよく、この下を通り合せて、あなたの姿をみとめてやつて、きたのです」

私は、しどろもどろに、呼吸をあえがせていった。

好子は、ちらりと私をみた。お前なんか近寄つて話しかけられては困るとでもいふたようだった。

「ね、どこへ？」

「どこへも行きやしない」

「おひとりです？」

「知らない」

彼女は気味悪くなつて五六歩後退した。そして、くると背を向けると、そのまま立去ろうとした。

「好子さん！」

私は叫んだ。

「もし、あなたが船へお帰りにならないなら、私と、一緒に、海岸を歩きましょうか」

私はそういつて、突然、真裸になつた。

はげしい情熱が炎となつて、猛り狂うのを覚えた。

道子は逃げ腰で鋭くいつた。

「あなたと、一緒なんか、いやです」

「なぜ？」

「他人がみたら笑うから」

私は、ぐんと血の気が頭に上つた。恥かしさと怒りと、悲しみと——そんなものがごつちやになつて気が狂いそうになつた。

「私は——私は、好子さん！あなたと、愛しているんです！」

「——」

好子は恐怖にがたがた震えているようだった。小さな、花びらのような唇から、白い歯が覗かれた。私は、その唇に、接吻したい衝動にかられた。

「好子さん！お願いです！逃げないで、あなたは、私が、そんなに恐いのですか！」

私は、逃げようとする好子に追いつき

あの、柔い手をとつた。夢中で、力一杯握りしめて引き寄せた。かあつと欲情が全身を荒れ狂つた。

「いやです！離して！離してえッ！」

好子は私の手を振切つて、一散に駈け出した。

陽はすでに落ちていた。

白く光る波の寄せては返す砂浜を、足をもつらせながら好子は逃げて行く。この上なく恐いものにも追われているように——。

私はもう荒れ狂つた獣になつて追つかけた。追いつくと、うしろから、好子の、あの求めて夜毎悩み苦しんだ。豊かな胸を抱き止めた。彼女は、物凄く悲鳴をあげてどつと砂浜に倒れた。私も折重なつて倒れた。「好子さん、私は、何も、あなたにしようとは、思つていなかった。でも、この恋を入れて下されば！」

私は、好子の白いのどに、激しい情欲を感じながらいつた。好子は、仰向いたまゝ、私にとられた腕を振り切ろうと身をもたえ白いのどを、激しくあえがせ、

「いやッ、いやッ！」

叫んで、起き上ろうと顔を持ち上げた。

私はのしかかつていつた。そして、彼女の白いのどと、それから、真紅の唇とへ、呼吸もつまるような接吻をした。

波の音も、松並木にそよぐ風の音も、何も聞えなかつた

そのときである。

私は、背後に足音を感じたと思つた瞬間鋭い一撃を後頭部に受けて、あッ！とのけぞつた。襟かみを掴まれて砂上に投げ飛ばされた。そして、恐ろしい怒号を浴びて横つ腹や、背や、脚を蹴られていた。

「くそッ！不具者のくせしやがつて、何んてことしやがるんだ！畜生奴ッ！」

怖しい船長の声だった。

私は必死の力を出して起上つた。はげしい怒りに燃え立つた。彼に対する不平の数々、憤怒の塊みたいになつて叫んだ。

「何が不具者だ！貴様こそ鬼ぢやないか！」

「貴様ッ！船長に口答えしたな！」

「もちろん！」

「何がもちろんだ！貴様が好子を——うぬ！殴り殺してくれろ！」

船長は強く私の胸をついた。私はよろよろと砂上に倒れた。だが、私は猛然と起き上つて、今度は憤然として船長に戦いをいどんだ。

はげしい争いが砂浜で開始された。

私は、好子を制服した以上、既に死を覚悟していた。あるだけの力を出して船長に抵抗した。けれども、悲しいことには、力

強い船長の腕にはどうすることも出来ず、鋭い鉄腕の一撃を喰つて、砂浜に突き倒された。

そして、ゴッソ、ゴッソと脳髓が堅い物体で殴られているのを感じながら、気が遠くなつていつた。

五、嵐に逆上する

淫獣

夜明け少し前、碎け散る白波の海岸を通る者は、顔面から血を流し、右足をひきづりながら悄然として、失神したように歩いていく奇怪な尙僕男をみとめた筈である。私は、我に返つたとき、あまりに惨めな自分を見出して死ぬより辛い苦痛を感じた全く哀れな私だった。重い足をひきづりながら、的もなく足を進めたが、行くべきところはなかつた。船へは帰れない。恋はもうくも地上に敵きつけられた。



私は恋の勝利を得た彼等の姿を想像して
激しい妬妬と憤怒の鬼になつていつた。

好子も世間並の冷めたい人間だつたのだ
私のこの姿をみて笑いなから立去つたので
あろう。だが、私は彼女の肉体を識つたの
だ。長い憧れの的だつた女体の神秘を好子
によつて目覚めさせられたのだ。

私は次第に淫らな空想にふけつていつた
好子を犯したときの、宇頂天な快感を思
い出すと、どうしても、もう一度死ぬまで
に彼女を我物にせずにはおかないと決意し
た。

海洋丸が出帆してから、毎日のように港
にきては、波止場の尖端に立つて、その船
の戻つてくるのを待ち侘びた。時には一日
中そこで過すこともあつた。

二十日あまり経つて、遂に海洋丸は横浜
に入港してきた。

私がその姿を波止場で認めたのは午後四
時過ぎだつた。で、積んできた荷物の陸揚
げ最中を利用して密かに乗り込んでやろう
と思つた。

夜がやつてきた。

私は岸に繋いであつたボートに乗ると海
洋丸の左舷の方へ潜いでいつた、

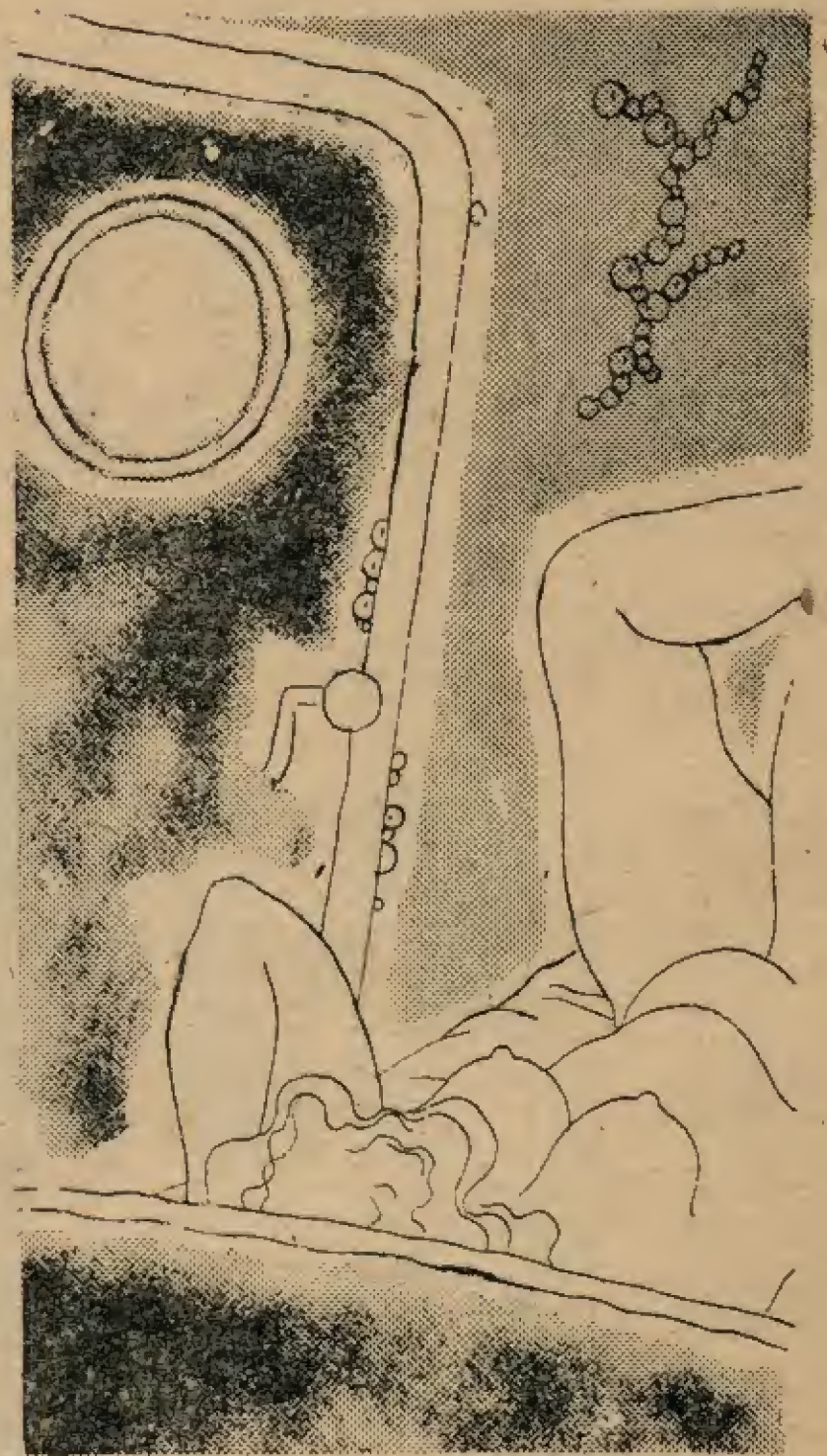
巨大な錨をつけた鎖が海中に没している
ところまで来たとき、その鎖に飛びついて
するするとそれを伝つて何の苦もなく甲板
まで忍び込んだ。

あたりには誰もいない。

私は腹這いになつて昇降口までくると、
そつと中へはいつて行つた。

様子を知つているので、誰にも認められ
ないで幸にも安全に好子の船室へ忍びこむ
ことができた。

好子の部屋はまことに美しかった。甘い



香水の匂いが、懐しく胸を締めつけてきた
鏡台や机も驚くほど豪華なもので、見事
なベッドが悩ましげに私の心をあふりたて
た。銀製の時計、花瓶、それらのものが、
所を得てキチンと飾りつけてあつた。

ふと机の上にある一枚の写真が目に入つ
た。船長と好子と一緒に写したものであつ
た。

私は力任せにそれを床に叩きつけた。

それから、何か彼等の間における秘密に
かんする品物でもないかと部屋の中や、机
の引出しを掻き廻したが、中から一個のピ
ストルをみつけてとりあげた。六連発であ
つた。好子の護身用なのか弾丸は全部はい
つていた。それによつて私は、好子が死を
怖れているのだと思つた。

誰かやつてくる足音がした。

私は、あわてゝベッドの下に身を入れた
入口の扉が開いて見知りの船員がはいつ
てきた。私のいるのも知らないで、妙に注

意深く室内を見廻した上、床に投げつけら
れた写真をとりあげていつた。

「船長奴、うまくやつてやがらあ、不具者
も可哀想な奴だ、だけど、あの面ぢや誰だ
つてかなわないうや、俺にだつて好子は駄目
なんだからなあ」

彼は立ち去つた。私は今の言葉によつて
この船の者すべてが好子を思つていると推
察した。

自分の敵は船長ばかりでなく、この船全
体なのだと思つた。同時に、自分の恋の成
功が危い瀬戸際に立つていることを今更強
く感じてきた。

夜中の二時過ぎになつて好子が戻つてき
た。私は固唾を飲んでベッドの下からみつ
めた。

好子は、着ている上着を無造作に脱ぎす
てた。美しい上半身が、船側の窓から流れ
こんだ月光に照らされて露出した。

私は、思わずベッドから首を出して彼女

の肌を眺め入つた。海岸で犯した肉体がこ
れなのだ！と思うと、いても立つてもいら
れない焦燥を感じ、いきなり飛び出して
つて、力一杯抱きしめてやろうかと思つた
好子は、べつとりした肌にヤケに風を入
れた。白いハンカチでは涼しくならないの
で、引出しをガタガタいわせて扇子でも探
している様子だつたが、大きな溜息をつく
と、いかにも暑そうに身体を跳めながらス
カートを脱いだ。忙しげにシューミズのホ
ソクを外して、それも脱いだ。そしてこち
らを向いたかと思うと、ベッドにつかつか
と密つてきた。私は窒息しそうに興奮して
いたので、危く身をかくさなかつたらみつ
けられるところだつた。

鼻先で、好子の脚が動き、ストッキング
が外された。恰好のいい脚に私は嚙りつき
たい衝動を覚えた。

そのうちに、好子は眠つた。

私は、そろそろとベッドの下から這い出
してきた。

好子は全裸で、だらしなく寝ていた。

乳房のあたりに毛布をかき込み、肩から
腰を剥き出しにして仰向けに片足をベッド
に垂れている。最も男性を悩殺させる姿で
あつた。私は全身の血を高鳴らせた。むら
むらと湧き立つ征服欲にかあつと逆せ上つ
た。

そのとき、突然ドンドンと激しいエ
ンデンの響きがした。私はハッとしてベッ
トの下に隠れた。

なんのことはない、夜中の出航なのだ。

私は怖れなかつた。ポケットのピストル
を握りしめて、これから好子と共に死の世
界へ突入して行けると思うと、安心に似た
快ささえ覚えた。私にとつて、死は既に

六、淫慾の修羅場

憧れだつた。そこへ好子という道づれができたのである。彼女も可哀想に、私のような不具者と共に死ぬのかと思うと、同情の念が起らないでもなかつたが、そんなことはもう構つていられなかつた。

苦しかつた半生が走馬燈のように脳裏をかすめては消えていった。

死に別れた両親の姿もはつきり臉に浮んだ。微笑しながら招いているようだつた。

私は、しばし過去の思い出に心を馳せていた。その頃天候が一変していたものであつた。揺れが突発的に激しくなつてきたのだ、私は怖るべき嵐の前兆を感じた。海で生活しているものの鋭い第六感であつた。

風の唸りが急速に高まつてきた。ただこゝろでない物震さが感じられて、私はドギリとした。凄じい電光がパツと室内を真晝のように照らしたかと思うと、物震い雷鳴がとどろき渡つた。気のせい甲板上に駆け上る人々の足音や叫喚の声を聞いたように思つたが、嵐はまだその全貌を現したのではなかつた。

私は狼のように床を這つて、扉の鍵前をたしかめに行つた。しつかりと閉ざされていた。鍵は好子がつけている筈である。

船体は大きく上下に動揺し、嵐はますますはげしくなつていった。

ガチャン！

机の上の花瓶がけたたましい音を立てて床に落ちた。横波を喰つたのか、船が大きく傾いた。好子が驚いてベットから飛び起きた。

甲板上が急にさわがしくなつてきた。

靴音が駆けてきて、激しく扉が叩かれた

「好子！好子！開けろ！大變だ！」

船長の慌てた声だつた。

好子は、あわて、シュミーズを着

るとベットを飛び降りた。私は彼女

を抱き止める筈だつた。しかし船長

の声を耳にした瞬間気が變つていた

船長を室内へ入れて好子の前で殺

してやろうという惨忍な考えが浮か

んだからである。私はベットの下に

素早くもぐりこんで様子を窺つた。

好子が震える手で扉を開けた。船

長が飛びこんできた。いきなり好子

の、シュミーズ一枚の肉体を締め殺

すような強い方で抱き締めて接吻の

雨を降らせた。そして

「好子、荷物をまとめて、ボートの

用意が出来ているから、もし沈没す

るようなことになれば逃げなけりや

ならんのだ！」

と、激しい口調でいった。

好子は蒼白になつて震え出した。泣き声

で

「どうしたらいいの、おお恐い！助けて

！」

と船長にからみついていった。

私は齒ぎしりして口惜しがつた、今だ！

と思つてベットの下のから飛び出すと、好子

の手から鍵を奪つて扉の前に立つた。

二人は、あつと叫んでよろめいた。

どどどど！と波が舷側に打つかる音がし

て今にも沈没せんばかりに船が傾いた。

船長と好子は、危ふく机にかちりついて

踏み止つた。私は扉のハンドルをしつかり

握つて舷を支え、ガチャリと錠をかけた。

英



「貴、貴様ッ！何故、錠を！ど、どうしてこ、こんな所へ！」

船長は驚愕に声を震わせて喚いた。

「きましたよ、不具者が！」

私はそういつて、にやりとした。

船長は噛みつくような声で叫んだ。

「面白い！命が惜しくねえんだな、こうしてくれろ！」

さつとジャック・ナイフを逆手にもつて

躍りかかろうとした。私はピストルを構えた。

「動くな！一歩でも動くと撃つぞ！」

私は叫んだ。船長は驚いてしまった。

「船長！」

私はいつた。

「お前は俺のことをゴリラ／＼といったな

だが、いくら醜いゴリラ男でも、貴様に

対する復讐心はもっているんだぞ！俺は好

子さんを貰う。船は進行力を失つて死と生

の境が迫っているのだ。俺は勝つたのだ！

好子さんは俺のものだ！覚悟しろ！」

「な、なに！好子は俺のものだ！俺はピス

トルなんか怖くないぞ！早く扉を開けろ！」

「ふふふ」

「な、なにを笑う、お前のその手で、俺が

俺が撃てると思つていいのか！」

「——」

「さあ撃つてしろ！お前なんか人が殺せ

てたまるものか！撃て！」

「——」

私は眼を閉ぢて引金をひいた。

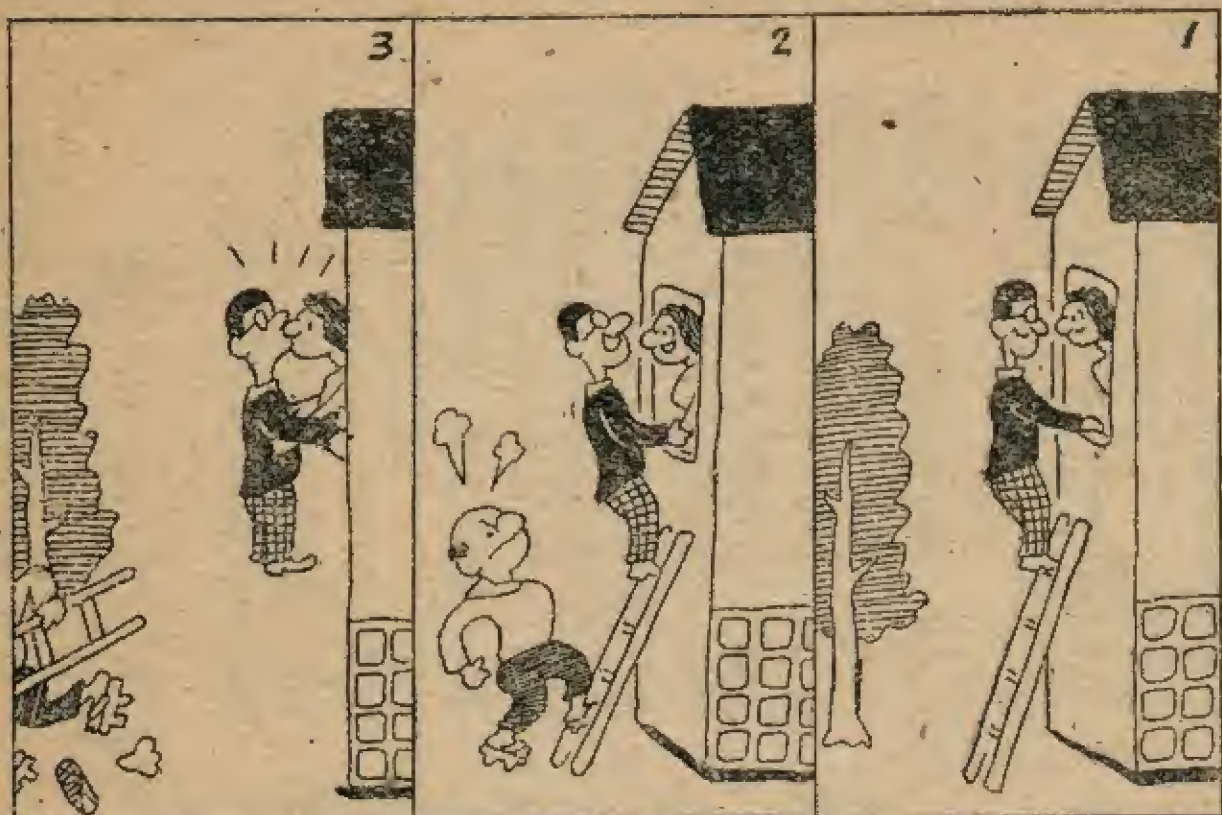
鋭い銃声が鳴り渡つた。続いて一発、また一発。

船長は腹部を抑えてどつと床に倒れた。だが、再び起き上つて

漫 画

無我の境

山田 清香



「畜生！やりやがつたな！」

と叫ぶと、鋭いナイフをひらめかせて私に迫つた。だが、弾丸を喰つてゐる船長は既に力が抜けていた。私は危く彼の手を抑えてナイフをもぎとると、いきなり船長の肩に斬りつけた。鮮血が私の顔に振りかかつた。

船長は、よろ／＼とよろめいて室の隅にある椅子に身を交えようとしたが、それを掴んだまま、どうつと倒れた。そこへ血をまき散らしてのたうち廻つたが、遂にこと切れてしまつた。この時、船体は、急に激しく動揺した。

それと共に、水の浸入する音が船艙に当つて響いてきた。みるみる船は右舷に傾きはじめた。海洋丸は遂に船底を岩礁に強く突き当てたのであつた。

私はそこらにあつた衣類を幸いに、あり合せたベイントにつけて、扉の間に挟んで水の浸入に備えた。

そして、好子を振り返つた。好子は、恐ろしさのあまり口もきかないで蒼白になつていた。おそらく私が船長を殺したように自分も殺されると思つてゐるらしいかつた。

私は、靜かに彼女に近づいていつた。

「きやッ！」

と叫んで、好子はベッドの上へ打ち倒れた。白い脚が微かに痙攣してゐた。

私は、よろめきながら傍へ寄つていつた。「好子さん。どうか私と一緒に死んで下さい。」

私は、心から愛してゐるのです。お願いです。先日のことはあやまります。私は、あなたに恋しさのあまり、飛んでもないことをやつてしまつたのです。でも、もう死が近づいてゐます。せめて死の一步手前でも、私の愛を受け入れて下さいませんか」

「いやです！」

好子は泣き出しそんな声で叫んだ。

「死ぬなんていやです！私は、死にたくない。ね、救けて、ボートで逃がしてくれから、私、なんとか——」

「駄目だ！」

「もし私を救けて下さるなら、私は、あなたと結婚します」

「馬鹿な、他人がみると恥かしいといつたのは誰でしたか」

私は、突然むらむらと焼けつくような憤怒を感じた。

「私はだまされません！あなたは、私の思うがままになるだけです。船はやがて沈むのです。まだ五時間以上はゆつくり間があるでしょう。私は死ぬまで、あなたを自由にします。なんといつても、誰にも奪われないで、永久に、あなたを私のものにするのだ」

「ちがいます、いつまでもあなたを捨てないことを誓います、だから、助けて下さい」

「駄目だ、自分のものにするのだ。心だけでいいから自分のものになりたいと、望んでいたが、ああ、私は、あなたの肉体だけでいい。自由にするのだ！」

「ああッ！助けて！助けてえッ！」

好子は必死になつて逃げようとした。私は

は乱暴にもベットにねぢ伏せた。シュミーズが引き裂かれた。

「許して——許してえ——」

好子は、次第に、呼吸もたえだえに、あえぎながら、声すらかすれて、叫び続けたが、とうとう私の両腕の中で氣を失つてしまつた。

「ああ、許して——許して、私を信じて——誓います／＼あなたと結婚しますから、許してえ——」

そんな言葉を、氣がつくたびに幾度吐いた。だが私は許さなかつた。

海水は次第に扉を覆つてきた。そして、私はしつかりと好子を抱き締めたまま、まるで幽鬼のような物凄い表情で、彼女の肉体を噛み、責めさいなんでいた。

私は、もう死んで行く。私の傍には、好子がいる。苦痛の色も消え氣絶したまま永久に私の傍で眠つてゐるだろう。

船体は既に渦巻く激浪に吞まれて海底に没入したのか、今迄聞えた騒しい人声や物音もしなくなつた。只恐ろしい水圧が、この一千噸の汽船の中で、たつた一つ残されたこの船室へ向けて、ひし／＼と迫つてくるのを感じた。

だん／＼息苦しくなつてきた。私はもう死

× × ×

これで手紙の文字は終つてゐた。

私は改めて三つの死骸をみつめた。それはただ、白い骨の集りであつて、私達にはそこに、船長も、好子の肉体も、哀れな尙僂男の醜怪な顔もみとめることはできなかつた。それは奇怪な夢のように儂い現実であつた。

(終)

艶笑世相奇譚

玉置光男

覗き見られる夫婦

省三が会社から帰つて来ると、それを聞きつけた階下のお主婦が直ぐに上つて来て、今度こそ、どうしても立退いてほしい、と云つた。

その事に就いて、省三は前からうす／＼妻に聞いて知つてはいたが、此頃の様な住宅難では、そう簡単に引越しも出来ないのを知つてゐるくせに、あんな無理な事を云つてゐるのだ。まあ／＼しばらく放つといたらいゝだろうと、曖昧な返事ばかりしていたが、今日こそ省三に直接会つて話をつけてしまわねば、と彼の帰るのを待つていたので。

お主婦は、少し開き直つたかたちで「実を云いますとね、私も貴方がたにお二階をお貸し、

て半年も経たないの出て行つて下さいなんて理不尽な事云い度くないんですのよ。しかしねこんな事……貴方がた二人を前にして本当に申しにくい事なんですけど……うちの君子もねえ……もう年頃ですし……」



つた。郷里から甥が出て来るので出て行つて呉れ、そのかわり戴いた権利金はそつくりお返ししますと云うから、彼は鼻の先で笑う様にしていたのに「子達は無し、良い人に借つて頂いてよかつた、と思つてましたのに……」かえつて、……ホホ」

と、意味ありげな笑顔を妻の方に向けたので、省三は内心どきりとした。何かわけがあるな、と思つた。妻が黙つてうつ向いてゐるのへ、奥さんに聞けばわかる、と云わぬばかりの顔をして降りて行つた。

空襲の激しかつた頃、省三夫婦も丸裸に焼け出されて、郷里へ落着いたのは、終戦になる年の

のようやうな暖かくなつた頃であつた。

戦争の最中ではあつたし、都会での空襲の恐しさから逃れられたという、ほつとした気持ちも手伝つてか、始めの内は、夫婦して馴れない野良仕事をするのも、大して苦にはならなかつた。それが

醉夢七不思議

金子しのぶ

花の精に弄れた戀人

あづさ川には、季節季節に美しい花が流れてくるのです。それは、この地方の七不思議の一つに数えられてゐます。川を遡つて、花の流れてくる源を探りに行つた者は昔から幾人も居りますが、大方は帰つて参りません。

また、帰つて来た者は、間もなく死んでしまふと言ひ伝えられてゐます。私は百姓にもあきて町へ出て、髪を男のように短く刈分け、男裝して一とかどの不良ぶり、不良ありきたりの生活をして子分と名のつく青年も幾人かありました。

初春のことです。思い立つて、戸上と云う私の思召しのハンサムな青年を連れ、二日分の食糧を持つて、あづさ川を遡りました。

他の青年達は、戸上が私を得るであらうことを想像し、且つ、伝説を思い、羨望と畏怖とで私達を見送りました。



ざめてはいましたが、元氣一杯で舟を操つていましたが、やがて川は浅くなり、どうしても舟が進まなくなりまして。

私達は舟を岸につないで岸辺を歩いてゆきました。そのうちに、岸は藪や岩で歩けなくなり河原へ降りました。川面に流れてくるのは遅咲きの紅梅のようです。

私達は急ぎました。岸辺には山が迫り、日はかげりました。岩がごつごつつき出て、川はせばまり、私達はいつか谷間を歩いていました。

ふと気付くと、岸辺に、一ひらの衣もまとわぬ乙女が、紅梅を水に流してゐるのが目に止まりました。戸上は、

ごくり、と、唾をのみました。きつと、私達が手をふれたら、雪のようにとけてしまふか手の跡がくつきりと白い肌につくのではないかと思ふほどで女の私でもそれは息をのむやうな、水の精かと思われる乙女でした。

乙女は、私達を認めると、すらり

数カ月の内に、戦争が思わぬ方向に片付いてしまったのだ。

郷里といつても山間の一貧農でしかない小さな家に、両親や兄弟夫婦等と一緒に暮らしているのが、急に、気詰りになった。まして、結婚して一年そこ／＼にしかない彼等にとつては、家の狭いのが何よりの苦痛だった。

而し、動物本来の慾望を抑える苦痛の方がより大きかった。

夏の蒸し暑い日など、遮るものといえ、蚊帳だけしかない、開け放した家の中で、いつ迄も眠つたれない、団扇の音を気にし乍ら、自分等だけの秘密を守る爲に、人知れず苦心した。夜更けに、枕元を通る年寄の足音にびくつとして、人生最大の悲哀をかこつたのも一度や二度ではなかつた。

しかしそれも始めの内だけで、だん／＼大膽になつて来て、そんな環境にある事がかえつて女の慾情を刺激する

のか、人眼も構わず、あけすけに振舞う、妻の初夜の白い体を不思議にさえ思ふ様になつた。

秋の取り入れが済んで、百姓達が山へ薪を採りに行く季節が来た。省三夫婦も家の者に従いて山へ行つた或る日の事。どうしたはずみか道に迷つて、行けば行



く程道がわからなくなつて、今迄ちら／＼見えていた筈の麓の村の景色も、すつかり視界から消えてしまった。遂には道らしい道もなくなつて、前後もわからぬ蔓草の中へ迷い込んでしまつた。

人間というものは、絶対孤獨な立場に置かれると、心理作用に何らかの變化を齎らすものらしい。まして性の異つた二人の人間の場合には――

その場に腰を下した彼等は、どちらからともなく、歡喜の生活を営むのに躊躇しなかつた。見えるものといえ、唯、秋空に悠然と浮ぶ、ちぎれ雲だけである。

……突然、叢の騒ぐ音がしたかと思うと、

「ヒヒヒヒ」
という笑声がした。

という驚きと共に、桃源の境から急に奈落の淵へ墮落

された二人が、慌てゝ居ずまいを繕つたが、もう遅かつた。

その事は、その日の内に、彼等の仕種をつぶさに見ていた心なき炭焼男によつて、村中に喧傳されてしまつた。

その事があつてから、その土地に居られなくなつた

と起ち上つて、岩陰に、まるで花びらが舞うように身を隠しました。

私達は乙女の後を追いました。乙女は、手のとどきそうところで、ひらりひらり身をかわしては逃げてゆくのです。戸上も私も夢中になつてしまいました。

突然私は、右にも左にも、花のような乙女がひらりひらりと飛び交つてゐる幻覺に陥入り、此れはいけない。と立ち止まりました。が戸上は尙も右に左に駆け廻つていました。

事実、私は幻覺したのではなく、この岩陰にも、藪の中にも美しい乙女達が、私達を凝視しているのに気付きました。私は、（失策つた。）と、心の中で叫びました。此れはきつと花の精かなにかに違ひないのだ。私達は見事にそのとりこになつてしまつたのだ。――

私は、隠除けに焚火をしよう。ととつさに考へて枯枝を集め、ライターを出しました。

が、突然私は背後から羽交いに抱きすくめられてしまいました。こんなことではたばつてゐるような私にはありません。私は素裸の乙女と、組打ちを初めました。数人の乙女達が私に飛びかかり



私の手足は蔓草にからめられてしまいました。戸上も、私と同様の有様でした。

私と戸上は、乙女達に担がれて、更に奥へ運ばれて行きました。もう日暮れで薄寒いのですが、乙女達は平気なものです。

やがて疎林に囲まれた小さな草原に出ました。そこには、鎌倉時代様の古風な大きな家が軒建つていて、私達は、その家の大広間に運び込まれました。私は、平家の落人がこの辺に佐んてゐると言ひ傳へをちらつと思ひ出して、若しや、この女達はその一族ではないかと考えました。乙女達は、草がそよぐようにみやびた囁きを交していましたが、その中で最も美しい最初に私達が発見した乙女が他の乙女達に合図を致しました。

敷きのべられ、まづ戸上が、素裸にされてその上に投げ出されました。乙女達は楽しそうに彼を遠巻きに取り囲みました。と最初に見た乙女が戸上の上に跳りかかつて、私のはつと息をのみ、頭がぢんぢんするような、素晴らしい場面を展開し初めたのです。乙女達は、笑い

二人は、口さがない村中の嘲笑に追われる様にして、大阪へやつて来て、此の二階に住む様になった。

幸い、省三も職を見付ける事が出来た。ほつとした二人にとつては、この六疊一間限りの二階が、まるで、エデンの園の様に思えた。

而し、それも余り永くは続かなかつた。彼等の肉体が許さなかつたのか、否、そんな事より

も、もつと何かを求める気持の方が強くなつて来た。

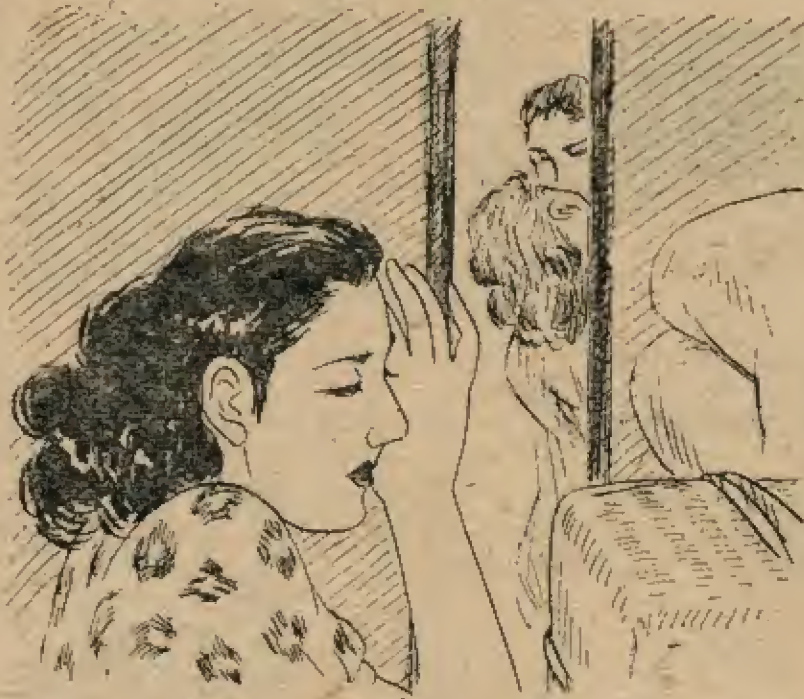
むしろ肉体が疲れた後など、何か満ち足りないものがある様な気がしてならなかつたのだ。

或る夜、皆が寝静つた頃、初枝が便所へ行こうとして、障子を開けた

突端、慌て、それでも足音をさせずに、階段を駆け降りて行く階下の一人娘君子のうしろ姿を発見した。

一瞬、初枝はカアツと頭へ血の氣の上るのを感じた。

階下で君子が独り留守居をしていた日の事。初枝は君子を呼んで日の暮れる迄話をしていた。その内に省三が帰つて来たらしい音を聞くと、何となく



そわ／＼していた初枝は、その目に限つて、階下へ迎えに降りて行くこともせず、遠慮して腰を上げかけた君子の手を掴んだと思うと、け／＼な顔をする彼女を、無理矢理押入の中へ閉ぢ込めてしまつた。

省三が上つて来て、服を着換えるが早いか、初枝は、やにわにしなだれかいて、いぶかしがる省三を促して、明るい電燈の下で、

他人に見せるべからざる情景を演じてしまつた。その時押入の戸がコトリと動いた事等省三には気付く筈はなかつた。

省三が降りて行つた間に、押入の戸を開けると、君子は、無理に無表情を繕うおとして、真赤に上氣し

た顔をこわばらせて出て行つた。

午後から降り続いている雨が、一向に止みそうにもないので、風呂へ行くのもあきらめて、しきりに本を讀んでいる君子を、背中から覗き込む様に

「お勉強？」

「うゝん、これ」

と君子は婦人雑誌の表紙を見せ乍ら

溜息をつき、呻き、興奮し、私などはもうただ驚くばかりです。乙女の肉体のコーコツとした見事さ……。ふるえる乳房……。乙女が素早く退くともうあとはテンヤワチャで、可哀そうに彼は氣を失つてしまいました。

戸上が、ぐつたりして運び去られると、乙女達は私の服を剥ぎにかかりました。私は必死に争つたのですが、遂に素裸にされてしまいました。

乙女達は、私が女であると知ると怒りの声をあげ、私を荒々しく戸外へ担ぎ出し、草原の真中に投げ出しました。そして、蔓草で私の手足を四方の立木に縛りつけ、呪の言葉を残して家の中へ引揚げてしまいました。



す。

やがて家の中がひっそりしました。すると草原を、何者かが私の方へ這い寄つて来るではありませんか。それはやせおとろえた裸の男なのです。私の全身は鳥肌立ちました。

男は、腰抜けのように起つことが出来ないので。そして彼は、私の恐怖を知ると、私を安心させようとして微笑しました。が、

またその微笑の氣味の悪さに私はぞつとしました。

「お嬢さん。私はあなたを侵そうなんて氣は毛頭ありませんよ」

と、男は、地の底からでも言うような声で喋り始めました。

「少し用が足せるようになればすく

あの女共に紋られますからな。あいつらは女の子供が欲しいのです。男の子が生れると殺して、女ばかりの村を作ることが、あいつらの理想らしいですな」

男は氣味悪く笑つた。

「私は、とても逃げられないので、まあ、遊び殺されるつもりですよ。私はそれで本望ですよ」

「もうちよつとなの済んだら見せて上げるわそうねあと十分位かしら、読んでしまつたら、持つてつて上げるわ」
「そう、お願いするわ」

と約束して、省三の待つてゐる寢床へ歸つて来た初枝は、彼の逞しい腕に抱かれ乍ら、もう君子が雑誌を持つて上つて来る頃だ、いや既に階段を上つたところに立つてゐるのかも知れない

と思ひ乍ら、障子に写つてゐる自分等の蒲団の影の動いてゐるのを見て急激に体中がほてつてくるのを覚えた。

と、突然階段のあたりで人の氣配がしたかと思つと「君子、そんなところで、なにしているの！」

という母親の聲

がした時には、初枝は、前後もわからず痺れる程力任せに省三にしがみついていた。



て來てゐるのであつた。
初枝にしても、子供の無い倦怠期の夫婦生活の無味乾燥が、第三者の介入によつて、今迄に感じたことのない刺激と興奮を、はからずも住宅難によつて経験され、それが知らず知らずの中に、彼女をして、自然そつと風に向つてゐるのであつた。
勿論、これが窃視症という、一種の變態的慾望である

など、彼女等にはわからない。

省三にしても、未だその事柄について、何も知らなかつたが、さつき階段のお主婦に、あんな事を云われて、是非妻に事情をきいてみようと思つたが寢床へ這入つてからも、その事に触れるのを

恐れてゐる様な初枝の態度を見て、夫婦の事柄を現実に結び付けて考えたくないという、彼の持論に従つて強いて聞き正そうとはしなかつた。

「こんどこそ、何とかして一軒家を持つてね」

と云うと彼女はしらずしらず出てくる涙で濡れた冷い鼻先を彼の胸に押し付け乍らコックリをした。(おわり)

「しかし、私は逃げたいんです」
「えい、わかつていますよ。そりやねこのまゝでいれば、猿が大グモか何か来て、生血を吸われるか、猿の子を生むしなけりやなりませんからね」
「だから、助けてよ！」
私は、とうとう涙声になつてしまつた。

「条件が一つあるんです」

「えい、何でも、聞くわ。どうせ身動きも出来ないんですもの」

「ぢや、お嬢さん私はあなたの、毛をもらいますよ」

「え？」

「いやなら、さようならです。猿の餌食になつてやんなさい」

「い、いいわ。あなたの言う通りになるわ」



國のようにおぼろに霞んで美しい風景でした。ヤセ男に助けられた私は、全裸のまゝで、川に沿つて無我夢中で走りつづけました。

岩のゴロ／＼する谷間に素足から血を流し、茨や灌木の枝に太股や脛にすり傷をつくりながら、やつと、その日の夕方、舟をつないだ岸迄迄辿りつきました。クタクタ／＼になつた私があづさ

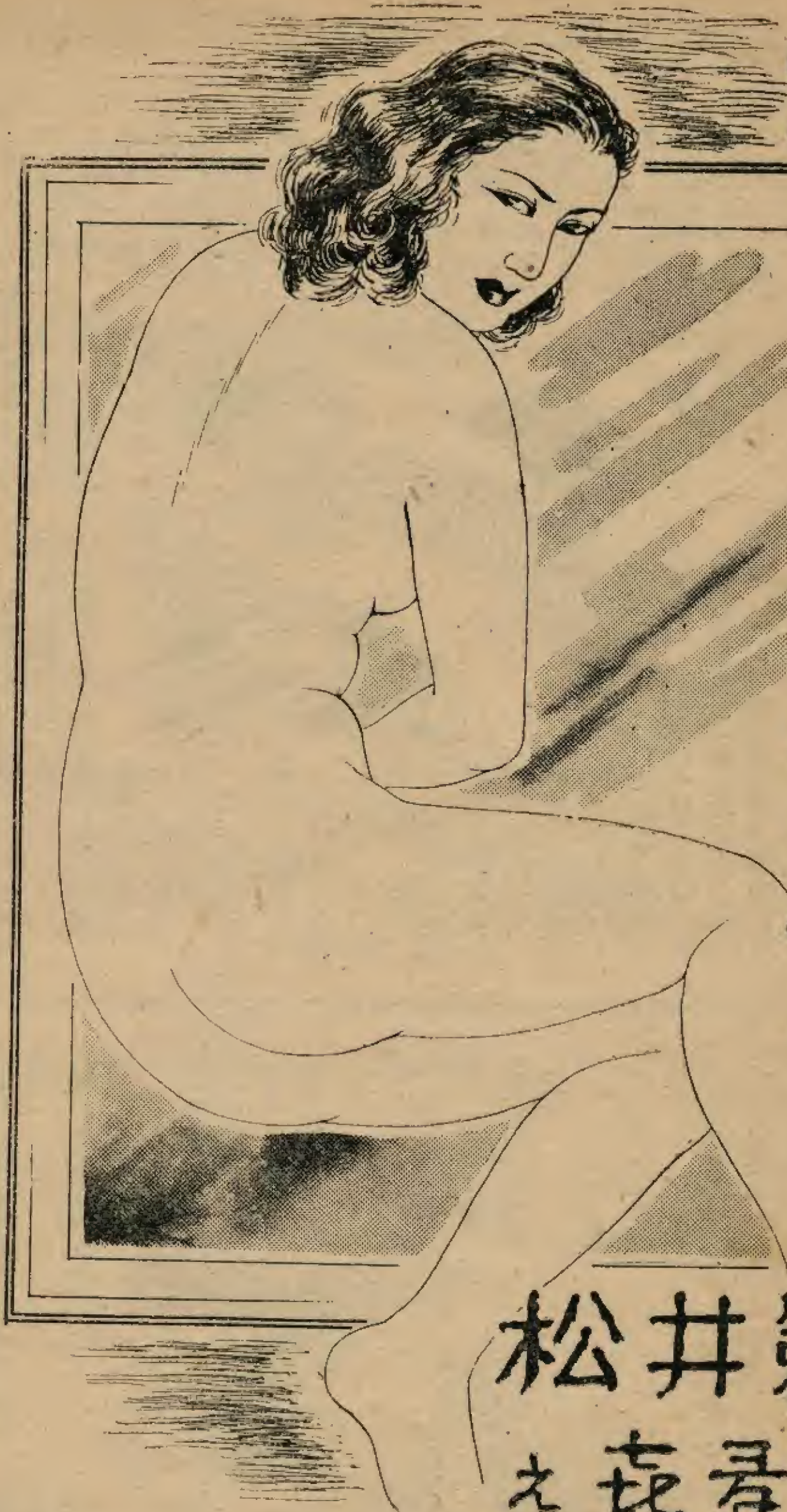
川の岸辺で水を飲むもうとしてゐる所へ、二人の村の青年が來て呉れなかつたなら、或は私は永久に町へ歸ることが出来なかつたかも知れませんが私は恥しさを忘れて二人の男の手の中に倒れかゝつていつたのでした私は今でもあのことを思つと、心から身ぶるいが出ます。

戸上？ 歸つてきましたよ。おぢいさんのような容貌になつて……。彼は氣が狂つてあづさ川に投身自殺しました。

私は、えい、ますます元氣で噂をふりまいて居りますよ。しかしもう七不思議の探險など真平ですあはれはきつと花の精に違いありません。——おわり——

裸身らしんの魔鬼女まきぢよ

松井 籟子
と 長 尋 玲 子



ると、自分の本来の姿がうつるとか、不幸をよぶとかいう言い伝えがある。良次は子供の頃から、年寄の膝でそうしたたとえ話をいくつか聞いた。信ずるつもりはないのに妙な恐怖心が残っていた。午前二時という真夜中に真白い着物を着て、ロソクの光で自分を鏡の中に見ると、自分ではなく、未来の配偶者の姿が、うつるという話もある。鏡の中に自分ではない、他の人の影が映っていたらどんな気がするだろう。或は自分ではあつても皺だらけの醜い老人の、しかもそれが自分自身の顔であつたら……。

滝江が不用意にちりめんの鏡かけをおろしておかなかつたばかりに、今良次は真夜中に、みんな寝しづまつたあとの水の様な空気の中で、鏡と真正面にむき合つてしまつたのだ。

何がうつつていふというのだらう。消し忘れたスタンドの深い笠の下からひろがつた光は、鏡の中の世界をぼやけさせてはいたが、何かそこに生きものの映像がある。

良次は鏡の中をのぞいてみた。息をつめて何がうつつていても、驚かない用意を心の中にととのえて、そつとのぞいてみた。

しかし鏡の中にとらえた映像は、べつに怪奇なものではなかつた。それは美しい滝江の、シユミーズからのぞいている丸い乳房と、股の間に深いかげがおちている寝姿だつた。彼に背を向けている滝江の、彼に見えない面が鏡の中からまともに彼に向いただけなのだ。

くつて入る算段も面倒くさい程酔つてゐるのか、太ももから長い脚をあらわにのぼして眠つてゐた。

良次は深い溜息をすると、床の上にあぐらをかいて煙草に火をつけた。するとその火が三尺ばかりはなれた壁でぼーつと光つた。滝江が壁ぎわの鏡台の鏡かけをおろすのを忘れたらしい。良次ははつとした。夜中に鏡をみ

いつの間に帰つて来たのか、良次がふと目をさますと滝江は彼に背を向けて、泥のように眠りこけていた。どこかで飲んで来たらしい。寝巻にも着かえずシユミーズ一枚、良次のかけていた掛布団の上から、それをめ

しかしそれは不意に彼の体を頭のさきからすりつとかいて、彼の血をひと所へあつめた様な感動をおこさせた。

現実の滝江はさつきから彼の方へそのもりあがつた腰を向けているのに、何の感動もおこらず、ねぼつこい彼女の体臭の様なものに、手も足もからみつかれて、いやだ、いやだと、指についた飴のきたならしさに似たものを感じているのに、鏡の中の滝江は別の女のようにほろつとかすんで美しかった。

別れよう、別れようと思ひながら、ずるずると、別れきれずにいる滝江との交渉は、もしかしたら此の鏡の中の女のしわざなのかもしれないと良次は考えた。鏡の中の女と、滝江とは同じ人間ではないのだろうか、夜という魔の世界で、はじめて良次に、鏡の中の女が口をきいたのだろうか。

「あなたは私に惹かれているのよ」と……。

二

それは最初のあいびきだった。

「どこかでゆつくりごはんでも食べようか」

そういう約束だったのが、梅田に近い喫茶店で待つていた彼の前の椅子に

「おそくなつちやつて……」

と、言いわけしながら腰をおろす滝江の手にした包の中で、コトンと小さい音をたてたのを、良次はすぐに石

「あなただけは私の恋人よ。だからお金なんて頂かないわ。だけど

お互いに相手の必要がなくなつたら、潔よく別れるつて約束してほしいの」初めての逢曳きでこう言い放つた女は、三面鏡の部屋に遅

ましい裸身を映しながら、激しく燃え上つてきた。

情痴と愛慾の葛藤と描いて間然することなき松井籟子氏の異色篇！

蟬箱の音だとかんぐつた。

―用意して来たな―

何か安心する気持だった。

―あそびなれている―

それはつまり、滝江との交渉が終始浮気ですむという打算だった。

「今時チャチな女店員が、月給だけでアパートすまい出来るものぢやないわ、部屋代だつて二千五百円も払つてゐるのよ。それ相当のアルバイトもしなくちゃならないわ……」

でもあなたは別。アルバイトぢやないわ。私の慰安よでもいつまでそれが私にとつて慰安になるかわからないでしよう。あなただつてそうだと思うわ。どうせ男なんて浮気なんですもの。だからどつちかが別れた方がいいと思つたら、きれいに別れましょうよ。今は私、あなた好きよ、だから好きだつてことを私の知つてゐる方法で表現したつていふと思つて。ただその好きだつてことが永久につゞくかどうかかわからないというだけ承知してほしいの」

最初から滝江はそう云つた。俺の方で言うセリフをさきに言つてやがると、良次は苦笑したものだつた。

その時は朝日会館で新劇をやつてゐたのを途中で帰つた帰りのことだつた。人から紹介されたのでもない、ただ朝日会館で新劇やバレエをみる度に、途中から帰るくせのある良次が、廊下のざわめきをあとにして、妙に靴

音のひびく階段をおりてくると、同じ様にいつもきまつておりてくる女があつた。五階から一階まで、女を無視してかけおりてしまふことも、いつそゆるゆるとおくれおりのことも出来ずにお互いが相手の靴音を気にしながら、わざとしらん顔して下までおりてしまふと、良次は川ぞい到大江橋の方へ、ほつとした様に交差点を渡り女は櫻橋の方へ歩いてゆく。そんなことが五回程あつたあとで、目のさきだけの軽い会釈が、頭をさげるようになり、どつちからとなく

「お茶のみましようか」

に発展したのだつた。

お茶の次がお酒だつた。

お酒の次が……。それがその日のあいびきからはじまつたのだ。

「どこへ行こう？」

という

「どこへでも」

というまかせきつた答えに、良次は京都寄りの郊外にある温泉旅館へ滝江をともなつた。勿論温泉といつてもそれは、ただその温泉のマークがつれこみ歓迎という広告を四本の線で表わせる、尤も簡単な方法にすぎなかつた。

一見、何のへんてつもない日本屋敷の、押入れのような位置の襖をあけると、そこに寢台があつて、枕元には電気スタンドや灰皿、夏は扇風機、冬は電気炬燵と、ちやんと、ととのつてゐる。襖さえしめておけば普通の料理屋の座敷とたいしたかわりもなく、廊下に面した硝子障子を透して、ゆるやかな曲線であつてゐる川が見え温泉場の様な気分になれないものでもない。そんな家だつた。

良次は此の家にこうした設備の部屋が五つほどあることを知つてゐた。良次の中学時分の友人がたまたま此の家の持主の息子だつたことから、面白半分にみせてもら

つたりしたのだが、今は、代がかわつていたし、多分そういう設備はそのままになつてゐるのだからと思つて、滝江を連れて来たのだが、わざわざ晝間から郊外電車にのつて此処まで足をのぼす程の女との交渉はなかつたのだ。

「そこをあけてごらんさい」

良次は滝江に言つた。

あけてどんな顔をするか、もう一度たしかめておきたい用心深さだつた。押入のつもりであけてうろたえる女の不用意な姿に良次はその女の情事の深淺がはかれると思つたのだ。平気なら平気で別の答えになる。

しかし滝江は

「フフ、」

押しこもつたような、しのび笑いをのこしただけだつた。

「こいつしつかりしていやがる」

良次はそう思つた。それともそれが女の虚勢かもしれない。

良次は立つていつて、自分でがらつと襖をあけた。手品師が種あかしをする手ぶりに似ていた。

しかし、このたねは、手品師の見せようと思つたたねとは一寸違つていた。

「うむ！」

彼は口のなかでうなつた。

「これは一寸えげつなすぎるぞ」

当惑した様な彼の顔を表面の壁がうつしてゐた。壁……そうなのだ、壁に彼の顔がうつつてゐるのだ。つまり壁は鏡だつたのだ。寝台の設備は彼が會つてみたのと變りはなかつたが、それを囲む三方の壁に相当の高さまで鏡がはりつけてあるのだ。寝台の上の男女の姿態はもはや二人きりの秘密ではない、同じ場所と同じポーズで八人の男女がたわむれ合うことになる。もしかしたら鏡が鏡をうつし合つて、その中の男女の数は無限に増すので

はないだろうか。

「これは少しいたずらがすぎる」

良次はうしろからのぞきこんでゐる滝江の前にとりつくろふ顔に困つた。はじめての交渉にこうした場所をえらんだことをさげすまれるかもしれないと思つた。

良次はそくさと襖をしめると、ベルを押して女中をよんだ。

「他の部屋あいてないの？」

鏡のはつてない部屋とは露骨にも云えず、困つたような良次のふくんだ云い方に、滝江は薄ら笑いをうかべたが、女中があるともないとも答えないさきに「少しおもてがうるさいので、かえてもらおうと思つたけれどもいいのよ、ここでも……。それより、ビールちようだいね」

三

「誰と来たんだ？」

「ううん、はじめてよ」

「うそつけ。此の部屋におどろきもしなかつたぢやないか」

「こんな部屋があることぐらい何かで読んだわ。あなたこそこん家知つていて……」

「家は知つてゐるけど、まさか鏡なんて……」

「どうだか……誰と来たの？どんな人つれてきたの？いつたい何人ぐらい女の人知つてゐるの？ああ、憎らしい」

滝江は良次にからみついてい

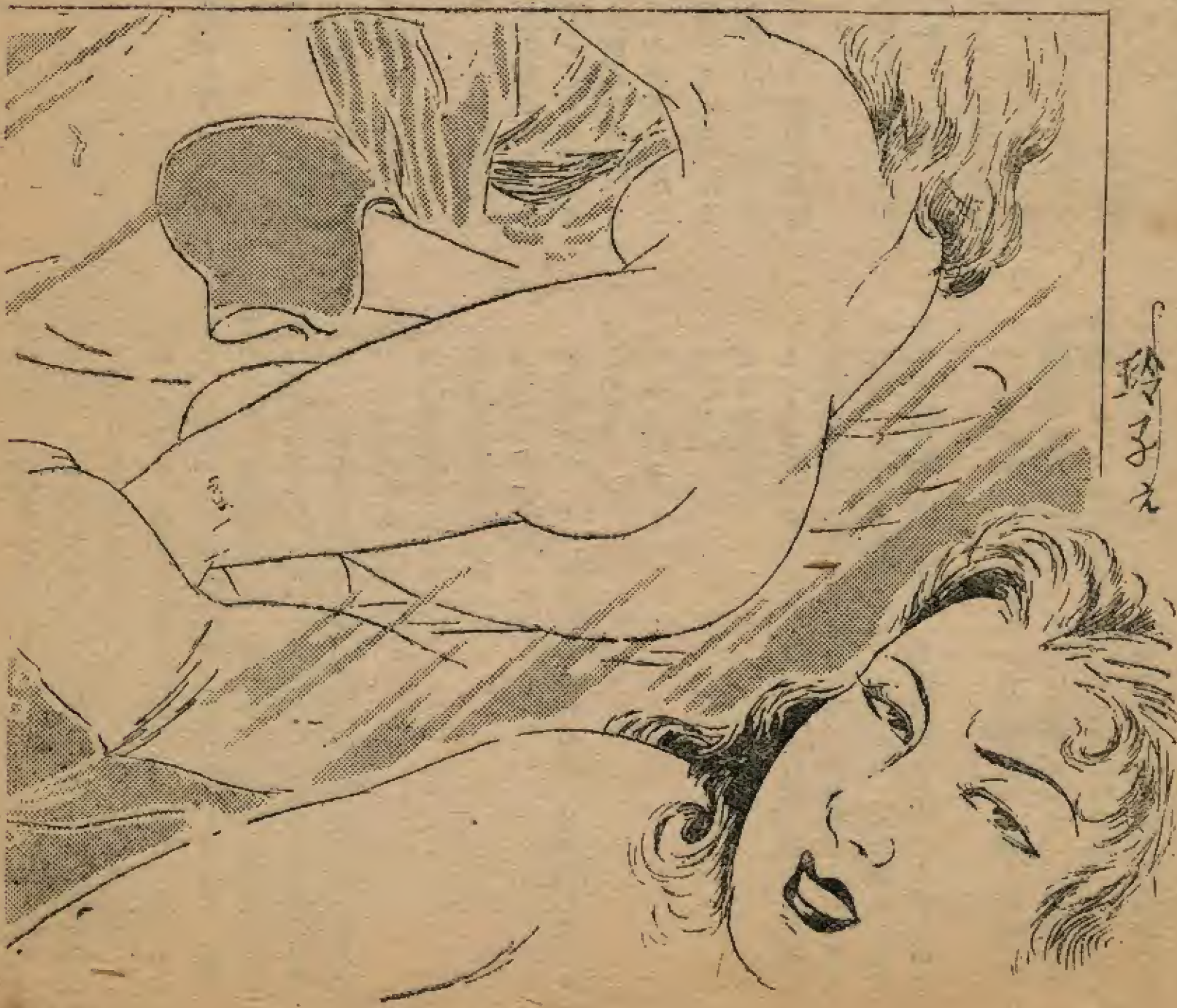
た手をそのままに、彼のわきの下をつねつた。

「痛い！」

「男の人つていやあね、このからだ、どんな人がどんな風に愛されたのかしら？ひとりひとり人によつて違うでしょう？」

「ぢやあ、君はそうぢやなかつたというのか？」

玲子



「あなたより少いわよ、女なんてそんな……。私、娼婦ぢやないわ。二人しか知らないのよ、本当……。あなたで三人。でもあなたは十人目ぐらいでしょう？」

「まあ、そんなところかな」

「もつと多いの？」

滝江の指先に力が入った。

「多いって言やしないぢやないか」

「うそ！白状しなさい。多いの？」

四本の指先をぎゅつと彼のわきの下の筋肉へ押しこむようにして滝江は言った。

「拷問するみたいだね、こわい、こわい」

良次は笑いながら、彼にからみついている滝江の白い腕をそつとはずそうとした。その爲半身を起したので、裾の方の鏡の中に、自分と女の姿が裾の方から逆に見え、み合っている様にも見えるその姿、しかし獸の様に醜くはなく、男にしては白いつもりでいた良次の肌の色よりも、なお一層白くきわだつていた女の裸身は、人間でも獸でもない、不思議に美しい生きものの様にみえた。

「言わないの？」

滝江は彼の胸に顔をうづめて、なおも指の力を増してくる。

「痛いよ」

良次が体をくねらせると、鏡の中の女の腰が、良次の体の動きにつれて、良次の体よりもはつきりとくねつてみえる。

「痛くしてやるわ！」

滝江がむきになつても、女の指の力はしれていた。痛いよりもくすぐつたい。

良次は体をくねらせながら、鏡の中の白い暴君を見ていた。えものにとびかかっている様な白い。美しいけどものを……。

しかしいつの間にか、鏡はただ冷たく二人をうつして

いるだけで、良次の意識の中にもう鏡の向うの女の姿は消えてしめきつたせまい部屋一杯にひるがる熱い蒸気の様なものの中で、人もなく我もない放心状態におちていつたのだつた。

四

滝江に別れたいのだが、どう

したらいいだろうと、良次が私に相談したのは、滝江のアパートで、彼が鏡の中の女に気がついてからだつた。

「鏡にうつった姿は、本当は実体とは違つた、他の像だよ。ジキル博士が自分の顔をみようと思つて、ハイドの姿を見たようなものさ。とくに暗い所はいけない。鏡の中に別の世界があつてその魔力を発揮するんだよ」

良次は私にいつた。私と良次とは今さら恋愛なんて考えられない幼友達だつた。

「別れることないぢやないの、そんなに惚れているならいつそちゃんと結婚したらいいでしょうに……」

私が言うのに、良次はとんでもないという様に肩をあげた。

「最初滝江は僕に合うのは自分の慰めだと云つたよ、それはアルバイトぢやないから滝江の体の使用料を払わないでもいい、というだけなのだ。旅館の勘定からちり紙まで僕に買わせるのだよ、安月給でそうそう続きはしないたまには映画ぐらいみるだけで帰ろうと思つと、映画館の暗闇で、僕がどうしてもその晩泊りに行こうと言ひ出さなければならぬ様にしまふのだよ。義理のわるい借金かふえて、もうどうにも僕には算段がつかなくなつたら、はじめて自分のアパートへ来てほしいと言ひ出したんだ」

「それならお金はかゝらないわけでしょう？何故はじめからそうしなかつたの？」



「アルバイトの相手に知れるのをおそれていたんだね。どうせ僕と結婚して安月給で苦勞しようなんて気はないのだし、僕だつて、そろきんで食卓の上をふくような女を妻にしたいとは思わない」

「そんならはじめつからそんな關係にならなきやよかつたのに」

「それがね……まあ君にはわからないよ。いくら君がエロ作家でも、せいぜい御主人ぐらいいしか知らないんだろ、第一君には色氣がない……」

「いゝわよ、私のことは……。それよりどうしたの、それから？」

私は色氣がないと云われて少ししよげたが、さきをうながした。良次の私にいう「色氣がない」は、おほこだつた。

「滝江のアパートへ泊ると滝江が言つたよ『今日は私があんたを可愛がるのよ』つて……。男がすつかりおぜんだてをしてくれるから、男に体をまかせて男のしたいように受身になつてゐるんだつて。けれど女だつて、いつもそうしてゐなければならぬつてことはない……。それから……。一寸くわしくは云えないね。朝になつても行つてやるものか、僕はそう思つて、アパートを出たよ。肩にも胸にも滝江の吸つたあとが赤黒く、まるで野バラの花を押しつぶした様に残つていた。のどなんかやつとネクタイをしめてかくしたけれど、家へ歸つて着物

に着かえる時困つたよ。女房はいなくなつて部屋すみ同然だ、おふくろもいれば妹もいるんだからね、会社で洋紙をあつかつてゐるんで変な虫がいて困るつてごまかしといたけど……」

地獄……というとおゝげさかもしれない。しかし良次は滝江に会うまいと思ひながら、滝江からはなれられず深い自己嫌悪の中でだんだんに寝せていつたのだ。

「その痕が消えたら又いらつしやいね」
帰りしなに、滝江はいつもそう云つて良次をおくり出す。

「もう来るもんか」

良次はきまつた様に心の中でいう。言葉に出していうことさえある。すると滝江は

「ふふん」

と鼻をならして

「駄目よ、来ないでいられるもんですか」

「来ないよ」

「来なかつたら迎えに行くわ」

事実、一週間と良次の足が遠のくと会社の退け時に待つてゐるのだ。

「ただ会いたかつたの、それだけ」

吸いこむ様な瞳を良次の顔にむけて

「少し振だから見てゐるの、見さしてね、あなたの顔……」

ああ、本当に少し振り……」

小娘の様に無邪気な顔に涙さえうかべて、ちつとみつめられると、そのまゝお茶をのんでさよならとは云えなくなるのだつた。

「いゝの、たゞ会いたかつただけだから……」

一緒にアパートへ帰ろうと云わない滝江に、良次は滝江がアルバイトの度がすぎて、疲れてゐるのかと、ふと嫉妬めいたものを体に走らせて

「送つていつてやるう」

そう言いたくなる。

そして再びくりかえす、泥絵具で画いたようなどぎつい情事だつた。

「何とかして本当の終止符をうてないものだらうか」

良次は、私に云つた。

「滝江がはなれていつてしまつてくれればいいのだ。

お互いの意地張でも、もう

よりを戻すことは出来ない

という、何か決定的な原因になるものはないだらうか」

「他に、女の人が出来ればいゝのぢやない？」

私は聞いた。

「出来やしないよ、そう急には……。それも滝江にあきらめさせるきめ手がなければ、かえつてあとがうるさいし、滝江がいたら出来かつた女がおどろいて逃げちやうだらう」

良次は自嘲するやうに笑つた。

「だつて要するに、その滝江さんと別れられればいいのでしよう。そんなら私がお芝居してあげる、あなたの新しい女の様な顔をしてあげるわ」

「駄目だよ、君ぢや……」

「色気がないから？」

私は良次の言葉をさきに言つた。

「ううん、それは今まででも、よく君のことで本当に火のない所へ煙をたててやきもちをやいていたんだから、君のことを滝江は気にしてゐるだけだね、僕があの人には色気がないという、そうねつて納得していたんだよ。しかし、急に君と何か関係が出来るなんて変ぢやないか」

「そうでもないでしよう、恋なんて、どんな拍子に感じ

玲子



ない

ものでも

ないわ、私だつ

てまだ人に恋することく

らい出来てよ」

「本当？」

良次の目と私の目とぶつかつた時、一瞬

目と目のさきでめらめらと焰の様なものが燃えた様に思つたが、

「お芝居つて云つたでしよう」

私はあわててその空気の色をかき消した。

五

前の日から泊つてゐる様にみせかける為、わざとぬいだ靴下を衣箱にぶらさげてみたりブラウスの上から良次のはんてんをおつたり、ハンドバックの口をあけて、コンパクトや、ルージュを良次の机の上に、ひろげたり

した。

「折角おぜんだとしても来ないんぢやないの？」

「来るよ、きつと。おふくろも妹も一週間程泊りがけで田舎へ行くと前から云つておいたんだ。本当なら昨日の土曜日から泊りに来るというのを、わざわざ電話で土曜日は友達が来るから困ることわつたんだ。今日は必らずやつてくる。もうそろ／＼来るだろう」

私は部屋を見廻した。一つの寢床に二つ枕が並んで敷きつばなしになつてゐる。ふとんの下からちり紙のはしが見えてゐる。すでに洋服を着てゐる私の恰好は変かもしれないが、靴下をぬいで素足だし、黒袴の男物のはんてんをはおつてゐる姿はかえつて妙な雰囲気を出してゐる。

「一寸おかしな気になるね」

良次も笑つて云つたものだつた。

「本当のように、みえるかしら？」

「うん、まさか嘘

つばちの舞

台装

置とは思われないね。それに君、今日は一寸色つぽいよ」

「飲んだせいよ、赤いでしよう？」

それも舞台の小道具のつもりで一本つけたお酒を、あまり飲めない良次と半分づゝのんだあとだつた。

「来たよ」

玄關の格子のあく音に良次が言つた。

私はぐつと息をつめた。

良次もだまつてゐる。

「ごめん下さい。お留守？」

二人は目で合図しながら、首をちぢめて、だまつてゐた。

「おかしいわね」

ひとりごとを云いながら下駄をぬいでゐる音がする。

「知つてゐるの？二階だつてこと……？」

私は早口に小声で良次に聞いた。

「あゝ、知つてゐる。二三度来たことがある、晝間、お客

様の様な顔でね……」

良次の言葉は階段をあがつてくる音でとぎれた。

足音が近づくと、私は良次に手を握つてもらいたい様な不安なおそれが全身に波打つて来た。何のやましいこともしないのに、お芝居なのだと高見の見物でゐる気持ちにはなれなくなつてゐた。

襦ががらつとあいた。それはきつと最初そろそろと、ためろろ様に一寸、二寸ひ

きあけられて、中の光景を目

にすると思わずがらつと

激しく引きあけられたの

だろうが、私は手荒くあ

いた敷居ぎわに棒立ちに

なつた滝江の顔を、嚴若

の様に思い、目を伏せる

ことも出来ない程、いす

くめられてしまつたのだ

「あんた！」

多分そろ叫んだのだろうが、私には

「ウォーッ！」

という獣の叫びの様に聞えた。

滝江はいきなり良次につかみかゝると、座つてゐた良次の髪の毛を、ぬける程にひつつかんで、彼を引き倒した。そして頭といわず、顔といわず、めつたうちに持つてゐたハンドバッグでなぐりつけた。ハンドバッグの口金があいて、中から財布やコンバクトや口紅やくしが乱暴にとび出して、押入にあたつたり、私の方へとんできたりした。

思わず私はうしろから滝江をとめようとしたが

「ビシャッ！」

と滝江の手が私の頬でなつた。

「あ痛ッ！」

私は不甲斐なく声をあげたが、どうやら滝江を良次から引きはなした、良次に立ち直る姿勢をとり戻させることが出来た。

すると良次は滝江の手をふりはらつて、体で押す様に私を隣座敷へ逃がれさせると、自分もすばやく隣座敷へ移つて、間の襦をビクツと滝江の鼻先でしめると、後手に襦をあかないように押さえた。

「もういゝ、僕が何とかする。君は帰つた方がいゝ」

良次は私に言つた。

「でも……」

「大丈夫だよ、僕にまかせなさい」

「そう……」

座敷の中から襦が破れそりに滝江があけようとあせつてゐる。所詮、私がいてもどうなるものでもない。滝江のけんまくに良次の身が心配だつたが、男と女が一对一で男が負けることもないだろうと、私は素足に靴をはいて、帰つて来てしまつた。

六

「どうだったの？」

それから一週間程して私は良次にたづねたが
「うん」

と、良次はあまり語りたくないらしくった。

「別れたの？」

「あゝ、それはもう大丈夫だろう。あれだけの目にあわされたら、僕だつて、あいつだつて、まさか二度とよりが戻るとは思わないだろう」

「そんなひどい目にあわしたの？」

「うん、あわされたんだ、僕が……」

だからあまり語りたくないらしいのだ。しかし、ポツリポツリと語つた良次の言葉をつなぎあわせると、こんなことだつたらしい。

襖を押された良次の手がゆるんだので、滝江はいきなり襖の少しあいたすきまから手をのびして、良次の片足をぐんと引つばつた。思わずよろよろとする良次を押し倒して敷居の上で馬のりになつてしまつたのだ。

良次はされるまゝになつてやろうと決心した。さんざんぶたれたあげくに

「こんなひどい目にあわされて、誰がお前みたいにな女とつきあつていられるか」

という切札を出すつもりだつた。

そしてそれは自分自身への切札でもある筈だつた。愛してもいけない滝江からどうしても別れきれない自分の肉体にひそむ悪魔を、ぶつてぶつてぶちのめされたら、再び滝江への未練はおこさないですむだろうと思われた。

「いや、いや！ あんたを他の人にやるのいや！ あんたは私のもの、私のとりこ！」

良次をさんざんぐつた手を、良次の背中にまわして抱きしめるのに、良次は自分の手をだらんとたれたまゝ、人形のように無感動でいた。

「ねえ、愛して、私、あんたを誰にもやらない」

それでも良次がだまつていると

「いゝわ、私の囚人にしてしまふから……」

良次の帯をとり、良次の手を後手に縛つた。

「あんたは私の囚人よ。首かせをかけてやる」

——どうにでもしろ——

良次はおなかの中で思つた。殺すというなら殺されてもいい。いやな、やりきれない自己嫌悪からぬけ出せれば、それでもいいだろう。

何かしらん捨てばちな氣持になつていた。

滝江は洋服かけを二つとると、それを良次の首に前後からあてがつて紐で結んだ。

「首かせよ」

そう云うと氣持よさそうに笑つた。

さんざんぶたれた体はづきづきと痛み出して、あぐらをかいていゝことさえだるかつた。

——よく見てみる、自分の姿を、これでも此の女からはなれられないのか——

良次は自分に言いしかせた。手は後手に縛られ、首には洋服かけが、丁度囚人の首枷くびかぎの様にくいこんでいるのだ。淺ましい姿だつた。それなのに、滝江はまだそれで満足しないのか、簞笥をあけたり、押入をあけたりして紐をさがしている。

「さあ、動けるなら動いてごらんさい」

勝ちほこつた様に滝江が言つた時、良次はいつそ息の根をとめてもらひたい程、激しい羞恥と自己嫌惡に、身もだえしなければならなかつた。まるでくもの巢にひつかゝつた虫に似て、四方八方くもの糸にはりめぐらされたかの様に、足は片方づつ机の足に結びつけ、体は後手に縛られた上からさらに紐をかけられて床柱にくくりつけられ洋服かけの首かせは、なげしにかけた額の釘へ紐をかけて首を吊りあげる様に結び合わせてあつた。

しかし、それだけされてもまだ一言も云わない良次に

「何故おこらないの？」

自分のひどい仕打を怒らないといつて滝江は責めた。

「怒る程の愛情もなくなつてしまつたのね」

しまいに滝江はそう云うと、縛られた良次の前でさめざめと泣き出した。

——何か言つたら負けだ——

良次は泣きくづれる滝江を、目の前に見ながら身動き出来ない状態を嘲笑した。それは世にも奇怪な光景に違ひなかつた。奇怪だと思ふのは、良次を縛つた本人が泣いていることを知つてゐる者だけで、或いは何かの咎でさらし者にされている罪人の愛人が、その前で泣きくづれるともみえる光景だつた。それ程、滝江はさめざめと泣いた。

それから、一つづつ、縛つた紐をといて良次の腕をさするやら、赤く紐のくいこんだ痕にメソソレをつけるやら、別人の様に良次をいたわつたが、その間も良次は無言の行をつづけた。

滝江は寝床へ良次を寝かして、あやまつたり、かきくどいたり、いつか陽が西に落ちて、とつぷりと夜の闇が部屋をつゝむまで良次の愛を求めてやまなかつたのだ。

七

それから半月程静かな日がつづいた。

それでも時々はどうしてゐるだろうと思ふ日もあつたが、滝江もさすがに來られないのか、会社の退け時にもそれらしい姿もなかつた。

私は良次に

「もう女は沢山？」

そう聞いてみたいような、妙に無関心でいられないものを感じ出してゐた。良次からも今までよりはまめに便りを書いたりしてゐたが、まだ滝江に残る氣持を私に便りを書くことでごまかしてゐるのかもしれないと、自分のうぬぼれをたしなめていた。

そのうち、良次からの便りがばたつときれてしまった。

「僕のくだらないおしやべりを聞いてくれますか、誰かにしやべつたら少しは気が軽くなるかもしれない、僕のくすりのつもりで来てくれませんか」

そんな便りが久し振りに届いたのは、私が素足で良次の家から帰つた日から半年もたつていた。

「駄目だった」

良次は私の顔をみるなり云つた。

「僕は憑かれてるんだ、魔に憑かれてるんだ」

良次は言う。

一ヶ月程して良次が会社の帰りに、めづらしく心育橋

へ出て、前によくいつたトリコロールのドアを押すと入口近い卓に滝江が座つていた。はつとしたが

「もう大丈夫だ、なにも逃げることはない」

そう自分で自分を笑つて

「やあ」

お久し振という何でもない顔で、滝江に挨拶した。

滝江はすぐに椅子を立つと、その前に座れというこなしをして

「待つていたのよ」

と云うのだつた。

「僕に何の用があるんだい？」

今更待つていたでもないだろうと、冷たい顔で、それでも良次は滝江の前の椅子に腰かけた。

「あんたが怒つてるのよくわかるわ。だからとても会社へは行けなかつたんだけど、もしかしたら偶然どこへお茶のみに来て会えやしないかしらと、私、毎日此処へ来てみていたの」

「……………」

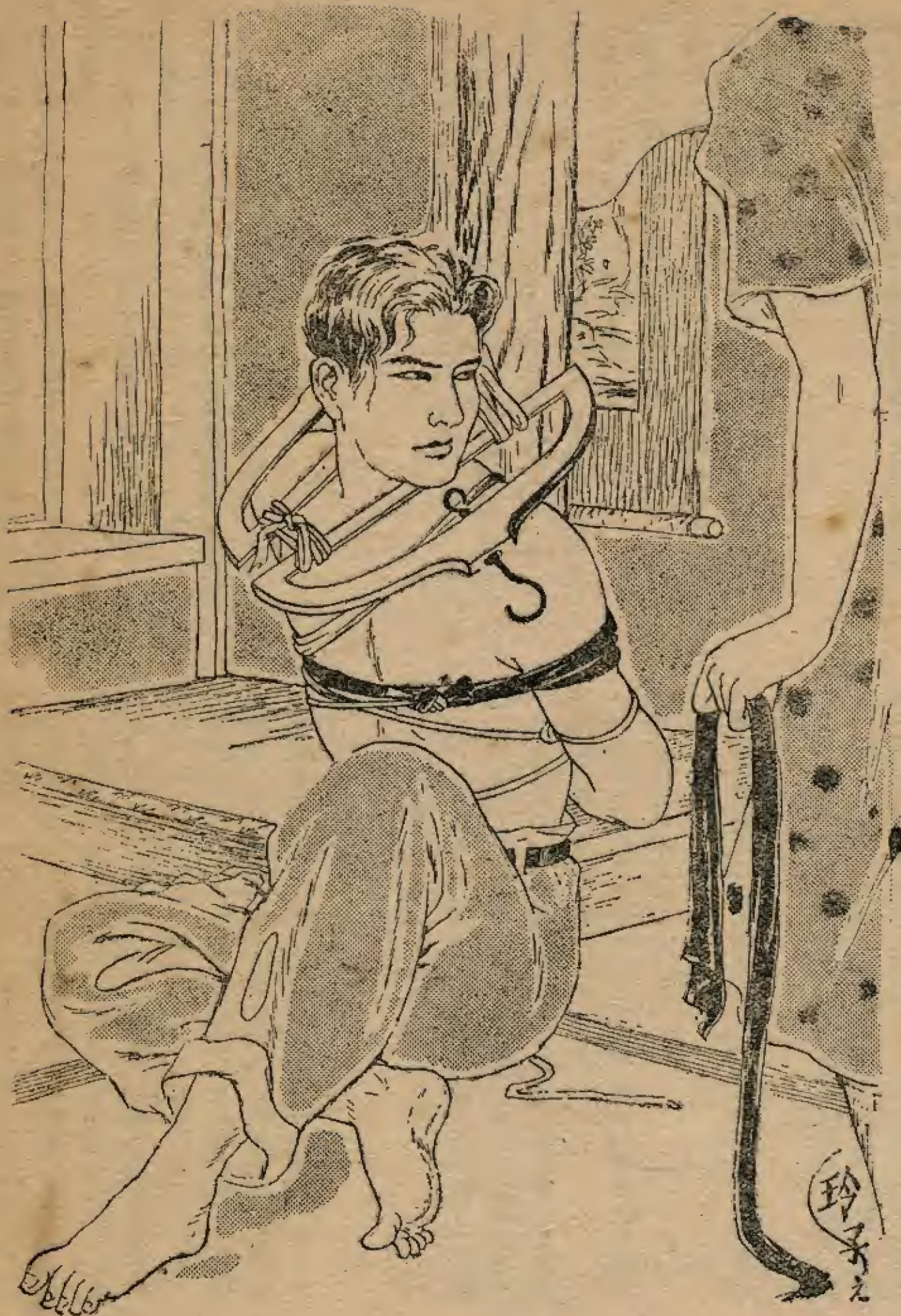
「ねえ、はじめつからどつちかが別れなくなつたらきれいに別れましようつて約束だつたわ、私、それもよく知つてゐるの、だからあんたが別れたいなら、別れてあげるわ、でもあんな別れかたするのはいやなの。そりやあ私達、夫婦になつたわけでもないし、ほんの浮気だつてこと知つてるわ、でも浮気にしたつて男と女が、何万人の中でお互いの体を知り合う仲になるなんて、一生を通じてそんな深山な経験ではない筈よ、あんな女がいたなあつて、あんただつて、いつかお爺さんになつてから思い出すことがあるかもしれない。その時に、ひどい女だつたとは思われたくないわ、私、考えたの。あんたと別れてもいゝから、もう一度、私があんたから女らしく可愛がられてから別れたいと思つたの。私、乱暴なことしないわ、あなたのするまゝになるわ、ねえ、今まで関係してきた日にも対してだつて、たつた一べん、もう一度だけ、私を可愛がつてくれたつていゝでしょう？ねえお願い！ そうしたら、今度こそきれいに別れるわ」

良次は迷つた。しかし女の云うことにも一應の道理があるように思つた。

「そうだな、そうしてもいゝが……………」

いざとなると又、滝江はもちまえの痴態に狂い出すのではないだろうか。

良次はふと最初に行つた旅館の鏡の部屋を思い浮べた



滝江の浅ましい狂態を、滝江自身にみせてやろう。自分は終始冷静にしてい、滝江を燃え上らせるだけ燃えあがらせて、

「見てごらん、お前の姿を、その浅ましいけだもののような恰好を」

そうつきはなしてやろう。それは滝江の惨忍な血に報いる、精神的苛虐であるかもしれない。良次はそう決心した。

八

「お前のいうとおりにしよう」

そう云つて立ち上つた良次について市電にのり、天満から又電車に乗つて、良次の行くさが最初に行つたところのある例の家だということに気がつく、滝江は、その部屋からはじまつた二人の關係を、同じその部屋で終らせる良次の感傷なのだろうと思つた。

通された座敷も前と同じ部屋だつた。

「あの時分はよかつたわね、あんまり簡単にあんなものになつちやつたからいけなかつたんだわ、恋愛にはやつぱり障^{しょうがい}碍が必要なのね」

滝江は云つた。

「何が恋愛なものか」

良次は思つた、恋愛なら自己嫌惡なんて氣になりはしない。どんなに二人で情痴のかぎりをつくそうと、恋愛感情のやむにやむにやまれない表現なら、あとに残るものは法悦に似た喜びである筈だ。それによつて又深め合ふ愛情である筈なのだ。

良次は滝江に精神的な愛情が持てない。それが持てないのに男の肉体がいうことをきかないところに良次の悩みも苦しみもあるのだつた。

しかし、今日こそは、自分自身の姿にもつばをはきかけてやれるのだ。鏡にうつる自分の姿を思いきり罵倒してやる為に、滝江を女の一番みにくい姿にさらけ出してやるのだ。

やるのだ。

女中の出してくれた浴衣に着かえて寝室に入ると、良次は滝江の腰紐をといた。生れたまゝの姿にされてゆくのを、滝江はおとなしく、ただ良次の油の少い髪の毛に指をいれてまざるだけで、されるまゝになつていた。

良次は滝江の丸い乳房の間に顔をうめながら、ふと壁の鏡をみると、白い女体のやわらかい線が妖精の水浴の絵の様に美しく、仄かな香りが鏡面から流れてくるようにさえ思われた。

「いけない、いけない」

良次はいそいで鏡から目をそらした。

しかし良次の目は頭の上の鏡の中に、女の波うつ髪と、のぼしている二の腕をとらえた。それは良次の魂を手をのぼしてつかむ様に惹いていつた。鏡にうつる良次の瞳が、他の人の瞳の様に光っていた。

「あれはおれなのだろうか。違うおれぢやないんだ」

良次は心の中で叫んだ。

「どうしたの？」

愛撫の手をふつととめてしまつた良次に滝江はいうと「ねえ」

良次の唇を自分の唇で追つた。そしてのどから肩、胸と、滝江は接吻の雨をふらし出した。良次は顔をそむけて、滝江の愛撫に知らん顔しようとした。そのそむけた顔に滝江の裸体が大きく鏡にうつつてみえた。滝江であつて、滝江ではない鏡の中のふしぎな女に、良次は憑かれたように心を惹かれていつた。そして鏡の中の女のことになつていくことが、もうあさましいとも恥ずべきことだとも思えず、鏡の中の麗女の生贄にされることに無上の愉悅を感じていくのだつた。それは阿片の様な魅力であるかもしれないかつた。

「憑かれてしまつたんだ。僕は魔に憑かれてしまつたのだ」良次は深い溜息をした。そしてそれは、滝江へのみじめな敗北を自らみとめる溜息にほかならなかつた。終

讀者娛樂玉手箱

詰將棋新題

大橋盧士出題

一、持駒 ナシ

二、持駒 角、金、桂

一	二	三	四
1	2	3	4
5			

一	二	三	四
1	2	3	4
5			

四月号所載詰將棋

(一) 解答

二三銀打、同玉、一四金打、一二玉、二四桂、二二玉
三三桂成、同銀、同角成、同玉、四四桂、四二玉、三
一角成、同玉、三二銀打、四二玉、四三銀成、三一玉
三二成銀迄(十九手詰)

(二) 解答

一五金打、同銀、一三銀成、同玉、一四銀打、同角、
二四飛成、同桂、三一角打、二三玉、二二角成迄(十
一手詰)

笑話

兵庫 水島貞男

裸体画

A 「近頃の出品はいやに裸体が増えてきたね」
B 「うん、そりやあ当然だよ。近頃の衣料を見給え、ベ
ラ棒に高いからね」
なるほど

甲 「君の細君はいやにヤキモチを焼くんなんだネ」
乙 「うん、今年はアレのヤク(厄年)年なんだよ」

ナゾナゾ

富山 石井武美

○摘菜とかけて

△人名辞典と解く

心は多くの名(菜)を集める

○写真とかけて

△梅の花と解く

心は、香を(顔)うつす。